THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

大正七年三月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十三年第三號　第三百五十四號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用ある店舗は卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●思想界・文藝界の新光明

英國 ジョン・ラスキン著
文學士 小林一郎譯

塵の倫理

四六判總洋布製 極美本・全一冊
正價 壹圓五十錢 郵税十錢

最新刊

詩人の豊なる想像力と哲人の深き思索力とを兼ね具へたるラスキンの特色は最も鮮かに本書に於て發揮せられたり。一の老講師と數人の少女との問答に托して自然界に存する創造力の偉觀を描き出し斯る自然の大法則に基きて人生百般の法則を打建つべきことを明にす。其變化極まり無き中に一貫せる精神氣魄は讀者の胸底に透徹せざれば已まず、大戯曲にして同時に大經典たるもの希臘のプラトーン以外に其匹儔を求むべからず、自然を知らんとする者人生を知らんとする者眞を知り美を知らんとする者は必ず一讀を惜むべからざる也

七版出來

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

死後は如何

▼四六判總布製・價壹圓貳拾錢・郵税十錢

四版出來

獨逸イエナ大學名譽教授
ヘッケル博士著 文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

▼四六判總布製 價壹圓七拾錢・郵税十二錢

東京本郷西片町 玄黄社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

有島武郎著作集

有島生馬氏装■一冊大版百六十頁■定價一冊各五拾五錢■送料一冊六錢(三冊十二錢)

第三輯

カインの末裔

荒涼たる北海の自然を背景として、本能の儘に動く、野獸の如き一個の自然兒を描いた、色彩の濃い、力の強い、而して調子の高い作品である。作者の手腕を文壇の一般に知らしめた最初の作だと云ふ意味からばかりでなく、作者の全作中の或る一面を代表した、最も注目すべき作品であらう。『カインの末裔』の外『實驗室』他二篇あり、『實驗室』は愛妻の屍體を解剖する若き隻眼の醫學士の心に、其のメスよりも鋭き筆を加へたもの、昨年の文壇を動かした名作である。

第一輯 死(第五版)

第二輯 宣言(第四版)

新興文壇の全面容を見よ

新進作家叢書

中版特製■一冊四拾錢■送料六錢

第十一編

一つの芽生

中條百合子女史著

妙齡の身を以て既に堂々の旗幟を文壇の一角に飜したる中條百合子女史の出現は、正しく文壇の奇蹟と稱せられてゐる。本集は其の最近の傑作「一つの芽生」「三郎爺」「地は饒かなり」等を蒐めたるもの、いづれも生鮮潑剌の作である。初めて開ける花の色、初めて釀されたる酒の匂ひ、新しき文壇のうちに最も新しきものは是れ。敢へて世の熟讀を要める。

第一■新らしき家 武者小路實篤著
第二■恐ろしき結婚 里見弴著
第三■生あらば 豐島與志雄著
第四■大津順吉 志賀直哉著
第五■生と死の愛 谷崎精二著
第六■結婚の前 長與善郎著
第七■暴君へ 有島生馬著
第八■煙草と惡魔 芥川龍之介著
第九■夢と六月 相馬泰三著
第十■手品師 久米正雄著

東京牛込矢來中の丸 振替東京一七四二二番 新潮社 電話番町八〇九番 電話番町八九九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

奥野他見男著　池田永治装幀挿畫

高い山から谷そこ見れば

中版上製三百餘頁

實價金七拾五錢

送料金八錢

本書は有ゆる出版業者が潮の如く詰めかけ手に入れむとして能はざりし秘藏の名稿にして、著者をして大正の諷刺文學者として名を後世に遺す代表的名作たり。

著者自ら『快讀限りなし』と、以つて躍如たる內容知るべきのみ。洵に其の輕快洒脫なる筆致は愈々冴えて其の諷刺の妙は上品なる滑稽と相俟つて神韻を極む、眞に永久の名著として推賞するに憚らず。

大賣捌　東京神田小川町　振替一二三三六　**敬文館**

東京堂、北隆館、東海堂、林平、目黒分店、至誠堂、誠文堂、矢部福音社、盛文館、星野、川瀨、菊竹、宇都宮源平、其他

發行所　東京神田駿河臺　文名堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●理財科
●法律科
●政治科
●文學科
豫科一年

慶應義塾大學部（新學年）學生募集

（規則書要郵券貳錢）

●修業年限　豫科二年本科三年、●入學資格　中學校指定學校甲種商業學校（理財科ニ限ル）卒業者竝ニ專門學校檢定試驗合格者　●入學手續　入學志願書履歷書卒業成績證明書寫眞及受驗料ヲ貳圓三月廿日ヨリ同三十一日迄ニ差出スト同時ニ志望學科（第一何々第二何々）ヲ二ツ以上屆出ベシ　●入學試驗　成績優良ノ者ハ無試驗入學ヲ許スモ其ノ他ハ試驗ヲ行フ●試驗科目　英文和譯、和文英譯、代數幾何、日本作文トス、四月二、三兩日施行

●醫學科豫科壹年

●修業年限　豫科二年本科四年●入學資格　中學校及指定學校卒業者竝ニ專門學校檢定試驗合格者●入學手續　入學志願書履歷書卒業成績證明書、寫眞、受驗料五圓ヲ三月十日ヨリ同廿二日迄ニ差出スベシ●試驗科目及期日　國語漢文、英語又ハ獨語、代數幾何、物理、化學、動植物、體格、三月廿五日ヨリ試驗施行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び[illegible]猥なる賣品の廣告掲載は[illegible]謝絶す



中央公論第三十三年三月號目次

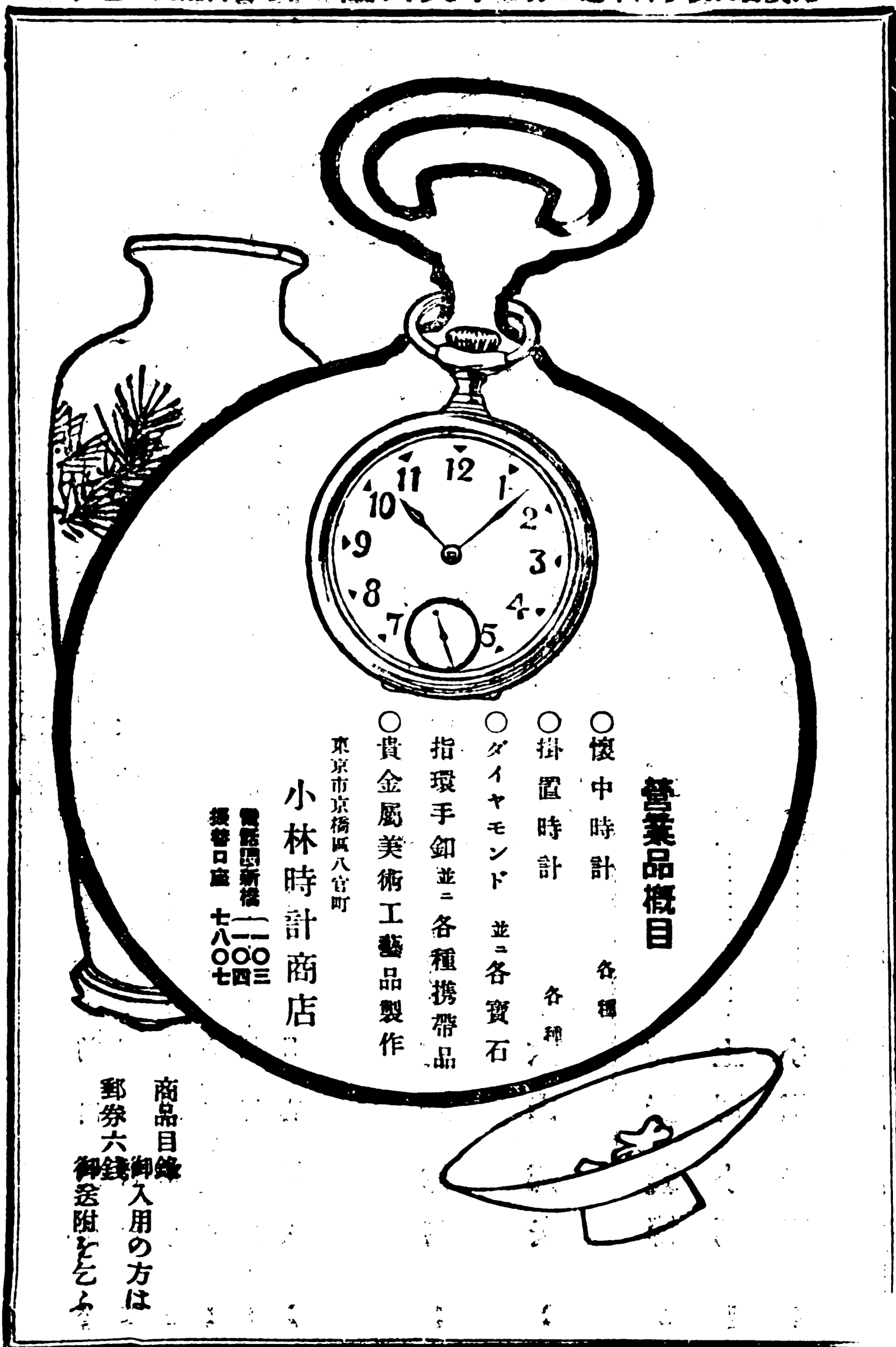
▼公論

▼說苑

【土に親むものゝ春に逢へる歡び】



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論
第卅三年第三號
三月號
第三百五十四號



國勢調査の意義を論じて國民の注意を促がす

法學博士　高野岩三郎

（一）

長い間の懸案であつた國勢調査の問題も、いよ〳〵時機到來、本年の議會で其の實施が確定せられたと認めて宜しいやうである。吾々は啻に專門の關係者としてのみならず、廣く我社會全體の爲め、我學術一般の爲め、歡喜の情に堪へぬものである。

想へば我國勢調査ほど冷遇せられた立法が他にあらうか。國勢調査法と工場法、此の二者は近來まで紙上の空文法の東西大關であつた。然かもそれが比較的些細なる法令であるならば、吾人は別に之に對

して大なる遺憾を感ぜぬ譯であるか、國勢調査法は基本的統計調査に關する重要法規であり、工場法は社會政策に關する重大法規であつて見れば、假令色々の故障があつたにもせよ、其の實施を延してをつたのは、正に我文明の恥辱であつた。歐米の諸國では多くは十九世紀の前後より十年毎又は五年毎に繰返して國勢調査的調査を實行してをるのは、優に此の種の調査の必要を吾人に暗示するものであらう。又工場法の制定及改良が、かの所謂勞働問題の發生及進展に伴隨すること、各國產業史上殆ど符節を合するが如き事實であるのは、誠に克く工場法の重要さを吾人に語るものである。然るにも拘らず此の種の二立法が、揃ひも揃ふて、我邦に於て實施を延ばされてをつたのである。處が工場法の方は漸く一昨年の夏大隈內閣の世に至つて、施行勅令の公布を見ることゝなつた。法律發布後五年餘を經て始めて解決せられた譯である。國勢調査法の方は更に遲れて、漸く此頃に至り解決の見込が出來た。即ち既に衆議院を通過したる國勢調査に關する豫算が、遠からず貴族院をも通過すれば、間もなく又施行勅令の發布を見るであらう。さうすればこゝに愈々第一回の國勢調査は實施せらるることとなり、空文變じて實文となる次第である。それにしても明治三十五年十二月法律公布の時より數ふれば、正に十有五年の歲月を經たのである。無論其の間には多少の迂餘屈折があつて、全然放擲せられてをつたのではないが、石の上にも十年との譬を遙かに超越して、隨分長く辛抱させられたものである。此の日陰者を拾ひ上げて、日光の惠澤に浴せしめたる寺內內閣は見上げたものと言はなければならぬ。吾人は前大隈內閣に對しても、又現寺內內閣に對しても、甚だしく飽足らぬ節の多きに堪へぬものであるが、併し工場法と國勢調査法とに關する兩內閣の功勞は、之を好對照として共に賞讚の辭を呈するを惜まない。但し此の功勞

たるや、眼前の利害關係の多き問題ほど世間一般の承認を受くることは少ないと考へらるるが、併し長き將來の歷史的批判は深く此の功績を認むるであらう。恐らく政府當局者の想像以外の甚大なる程度に於て、之を賞揚することと疑ないと確信するのである。

然しながら國勢調査實施の見込が付いたからと言つて、吾人は徒らに喜に耽つてはならぬ。問題の眞の解決は寧ろ之から始まるのである。假令調査がいよ〳〵實施されても、若しもそれが不充分に行はれ、從て又結果が不完全に終つたならば、世人の期待は裏切られるであらう。吾人の喜は霧散するであらう。それであるから吾々の如き從來口に筆に必要を唱へ實施を迫りたる者は、今は殊更ら調査の圓滿なる實行、完全なる成功に向て努力せねばならない道徳的責務を感ぜざるを得ない。大に筆舌を鼓して實行問題の論究や說明に盡瘁しなければならない。そこで余も亦本紙上を通じて大體の說明を試みんとする次第である。

（二）

先づ國勢調査とは如何なる調査を指すのであるか。法律は、國勢調査は十箇年毎に一回我版圖內に施行するを規定するに止まつておつて、調査の範圍は別に命令を以て定むることにしてある。それ故國勢調査が十年毎に繰返して行はるる統計的調査たることと、且其の名稱より判斷しても國勢の大本を明らかにするに足るべき大調査たることは疑ないが、併し如何なる種類の調査を其の中に包容せしむるやは法文其者では分らないのである。然しながら法律制定の當時議會に於ける問答や、其の後に於ける政府當局者の說明や、乃至專門學者の意見等に依つて國勢調査の範圍は略ぼ定まつたと看做され得る。殊に

又明治四十三年に開催されたる國勢調査準備委員會の決議に依て、少なくとも第一回國勢調査の範圍は定められたと云へる。政府の今回提出したる豫算も此の決議されたる範圍を基として費用を算出し之を要求したものと認めらるゝ。之に從へば第一回調査の範圍は比較的狹隘なるものであるが、何故斯く定められしか、之を說くに就て少しく外國の事例を擧げて論じて見やう。

外國に於ける國勢調査中範圍の廣、規模の大を以て常に引用さるるのは北米合衆國の「センサス」である。同國の「センサス」は千七百九十年の第一回調査以來種々の變遷を經てをるが、最近千九百十年四月十五日に行はれたる第十三回調査は、從來に比べて範圍が大體縮少されてをるが、それでも中々大規模である。調査範圍は四大項目に分れる。

第一は人口に關するものである。此の部分に於て各人に就き調査さるゝ事項の主要なるものは、家長への關係、男女別(體性)、人種、年齡、配偶關係、現結婚後經過年數、妻の生じたる小兒數、當人及父母の出生地、渡米の年、常用語、職業の種類及職業内に於ける地位、職業の行はるゝ事業の種類、現在に於ける無職業の有無及無職業の期間、敎育(讀み又は書き得るか否、千九百九年九月一日以來學校へ入學せしことありや否)、家屋所有關係、盲目又は聾啞の有無等である。此の範圍では普通に所謂人口調査(單純なる人口調査兼職業調査)の稍擴大されたるものである。

第二は農業に關するものである。其の調査事項は甚だ繁雜であつて、各農業者に就き耕地の面積、價格、所有關係、負債關係、生産費より家畜の狀態、收穫高等に至るまで事細かに調査を試みてゐる。

第三は工業に關するものである。各工業者に就き其の企業形式、投下資本額、機械數及其馬力數、使

用人勞働者の數及給料高、原料費、生産高等に關し多數の調査事項が設けられてある。

第四は鑛山に關するものである。之は工業に於けると同じく、事業に使用せらるる資本及勞力の狀態より事業の組織、其生産費、生産物の點に至るまで細かに調査さるることとなつてをる。

米國の「センサス」は以上說明したるが如くであつて、人口兼職業調査に加へて農工の產業調査を以てしたるものである。調査範圍の廣汎なるだけ、之がために投ずる所の費用も亦巨大、約千三百萬弗に上る。調査の結果の出版物も亦頗る浩瀚なる大册を成すのである。但し調査事項が餘りに多岐、繁雜であつて、從て事實の正確を缺くの虞が多いので、次回には調査事項を縮少しても精密なる事實を得るやうにしたいものであるとは、同國の統計當局者自らが唱へてをる所である。

(三)

米國の「センサス」には遙かに及ばないが、普通に所謂人口調査以上に出でて調査範圍を擴げてをるのは、獨逸の職業及營業調査である。其の所謂職業調査の部分は一種の人口調査であり、營業調査の部分は農工商の事業經營の狀態に關する調査である。但し同國では五年每に一回人口調査を施行してをるが其の以外に千八百八十二年、千八百九十五年及千九百七年の三回に此の職業及營業調査なるものを實施したのである。三回とも多少の差違はあるが、今最近の千九百七年の調査に依て調査事項の大要を示せば、下の如くである。

先づ所謂職業調査に於ては各人に付き所帶主との關係、體性、年齡、配偶關係、本業の種類及本業内に於る地位、副業の種類及副業内に於る地位、出生地、宗教等を調査するのである。

次に營業調査中、農業に就ては土地の面積、其の所有關係、其の利用法、從業者、家畜、機械等の諸點に關し、それ〴〵可成り詳しく調査するのである。又工業商業に就ては事業の種類、其の形式、從業者、機械等に關し各々調査事項が設けてられてある。

獨逸に於ける此種調査の結果は巧に整理編纂せられて、これ亦大部の出版物となつて世に公けにせられ、實際と學問とに多大の稗益を與へてゐることは著名の事實である。米國の「センサス」が規模の雄大を以て誇るとすれば、獨逸の職業及營業調査は萬事精緻を以て特色とすと謂ふべく、亞米利加式と獨逸式とが此の邊に現はれてをるのも亦面白い對照である。

（四）

前二種の調査と異つて、歐米諸國に通例、五年毎又は十年毎に行はるゝ所の人口調査なるものは、單純なる人口事項即ち各人の體性、年齡、配偶關係等に職業事項を加へ、更に又時々出生地、常用語、宗教、讀書程度、身體上又は精神上の不具等を調査するものである。我國に於ても最近十數年間に、各地に其の地方限り行はれたる調査、例へば明治四十一年十月一日東京市に行はれたる東京市市勢調査の如き、又は明治三十八年及大正四年十月一日臺灣に行はれたる臨時臺灣戸口調査の如き、皆同類型に屬する。東京市勢調査の調査事項は各人の氏名、所帶に於る地位、生年月日、男女別、婚姻關係、緣組關係、本業、副業、本籍地、出生地等である。臺灣戸口調査の調査事項は之に反して大分多くなつてをる。氏名、所帶主との關係、種族、男女別、生年月日、緣事上の身分、本業の業名及地位、副業の業名及地位、用語、讀み書きの程度、不具の種類及原因、阿片煙吸食者、纒足者、出生地（內地人限り）、本籍（內地

人限り)、國籍(外國人限り)、渡臺の年(内地人限り)、住家の有樣(所帶主に就き持地持家、持地借家、借地持家、借地借家の別を問ふ)等であつて、臺灣特殊の事情に由て種々の事項を加へる必要を見たからである。

(五)

然らば將來我國に於て全版圖内に行はるべき國勢調査は如何なる範圍を有すべきか。第三種の人口事項職業事項類を包含する人口調査式に止むべきか、それとも更にそれ以上に出でゝ第二種の營業調査に亘れる獨逸式の如きものとなすべきか、又は層一層進出して產業全狀況を調査する所の亞米利加式類似のものとなすべきか、此の點は過去に於ても議論のあり、又將來に於ても調査每に議論の起り得べき事柄である。然かも又何れとも未だ決せられざる問題である。それは前にも述たるが如く、國勢調査法は國勢調査の範圍の決定を命令に讓り、しかも其の命令が未だ發せられて居ないからである。但しかく法律自體に於て調査範圍の確定せられて居ないのは却て妙味の存する所である。國勢調査が一回二回と度を重ねて行はれ、政府も人民も經驗を積むに連れ、又我社會全體の發達殊に經濟界の進展に伴ひ、其の時々の狀況に應じ、適當に調査事項を伸縮加減して、國勢の大本を明らかにすることは、法律の許す所である、否其の望む所であると云へる。

國勢調査の範圍はそれ故固定的であるを要せぬが、併しそこで問題となるのは第一回の調査の範圍如何と云ふ點である。此の事に就ては前にも說明した通り、明治四十三年に開かれたる國勢調査準備委員會に於ける決議が今に至るまで甚だ有力である。此の會は朝野の專門家及關係者を委員に任命して組織

されたものであるが、熟議を凝したる末、明治四十八年實施と豫定されたる第一回國勢調査の調査事項として、下に擧ぐるものを決議した。

一　氏　名
二　所帶の主人との續柄又は關係
三　男女の別
四　出生の年月日
五　緣事上の身分
六　職業及職業上の身分勤柄等
七　出生地
八　國　籍

卽ち第一回の調査は普通の人口調査式に止むべしとの議決である。余は當時に在ても大體同意見であつたが、準備委員會開催後數年を經たる今日と雖尙ほ同一意見を抱くのである。但し第二回の調査は人口調査以外更に獨逸式の事業經營調査に亘つて、我農工商の事業組織を明らかにするを努むるが宜しからうと考へる。更に第三回以後に於ては我經濟統計の進步を參酌して、更にそれ以上立入つて調査することにするのも敢て不可なしと思惟するのである。然しながら第一回は此の種の調査の最小限度に範圍を限局することと得策である。我國に於ては、全國に亘り全國民を直接の相手として、統計的調査を行ふのは、これが初度である。大調査の試驗である。之に合格すると否とは、向後に於る同種類の調査、又

は其他の大調査の實行に對して、大なる關係がある。從て又此の試驗は徒らに問題を煩雜にして不合格の危險を多からしむるよりも、寧ろ問題を簡單にして置く方が良法である。此の點より云へば獨逸式の營業調査にまで範圍を擴げることは甚だ危險である。假令之を人口調査に限つたとしても、六千萬に近き人口に對し幾萬の調査委員を置て調査すると云ふことは中々の大事業である。其の準備其の實行に多大の勞費を要するは云ふまでもない。更に其の調査の結果を纏めて無數の數字を作り、之を巧に整理して統計表に製し上げる所の手數や煩勞は並み一通りの業では無い。況や更に調査の範圍を各種事業の經營狀態にまで及ぼしたならば、調査の準備、實行並に結果編整は益々煩勞を加へ來り、初めの試みとしては餘りに困難が大である。況や又營業調査は營業者の事業の內部に立入りて調査を行ふものであるから、直ちに其の利害關係に接觸し、之が爲めに動もすれば事實の申告其の當を得ず、調査の効益を甚だしく減殺するの虞があるのである。それ故第一回國勢調査の範圍を營業調査にまで擴張することは不得策である。從て又更に〱範圍を擴げて、亞米利加式の產業調査とすることの不可なるは、多言を要せないと考へらるる。

（六）

そこで此の人口調査の範圍、前に列擧したるが如き調査事項に限られたる國勢調査の効益は、果して如何であるか。此の點を本邦統計の現狀に照して少しく說明して見やう。

先づ第一の効益は現在の我人口統計を是正し、補充して、我社會狀態並に經濟組織の現況を判明ならしむるの利益である。抑も我現行制度では、五年每に戶籍簿に就き帳簿上現存の人口を計へる。これが

所謂本籍人口であつて、其の最近のものは大正二年末の調べに係るものである。此の外に尙ほ現住人口なるものが算出さるる。之は本籍人口に各地方の人口の出入を加除し、現住者と認めらるる人口を計算したものであつて、これも亦五年每に調べられ、最近のは大正二年末の數である。而して又本籍人口に就ては更に體性、年齡、並に有配偶無配偶の別、現住人口に就ては體性(但し別に警察署調の現住人口なるものに就ては體性及年齡の別)を調ぶるに止まる。併し單にこれだけの事項であつても、其の結果たる數字に依て吾々は全國並に各地方の人口の數々其の增減の狀況や、乃至は男女年齡配偶關係の別より見たる人口の構成の狀況及び變遷の勢を明らかにすることを得て、實際上にも又學問上にも利益する所少小ならざるは喋々を要せずと考へる。況や又是等の數字が精確にして信憑するに足るものであるならば、其の價値、其の與ふる効益は勿論多大なのである。然るに遺憾なることには我本籍人口並に現住人口に關する統計は兩つながら精確を缺き、其の實數と少なからざる差異あるべきこと疑ひなき事實である。所謂本籍人口の中には出生の屆出並に死亡の屆出等に因りて、實際生存する人口が戶籍面には存在せず、之に反して實際生存せざる人が戶籍面には生存してをることとなつてをるのが少くない。又所謂現住人口なるものも重に入寄留の重複と出寄留の脫漏とに因て、少なからざる虛數を含むことは明らかであると認め得る。從て又大都會の如き人民の出入の激甚なる所にては、殊に此の誤謬を大ならしむる譯である。現狀如此くであつて、此の缺點を正すがためには、どうしても從來の帳簿上の調查方法に代へて、一定の期日に於て全國の人民に就き實地的調查を施こさなければならぬ。語を換へて言へば人口調查式國勢調查は從來の我人口靜態統計の缺點を矯正するの意味に於て既に已に効益の少なからざるもの

があるのである。況や又更に從來の調査事項以外に、尙ほ他の事項を加ふることに由て、調査は著しく重要の度を增大する次第である。例へば所帶主との續柄又は關係と云ふ調査事項があるが、現行制度の下に於ても現住戶數なるものを調べて居るけれども、これ亦甚だ不充分であり、且戶の內部の構成に關しては何等の調査も無い。然るに國勢調査に於ては各人に就き其の所帶の內、家族の內に於る地位を一々申告せしめる。親なり、子なり、夫なり、妻なり、下婢なり、同居人なりと云ふことを答へしむるから、之に依て吾々は所帶の構成の模樣をも明らかにすることが出來、社會研究上にも一好資料を得る譯である。然しながら所帶の事項よりも遙かに重要なるは職業の調査事項である。此の事項の加はるに由て單純なる人口調査は全然色彩を變じて經濟的調査となるのである。此の點は段を改めて聊か說述しやう。

(七)

試に農商務統計表又は日本帝國統計年鑑を繙けば、例へば農家戶數、養蠶戶數、製絲戶數と云ふが如き人民の職業を察知すべき若干の數字はある。又耕地々主の數、官公吏、學校敎員、醫師、藥劑師、產婆の數と云ふが如き個々の統計は存在する。然しながら人民全體に亘りて、其の職業の種類を調査したる材料は嘗て存在せぬのである。卽ち我國民は如何に農工商其他の生產業にそれ〴〵手を分て從事し、自己を支持し家族を扶養しつゝあるか、吾々は更に之を詳らかにせぬ。語を換へて云へば、本邦現時の社會的分業組織の狀態は吾々の未だ知らざる所である。農工商業の權衡如何、農工商業の各地方の內部に於る分配の有樣乃至都會と田舍との間に於ける分布の狀況如何、是等の問題の如きも全く正面の解答を

下し難き事柄である。

或は鑛夫或は工場職工或は鐵道從業員と云ふが如き、個々の勞働者に關する統計は現存してをるけれども、廣く全般に亘れる數字は全く利用し得ざる有樣である。又農工商業の事業主の數、役員使用人事務員の數の如きも亦同じく缺如してをる。一言すれば現代に於ける社會階級の形成の基を成す所の各人の職業的地位に關する統計も亦甚しく不完備の狀態にある。

農工商等の生產業を本業とするものと之を副業とするものとの關係如何、之も亦重大なる問題であつて、然かも數字を以て其の現狀を說明し能はざる事柄である。又男女別年齡別に依る職業狀態の如きは、單に部分的には材料が備はれども、全體に就ては依然未知數である。況や有夫婦人の職業狀態と云ふが如き緣事身分と職業とを結び付けたる材料の如きに至つては全く不備である。

田舍から都會へ、小都會から大都會へと、所謂國內移住の盛んに行はるる現代に在つて、如何なる職業の如何なる地位の如何なる種類の人口が、何れの地方より如何なる職業如何なる地位を逐ふて、何れの地方へ向て轉々移動するか、之を明らかにするは極めて有用であつて、然かも今は手の着けられてない問題である。

總て是等の問題は國勢調査の職業事項に依て決せらるべき事柄である。何となれば職業に就ては(準備委員會の決議に依るも)本業と共に副業をも調査し、又本業副業の各に付き職業の種類と地位とを調査し、而して之と共に他の調査事項たる男女、年齡、緣事身分、出生地の項目と職業とを結び付くれば、自ら所要の統計を作り得るからである。要するに國勢調査は職業事項の加はるに因て、全然一の根

本的國民經濟組織調査たるの趣を備へ、其の結果は吾々の眼前に我社會的分業の一大「パノラマ」を描き出すに至るのである。若し人口調査式國勢調査を以て經濟調査たるの趣の薄きが如く考ふる人があつたならば、それは大なる謬見である。但し之と同時に、恐らく一萬以上に昇るべき職業、其間の關係の錯綜紛雜、之を巧に分類し整理して明瞭なる統計に仕上ぐべき統計家の勞務の如何に多大なるべきかは、吾々の深く顧慮すべき事柄である。

（八）

以上述べたる所は人口調査式國勢調査の實施が我國の社會狀態幷に經濟組織の現況を明らかにする上に與ふべき効益であるが、尙ほ第二の重大なる効益は他種の統計の利用上に與ふる利益である。一二の例を以て此點を說明すれば、本邦人口の結婚、離婚、出生、死亡に關する所謂人口動態統計は中々完備してをるけれども、如何せん現存の所謂人口靜態統計が精確ならざるがために、彼此對照して比例を算出しても常に不精密の譏を免れぬ。況や前にも述たるが如く人口靜態の調査事項は現今では僅少に止まるが故に、折角人口動態の方に於て一層完全なる材料が備はつても、不具不充分の統計となり了るのである。又例へば我犯罪者統計を觀れば、犯罪者の體性、年齡、緣事身分、及び職業別の數字が擧げてある。然しながら犯罪と男女、年齡等との關係を究むるがためには、どうしても全人口の男女別、年齡別等の數字がなければならぬ。犯罪者の男女別年齡別等の統計と全人口の男女別、年齡別等の統計とを適當に比較して、初めて犯罪の程度を判定し得るのである。然るに之も亦人口靜態統計の現狀に在ては不充分又は不可能なる事に屬するのである。如此くであつて他種の統計を活用するに當つて、比較の基本を人口

靜態統計に求むる場合が甚だ多い。然らば則ち國勢調査に依て確實にして精密なる人口靜態統計を作り出すの必要は大なりと云はねばならぬ。

第三の効益は國民を統計的大調査に慣熟せしむると云ふ教育的價値である。十年に一回位此の種の調査を實行すれば國民も自ら統計的調査に慣熟し、其結果一般に統計調査の意義、重要を認識するに至るの理である。國勢調査すらも實行せざるの邦國には統計事業の眞の進歩なしと云つても、蓋し過言ではあるまいと考へる。

尙ほ第四の効益として軍事上の利益を數ふることが出來る。卽ち一朝事あり、所謂工場動員を行ふが如き際に方り、人口の職業狀態統計が之に有力の參考資料を供し得るのである。

（九）

上來說明したる所に依て、人口調査式國勢調査と雖も、其の効益の頗る多大なることが明らかであらう。所で此の調査は何時行はるゝ筈であるかと云ふに、明後大正九年を以て第一回が實施せらるゝ豫定である。大正九年は卽ち西曆千九百二十年に當り、北米合衆國、墺太利、匈牙利、白耳義等も亦戰爭の終結を見たらば同樣の調査を實行すべき豫定の年である。英吉利、佛蘭西、伊太利、獨逸の如きは翌千九百二十一年に擧行すべき筈である。それ故大正九年を以て調査を實施すれば、同年又は翌年に於ける歐米諸國の調査と互に相比較して一層の便益が多い譯である。

更に大正九年中の如何なる時期に於て行ふかと云へば、それは十月初めの豫定である。之は先年內閣統計局で全國各地の事情を參酌し、大體に於て、秋季たる十月初めを以て人口兼職業調査の最適期と認め

國勢調査準備委員會に原案として提出し、委員會に於ても承認したのである。但し原案には十月一日と限定してあつたが、之は何も常に一日に限るべきでは無い。恰も一日が日曜日の如き人の移動の激しかるべき虞ある時に當つたならば、適宜其の前後に於て調査日を選定すべきものであるから、十月初めと解して大正九年及其の以後に於ても其の時々適當の日を定むべきものと考へる。

さて又十月初めに於て選定せられたる日の午前零時を以て調査時刻に充るのである。即ち前日より當日に移る夜半に於て現在せる人を其の現在せる場所に於て漏なく調べんとするものである。

然らば如何なる方法に依て調査を行ふか、之を略言すれば下の如くである。即ち全國を無數の調査區域に分ち、一區域毎に通例各一名の調査委員を任命し、之に調査の直接實行を委ねる。一區域は原則として五十なり百なりの一定數の所帶を合せたる範圍に於て之を定める。而して調査委員は其の擔當區域内に於ける各所帶へ調査期日以前に一定の調査用紙を配布する。此の用紙面には調査事項がそれ〴〵印刷してあり、且之に對する答申を記入すべき餘地が設けられてある。そこで各所帶の所帶主は調査期日の午前零時に於て其の所帶に現在せる人員に就き一々記入をなす。調査委員は更に成るべく速かに之を回收して上級の監査委員に送る。かくして此の材料は順次上級の機關を經て中央に集まる。中央に於ける國勢調査最高機關は之を整理し編纂して統計を作ると云ふ手順である。

（一〇）

國勢調査は大要上述の如くにして行はるゝものである。それ故調査の實行上殊に必要なるは一には調査委員の選任宜しきを得ることゝ、二には國民が喜んで調査を受くると云ふことである。若し之に反して

調査委員其人を得ず、又國民が調査を厭忌するの風があつたならば、必ずや調査の不正確を來し、不充分不眞實なる事實の申告を招き、折角の調査も甚だしく其の効益を殺がるゝに至るべきである。曾て東京市に於ける市勢調査に際しては全部調査委員を警察官に採り、又臺灣に於ける臨時戸口調査に在つても同樣であるが、臺灣は特別の事情の存する所として止むを得ずとするも、東京市に於ける處置は吾々の賛成し兼るものである（當時餘儀ない事情があつたとしても）。國勢調査に於ける調査委員は宜しく教員、地方自治體の吏員其他國民と隔意なき交渉を遂げ得る人物を選ぶに努めねばならない。諸學校の學生生徒の如きも亦其の適當なる候補者である。兎に角調査委員は懇切丁寧に國民と接觸して、調査の圓滑なる實行、國民の誠實なる申告を促さねばならない。之と同時に國民も亦克く調査の趣意を了解し、其の重要を認識し、勇み進んで調査に答へるやうありたいものである。勿論之がためには當局に於ても豫め種々の手段を講じて調査の趣意を徹底せしむるに努め、苟も國民をして不安危惧の念を起さざらしむるやう、深く注意せねばならぬ。

來るべき國勢調査の意義、其の重要なる効益は前段說明したる所に依つて、明らかであらう。兎に角之は我國として最初の試である、此の試に於て充分の成功を收めなかつたならば甚だしき恨事である。否我國民の恥辱である。之は統計關係者として我田引水の私言を放つのではない、公正なる社會研究者としての斷定であるぞ。單に我國全體の社會的經濟的狀態を明らかにするための調査、利害を離れ感情を遠ざけて只眞實なる事實を得んがための調査、若しこれすらも失敗に終らしむるならば、これは國民の恥ではあるまいか。調査の實行期には尙ほ一年餘を餘す譯ではあるが、吾々は今日より國民の注意を促がして切に調査の大成功を希望するものである。

佛敎思想と現代生活の交涉

木村泰賢

一、國譯大藏經と讀書界

從來、佛典といへば一般に可成り六ヶ敷いものと考へられて來た。漢文で出來てゐる上に、特有の術語が多く、而もその漢文も元來が譯文であるので、所謂漢學者でも容易に讀み難しとせられて來たものである。況して普通の讀書界にあつては、本典に就て佛敎思想を味つて見やうとする人などは極めて稀で、佛典は僧侶が佛前で誦するもの、たゞ專門家又は特志家のみがその內容を理解し得べきもの丶やうに考へられて來たのも怪むに足らぬことである。實際は、一と通り文句の意味をとるだけなら、左程六ヶ敷いものではないけれども、少くも一般には左樣に思はれてゐたのである。

而もこの豫想は文學者の側にまで及び、彼等は、概ねその材料の意味でバイブルは讀んでゐるけれども佛典に關しては、我國の思想に最も關係の深い法華經をさへも讀んで居らぬといふ有樣である。從てその作物中にも、宗敎に關したことゝいへば、概ね基督敎的臭味を帶びたものとなつて表はれ、佛敎的色彩を帶びてゐるもの丶、誠に尠いことは、少くも所謂、新しい立場にある小說家の創作に見る不斷の傾向である。作家その人に必ずしも基督敎的信仰がある譯でなくとも、その作物の上にだけは、さういふ傾向を示してゐるのである。無論これは、新しい作家は概ね西洋物から暗示やら刺激やらを受けてゐる爲めに自然、その作物にも自ら西洋人的人生觀が入つて來る所に起因するに相違がないけれども、他面からすれば、確かに佛敎思想に對する理解を缺くために、之を材料に消化するとの出來なかつたのが、その一原因であるといふことは疑のない

事實である。現に去る文學界の消息通は嘗て吾人に次のやうなことを告げたことがある。文學者の中にはその作物の中に佛教思想の織り込みといふことを考へてゐる人も可なりにあるけれども、何分にも本典に就て味ふといふことは臆腔であるし、去りとて通俗的紹介書によるも面白くなしといふので、遂に手を出しかねてゐるのである。と、とにかく、種々の思想的材料を獵つてゐる文藝の人々でさへ已に斯の如しとすれば、その外の一般の人々にあつては、たとへその志だけがあつても、佛書を讀んで見やうといふまでに進みかねてゐるのも、誠に無理からぬ次第と言はねばならぬ。佛典は漢文のまゝで傳つてゐたといふことは、佛教のために損失であり、日本思想界のためにも一大損失であつた。

此時に當つて多年の懸案であつた所の國譯大藏經の出たのは誠に讀書界によつて一大福音であらねばならぬ。勿論これは漢譯藏經の全部ではなく、亦必ずしも悉く現代語に譯された譯でもない。けれども、少くとも其代表的なるものは概ね攝し、凡てを延べ書きにして而も所々に註釋を加へた所、從來、佛典に伴つてゐた困難の大部分はこれによつて除去された譯である。但しかく言つたからとて吾人はこゝで右和譯藏經は悉く間違がなしといふ保證を與へる意味ではない。嚴密なる學術的見地からしたら、恐らく非議に價すべき點も定めて多からうと思ふけれども、ともかく、大仕掛に佛教の通俗化をやり、何人でも樂に一と通り主なる佛典に眼を通ふすことの出來るやうになつたのは、誠に時期に契つた擧であると言はねばならぬ。現に、この大事業の幹事をやつてゐる山上曹源氏から聞く所によれば、その購讀者、極めて多方面に渉り、而もその大部分は寺院關係以外の人であるといふことであるが、此一事、以て、いかに一般の讀書界がかゝる事業を要求してゐたかを明白に語るものではないか。而して面白いことには、この事業が未だ完成の半途にあるにも關らず、早くも、何程かは思想的方面に影響したことで、少くも本誌主幹、瀧田氏から聞く所によれば、新し

い文學者の仲間にはこの頃大分、國譯藏經によつて佛敎を味つて見やうとする風が起つて來たといふことであるから、遠からず作物の上にも、その結果がいかなる形に於てか表はれて來やうと期待せらるゝのである。昨年邊りから谷崎潤一郎氏が印度物をねらうやうになつたのはこの風潮の直接の影響ではないとしても、少くもこの頃の田山花袋氏の作物の中に佛教的思想の表はるゝやうになつたのは、或はこの結果の一部分ではあるまいかと思はれる。とにかく、今後、文壇なり學術界なり實際界なりに、この結果はいかに表はれて來るかは本より判然と豫測はされぬけれども、從來に比して佛敎思想は一般に行き渉り、而も宗派を超越した源流的佛敎思想が次第に理解されるやうになるのであらうといふことだけは言ひ得ると思ふ。かくして、遲蒔ながらも、日本佛敎界がなさねばならぬ所の事業の一つをなしたと言ひ得べく、日本の一般思想も、長らく日本を支配し來れる佛敎思想の眞實に接することが出來るやうになつたと言ひ得べきであらう。

かゝる意味に於て、吾人は國譯大藏經の刊は、たとへ書肆の營利事業であるとした所で、佛敎思想を現代の思想生活に交渉せしむる上に於て、頗る注目すべき最近の一事業として、論題の一項とし、大に敬意を表する次第である。尙ほこの機會に吾人はこの國譯大藏經と相併びて佛敎本典の解説紹介を目的とする、本田日生氏の藏經義解に對しても、同樣の敬意を表することを附記して置きたい。

×　×　×　×　×　×

そこで、この機會に、少しく佛教思想と現代生活の交渉に就て、吾人の所見を述べよといふ瀧田主幹よりの御注文に接した。實をいへばこの題目は吾等の立場としては非常の大問題である。この中には現代はいかに、將來の希望はいかに、而して佛敎の現代生活に對する根本理想はいかに、これに關連してその實現方法はいかに、といふが如き種々の問題が含まるものと見てかゝるの必要があるからである。而も正直に言へば、是等の點に關しては、吾人自身も未だ確定した見解なり、論策なりを有せぬから、とてもこゝでこの題目に添ふが如き解答を提出することが出來ぬのである。乍併、嚴重なる論文でなく、言はゞ平常の所感といふ位の處なれば、多少考へてゐることもあるから、

いふので、遂に承ることになつたのは即ちこの論文ある所以である。この點は豫め讀者に御斷りして、かゝりたいと思ふ。

二、現代生活に對する佛教の現狀

佛教はその屋臺の大きい割合に內容的生氣に缺けてゐるといふことは、最早言ふまでもない所である。極端な論者からは、今や將さに大厦の仆れんとする樣にも比せられてゐる程、生きた力を失つてゐるといふことは、少しは割引を要するけれども、遂に認めねばならぬ事實である。乍併、何んと言つた所で、長の間、日本全體に涉りて、その根を張つて來た大宗教である。實際上にはまだ〳〵生きた力として、少くも或部分には働いてゐる許りではなく、見樣によりては亦、復活の氣運さへも孕んでゐると思はしむるものゝあることも、矢張疑のない事實である。いかにも本願寺は近來著しくその勢力を失つたに相違があるまい。併しながらその門徒の中には今尚親鸞、蓮如の溫い信仰の血潮の通ふてゐるもの丶豫想外に多いことは、少しく所謂、御門徒衆の家庭なり、集まりなりに入つて見ればば容易に分ることである。而もそれは必ずしも、老いたる愚夫愚婦のみではない。新しき教育を受たる自覺ある青年中にも昔の一向宗的熱情を以てその信仰を欣びたゝへるもの決して尠くないことを見逃してはならぬ。又禪宗には眞の得道者の尠いのは事實で、而も所謂禪師なるものに怪しき人の多いのも事實である。乍併、こゝに道を求むるものは割合に智識階級の者が多く、中には凡ての他の宗教に失望して遂にこゝで最後の滿足を得るものも決して珍らしとせざる現象である。亦近來、非常の勢で發展して來た所謂日蓮主義の運動を何んと見るか。日本國家と法華經を日蓮によつて結び付くる以外、どれだけの思想的方面を有するかは知らぬけれども、ともかく社會の有識階級を吸集して、頗る活氣のある新しき運動の一つとして、確かに佛教に一勢力を添ゆるものではないか。殊に近來、佛教でも漸く社會教化の方面に注意を向け、從來の葬式法事以外に、種々の社會事業に手を出すやうになつたのは、佛教の現代的意義として大に注目すべき點である

る。勿論中には單に形式一片に過ぎぬものも多いけれども、亦形式、內容とも、可なりの成績を擧げて佛教的精神の社會化に成功してゐるものも決して尠くはないのである。又吾人は、夏期などに時折り、講習會のために各地に出張することあるが、かゝる折りにその地方の佛教の現狀を見るに、時にその餘りに精神力の荒廢した有樣に驚くことがあると同時に、時に亦、青年の間に豫想外に佛教的精神の充實してゐるのを見て、心強く感ずる場合も屢々あるのである。吾人は決して强ゐて佛教の光明的方面を見んとするものではない。否その形勢の否運を觀取するに人後に落ちるものではないけれども、少くも如上の事實よりして、一部の悲觀論者、又は極端論者のいふ如く、佛教を以て今にも仆れさうに考へるものには到底與みすることが出來ぬものである。矢張、佛教は隱約の間には巨然たる勢力として、今尙、生きた意味を有すると見るが公平の觀察であらう。乍併、こゝで吾人は佛教の教勢に就て彼れ是れ言ふのが目的ではない。寧ろこの實際的教勢を背景として、佛教思想はいかになる形に於て、いかなる方面に於て日本の現代生活に觸れてゐるかといふことを見るのが目的である。

然らば、佛教思想は現代生活に對していかなる點に於て交渉を有してゐるか。實はこれは一般的に一寸纒めるに非常に困難な題目である。蓋し、宗教の特色とし最も强烈にその力を現はすのは概ね特殊場合に多く、一般としては佛教思想の影響は大部分、習慣化して灰色になつてゐるので著しき點を摘記し難いからである。そこで今は暫らく、意識的に生きてゐるものゝ外に、無意識的ながらも、少くも日本現代文明の要素として國民生活の間に生きてゐるものに就て、その主なるものの四五を擧げてその一般を推すことにしやう。

何んと言つても、佛教の生きた生命は矢張、安心問題の鍵を握つてゐる所にある。殊に死後の安心立命といふことに關しては最も力强き根底を存するもので、自覺的信徒は勿論の事、無自覺的信徒と雖も、大部分は、これによりて佛教と結び付いてゐるといふ有樣で

ある。蓋し、后に述ぶるが如く、佛教の本來の立場は必ずしも死後問題の解決を第一義とするものではないけれども、その一部たる往生思想が解脱的理想と相結ぶに及びて、こゝに最も力強い佛教人生觀の一要素となつたものである。この事は佛教にとりて、善い事であつたか、惡しい事であつたかは別問題として、とにかく、事實として、他のいかなる教よりも、佛教は日本人の死の觀念を支配してゐるといふことは認めねばならぬ所である。乍併、佛教的信仰は必ずしも死後問題に限つたことではない。少くも通俗社會にあつては亦現世利益の方面に於ても豫想外に大なる力を有するものがある。藥師如來、觀世音菩薩の如き專ら現世の苦厄を救ふと信ぜらるゝ佛菩薩の信仰の盛なる、扨ては種々の宗派に於ける加持、祈禱の隆盛なる、迷信といへばそれまでゞはあるけれども、少くも通俗社會にあつては眞面目な信仰で、而もそれは偉大なる慰安力となつてゐるのが事實である。勿論此中には、所謂現代生活といふ立場からすれば、已に時代錯誤に屬し、事ろ排斥するを可とするものも尠くはないけれども、ともかく廣き意味の生活といふことからすれば、矢張その強い交渉の一つであることを見逃す譯に行かぬ。

かくして、是等の現在、未來の信仰生活と關連して佛教の道義的精神も亦、種々の形で一般社會に働いてゐることを見逃してはならぬ。勿論、不幸にして其力は大に散漫にはなつてゐるけれども、少くも冥々の中には諸方面に喰ひ入かてゐるのである。例へば、かの三世因果の教の如き、たとへ之を證明することは困難であるとしても、一部には尙、非常の力となつて防非作善の根柢をなしてゐる。何か不幸の事件に遭遇すれば、「これも前世からの約束であらう」とか「せめては今生に善き種を蒔いて來世にはもつと善き境界に生れん」などゝいふことは、今尙ほ、始終人の耳にする所ではないか。勿論、實際に確信して言つてゐることか、去る場合の常套語として言つてゐることか、分らぬ場合も多くあるけれども、ともかくかくの如きことを言つて、運命に安じて將來の希望を捨てざる根本は全く佛

教思想の感化によるものである。又かの佛教の重なる德目として擧ぐる四恩、十善、の教の如きも、嘗て吾等の祖先の道德思想を大に助けた許りではなく、今尙諸所に十善會とか四恩會などが組織され少くも佛教徒の道德的修錬の目標とせられてゐる。殊に中央には有名なる瓜生岩子を紀念する四恩瓜生會なるものがあつて種々の慈善事業を經營し、機關雜誌をさへ出してゐる程で是等の德目は割合に強い感化力を與へてゐることが分る。若しそれ、日本人の道德的情操に及ぼした佛教の最も強い影響はといへば、蓋しその慈悲平等の觀念で、從來日本人の美德とせられた――大に義へたけれども――獨り人類に對して許りではなく、動物や植物にまでその同情を寄せた優にやさしき、心ばえは全く佛教の影響と見ねばならぬ。蓋し佛教ではその輪廻論の關係上、動物も遂に吾等と同種の生物であると見、艸木國土皆悉成佛の理想上、心なき艸木(くさき)にも佛性を認め、自然と其等に對して親密の情を運ぶべく、我國民性を訓錬したからである。かの、山鳥のほろ〳〵と啼く聲を聞いて前生の父か母かと疑じたといふ和歌の情合も、朝顏につるべとられてもらひ水したといふ發句の情合も、たとへ今現に吾等の思想を支配することが出來ぬにしても、少くも吾等は之を充分に理解し同情し得る程 なつてゐるのは、全く佛教の感化力によるのである。殊に吾等日本人の性情の概して恬淡で、たとへ敵味方と分れて血の雨を降らしても一旦和解すれば氷然と打ち解けるといふ風のあることは、嘗て本誌上で永井柳太郎氏も論じたことであるが、かくの如きも吾人を以て見れば確かに佛教の思想の影響による所が多いと思ふ。蓋し、佛教の無我思想、超脱思想の自然的感化で、殊に、佛教的信仰に達した武將などの行動が一般にこの性情を養ふに與つて力あつたものと思はれる。尙、吾等に對する佛教的感化の一つとして看過することの出來ぬ一事は美的情操の涵養である。必ずしも佛教に附隨して發達した諸種の美術品に就ていふのではない。直ちに美的情操その者をいふので、殊に自然に對して、そこに一種幽邃の趣きを見出し得

る力の吾等にあることは全く佛敎の感化の致す所と見ねばならぬ。松吹く颱に說法度生の聲をきゝ、曇りなき月影に眞如の相を見るといふが如きは、一種の形容詞であるとしても、とにかく、吾等が自然に對して、單なる物的自然以上の意味を美的に感得し得るのは事實で、而もこは全く佛敎の汎神觀的思想から來た美的影響に外ならぬのである。

其外、かゝる、歷史的背景の中に喰ひ入つて、今尙ほ現代生活に交涉してゐる佛敎思の想影響を一々擧げるならば、數限りないから、この位にして置くが、要するに簡單に云へば、佛敎思想の吾等の生活に及ぼしてゐる最も大なる力は、現實生活以上に精神的自由の王國のあることを知らしめ之に依て現實生活の意義を高め且つ深めたことである。而してこれ實に佛敎が日本文明に及ぼした歷史的意義で總て亦、直接間接に現代生活に交涉してゐる佛敎思想の意義であらねばならぬ。蓋し日本人は元來、可なり現實的國民であつた上に、佛敎と相並びて日本の精神界を支配した儒敎も、何れかといへば現實主義、功利主義の上に立つものである。故に若し日本に佛敎の感化がなかつたならば、恐らく吾等は右に述べた如き高い深い理想的精神生活の何物たるかを知らないで來たかを知れぬと思はれるものがある。然るにそれがたとへ衰へたりとは言ひながら、今日尙吾等の生活裡に上述の如き豐なる精神生活の方面を控え得る所以は、少くも控えるだけの準備の整つてゐるのは全く佛敎の感化力によるものと見ねばならぬのである。

乍併、最後に再び注意せねばならぬとは、かく述べて來たからとて、吾等は決して現在の佛敎思想は具體的勢力として、右の如き感化力を力強く發揮してゐるといふ意味で言ふのではないといふことである。上に述べた所は、要するに現在を起點としゝ、何れかといへば過去に遡つての佛敎の力で、而も現在にあつては凡ての方面に於て可なりに色褪せてゐるといふことは飽くまでも認めねばならぬ所である。況して、それがこのまゝで、將來の實際生活にまで交涉してそれに光

を與へ行く原動力となるとは、斷じて吾人の考へてゐる所ではないのである。たゞ、ありのまゝの相を少しく與へて解釋して見たまでゝある。

三、現代生活に應ずるための佛教改造の要點

佛教は、上述の如く、日本國民の生活に多大の交渉を持てゐながら、總じて生溫き、灰色な稀薄なものとなつて仕終つたのは何に起因するか。種々の理由があらうけれども、その主なる原因は要するに、今日の佛教は、凡て遲くも六七百年前の成立にかゝり、嘗て其後改造を經たことがない所にあらねばならぬ。即ち今日の佛教は凡て平安朝、若しくは鎌倉時代の時代精神に應じて起つたもので、その組織も教理も凡てその時代に適合し、その時代を導くには適當したけれども、最早今日の時勢には合致することの出來ぬ點が多く生じたのは、少くも新しき人に黴臭く感ぜらるゝ最大原因であらねばならぬ。今日は最早、德川時代でもなければ、鎌倉時代でもなく、況して平安朝時代からは千年も過ぎてゐる、明治維新を經た大正の時代である。平安朝から鎌倉時代にかけて成立し、德川時代に全く形式化された今日の佛教が、而も稍ゝもすれば德川時代の流義で進まうとする佛教徒のある佛教が今日の時勢に適しなくなつたのも怪むに足らぬ所ではないか。乍併、高遠なる佛教・理想と之を、盛る豐富なる佛教の思想は、決して鎌倉時代の陣立で盡きたものではない。佛教改造の根據は全くこゝにあるのである。即ち佛教の理想は飽くまで之を保持せよ、しかし之に意味づけ之を實現するには時代の光を以てすることが、軈て佛教が現實生活と交渉し、生々と之を導き得る所以の唯一の道であるといふのである。勿論、先きにも述べた如く、今日、佛教徒と雖も、一部の人の攻撃するが如く悉く眠つてゐるものではない。少くも新しい佛教徒の中には、種々の方面に於て徐々ではあるけれども改造事業に從事してゐるものゝ尠からざるは事實である。併し何分にも長き因襲のつき纒ふが爲めに、稍ゝもすれば生氣なき妥協によつてその現代的進路を開か

うとして、却てとりとめのなきものになる弊を免れぬものが澤山にある。吾人の主張する所はもつと切實に、もつと強烈に而してもつと意識的に改造的精神を振ひ起さねばならぬといふのである。然らばその改造の方針はいかに、これは非常の大問題であるけれども、少くも次きに述ぶるが如き事項は、いかなる形で改造するとも是非とも據るべき方針であらねばならぬ。勿論、この大部分は已に新佛教徒諸氏などによつて早くより唱導され來つた點ではあるけれども、今尙、繰り返さねばならぬのである。

言ふまでもなく、佛教は宗教である限り、その根本立脚地としては、何處までも安心立命の鍵鎖を握つて立たねばならぬ。これがなければ、たとい社會的にいかに役立つとしても已にその中心の生命を失つたものである。一部の新しい佛教家の中には、餘りに現實生活との交渉といふことに走つて、安心問題を度外視してゐるものもあるが、斯くの如きは斷じて、眞の改造の精神に契つたものではない。而も、我田引水かも知れぬけれども、吾人を以て見るにこの問題に於て佛教は少くも理論上最も新しき、且つ永遠の意義に富んでゐるものと思ふ。蓋し世界の宗教は、多神教は勿論一神教でも、苟も神を客觀的に立つる限り、その存在の妥當性に關して次第に躓きつゝあるに反し、佛教の殊に大乘佛教の根本精神たる自心に佛を認め、世界に淨土を見るの立方は、新しき意義を擧げてその光を輝かし得べき運命を擔つてゐるからである。たゞ、この點に於て、大の改造を要する點は佛教に附隨してゐる種々の迷信的信仰を洗ひ落して、もつと純眞な、もつと本質的なものとすることである。蓋し佛教はもと雜神的信仰に反抗して起つたものであるけれども、その汎神觀は不幸にして、諸所の通俗信仰との妥協を許し、高尚なる哲理の前提の下に、遂に稍ともすれば迷信をも誘ひ入るとになり、その極少くも信仰者の側からは却て其本意を失ふまでになつたのである。吾人はこゝで一一その例を擧げぬが、とにかく再造の佛教には斷じて、かゝる妥協的信仰を許るしてはならぬ。これ佛教は今

後新しき時代に處して信仰的に生き行く道で、而もその淨化の力を大ならしむる原動力であらねばならぬ。

併しながら、再造の佛教は、單に信仰を信仰として現實生活と隔絕せしめてはならぬ。從來の佛敎の弊は實にこゝにあつたもので、殊に德川時代に於て、佛教は全く出世間的方面を司るべきもので、實際生活に與かることを禁ぜられたのは、軈て今日の衰運を來たした一原因であることを忘てはならぬ。再造の佛教は信仰生活を奧の院としながらも、これを社會的實際的に實現するを寧ろその第一目的とせねばならぬ。蓋し現代生活の理想は、何んと言つても人本主義の上に立つものである。宗教に對してもそこにその存在の意義を求むるもので、つまり天國でも、極樂でも解脫でも、それが現實生活の中に入りて働く限り眞理であり、價値であると見るやうになつてゐる。米國のロイス氏が現今の宗教問題の中心は神の存在でなく、贖罪の問題でもなく、全くcommunityであらねばならぬと言つたのも、實にこの意味に外ならぬ。然るに佛教は、元來少くも大乘佛教にあつては、地上に極樂を建設すべきを最後の理想とし、且つ實際上、昔よりこの社會教化を大眼目として進んで來てはゐながらも、稍ともすれば單に觀念又は理想の上の事にして仕終ひ、直接に生きた實生活に觸れるといふことに於て大に遺憾の點あるを免れなかつた。再造の佛教は治生產業皆佛法とか、娑婆卽淨土とかいふが如き教を單に哲學的又は詩的に考へる許りではなく、更に實際化することに努めねばならぬ。この意味に於て吾人は從來、佛教で唱へて來た、眞諦門、俗諦門の價値を轉換するの必要があると主張するものである。卽ち從來は出世間的なるを眞諦門として第一位とし、人間的なるを俗諦門として第二位に置きたるを逆にして、飽くまで世俗的人間的たる所に眞の佛教の光を輝かさねばならぬといふのである。

以上の二項は佛教改造の二大方針であるが、尙ほ第三に教會組織に於て注意せねばならぬことは、從來の如く、同じ佛教徒の中に僧俗の區別を嚴重に立つるこ

とを廢せねばならぬといふことである。由來、僧侶偏重の制度は佛教の弊で、佛教が世間的になりかねたのも主としてこゝに起因したものである。併しながら佛教の本來の精神を尋ぬれば必ずしもそこにあるものではなく、少くも大乘佛教の理想の寧ろ俗人中心であつたことは。勝鬘經（勝鬘夫人中心の經）とか維摩經（維摩居士中心の經）とかの精神から見ても明な事である。況して日本の佛教となれば上宮太子といふ俗人が、俗人中心の上の二教と法華經をその信仰の基礎的立場とした所に淵源するとせば、僧俗の區別を撤廢することは軈て大乘の精神に契ひ、日本佛教の本來の理想を實現する所以ともなるのである。この點に於て從來、最も發達してゐるのは淨土眞宗の御同朋主義であるが、再造の佛教は更にもう一歩進むるの必要がある。何故なれば眞宗も其後、著しく僧侶化し貴族化して本來の意義を失つたからである。但し吾人は、決して教役者としての僧侶が不必要であるといふ意味ではない。たゞ從前の如く僧侶を以て別階級の如くに考へた弊を斷てといふのである。

其外、佛教改造の方針として擧げねばならぬ點は澤山にあるけれども、細論はとてもこゝで盡す譯に行かぬから、暫らく上の三項をその大方針として置く。要するに今後、佛教に生命あらしむるためには、因襲的形式の束縛から脱せねばならぬ。生きた現代生活の精髓を捉へて立たねばならぬ。かくして佛教の、大理想を捉へ來つて之に新しき光を與へ、以て、生活に眼ざめながらも、却て種々の點に於て行きつまつてゐる現代の日本は勿論、進んでは世界を相手にしてその理想の實現を期する所に、佛教の新なる生命が湧いて來やうといふものである。而してこれ軈て佛教は現代に對してその存在の意義を主張し得る根據であらねばならぬ。

四、現代文明に對する佛教の役目

所で、かく論じて來ると、人あつて或は曰ふかも知れぬ。一體佛教は改造を加へてまで現代生活と結びて生きて行かねばならぬ價値的根據は何處にあるか。佛教は巳に東洋の文明に對して過去に於て大に役立つた

から、已に其任務を盡したものとして、靜かに老衰して行かしむれば、それで滿足ではないか、と。吾人はこれに對して答へる。吾人の主張する所は必ずしも佛教自身の存續のためといふ許りではない。寧ろ日本文明のために、進んでは世界文明のために、佛教はもう一遍も二遍も若返へつてその任務を盡さねばならぬ。とそこで少しくこの事を述ぶるの必要がある。

抑々現代文明（主として西洋文明）は、何んと言つた所でこれまで諸所に起つた文明中、最も進歩したもので、而も最も力强いものであるといふことは是非とも認めねばならぬ事實である。從てその文明の根底となつてゐる人本主義的思潮（廣義の）も、亦最も切實に生命の根本要求を捉らえたものであるといふことも、認めねばならぬ。この點に於て吾人自身も現代人たることを光榮とする者である。乍併、現代文明の一大欠陷も亦軈てこの中に含まるもので、殊にその餘りに差別相に墮して普遍相を認めず、物質を重視して精神的方面を顧みないといふことは、陳腐であるかも知れぬけれども、矢張その一大欠陷とせねばならぬ。蓋し人本的立脚地その者は決して間違つたものではない。けれども、餘りに個別人のみを重し、全人的方面を度外視したのは抑々現代文明の根本的病患である。不健全なる個人主義的思想も、極端なる軍國主義的國家觀も實にこの現代文明を支配してゐる人生觀から湧き出したものである。かくして遂に現代文明は漸やく行きつまり、其極、遂に折角、建てた文明も自分自らで破壊せねばならぬやうになるであらうとは、今度の大戰爭を俟たないで已に識者の夙に看破してゐた事柄である。吾人は決して現代文明の呪咀者ではない。寧ろその讃美者ではあるけれども、この欠陷はどうしても認めねばならぬ事實である。而してその源因を尋ぬれば、これも古臭い言草ではあらうけれども、確かに餘りに物質に拘泥し、肉的人間に執着した爲めに、物質に固有する個別的原理が强く働いて精神生活の特色たる普遍化的方面が壓倒された爲めであると解せねばならぬ。そして、此點に於て、從來西洋を支配して來た基督教

も亦その一半の責任を負はねばならぬ。蓋し基督教の本質は愛にありて、この差別的傾向を防止するがその役目であつたけれども、その教理の立方に於て神と人とを區別し、人と人とを區別し、人と動物とを區別して、矢張、差別相を特相とするので、愛の福音の實力を失ふに到るや、却て現代文明の差別的傾向に手助けした形になつたからである。勿論、基督教徒は今尚、この極端なる差別相を防止せんとして種々の世界的運動を起してはゐるけれども、稍々もすれば愛の福音の名の下に異人種を壓倒するといふが如き脱線などをやりて、眞にこの弊を救ふだけの力を有せぬことを示してゐる。しかも、この現代文明の欠陥は、獨り西洋に止まらず、その潮流の到る所に凡て伴ふもので、日本の所謂、現代生活にも著しくその鋒鋩を表はすに到つたことは改めて言ふまでもない所である。加ふるに日本の場合にあつては、西洋の秩序的にさうなつたのに反して、何分にも未だ借物の氣味を脱せぬ爲めに、到る所に、之は亦矛盾不調和の種を蒔きちらし、思想界に教育界に、政治界に實業界に、而して皮肉にも亦宗教界にまで混沌の波を起すの原因となつて、西洋に於けるよりも一層、性質が惡くなつてゐるのである。とにかくこの現代文明、從て現代生活に伴ふ病根を治し、眞に靈肉共に健全なる全體的文明を促進するためには、今までの指導的精神を更正し、少くも緩和させる人生觀を以てせねばならぬといふことになる。即ちモット精神的でモット超越的で、而もモット平等的理想を以て導かねばならぬといふことは、苟も現代文明の弊を認むる限り何人も承認せねばならぬことにならう。吾人の主張する所は、即ちこの點であつて、こゝに佛教の理想が働くべき役目を持つといふのである。蓋し、佛教が無我觀の上に立ち、平等慈悲の精神により、解脱に住して而も之を實生活に實現するを理想とする所、正しくその差別病を治すべき資格を備へてゐるからである。この事は、嘗て英國の佛教學者、リス、デビッ氏も言つたことで、彼は何故に佛教を研究するかの問に對して答へた所は大凡、右の所論と同徹であつた

と吾人は記憶してゐる。即ち佛教も基督教も共に慈悲博愛を主張し、精神生活を高唱する上に於て同一であるけれども、基督教は差別を本位として平等を見るに反し佛教は飽くまで平等を本位として差別を見る所がその異る點で、こゝに佛教人生觀の根底があり、こゝに即ち基督教が有せぬ差別病を救ひ得る根底があるのである。況や基督教本來の立場は何れかといへば神本主義であるに反し、佛教(殊に大乘)の立場は飽くまで人本主義である所、たとへその概念が異るにしても、少くも立場に於て、佛教は現代文明の基礎的人生觀と調和し得べき點あるに於てをや。この意味に於て佛教は已に東洋の文明に功献したからとて、その役目が濟んだものではなく、更に進んで西洋の文明に功献せねばならぬ任務を帶びてゐるものと言はねばならぬ。それには、今までの如き稀薄にして散漫な組織ではいかぬから、更に西洋文明の力強き方面を採用し之を止揚して若返へらねばならぬといふのが即ち吾人の主張である。況して、我日本としては、已にその歷史的背景もあり現に今も生きてゐることであるから、この佛教にして一度び力強く若返へることが出來たならば、隨て日本の使命たる東西文明の調和といふことも、恐らくこの佛教の力によつて遂行し得られることゝ思ふのである。

五、佛教の根本思想とその現實的意義

說いてこゝに來ると、又一つの問題が起つて來る。即ちそれは、一體佛教本來の立場は出世間的のものである。無我觀、慈悲觀、平等觀といふが如きも所詮、現世超越の手段に外ならぬから、それ等が果して現代文明の欠陥を補ふといふが如き實際的作用を呈し得るものであらうか。佛教を現代化して若返へらしむるといふが如きことは遂に佛教の根本思想を破壞することであらねばならぬと、いかにもこれは一應理由のある非難である。蓋し佛教の立脚地は、少くも表面上、消極的否定的要素に著しく富んでゐる許りではなく、實際上に於ても、所謂浮世を離れて不關焉と構えるのを佛教の聖い行とせられて來たからである。併しながら

佛教の理想を以て全く出世間的に限り、消極的否定的境界を最高としたかの如くに解釋し去るは、所謂小乘的見解で、之と同時に强い世間的肯定的方面あることを忘れてはならぬ。少くも大乘の教徒が小乘教徒を非難した所は實に、主としてこの點にあつたものである。いかにも佛教は無我を說き無常を說き苦と說き空と說き、而して解脫涅槃を理想とする。乍併、少くも大乘的見解に從へば、其等の消極的觀察の後ろには常に偉大なる現實の肯定を豫想してゐるといふことを忘れてはならぬ。卽ち、一切空の後ろには無碍自由の人格活動を肯定し、諸法無我の後ろには無限の慈悲といふ俗理的大我を肯定し、解脫涅槃の意味は遂に卽身成佛、娑婆卽寂光土の理想に歸結するといふことは已に前々から觸れおいたことで、而も少しく大乘佛教の何物たるかを知れる人は何人も容易に看取し得べき所である。吾人の主張、力說する所は卽ちこの點でつまり、佛教思想に消極的方面のあるのは事實ではあるけれども、そは最後に積極的に轉換し行くのがその眞意であるから、この方面を表面に推し立てゝ、之を實際化することが軈て佛陀の本意を完ふし大乘佛教の眞目的を實現する所以であるといふのである。吾人はこゝで、是を文献的に證明してゐる暇がないけれども、暫らくこゝに一切空といふことに就て二三の重なる聖典に照らして、その意味を明にして見やう（無我の大我たることは一昨年本誌で論じ置いたし、解脫涅槃の積極的意義に就ては、本月號の東洋哲學に吾人の意見が揭げられる筈になつてゐる）

凡そ、種々の經典中、盛に空を主張したものと言へば、般若經に如くものがない。大般若六百卷、たゞこれ空の一字を說いたもので、空々、大空、畢竟空と凡てを空にせねば止まぬといふがこの經の立場である。この限り般若の主意は疑もなく消極的否定的で殆ど虛無主義にも近いと言はねばならぬ。乍併、般若の主意を以て虛無主義と解するならばそは非常の誤りにて、般若に從へばその空々の否定の力は軈て大なる自由肯定の力となつて現はれるもので、少しく大袈裟ではあるけれども、般若經は、この力によつて一毛の中に百

億の須彌山を攝し、一滴水の中に四大海を盛ることが出來るとさへ言つてゐる。蓋し般若の空とは、今日の言葉で言へば絶對意志又は純粹意志の實現の兩體で、言詮し表象することが出來ぬけれども、少くも體驗としては絶對的自由にして無限の充實した生活であるから、かくの如き大袈裟なことも言ひ得たのであらう。從て般若は亦この立場からして、宇宙の森羅萬象ゝ所詮この空の力の顯はれで、世界は空であると同時に、空は卽ち世界であるといひ、その空を殆ど形而上的原理の如くにさへ說いた所もあるのである。この意味に於て般若の空は頑空ではなく、眞空の妙有であると解するが佛敎の通規になつてゐるのである。而も其妙有の契機點は要するに人格活動で、特に慈悲(布施)、德行、(授戒)、忍耐、努力(精進)、靜觀(禪定)、智慧の所謂六波維密として顯はれ、同時にこの六波羅密によりて眞の空は實現せらるゝと說くのである。かくの如きは豈に一片の消極的虛無主義を理想とするものゝ言ひ得る所であらうか、これ吾人は前に一切空の後には無碍の人格活動を肯定してゐると言つた所以で、而も現實生活に於て實現せらるゝ所にその眞意があることになつたゐるのである。吾人はこゝで敢て講義をするのではないからこの問題に深入りせぬが、とにかく、この般若の空思想はあらゆる佛敎思想の根底となつてゐるものであるから、その眞空の後ちに妙有の人格的肯定のあるといふことを見逃しては、佛敎の根本義は到底得られぬことになるといふことを注意して置くのである。而してこの事は同じく般若系統の上に立つてゐる他の諸經文となれば一層明瞭になつてゐるから試みにその二三例を擧げて見やう。例へばかの有名なる維摩經であるが、あの聖典の內容の般若を說いたものであることは、何人ゝ疑はぬ所であるが、而もこの經に特有の意義ある所以は、前にも一寸述べた如く、俗人の維磨(Vimāla Kīrti)といふ人が、出家の沙門よりも、より能く般若の空理を體現してゐることを示した所にある。卽ち般若思現の現實的世間的に實現した模範として維磨居士の活動を示した處に此の經の眞義がある

と見ねばならぬのである。況して、根本では矢張同じ般若系統に屬する法華經となれば更に進んで、眞空が最も具體的なる妙有として發現する樣を說いたもので、實に般若思想の行くべき所まで行つたものと言つても然るべきものである。諸法實相、世間相常住などゝ說いては、眞空の兩體は直ちに妙有たるの妙諦を明にして現象卽實在論の立場に住し、この空を體現した人格者としての佛陀を說いては、具體的人格に卽して常恒、遍在の永遠性を認め、次いでこの人格者の救濟的活動としては觀音菩薩の拔苦與樂の誓願として、最も具體的に種々の場合を擧示し、更に吾等の理想生活の代表としては僅か八歲の龍女までも成佛すべきの約束を與へて、一切衆生に悉く佛性ありの旨を最も明に示したのは、卽ち法華經の大結構ではないか、法華經の非常に重せらるゝ所以もこゝにあるもので、つまりその背後に般若の眞空を豫想し、それが妙有として現實的肯定的活動に顯はれ行く所を說いたものと見る所に限りなき深みが顯はれて來るのである。而もかく見ることが歷史的に言つても敎理的に言つても法華經の眞の見方で、能く法華經は藥の効能書の如きもので中味に乏しいといふ人もあるけれども、かくの如きは中味として般若が豫想されてゐることを知らない所から來る小言に外ならぬ。尙ほ序でに一二の經に就て言つて見るならば、かの華嚴經も法華經に劣らぬ名高い經であるが、これは要するに高大なる汎神觀の上に立ちて、宇宙の事々物々が互に無碍に融通し無盡に緣起する樣を說いたもので、而もそれは一法界の妙用として大日如來の顯現に外ならぬといふがその大主意である。乍併、その根底を流れてゐる思想を尋ぬれば矢張般若の空思想から來たもので、つまり空の妙用を宇宙論的に汎神論的に提示したものに外ならぬのである。又かの、阿彌陀經（三部經）が阿彌陀佛の本願として、念佛の衆生を導いて極樂に往生せしむるといふことを、主張したものであるが、一見すれば可なり般若思想と離れてゐるやうではあるけれども、詮索して行けば矢張、眞空の體現者としての光明無量、壽命無量の佛陀

の救済的作用が特に未來に働いたものであることが埋解されて來る。其外種々の大乘經典で般若に關係せぬものがない程で、而もその中には殆ど空の意味の見えぬ程妙有の方面の力說、高調されてゐるものもあるけれども次第に詮索して行けば遂に眞空といふことに歸着することが分つて來るのである。

少しく例解がくどすぎたかも知れぬ。實はかくの如きことは別段に論證の必要のないことではあるけれども、教育ある社會には、特に西洋人の書いた佛教書を讀んだ人などの中には、佛教の本意を虛無主義にあるかの如くに批評する人もあるので、特に經文の見方を擧げてその然らざるを證明して見たのである。但し吾人はかく、凡てを眞空に歸したからとて、それだから佛教思想の積極的方面も遂に消極になるのであると解釋してはならぬ。眞空といふとは、かく有的に取扱はれゐるのが佛教の眞意であるといふ意味であるといふことを誤解してはならぬ。要するに空といふことは、概念的に見れば nothing のやうではあるけれども、實は體驗的には最も具體的、現實的生活の肯定で、遂に實際的生活に到りて始めて眞の意義が實現するといふがその眞意であるといふことに歸する。而も、先きにも一言した如く、これは獨り空を標準として見た場合に限つたことではない。無我思想の場合でも解脫思想の場合でも大凡、同じことで、一應は消極的道程をとつても、最後には實際的にも理論的にも、現實的實際的生活の體驗といふ肯定的結論に達するのが佛教思想の奥義となつてゐるのである。

たゞ繰り返へして言はねばならぬことは佛教は、か程に實際的意義に富む思想的根底を有しながら、稍々もすれば之を觀念の上の事に止め、之を生きた、而も社會的生活の上に完全に實現しかねて今日に到つたのは、軈てその改造を要する所以である。この意味に於て、吾等の主張する改造は、佛教の根本精神を離れることではなく、寧ろ眞にその眞意を發揮するの道であるといひ得やうと思ふ。而してこの根本精神さへ捉えて立つならば、之を改造するに西洋文明の强い人生

味、現實味をとるも、毫も佛教の眞意を害するものではなく、却てかくすることによりて、益々その强い光を表はすことが出來やうといふものである。

× × × × ×

最後に、初めの書出しに應じて佛典の見方に就て一言して置きたい。佛典には、特に有名なものには大底公認の註釋書がある。概ね支那日本で出來たものである。乍併、注意せねばならぬことは是等註釋書は大概、註釋者が一定の意見なり論策なりを以てゐて、やつたものであるといふことである。從て本典その者は必ずしも註釋家の言ふが如きものではなく、時に違つた意味で言つてゐると見るべき場合も決して尠くはない。故に眞に本典その者の眞意を味はうとする場合には、却て其等の註釋書に拘泥せぬ方が却て宜しい。殊にその中から特殊の味でも引き出さうとか、亦はそれに基いて所謂改造的意見でも構成しやうとする場合には、正直に自己に應照するまゝに見て行くのが、總て佛典の意味を益々深める所以の道であらうと想ふ。

奸商取締の手を緩むると勿れ

法學博士　福田德三

（一）

曩きに米價騰貴に就いて暴利取締令を布告した農商務大臣が、最近また其運用の一つとして伊勢の國の何某と云ふ者に對して戒告を發したが、それが大分世間で問題になつて居るやうである。第一に於ける非難は、農商務大臣の戒告が國法に違反するものであると云ふ事である。然し我輩の考ふる所では、該戒告が國法違反であると云ふ事實は、國法の條文の上から云つ

ても、また其精神の上から云つても、斷じて無いと思ふ。英吉利流の憲法の條文に於ては、營業の自由を以つて最も重要なものとして居る。蓋し歐羅巴の憲法は、獨逸語の所謂ゲヴエルベ・フライハイト（Gewerbe-freiheit）即ち産業の自由を以て基本の一つとして居て、身體の安全、財産の保障、營業の自由の三つを保護するを以つて、憲法の重要なる箇條として居る。然るに斯くの如く三つの條項を保護すると云ふ事は、今日に於ては半ば以上無意味に歸して了つた。十八世紀から十九世紀に懸けて所謂立憲政體が起つた時は、主として第一、第二階級に對して第三階級の權利を主張する事を以つて其本旨とした。所謂立憲政治とはブルヂヨアジイ本位の政治である。第三階級から考へれば身體の安固、財産の保障、營業の自由が何よりも最も大切である。殊に憲法政治の起る前の歐羅巴の經濟界には、ギルド（商工業の獨占組合）が殘つて其勢力を張つて居つた。アダム・スミスの大著は半ば以上ギルドの攻撃に費して居る。ギルドは經濟界の自由を認めない。從つてギルドに屬したもの以外は、自由の營業をする事が出來なかつたのである。而して第三階級は此特權を享用する事が出來なかつたが、第三階級本位の社會が起るに及んで、此ギルドを打破し、營業の自由、財産の安全を主張したのである。英吉利、佛蘭西、獨逸では之を勞働權（古い意味で）と云つて居る。此勞働權の少し形を變へたものが營業の自由、即ち獨逸語のグヴエルベ・フライハイト、英語のフリードム・オブ・エンタアプライスになつたのである。我國の憲法は大體に於て歐羅巴の憲法の模倣であるから、その多くの條項に於ても右の三箇條を主とした第三階級憲法である。然るに如何なる理由であるか我々は窺ひ知らないが、我憲法は明文の上に於て營業の自由を規定してない。だから單に條文の上から云つて、營業の自由を云云して今度の取締令の運用に對して憲法違反であるといふ事は斷じて云へない。勿論我憲法も間接には營業の自由を認めて居ると云ふ可しと思ふが、條文の上には規定されて居ない。之れは專門の憲法學者にいろい

ろ說が有る事であらうが、兎に角憲法の條文を替へない以上、文字通りに英國や佛蘭西のやうに主張する事は出來ない。

次ぎに廣い意味に解釋して、人權蹂躪といふ非難が加へられるといふ者があるが、我輩は加へられないと思ふ。成程第三階級の權利を以て直ちに民權だと解釋すれば、窮屈に云へば民權蹂躪だと云へるかも知れない。處が幸か不幸か我憲法は、條文の上に之を認めて居らぬ。我憲法は第三階級本位の憲法である事は明文の上に表はれて居らぬ。然し實質上から考へて見ると、假りに明文の上に營業の自由は認めて居るとしても、それは杓子定規的に解釋すべきものではない。何故に營業の自由を認め民權を重んずるかと云ふに、與へられたる社會國家の安寧幸福といふ事が最高の標準に相違ない。現在我國の有樣に於て第三階級の跋扈は、國利民福と凡ての場合必ず一致するとは云へない。極端に云へば、よしんば文字の上に窮屈な規定があるとしても、今日の時勢は之を窮屈に解釋する事を許さない。眞に國利民福といふ廣い立場から、廣い解釋を採らなければならぬ。卽ちよしんば窮屈に云へば憲法違反となつても、少し極端な暴論の樣ではあるけれども、其條文を廣く解釋し若しくは其條文の文句に悖つても、營業の自由を制限する事は一向差支へないと思ふ。否、それが却て社會政策といふ事を度外視するを得ない今日の時勢の眞の要求である。

偖て暴利取締令による戒告の爲めに民權が蹂躪されたとしても、其蹂躪されたる民權とは如何なる內容を有つか、營業の自由が侵害されたとしても、其侵害された營業の自由は如何なる內容を有つものであるかといふ事を考へて見なければならぬ。農商務大臣が戒告を發した當の相手とは、經濟上から云へば無用なる營業者である。否、有害なる營業者である。よしんば窮屈に解釋して、民權なるものを蹂躪したとしても、其民權は買占めに由つて奇利を博せんと欲する者の民權である。自由を保障せらるべき營業とは如何なる營業かと云ふと、經濟上何等存在の理由を許されない無用の

營業である。故に國利民福にして之を要求するならば、斯くの如き内容を有する民權は多少蹂躪しても構はない。斯くの如き内容を有する營業は、自由を侵害しても差支へないこと、例へば公けの風俗を紊る營業者は、警察的に種々束縛せらる可きが如くである。況んや暴利取締令なるものは今日發布されたものでなく、既に若干月以前に發布されたものであるから、若し民權の蹂躙營業の自由侵害を叫ぶべくんば、取締令發布の當時に於て叫ぶべかりしものである。伊勢の何某なる不都合の人間が、戒告を發せられたからとて、特に之を叫び出すのは奇怪しい。卽ち憲法違反といふ非難は、爲にする所あるものゝ議論と斷言しても差支へないのである。我輩が農商務大臣に切望するのは、斯くの如き愚論に惑はさるゝ事なく所信を斷行せん事である。

（二）

憲法の問題は假りに之れを專門家に讓るとして、今日の經濟生活の實際から云つて、政府が發布した今度の戒告に就いては、之れを二つに分けて論ずる必要がある。卽ちかの戒告なるものが、主義として當を得たものが否かといふ問題と、實行の方法として當を得たものか否かといふ問題とである。此兩者は決して混同してはならない。

偖て第一にかの戒告が實行の問題として當を得たものなるや否やを先に考へて見よう。農商務大臣が戒告を發したが爲めに、一向米價が下らない。卽ち其目的を達しないものであつた。であるから此點から云へば、或は農商務大臣の戒告處分は失當であつたと云ひ得るかも知れない。然しながら元來一片の戒告位で、米價の騰貴を防ぎ得るものと思ふのが大いなる間違である。故に我輩は米價の騰貴を防ぐ作用が少いとしても、あの戒告は一向差支へのないものであると思ふ。否、それで結構なものであると斷言するを憚らない。我輩が觀て以つて結構であるとするのは、米價を調節するといふ意味からでは無い。此點から考へればあの戒告に大した効果の無い事は、初めから判り切つて居

る。戒告に次ぐに戒告を以つてして米價の調節が出來ると思ふのは、從來歐米諸國が物價・物資の調節に幾多の苦い經驗を嘗めてゐる事實を無視したもので、餘りに樂天的に過ぎる。否、我德川幕府の米價取立て、引下げ兩政策の失敗の歷史を無視したものである。(詳くは本庄學士著「德川時代の米價政策」を見よ。)若し農商務大臣が其積りであの戒告を發したものならば、愚極まれりと云ふべきである。該戒告に其作用の無い事は初めから判り切つた事で、何も結果を待つて非難を下すべきではない。我輩がかの戒告を以つて結構と云つたのは此意味ではなくて、道德的効果(モーラル、エフエクト)の上から云つたのである。であるから假令調節の作用は少くても、不當の買占めをやる者に對して、戒告するのは結構だと云ふのである。一體今までの内閣は、營業の自由の侵害とか、民權の蹂躙とかいふやうな非難に對して餘りに神經過敏であつた。何等の財産の無い勞働階級に對しては、それに十倍二十倍する侵害を加へても一向議論を惹き起さない。財權階級、富豪者流に對しては少しでも之に制限を加へると、直らに矢釜しい問題を惹き起す。政黨なども之に應援してワイ〳〵騷ぐといふのは奇怪千萬な話である。況んや今度の如く民權を蹂躙され、營業の自由を侵害されたと號する者は、社會に取つて無用にして有害なる階級の者である。少くとも勞働階級に加へる壓迫と同程度の壓迫を加へても一向差支へないものである。然るに取引所投機者流の醜類等が寄つて集つて抗議を申立てるとか陳述するとか云つて問題を惹き起すのは、之れこそ却つて國利民福の敵である。彼等は本來なら聲を潜めて謹愼して居るべき筈である。然るに臆面も無く大聲叱呼して示威的舉動に出づるとは、不埒千萬と云はねばならぬ。幸ひに輿論の機關は此戒告に對しては、多くは其道德的効果の上からして戒告處分を是認して居る。政府反對黨の新聞さへも多くは左樣に論じて居るのは、大に喜ぶべき事である。

第二に主義の問題として善かつたか惡かつたかと云ふに、我輩は主義の問題としても非常に善かつたと思

ふ。國民の經濟生活に全然干涉しない國家ならば卽ち已む。然らざる國家に於ては、斯くの如き場合に際して政府の有する權限を活用するといふ事は、主義として甚だ結構である。況んや實行方法として或は拙劣を極めて居つかも知れないが、少くとも當事者たる農商務大臣の戒告を發した動機には、何等の私心を挾んで居なかつたと想像する事が出來るに於てをや。强いて云へば之れによつて大向の喝采を博さうといふ野心が無かつたとは云へないが、それは聖人君子ならぬ政治家としては已むを得ない。眼前に具體的に私利を圖つたもので無い事は疑ひない、國の爲めにしたといふ事は確かである。故に主義としても我輩は雙手を擧げて贊成するものである。

（三）

唯遺憾なるは農商務大臣の態度が當を得て居ない事である。殊に議會に於ける答辯に極めて激越なる語調、或は恫喝的の言辭を輕々しく用ひた事は甚だ殘念である。之れでは道理の問題を變じて感情の問題として了ふ恐れがある。又、國利民福の上から已むを得ずにやつたもので、決して事を好んでした處置ではないといふ事は、何處までも明かにして置く必要があつた。然るに仲小路氏の言動は如何にも書生的壯士的であつて、政治家の守るべき謹愼を守らなかつた憾みがある。之れが爲めに折角の善い企を感情的に惡いものにした恐れがある。此點は我輩呉れ〲も遺憾に堪へない。然しながら戒告されたる者、若くは其一味徒黨の輩が餘りに無耻なる言動に出でた爲めに、大臣と雖も人間である以上、多少感情の昂まるのは已むを得ない事で、其昂奮には寧ろ同情してやるべきものがある。我輩は斯く大臣の言動の不穩當を咎めると同時に、厚顏なる利害關係者の如何にも破廉恥極まれる運動は、皷ヶ鳴らして之を責めなければならないと思ふ。殊に議員の中にあつて此評を甘受しなければならない輩のあると云ふものあるを聞くは、甚だ殘念な事である。

（四）

論じて玆に至つて少しく根本問題に立ち入ると、戒告處分なるものは抑も末である。我國に於いて國民生活に最も關係の深い米の價の決定に就いては、現在の米穀取引所は寧ろ無益なる存在物である事は、餘り人が云はぬ。取引所存在の理由を主張する論者は曰ふ、取引所は價格調節の機關、需要供給調節の機關であると。然し明治以來の歷史に徵して、果して十分に其機能を盡くして居るかと云ふに、我輩は斷じて否と答へなければならないのを悲しむ。取引所の存在は國家社會に害こそあれ、毫しも有用な點を持つて居らぬ。唯徒らに射倖投機の心を養ふより外に何も無い。現在取引所の謳歌論者は全廢などは夢にも考へ及ぶまいが、我輩は此れは一の重要な問題とす可きものと思つて居る。若し全廢しないで其存在を認めるにしても、恰も公娼を認めると同じやうな意味に於て認めるのである。卽ち必然（ネセツサリー）の惡（エヴイル）としてのみ看過さるべきものである。米穀取引所投機者流は之を目するに遊廓の娼家の主人を待つが如くすべきで、卽ち社會の表面に跋扈するを許さず、謹愼して社會の片隅に蟄居せしめなければいけない。然るに我國では彼等醜類が大手を振つて白日大道を濶歩して居る。最も營業の自由を重んずる英國でさへ、仲買がお客を勸誘する廣告を新聞紙上に、人目に立つやうに揭載する事を許さない。之れを禁ずる事は恰も遊廓の廣告を禁ずると同樣である。然るに我國では彼等は莫大な紙面を塞いで客引の廣告をなし、新聞紙も恬然として之を甘受して居る。之れ全く營業の自由を穿き違へたものである。我國に數年滯在して是等の問題をかなり研究した元帝國大學敎師のヴエーンチツヒ氏は、日本の米價の亂高下の原因の重なる一は米穀取引所にある。在現の狀態を改めない以上は、米價の亂高下は到底免かれないと唱へて、殊に我國を去る時に方つて、詳密に研究した結果を我々同學の前に披瀝して歸つた。外國人でさへ斯く感ずる。況んや我々日本人は少からず之に注意しなければならない筈と思ふ。我輩は豫てより少くとも現在の形に於ける米穀取引所存在の理由に就て、多大の疑惑を抱いて居

るものである。殊に近來米價の非常なる騰貴に就いては、取引所が重大なる原因の一つである事を何うしても否定する事は出來ない。然かれば豈に獨り伊勢の何某を戒告するに止まらんや。農商務大臣は更に徹底的に日本全國の米穀投機者流に對して、法律の許す範圍内に於て、根本的に制限否壓迫を加ふべきであると思ふ。而して彼等が營業の自由の侵害とか民權蹂躪とか憲法違反とか人聞きの良い事を云つても、斷乎として之に耳を借さずして、農商務當局の所信を一貫すべきである。我輩は之を切望して已まないものである。英佛米諸國に於ける大規模の食料調節などの事を考へたならば、我日本の爲してゐるとは實に手緩い事を感ずる。前に我輩が云つた如く實行しても、尙ほ遠く及ばない。然るに一商人に對する戒告について愚論が跋扈する爲めに、當局者に聊か遲疑逡巡の色があるとしたならば、實に殘念千萬の事と云はねばならない。政府反對だからとて、此問題にまで反對するのは謂れのない事で、我々は當局者の誰たるを問はず、奸商取締の急要を主張し、當局をして其手を緩めしめてはならぬと確信するものである。

英米當局者の第二言明を讀む

法學博士　吉野作造

（一）

ウイルソンは二月の十一日、ロ－ド・ヂヨ－ヂは同十四日、各々議會に於て再び戰爭に關する大演說を試みた事は、已に新聞の報ずる所である。一月初旬の大宣言とは異り、兩者共主とする所を一にせざるも、共に戰爭に關する兩國民の志望を最も剴切に言明せる

のなることは言ふを俟たない。

ウイルソンの今度の演説は、彼とロイド・チョーヂとの一月初旬の宣明に對する一月廿四日の墺洪國外相ツエルニン伯並びに獨逸帝國宰相ハートリングの應戰に向つて、云はゞ更に二の矢を放つたもので、從つてまた前の宣明の趣意を補充するもの見ることが出來る。結局内容は前後略ぼ同一と見ねばならぬが、然し言辭甚だ剴切を極め氣焔當るべからざるものがあつて、世人をして自ら米國民の決心の如何に牢乎たるものあるかを一層明白に看取せしめたやうである。

演説の内容は一々細かに紹介するを省く。唯其大綱を擧ぐれば、第一にウイルソンは獨墺兩國の當事者に向つて一撃を與へて居る。尤もツエルニン伯に對しては、其調子の友誼的なるを認め、彼が自分の演説を以て、將來戰爭の目的に關する細目の交渉を開く場合の基調たるを得べしとせるに滿足の意を表して居る。けれども伯が「平和の基礎的條件に對して明確なる觀念を有し」居るが如くにして、而かも獨逸の壓迫の下に徹底的に其意見を發表せざりしは甚だ遺憾の次第であるといふて居る。又ツエルニン伯が其意見を公表する前豫め其大要をウイルソンに内示したといふ、當時尤らしく傳へられた風評に對しては、絶對的否認を言明して居る。次ぎにハートリングに對しては、其態度ツエルニン伯に對する如くではない。劈頭其調子の甚だ非友誼的なるを責め、其所説は槪して曖昧にして且つ混亂せりとなし、(一)「一般原則の論議を承認しながら、之を實地問題の處分に適用して最後の解決をつけんとする場合に至ると常に之を回避する事、(二)就中領土及び主權に關する或特殊の問題については、際[illegible]に之を一般會議に附するを拒み、即ち之を直接利害關係ある國家の特殊問題たらしめんことを主張せる事(三)を擧げて、其態度の甚だ利己的なるを難じて居る。彼曰く、「現戰爭に關係ある一切の問題は、現戰爭に參加せる各當事者に於て合同審議して、之を決定せざるべからず……伯の說の如きは、之れ一時の彌縫的平和を來たすに止まり、夫の維納會議と何の選ぶ所なし……吾

人の求むる所は吾人が一致協力して保障し維持し得る所の平和ならざるべからず……即ち講和に關する一切の問題は、理否に關するものと得失に關するものとに論なく、一に共同の裁定に附して公正の判斷を求むべく、決して二三主權者間の私定に委すべからず」と爲して、飽くまで獨逸の個別的解決案を排斥して居る。

第二に、彼は一般講和の基礎原則として、(一)「一の合併あるべからざる事」(非併合主義)、(二)「一の貢賦あるべからず、また一の懲罰的賠償あるべからざる事」(無賠償主義)(三)「民族の希望は尊重せられざるべからず、人民は其承認による事無くして何の支配何の政治をも受くべきものにあらざる事」(民族自決主義)の三大綱目を掲げて居る。之れ固より前に宣言せる所を簡約し繰返したるものに過ぎない。唯此中第三の點が獨逸の最も回避せんとせる所たりし丈け、之れについては更に(一)凡て解決は姑息的なるべからず、必須的正義の要求に合し永久の平和を保障し得べきものならざるべからざる事、(二)土地及人民は之を單なる動產の如く見做し、一の主權者より他の主權者に縦に動かすべからざる事、(三)領土問題は當該住民の利益を主眼として之を解決すべく、斷じて競爭國間の利害調節の具に供すべからざる事、(四)凡て正當と認むべき民族的希望に對しては十分の滿足を與ふべき事、を宣明し、獨逸の主張を痛擊して完膚なからしめて居る。

第三に彼は前よりも一層簡潔的確なる言辭を以て、再び戰爭に對する米國民の決心を說いて居る。暫く其言ふ所の大要を聽け。曰く、以上の主義は今や世界列國の認諾を得た。獨り承認を肯んせざるものは「獨逸に於ける軍國主義、併合主義の代辯者のみ」である。抑も吾人參戰の動機は「獨逸の軍事當局者が人類の平和安寧を破れるに對する世界の憤怒と苦痛とを相共にせんが爲めに外ならず」。「吾人は如何なる事ありとも陰謀と武力とによつて支配せらるゝ世界に棲息するを諾ふ能はざる」が故に、「國力のあらゆるものを傾注し、」「資源の一切を擧げて」、此戰爭を繼續すべく、

かも「主義の爲めに擇びたる行程より再び引返す事なかるべし」と。

（二）

二月十四日下院に於て爲せるロイド・ヂョーヂの演說も、一月下旬獨墺當局者の爲せる應戰に觸れて居る。而して米國大統領の態度が兩者に對して寬嚴の別ありしが如く、彼の態度も亦ツエルニン伯に比較的寬にしてハートリングに嚴である。唯ツエルニン伯が伊太利國以外の伊太利民族及び南スラヴ諸民族の運命に關して、聯合國の主張に反するの言明を爲せるについては、烈しく之を責むるに躊躇しない。若し夫れハートリングに對しては、「眞摯なる態度を以てせるものとは信じ難し」といひ、又「世界の認めて以て正當なりとする條件の下に和を議するの誠意ありと判ずべき何物をも含まず」といひ、徹頭徹尾反撃の戟先を向けて居る。而して彼は、講和の條件については、「先に發表せる予輩の陳述は、正に吾人の戰爭によつて達せんとする目的と理想とを包含して餘す所なしと信ずるが故に、最早や之については全然讓步の餘地なきを言明せざるを得ず」とて、米國大統領と共に、飽くまで戰ふといふ英國民の牢乎たる決心を語つて居る。

併し乍らロイド・ヂョーヂの演說の最も肝要とする所、從つて又吾々の最も興味を惹く所の點は、寧ろアスキスの質問に對して與へたる聯合國軍事會議に關する說明である。此日アスキスは、一月卅日より佛國ヴエルサイユに於て開催せられたる聯合國最高軍事會議の決定について首相の答辯を求めたのである。抑も此軍事會議が極めて重要なる――從來に例の無い程の重要なる――意義を有するものたることは、當初から已に洽く傳へられて居る所であつた。一體之と同じやうな軍事會議は、實は之までとても屢々開かれた事がある。併し從來のは、例へば共同策戰の步調を揃へようといふ樣な相談で、此會議に直ちに實行上の最高命令權を與へようといふ邊まで評議の進んだとは無い。出來る丈け共同の步調は取るが、各聯合國の軍隊を一令の下に組織統轄するといふ機運は、最近まで熟さなか

つたのである。現にロイド・ヂョーヂ彼自身の言明する所に據れば、彼は昨年の十一月、「聯合國軍事會議に對して實行上の權限を附與するの意無し」と明言した事があるといふ。然るに今度の會議に於て、どうやら實行上の命令權を此會議に與へたらしく見える。果して然らば之れ實に事柄自身極めて重大なる問題たると共に、又人をして其茲處に到らしめたる形勢の異常なるを想はしめざるを得ない。之れアスキスの質問ありし所以であらう。

ロイド・ヂョーヂは、此質問に對して明白なる説明を與へる事を拒んだ。尤も拒んだからというて、我國の諸大臣のやうに、事柄を曖昧にして責任を回避し、質問者は勿論一般環視の國民をして五里霧中に迷はしめ、從つて又不安危惧の中に彷徨せしむるが如きものではない。彼は説明拒絶の理由としては、明白に二つの點を擧げて居る。一つには「ヴエルサイユに集合せる聯合各國代表者は、孰れも會議の内容に關するすべての報告の發表に反對」せる事を擧げて、之を秘密にするは一の協約上の義務たる事を明にした。二つには「軍事會議の權限擴張について明確なる説明を與へんとせば、勢ひ諸會議の議決事項に言及せざるを得ず、若し右議決事項にして多少なりとも敵國側の知る所とならんか、之れ徒らに敵を利するの結果に終らんのみ」と説いて居る。

然り而して彼が此等の拒絶理由を明かに納得して貰ふ爲めに述べた所によつて、更に次の二點が吾々に明かになつた。第一は現在の戰局殊に西部戰場は今や非常なる危局に在る事である。西部戰線は、實は最近まで聯合軍の方が兵數に於て非常に優越であつた。然るに獨逸は休戰中軍隊を動かすべからずとせる露西亞との約束に背き、鐵道能力の許す限り軍隊を急速に西方に輸送したが爲めに、今や聯合軍は、却て敵側より多大の威迫を蒙る事になつた。是に於て之に應ずる最善の策を講ぜねばならぬといふ所から、此聯合國軍事會議を開くに至つたのである。第二は此新形勢に對應する爲めには、何處に危險と脅威とが發生しても直ちに之

に對抗する事が出來るやう、英・佛・米・伊の有する全勢力を最も有効に活用する事が必要である。其爲めには「聯合各國軍隊を單一なものとして取扱ひ得るやう手筈を整へる事絕對に必要」なることである。而して會議は討議を續くる事五日、其結果として實に完全なる一致結合の事實を見たといふのである。從つて今後の協同策戰は從來とは全く面目を一新したる方法によつて行はるゝであらう。

以上の二點は、彼の論辯の中に明白にあらはれて居るが、然らば如何なる所謂「手筈」が整へられたかといふに、此點については斷然言明を拒んだのである。「數百萬生靈の運命、國家の安全名譽並びに世界將來の幸福を保障すべき戰爭目的の實現如何は、實に繫つて此決議事項にあり。之に關し此議場に言明を敢てするは、罪正に死に當る。予は斷乎として說明の要求を拒絕するものなり」と斷言し、下院にして若し此態度に不滿ならば須らく政府を代へよ。未だ政府に對して其責任を捨てずと云はゞ、協商國との折衝に於て願はくは政府に行動の自由を許せ」と求めて居る。今や西部戰線に於て風雲正に大に動かんとするものあり、而して獨墺軍の近く大攻勢に出でんとするの報あるの際、此英國首相の言明は、最も吾人の注目に値するものである。

(三)

以上揭げたるウィルソン及びロイド・ヂョーヂの演說に關聯して、予は玆に次の三つの點を吾國民に警告したいと思ふ。

第一は米國が益々深く對獨墺の聯盟に深入りしつゝある事である。米國が同じく獨逸を敵として起ち、此點に於て英佛等と當面の目的を一にし、又從つて其事業を共にするものなることは固より云ふを俟たない。併し乍ら、米國が此の戰爭參加によつて達せんとする終局の目的は、必ずしも英佛諸國と全然同一ではなかつた。何となれば米國參戰の目的は、唯一に國際的正義の確立にあり、獨逸が此點に關する米國の主張を根本的に承認すれば開戰の目的は即ち達せらるゝに反

し、英佛諸國は米國と同樣の目的を揭ぐる外、更に序を以て多年双方の間の懸案であり、從つて又歐洲平和の禍根であつたあらゆる利害問題をも此際一擧に解決せん事を希望するものであるからである。從つて英佛諸國の戰爭の目的には、正義の確立と云ふ問題の外、尙利害の調節と云ふ問題がある。尤も此利害問題の衝突が多年歐洲平和の禍根であつた以上、之を解決する事が卽ち永久平和の必須的前提條件なるが故に、米國とても此點を全然度外に措く譯ではない。けれども此等利害問題の實際的解決方策如何と云ふ問題になれば、英佛諸國は自ら米國の如く冷靜公平なるを得ざる事情がある。現に又此等の點に於て兩者の間に其觀る所を一にせざる箇所も少からずあるやうに思はるゝ。故に米國としては、同じく獨逸を敵として戰ひ、而かも戰爭の主要なる目的は英佛側と異るものではないとしても、全然英佛の戰爭の目的を裏書する態度に出づる事は、彼の努めて避けんとせる所であつた。之れ米が一九一四年九月五日の所謂單獨不講和條約に加入するを肯んぜざる所以である。其でも實際上米國は單獨では獨逸を屈服する目的を達するを得ず、英佛側も亦米國の勢力を自分達の勢力に加ふる事が非常に其利益とする所であるから、出來る丈け一致行動しやうと云ふので、自ら雙方の間に疏通交涉の途は開かれた。去年の夏英佛の責任ある名士が米國に渡航したのも、恐らく此爲めであらう。斯くして事實上に於ては、米は段々英佛の聯盟に深入りして來る。而して其結果として表はるゝものは、一には云ふまでもなく聯合國側の軍事的勢力の增大である。二には米國の無私無慾の主張によつて英佛側の戰爭目的の醇化さるゝ事である。而して三には此醇化された形に於て聯合國の『戰爭目的』に關する思想は、新たに米國の後援を得て非常なる道德的勢力を增すに至れる事である。而して今や聯合國軍事會議の決議に加はる事によつて、米は更に一段の深入りをした。而して之によつて將來に起るべき結果の最も注目すべきものは、軍事上の優勢よりも思想上の優勢が益々其力を加へて遂に世界の全局を

配するに至らんとする事である。少くとも戰爭の目的並びに講和條件に關する思想上の葛藤に於て、去冬以來、獨逸側の主張が已に孤城落日の觀を呈して居る事は、我々の大に愉快とする所である。

第二に歐洲諸國は、今や軍事會議の決議の結果として國家國民の區別を忘れ、各種の痛切なる利害を投げ出して、高尚なる目的の爲めに協同一致するの經驗に入りつゝある事である。所謂國際主義が如何に流行しても、從來の國家は、最後に容易に人に許すべからざる或物を握つて放さなかつた。而して此或物を擁護し主張する最後の手段は卽ち武力である。從つて何事に於て協同一致の途が開かれても、軍隊を投げ出して之を國家以外の命令權の下に置くといふ事だけは、從來殆んど考へられもしなかつた。之れ從來共同策戰の必要に迫られつゝ尙且つ十分に聯絡ある組織的行動の執られなかつた所以であり、又「聯合國」其物に固有なる軍事的弱點と認められて居つた所でもある。けれども共同の敵を根本的に打破すると云ふ目的から云へば、何うしても此超ゆるべからざる溝壑を思ひ切つて飛び越えねばならぬといふ事は段々明白になつて來た。唯此最後の一斷は、前後五年に亘る苦き經驗も尙容易に之を促す事は出來なかつたのに、露國の脫退によつて生じたる新形勢は、茲に端なくも空前の危局を現出して、初めて聯合諸國をして其最後の寶物を投げ出さゞるを得ざらしめた。苦し紛れの窮策とは云へ、一旦開かれたる此新らしい經驗は、必ずや將來の世界に何等か重大の影響を及ぼさずしては已むまい。若し幸にして今度此事に成功せんか、軈て將來の世界が、此經驗に促されて、更に各種の事業をモット大規模に、モット組織的に世界的の經營の許に置かんとするの風潮を盛ならしむべきは、火を覩るより明である。成否未だ容易に量るべからずと雖も、要するに今や世界は、列國割據の個別的經營より來る精力の浪費を避け、人類の――民族の平和並びに發展の目的を最も有効に達せしめんが爲めに、益々一にならんとするの顯著なる傾向を示しつゝある。此趨勢に對して吾人は果して何の

態度を執るべきであらうか。

第三に露國の脱却によつて新たに生ぜられたる所謂空前の危局は、聯合諸國の民心を失望落膽せしめたよりも、寧ろ大に緊張せしめたる事は、また見逃し能はざる現象である。夫れ緊張は民心を新たにする。歐洲各國は今度の戰爭に於て幾萬の精鋭を殺し、ために戰後に於ける國力の回復といふ點より大に憂ふべきものありと云ふものあるも、民心の一新により今後の國民的奮勵を豫想する時は、獨り東洋の一隅に惰眠を貪つて居る我々の前途が寧ろ却つて大に氣遣はれざるを得ない。之れ實に西部戰場の危局に劣らざる重大の精神的危機ではないか。偶々時局の急に覺醒して國民の奮勵を説くものはある。然れども其云ふ所の多くは、歐洲諸國の困憊に乘じて東洋諸國に帝國の地盤を擴張すべく此千歳一遇の好機を利用せよと云ふの類である。之れ寧ろ時代思潮と逆行するの僻説にして、國家の前途を謬る之より甚しきはない。今や吾々も亦大に世界的に醒むべきの秋ではあるまいか。(二月十七日)

新聞紙振假名(ルビ)廢止論

ルビ必要論は盲目的迷信——新聞經營者、編輯者、社會部長等のルビ必要論——日本文字の特質よりする必要論——ルビ廢止反對論の五論點——之に對する予の駁論——ルビ廢止によつて受くる利益(漢字制限と文章平明)——漢字制限論、羅馬字論よりも有効なる國語改良策——新聞社自身の利益(時間經濟と紙面經濟)——讀者側の利益(報道迅速、記事豐富、印刷鮮明)——ルビ廢止は恐らく最近に起るべき實際問題

「東京朝日新聞」記者　高山覺威

(一)

現今の新聞經營者に向つて、新聞紙から、振假名即ちルビを廢せよと云ふ者があつたならば、何と之に答へるであらうか。恐らく一言も答へぬであらう、

の餘りに素人臭いのに呆れるであらう、先づ默殺するか笑殺する位が落であらう。獨り經營者ばかりではない、新聞記者も廣告係も販賣係も、苟も新聞事業に關係のある殆んど全部の人、少くも其の十中の八九まで之に對して一顧も半顧も與へぬであらう。自分は其の經驗を有する一人である、自分も新聞記者として此の提案者を笑殺した事があると同時に、自分が他に此の問題を提出して冷笑せられた事もある。自分が人を笑つたのは數年以前であると記憶するが、人に冷笑されたのは未だ新しい事である。

從來新聞のルビを廢せよと唱へた人は大概は新聞に經驗のない所謂素人か、然らざれば新聞經營といふ事には全く沒交渉な編輯局の新しがりの或者が只一場の思ひ附から何等の考察も何等の據り所もなく放言したものであつた樣に考へられる、それが爲めに新聞業者から「馬鹿な事を」と云はるればそれ迄である、敢て爭はうともせず、只專門家はルビを必要とする動かすべからざる或る眞理を有つて居るものとして、再び考慮を費さずして極めて單簡に承服するのが常であつたと思はれる。

又新聞業者の側に在つても考慮を費さぬ點に於て殆んどルビ廢止提案者と同列に置かれる、彼等は三で十は割り切れぬといふ位の筆法で即座に、ルビを取り去る事は出來ぬと否定するのが常である、素人の信ずる如き動かす可らざる眞理があつての話ではなかつた樣に思はれる。

併しながら、新聞紙のルビ存廢問題は左樣に手輕に片付けて置くことの出來ない重大問題である。實は新聞紙の段數が――今は十段になつて居るが――八段から九段にならうとし、活字が從つて小さくならうとする機運に向つて居た三四年以前から、ルビ問題は自分の頭にコビリ着いて離れない、故に自分は玆に、今日迄輕んぜられて居る此のルビ存廢問題を、經驗あり權威ある同業者並びに新聞紙に對して種々の要求を有する讀者側の人々が、深く立入つて研究せられんことを希望し、且つ自分が有する意見の一端を述べて是正を

乞はんが爲めに、敢て提案しやうとするのである。

（二）

但し自分には旣にルビに對する一つの動かすべからざる自己の意見がある、それはルビは今後早くば直ちに、然らざれば一二年の間に、晩くも五六年の間に、新聞紙から全廢した方が可いと云ふ意見である、之に對しては直ちに新聞業者から反對說が出るものと信ずる、笑殺默殺より一步進めて親切に自分に敎ふる人は必ず云ふ。

「新聞紙の勢力は「衆」といふ事である、多く讀まれるといふ事である、新聞業の經濟的立場から云ふても同じく「衆」卽ち多數の讀者を得る事が最も重要なる第一義の問題である、然るに世間の大多數はルビを力に新聞を讀まんとする無敎育な下層社會の者や女子供である、此の點に於て、ルビ廢止が新聞製作者に取つて假令便利であるにもせよ、相容れないものがあるのである、卽ちルビ廢止は「衆」を無視するものである、一言にして盡せば、賣れない新聞を作つても仕樣がないではないか—

と、之れは經營者側の言分であるが、編輯に携はる者は又云ふ。

「ルビのない新聞は見た目の感じが惡い、柔か味、溫か味といふものがない、五號ベタ、六號ベタ（ベタとはルビの無い組方の事）の多いのは醜い、汚い、淋しいものである、（新聞製作者は俗に之を白ッぽいといふ。）」

と、社會部長は又次の如く云ふであらう。

「ルビ廢止は社會部の廢止に等しい結果を生む、婦人や低級の讀者の領分は全く新聞紙から除かれ、殆んど官報か報告書かの如き索莫たる光景を呈し、興味の大半は之れが爲めに失はるであらう、如何に內容が面白くとも、一瞥して堅苦しく感ずる時は、讀者は却々食ひ付き得ぬものである、不味くとも旨さうに見せるのが新聞製作の手際である、ルビ廢止は旨いものをも不味く見せるやり方で、損なやり方である、社會部の如きは絕對に反對である。」

と、而して最後に誰も同じ事を云ふ、曰く、

「若しルビ廢止が實際に行ひ得るものならば、いづれの新聞かゞ始めさうなものではないか、二十年以前、日本新聞を始め、ルビ無しの新聞やルビを多く用ゐない新聞が數種あつたが、いづれもルビ黨の仲間入りをして、今日では全く其の影を留めないではないか、議論よりも何よりも之れは經驗の敎ふる處で、日本字の不便を訴ると同時に、日本字がルビを要求するといふ證左ではないか、」

と、それから稍々具體的で、有力な說せらとれるのは、

「日本の文字に或る特殊な訓ませ方がある、地名人名等の固有名詞に思ひ懸けもない漢字を當て篏めたのや、動詞や形容詞にも變つた訓み方を要求する場合が極めて多い、モ一つは同一の文字を、孰らに讀むでも差支ないが、筆者が特に恁う發音して貰ひたいと云ふ場合もある、例へば「日本」を「ニホン」と言つて貰ひたい時もあり「ニッポン」と語勢を强めて發音させたい事もある、恁ういふ際に、ルビは最も簡單に最も適切に其の要求を滿たすではないが、由來日本の文章は日本の言語と言語學の系統上別箇の性質を有する支那の文字を採り入れて居るが故に、甚だしい無理があり不便がある、此の無理と不便を幾分か緩和して呉れるものはルビでなければならぬ、無敎育者のみならず、學者と云はれる人に取つてもルビは必要である。」

と云ふにある、尙ほ此外に日本の新聞發達史、活字印刷の改良史、新聞紙の社會部なるものゝ發達史などを引證する人もあらうが、それは單にルビ付の文字を使用するに至つた徑路を物語るに過ぎずして、本問題とは直接關係を有たぬやうに思はれるから、それは茲には省略して置く。

（三）

ルビ廢止反對說は、尙ほ詮索すれば新しい議論も出て來るであらうが、差當り自分の聞き且つ考へた所では、以上の外に出でない、今之を約めて云へば、ルビの無い新聞は

一、無教育者に讀み難いから、新聞購讀者が著しく減ずる。
二、見た目が淋しい紙面が汚い。
三、記事が自ら堅苦しく感ぜられ、讀者の興味を惹き難い。
四、ルビ付はルビ無しの進歩したものである。
五、日本の文字は漢字を使用して日本の發音を爲さしむるものなるが故に、ルビを要求するのが自然である必然である。

と此の五ヶ條である、自分は此の五ヶ條に就いて次ぎ〱に論駁を試みて見たい。

先づ自分の考へに依ると、ルビ廢止が購讀者の數を減少せしむると云ふは餘りに物を單純に考へた意見であると思はれる。新聞紙の販賣方面に從事して居る者は、新聞購讀者の多數が教育の低い人間にあると、憶測獨斷して居る、是れ實に誤れる第一步である。日清戰爭から日露戰爭、日露戰爭から世界大戰の始まつた大正の今日、此の間我國の人文の發達は、顧みて僅か十年の昔でさへ隔世の感がある、普通教育の普及も之に似たものがある、而して十年前の小學生徒は今は立派な青年である、天保生れの老人は現社會活動の中心ではない、今は明治生れの人の世の中である、目に一丁字のないものは一年々々に數を減じつゝある、「辨慶が長刀」流にルビのみを頼りに新聞を讀む購讀者は、今日百人の中幾人を數ふるであらうか、自分は決して多數とは云ひ能はぬ——尤も茲に云ふ購讀者とは所謂讀者とは別である、讀者必ずしも新聞紙の購買者ではない下女も子供も讀者ではあるが、購讀者ではない——故にルビを廢したが爲めに購讀者の數が等しく減ずるものとは受取り難い、販賣業者の頭は、新聞紙にルビを付け始めた頃の説を今日尙ほ忠實に守つて居る、然るに世の中はそれ以來幾變遷、幾轉化を爲して居る事を知らねばならぬ。

尤も新聞の文字にルビが付けられ始めてからも、廣告の文字だけは殆んど全部ベタで組まれて居る、之れは廣告料金の關係から來たもので、ルビ付もベタも一

等の廣告料であるならば廣告依賴者もルビ付を望むであらうとも云へるが、併しながら料金の廉不廉を問ふよりも廣告者の先づ案ずる所は其の廣告の効力の有無でなければならぬ、ルビ無しの文字を讀む者が尠いとするならば約三分の一位の廣告料の增加は忍んでも(ベタとルビ付とは此位の比例)ルビ付を使用するのが利に慧敏なる商人のやり方である、何十年來ルビ無しの廣告を爲し來つて敢て効力を疑はぬ廣告依賴者は、此の邊に充分な確信を有するものと見られないではない、中には廣告文の天地左右行間凡てに多大な餘白を置き乍ら態とルビ付を用ゐないのがある、斯る廣告の依賴者はルビ付を必要とせざるのみでなく、却てルビを邪魔物視して居るのである。之れは新聞製作者に取つて味ふべき事であるのに何等の注意も拂はれて居ない、「あれは廣告依賴者の隨意である、」これが新聞社側の態度である。

成程廣告依賴者も隨意であらう、新聞製作者も隨意であらう、各々勝手な道を勝手に歩いてゐるに違ひないが、新聞製作者には恐ろしい矛盾撞着がある。彼等は婦女子にも無學者にも讀ませたい爲めにルビを施すと稱しながら、その婦女子や無學者の讀まうとする記事に態とルビをつけない場合が多くありはせぬか、例へば芝居や活動寫眞や寄席の案內、相撲の取組勝負手捌き、これ等は各社申合せた如く、ルビ無しに組むで居るではないか、モ一つ甚しいのは、無學者の集まりともいはれる相場社會を相手にする相場欄である、此の欄內に一字もルビ付を使用して居らぬのは何の爲めであるか、而して米國大統領の教書、露獨媾和條件、外交調査委員會、これには一行も殘さずルビがつけられて居る。若し此の矛盾に理由をつけるならば、それは詭辯である。

（四）

見た目が淋しい、醜い——黑人の術語でいへば——白ッぽい、とは五號ベタ六號ベタの多い紙面に對して黑人の編輯者から屢々聞く言葉である、成程ルビ付の文字は賑かには相違ない、黑ッぽいには相違ない、併

し白ッぽいのが醜いものであらうか、淋しいといふのは單調であるといふ意味であらうが、ルビ無しは果して單調であるであらうか、若し字畫の少い、卽ち複雜ならざる文字の連續が、單調であり醜いものであるならば、西洋の新聞は、日本の新聞製作者の嫌ふ所謂淋しい、白ッぽいものである、併し西洋の新聞は、日本のものよりも一層細かい活字を用ゐて居ながら一層鮮明であり、一層美しく感ぜられる、紙質の善惡、印刷の巧拙を外に、何となく垢拔けのした心持のするのは歐米の新聞である、自分は字畫の多い漢字に更にルビなるものを付けて複雜にした日本の新聞記事を、複雜なるが爲めに「見た目に美しい」とは思ふ事が出來ない、自分は却つて之を汚いと云ひ得る、否、事實左樣に感じるものである。現今の新聞製作者の淋しいと云ひ白ッぽいと感じるのは、それは因襲的見方である、一種の錯覺である、尤も少しの行間もなくルビ無しの文字が密接したベタ組は、日本の新聞ばかりではない西洋の新聞でも甚だ見難い見苦しいものである事は、玆に贅言を費す迄もない。併し適度の行間を有する五號又は六號活字の記事が、前見出しや中間見出しの爲めにその單調を破つて、手際よく配列せられるならば、如何に明快で、如何に感じが好いであらうかを思はしめる。

由來形象文字、特に漢字の缺點は、其の字畫の複雜な事である、現在の六號以下新七號の如きに至つては、廿畫卅畫のものは、蟲眼鏡を用ゐざれば、肉眼では分明せぬ位である、況して更に字畫に字畫を添ゆるが如きルビ付に於てをやである、今若し平假名のいろはの字畫が單調で淋しいと云ひ、之に片假名のルビを附し、尋常小學の一二年生も讀み得べくして、而も淋しからず白ッぽからざる新しき考案であると云ふものがあるならば、恐らく其愚の及ぶべからざるに呆れるであらう、漢字のルビ付も、殆んど之と五十步百步の感がある。

次の柔味がない、興味を惹かない、といふ說も、前の淋しい白ッぽいといふと同じく、囚はれた眼から見

た感じである、黒人が其皮膚の色の白化するを悦ばぬと餘り異ひはないであらう。

次に第四のルビ付はルビ無しの進歩したものとは、一應道理のある説である、ルビ無しからルビを附するに至つた徑路から云つて進歩である、時代に適應せしむべく考案したといふ點から云つても一の進歩であつた、自分は新聞がルビ付活字を使用するに至つたのは、其時代が之を要求したと信ずる、併し其時代は既に過ぎ去りつゝあると考へる、今はルビ付が惰力の時代に在るもの、只之を即時に引止むる大なる力が現はれぬが故に、恰も必要であるかの如き勢を示して居るに過ぎない。行燈から電燈に行く迄の石油ランプの役を此のルビ付活字が勤めたに過ぎない。

（五）

最後の問題は、漢字を強いて日本よみに讀ませるからして、日本が漢字を使用して居る間は、ルビは自然必然に要求せらるものであるとの説であるが、之れが最も有力らしく最も道理あるらしくして、最も無力で最も理屈に合はぬ議論である。

字畫が多く、複雑で、習得に不便で、記憶し難く、而して千數百年間の歳月を費してさへ、なほ日本の發音と完全に調和せしめる事の出來ないのは漢字である、日本の活版印刷の發達を妨げて居るのも、無際限に種々雑多な多くの字數を有する漢字あるが爲めである、現在新聞紙に使用されて居る六號活字以下の小活字を用ふる事の出來ないのも漢字の形の餘りに複雑な爲めである。たとへ漢字には、洋字の及ばざる種々の長所があるにもせよ、其の長所は其の短所を補ふに不足である。

然しながら、日本が初めて得た文字であつて、千數百年の歴史を有し、多くの新しい國語を作つた漢字を、不便であると云つて一朝一夕に廢する事は、到底望むべからざるところである、日本の現状では、漢字の不便よりも、漢字を全廢した不便不利の方が、どれだけ大きいか分らぬ、羅馬字論者が如何程聲を大にして絶叫しても、天下が之に耳を傾けぬのは尤も至極な

話である。

その不便その不利も之を忍ばねばならぬとするならば、成るべく巧みに、成るべく便利な方法を考究して使用せねばならぬ、それには、漢字の數を少くする事である、六ヶしい文字を排斥して易しい文字に就く事である、幸ひ弘法大師や吉備大臣の如き先覺者によつて世界中稀に見る簡易便利な平假名片假名が與へられて居る、漢字の數の制限によつて受くる苦痛は、此の二つの假名文字の使用法の擴張によつて補はれよう、母音と子音との二つの文字を以て表はさねばならぬ音を一つの文字で完全に表はし得る點に於て羅馬字よりも立優れる我が假名の長所と、之に形象文字の有する長所美點を加へる、之れが日本の國語を最も完全に表はす方法でなくてはならぬ。

而して漢字の數を減少せしめ、假名文字の利用を廣くするには、新聞紙からルビを除くのが、先決問題である。

現在の新聞紙は、其の使用する漢字の數が過多である、新聞製作者は口にこそ婦女子にも讀み得るやうと云へ、事實は頗る之に冷淡である、難解の議論をも、如何に平明に書くべきや、如何にして六ヶしい熟語を避けて平易な文字を擇ぶべきやに就いて、苦心して筆を執りつゝある記者が一社に幾人あるであらうか、只ルビに頼れ、如何程難解の熟語をも讀み得るであらうとは、新聞記者の態度のやうに見える。論語や孟子は愚か、毛詩でも春秋でも、ルビさへあれば讀めるには相違ない、單に讀めるとは發音し得るといふに過ぎない。新聞記者をして解し易い文章を書かしむる唯一の良法はルビを廢する事である。ルビ廢止に伴ひ、新聞社は營業上から新聞記者をして解し易い記事を書かしめねばならぬ、記者は自衛上から之に對して苦心して筆を執らねばならぬ。

斯くて新聞社のケースの上には、一萬の漢字が七千になり、五千になり、三千になる時期が來るであらう。之れが我が國文や普通教育に及ぼす影響は、教育會あたりで研究して居る漢字制限の調査會などの夢想

し得ぬ程に甚大なものであらう、之れが活字印刷の發達に資することも多言を要せぬ處であらう。

（六）

從つてルビ廢止に依つて新聞社自身が蒙る利益は更に莫大である、新聞製作上最も貴重とせらるゝものは「時間」である、編輯締切最後の一分間は、新聞社に取つては何物にも代へ難い高價なものである。ルビ付とルビ無しとは工場の費す時間が四と三の比例である。ルビ付に一分二十秒を要するものは、之をベタ組にすれば、一分間で足りる割合である、僅か一分秒時の差で重要な記事を掲載し能はぬ場合は屢々といふよりも殆んど毎日と云つた方が適切である、A新聞が國技館の燒失を他社よりも詳細に記載して、而も其新聞が他の新聞よりも早く讀者の手に配られたといふ事は、A社員の誇りとして居た最近の事實であるが、之れはA社員活動の結果でもあらうが、一つには工場の設備に充實した點があつたからだとも云へる、即ち夜中の三時四時に、即時に多數の職工を動かし得る設備がA社にあつて、他社になかつたからである。

假りに二十人の活版部員が其際小組大組に從事したとすれば、之をルビ無しに組ませるならば、三と二の比例で云へば、十三四人で足りたであらう、十三四人で足るべき仕事を二十人で働いたならば、今一層早く出來上つたであらう、即ちルビ無しは、時間の經濟であり、勞力の經濟である。

次には紙幅の經濟である、各新聞社ともに、四頁新聞は言ふに及ばず、八頁新聞も十二頁新聞も、各自相應に紙面の狹隘を感ぜぬはない、紙面の都合で紙屑籠の中に投ぜられつゝある比較的必要な記事が、日に幾十件あるであらうか、中には多額な電報料を仕拂つたものもあり、自動車や俥で記者が多くの勞力を費したものもある、時に讀者が或記事に就いて物足らず感ずることがあらう、編輯者も恐らく物足らず感じつゝも、其記事に物足る程のスペースを與へる事の出來ない憾みがある。而して新聞記事の材料は、一日々々と增加して行く、一方紙面は依然として同じ廣さである。廣

告係は一行にても多く記事欄に侵入せんとし、編輯者は極力之が防戰に努め、兩者の間に毎日のやうに紙面爭奪の激戰が行はれるのも、紙面狹隘の結果である。

　假りに現在の五號活字を本位とし之に六號活字を交へ、適度の行間を保たしめて組むとせよ、(ルビ付の一段は七十四行)一段に十行を殖やす事が出來やう、一頁に就て百行、八頁新聞ならば――其内廣告三頁、相場欄一頁を差引いて記事欄を四頁とすれば――四百行の經濟である。之を廣告と折半しても二百行を儲け得やう。況んや、ルビを廢し、漢字の數を減じ、字畫の尠い文字を多く使用する事になれば、其結果として現在の五號活字は五號と六號との中間位の大さに、六號活字は更に一段小さく改鑄し得るに於てをや、然らば今の一頁十段制は進んで十一段制十二段制を執る事も出來、記事の上に廣告の上に、如何ばかり幸福であるか計られぬ。

　更に之を讀者側の受くる利害から打算して見やうと思へば、上述の理由から推して其の結論を得ることは容易である。

　改めて言ふまでもない。即ち先づ第一に逸早き報道に接する事が出來る。第二に豐富なる記事材料を得られる。第三に讀むに骨が折れなくなる、第四に眼科醫の方の云分ではないが、印刷の鮮明に依つて眼を疲らす度を減ずることが出來る、其他細かい事に互つて並べるならば、直接間接に受くる讀者の利益も亦莫大と云はざるを得ぬ。

　而も新聞經營者が、ルビ廢止に耳を藉さない所以のものは、曩に述べた因襲と迷信から脫するとが出來ぬからであらうと思はれる。尙一つは各新聞社相互間の激烈なる競爭にも關係があると思はれないではない。

　併し自分がこゝに提唱する案は、決して新聞社相互間の競爭といふ如き小なる問題ではない、新聞社對社會の問題である。新聞界全體の利益と、社會全體の利益との一致點を見出すにある。

（七）

　餘り調子に乘つて書き續けた爲めに、肝心な一

失念したから、玆に一言して置くが、或は旣に其必要が無くなつたかも知れぬが、日本の固有名詞や其他にはビル無くしては讀み能はぬものがあるとの說、及び同じ文字を記者が恁う讀ませたい、彼あ讀ませたいと云ふ場合ルビが必要であるとの說、此の二つに就いて自分は決して異存を申立てる者でない、其通り恁ういふ場合は自分もルビの必要を感じない譯に行かぬ、けれども开はルビ必要論の全部ではない、只特殊な場合を示すに過ぎぬではないか、特殊な場合は、特殊な方法としてルビを附ける事が敢て不可ではあるまい、又それが何等の不便を齎らすものではあるまいと考へられる。

今一つ社會敎育上から見たルビ必要論がある、その說によれば、新聞は其のルビに依つて漢字の智識の亡びつゝある現代の人に、絕えず漢字の音と訓とを敎へ其缺陷を補ひつゝあるではないかと云ふのである。餘りに長談義に亙るを恐れて、之に對する管々しい反對說は預つて、只一言述べて置きたい、曰く論者の說の如くならば、英米の新聞紙に向つて、ラテン語の智識を國民に與へるが爲めに、成るべく多くのラテン文字を使用せよと云はねばならぬと。

之を以て討論は終結として置きたい、最後に自分は大に耻かしい次第がある、それは數年後の人々が之を讀むで、ルビ廢止の如き論ずるにも足らぬ自明の事を、張膽明目して論議する馬鹿々々しさよと云つて自分を嘲けるであらうと考へるからである、併し自分は嘲けられ罵られても可い、嘲けられ罵られる事の成るべく近き將來であらん事を希望し且つ信ずるものである。

尙ほ自分は此稿を草するに方つて、僭越ながら、力めて平易明簡な文字を使用し、ルビ無用論の實地の試みとした。而して雜誌として進んでルビ廢止を實行し、而かも其發行部數が東都の第一流新聞を遙かに超越して居る中央公論に於て此の論議を發表することを、頗る意味深きことゝするものである。

(大正七、二、五夜)

史談文藝

▲ 戰爭の消長と **輿論との關係**……文學博士 大類伸 ▼

▲ バイロンの海賊と **毛剃九右衞門**……木村鷹太郎 ▼

□波蘭悲史……加藤朝鳥

□日本女性史上の人物……松浦春峰

□日本最初の遣歐使節……寺崎武男

□ジャガタラ文物語……坪谷善四郎

飛鳥時代美術 黒田鵬心

江戸の女藝者 龍居枯山

□露西亞の革命……齋藤清太郎

□維新當時の女子教育……矢島揖子

□橋本景岳を懐ふ……滿川曉峰

□白虎隊(花外情調)……兒玉花外

古代 **日韓關係**……鳥居龍藏

史上の **理想的戀人** 青柳有美

□堂々四百頁

□最高權威の

三月號

定價五拾錢

郵稅三錢

東京赤坂一ツ木六十五

史談文藝社

振替東京二二四一七

小栗上野介……渡邊默禪

地底の怪聲……江見水蔭

□八百屋お七と白子屋お熊……福島歐波

□越前城下の血煙……坂東太郎

□朔平門の兇變……西村哀花

□名殘の花(長篇)……須藤南翠

秘中の秘……伊藤銀月

福島正則……半井桃水

□義士接待錄……堀内源右衞門

□元吉原奇談……小西可東

□寶暦の辻斬り……京野藁平

□小さと庄之丞……泉斜汀

▲ 傳奇小說 **白菊御前**(長編)……長谷川時雨 ▼

▲ 勤王小說 **平野二郎**(長編)……渡邊霞亭 ▼



異說切支丹屋敷

田中貢太郎

五月の午後の陽が輝いて、藍色の濃い海の方からは、輕い快い風が吹いてゐた。響灘と玄界灘との間になつた筑前大島の曾根の鼻を廻つて、その山陰に寄せて來た黄ろな帆をつけた一艘の小船があつた。舳先の長く尖んがつた風變りな船で、大島村の磯に近くなると櫂を入れて、そろそろと帆を下ろしはじめた。一人の男は、胴の間から頭を出して、片手で目庇をこしらへて、人家の方を伺ふやうにした。

村の背後には、御嶽と云ふ小山が靑々と聳えてゐた。日和が好いので、漁船は皆沖に出て了つて、磯には浦奉行所の早船が六七艘繋いであるばかりであつた。それは寛永二十年の五月十二日の事であつた。

小船は人家の外れになつた磯の岩陰に著いた。その陸には、斜陽のさした板屋根の番小屋があつて、二人の與力がゐたが、二人とも横になつて午睡をしてゐた。一人は頰のすつこけた胡麻鹽頭の老人で、それは頰杖をしてゐた。他の一人は若い圓顏の男で、それは肱枕をして心持ち好ささうに鼾をかいてゐた。と、老人が眼を覺して、二つばかり大きな欠伸をすると共に、無意識に頭をあげて、鹽魚の眼のやうな赤くうるんだ眼

を磯の方にやつた。見馴れない小船が磯に著いてゐて、船の中から三四人の者が陸に上りかけやうとしてゐる所であつた。

『―さん、―さん、』と老人は押しつけるやうに同役の名を呼んだ。

若い圓顔の同役は、びつくりして頭を持ち上げて、眼をぱちぱち動かした。

『怪しい船が著いた、怪しい船が……』と、老人は磯の方に指をさして見せた。

二人は片寄せてあつた刀を腰にして、あはてゝ番小屋の傍の崖を下りて行つた。

赤い大きな甕を一つづつ持つた四人の者が直ぐ眼の前に來た。四人とも背の高い男で、麤い飛白の單物を著て、短い刀をさしてゐた。與力の眼は先づ赤い大きな甕に引付けられた。高い鼻と、じやんぎりにした頭も見えた。

異人、切支丹、人の膽を入れるやうな魔法の壺。二人の與力は、眼の色を變へて引返した。四人の者は之を見ると、立ち停つて頭を集めた。

與力の姿は、番小屋の陰に隱れて行つた。四人の者は何か頷きながら陸の方に歩き出した。彼等は水を得る爲めであつた。長い足で大股に歩いて、番小屋の傍をあがると、人家の方に行く砂の白い小徑があつた。

四人の者は人家の方に向ひて歩いた。とつ付の左側に、二三軒の小さな苫葺の家が見えて、その前に子供を抱いた肥つた女が一人立つてゐた。

四人の中の一人は、水のある所を聞く爲めに、女の方へ歩いてゐた。その男は、甕を頭の上に載せてゐた。

澤山の人の氣配がした。突棒、刺叉などを手にした二十餘人の群が村の方から駈けて來た。浦奉行の村井仁右衛門が番小屋詰の與力の知らせによつて、怪しい風體の者を捕へに來た所であつた。

四人の者は驚いて、何か口々に叫びながら、足を返して逃げ出した。女の方へ歩いてゐた男は、甕を路の上に投げ出して行つた。

奉行の一行が番小屋の傍に行つた時には、四人の者

はもう船に乘り移つてゐた。崖の下にも甕の一つが碎けてゐた。

小柄な色の白い奉行は、軍扇を振りながら苛立しい聲でさしづした。與力の群は、崖を走り下りて、磯の方へと行つた。

怪しい船は、するすると水際を離れた。艫の方には二人の者があはてふためいて櫓を動かしてゐるのが見えた。帆をあげやうとして、帆柱の下で猿のやうに前屈みに背を圓めて、帆綱を引き絞つてゐる者もあつた。

與力の群は、早船のある方へ駈けて行つた。三艘の早船は、またゝく間に波の上に浮んだ。

怪しい船は、黄ろな帆をあげて、數町の沖を前へ前へと走つてゐた。船の向ふには、池の島が薄黒く霞んだやうに見えてゐた。

早船にはそれぞれ四丁の櫓を立てゝゐた。池の島が近くなるに從つて、怪しい船との距離が縮まつて來た。早船からは矢を飛ばし出した。一つの矢は夕陽に染められた帆にかゝつて落ちなかつた。

怪しい船では、諦めたやうに帆をおろして、船を潮の自由にまかせた。早船は三方から寄せて行つた。船の中には、丁度十人の怪しい男が胴の間に集まつて、空の方を見詰めながら、それぞれ小聲で祈りをあげてゐた。

奉行はそれと見て、片つ端から繩をかけさして、乘り船と共に、浦奉行所に引いて行つた。船の底の皮袋の中には、銀の十字架や、金貨や、怪しい文字の書籍などがあつた。書籍の中には、日本の風俗を畫いた挿畫のある物もあつた。それは長さが五寸、幅が四寸ばかりの物で、製本の體裁は大和綴と云ふのに似てゐた。

彼等が切支丹である事は、所持品から推して否まれない事であつた。浦奉行所では、之を重大囚として福岡の藩廳に送つた。藩廳は又之を長崎の奉行所に送つた。奉行所の取調によつて、羅馬法王のもとから直接に派遣せられた布教の戰士である事が分つた。伴天

が四人、入滿が一人、同宿が五人であつた。その内で入滿は、南甫と云ふ長崎生れの者であつた。壽庵と二官と云ふ支那人の二人もあつた。一行の代表者と見なすべき者は、ジウセッペ・キアラと云ふシシリヤ人であつた。

その歳は島原に於ける天主教徒の叛亂が鎭壓せられてから六年目であつた。國土侵略の疑ひから、德川氏になつてからも、豐臣秀吉の遺策を繼いで、天主教の切支丹を慶長十七年と寛永十六年との二回に渉つて禁止した。邪宗門に歸依してゐた者は、轉びと云つて改宗させられた。長崎、五島、平戸あたりでは、教徒と非教徒を鑑別するに、耶蘇の畫像を踏ました。從はない者は容赦なく殺戮した。刑死した教徒の數は三十萬に達した。磔殺、斬首、焚殺。教徒の叛亂を惹き起した島原藩では、教徒を溫泉嶽の噴火口に投げ入れるなど、刑罰は恐ろしく殘忍を極めたものであつた。後には改宗まで到らないで、怪しい者と見れば皆殺戮した。寛永十七年に長崎に來た貿易船の船員は、七十四人の乘組中、日本の禁教の峻嚴を報告さす爲に、十三人を赦して、その他は極刑に處してゐた。それと前後して薩摩の甑島に潜入してゐた六七人の切支丹も殺戮を加へられた。

かうした空氣の中に這入つて來た一行の運命にも、甚だ危まれる物があつたが、井上筑後守政重と云ふ理解のある切支丹奉行がゐた爲に、幕府の天主教に對する取扱が大に緩和せられてゐた。

一

岡本三右衞門は、牢屋の塀の外を落付いた足どりで歩いてゐた。二十間四方と云はれた牢屋の外圍は、赤土を盛りあげた土手のやうになつてゐるが、内面には一丈餘の切石を築いてあつた。その圍ひの内には、獄舍、番所、土藏などと共に、自分の住はされてゐる建物もあつた。

三右衞門は、晝飯のあとで散歩してゐる所であつた。碁磐縞の單物を著た背の高い男で、林檎色の光澤の好い顔に、碧いやさしい眼と、大きな鷲鼻の鼻とを

待つてゐた。彼はジウセッペ・キアラであつた。捕へられた年の七月江戸に送られて、傳馬町の牢屋や、切支丹奉行の屋敷に置かれてゐたが、その年になつて新に出來上つた小石川小日向の山屋敷に入れられ、岡本三右衞門の名で呼ばるゝやうになつてゐた。

山屋敷はもと井上筑後守の下屋敷であつた。表門のあゝ方が四十八間で、其所は東向になつてゐた。不規則な敷地で、北側が六十間、南側が八十間、背後になつた西側が三十八間と云ふ風になつてゐた。牢屋の一廓は、西南の隅に片寄つてゐた。その門は南向に付いてゐた。牢屋の西側の角には、板屋根の吟味所の建物があつた。

吟味所は戸が締つてゐた。三右衞門は、その前を通つて、屋敷の北隅に行つた。其所には根本から幹が三つほどに分れた可成り大きな榎があつた。椎色の小さな實が一面になつてゐた。鵯のやうな鳥の啼聲が梢の方でしてゐた。榎の根方は小高く盛り上つてゐた。三右衞門は其所へ來ると、シシリヤの故郷を思ひ出すのが例になつてゐた。小さな時に父母に離れて、叔母の手許で育てられた彼は、叔母の家の裏庭の古い榎の下で、何時も從弟と遊んでゐた。其所は狹い谷に臨んだ家で、谷の向ふの傾斜の緩い丘の上には、丘の線に緣を取られて、赤や黃ろに塗られた繪のやうな建物がぽつぽつあつた。

三右衞門は、物に見入るやうな眼付をして、榎の下に立つともなく立つてゐた。殉教の決心で東洋の旅に上らうとして、羅馬から叔母の許に歸つて行つた時の事が又しても浮んで來た。年をとつてゐる叔母は、穴倉の中に蓄へてあつた好い葡萄酒を出して來さして、祝福の席を設けてくれた。叔母は椅子一杯になつてゐた肥つた體を起して、澄んだ顫のある聲で祈つてくれた。暫く逢はない間に爺親くさくなつた從弟と、姙娠してゐた口元の子供子供して見える從弟の嫁も、その席に連つてゐた。彼の眼にはその晩の光景がまざまざと見えた。

『叔母の家は平和であらうか、』と、彼は心に思ひなが

ら、榎の下を離れて、東の方に歩いて行つた。

榎に近い所に、通行門があつた。その傍から東の隅にかけて、松や杉の生へた森があつた。森の樹の中には、毬彙(いが)の黄ろくなつた栗の樹も交つてゐた。樹木の根方には、萩や女郎花が咲いてゐた。熊笹の茂りが苔の生へた石をおほつてゐる所もあつた。屋敷の塀の外にも、杉の並木があつて、眞直な高い幹が空を支へてゐた。

三右衛門は表門の方に歩いてゐた。門の左側に番小屋があつて、一人の門番が横顔を見せてゐた。門の右側には小さな稲荷の社と眞赤な鳥居とが見えてゐた。その稲荷のあたりから出ると牢屋の門の前に歸へれるのであつた。

三右衛門の足は、牢屋の門に這入つて行つた。直ぐ左側が番所になつてゐた。三間に二間半の建物で、室の中には、奉行所から來てゐる役人の頭が二つ三つばかり見えてゐた。右側には番所と同じ大きさの土藏があつた。土藏の中には切支丹の持つて來た器具の一切を入れてあつた。秋の陽はその壁を照らしてゐた。土藏の先は車井戸で、井戸の先は、五間に二間の牢屋の建物であつた。牢屋の内は檜の厚板で三つに仕切つてあつた。三右衛門の住んでゐる家は、その牢屋の並びで、番所の先の端になつた所にあつた。

三右衛門は自分の住居に歸つて來た。と、裏庭の方で、人の罵りあふ聲がしてゐた。下女と下男の爭ふ聲であつた。

二

「此所で澤山だい。それで惡るけれや、おでこの上へ逆しにして置いてやらうか、この胡麻擂り。」と、下男の長助は、軒下へ水桶を据えて、それを擔つて來た枴を杖にしながら、勝手の流槽元で魚の料理をしてゐる下女の方に向つて、口を尖んがらかしてゐた。

「何が胡麻擂りだ、何時私が胡麻を擂つたんだ。」と、下女のお春も敗けてはゐなかつた。

「夜も晝も、朝も晩も、しよつちう胡麻を擂つてゐるじやないか、ヘッ、大方、切支丹の魔法でも習つて、

赤兒の膽をとつたり、流行病をこしらへたりする積りだらう、はつつけめ。」

お春はたゞもう口惜しさが一杯になつて、云ひ懲らさうとする言葉が出なかつた。彼は鱗をとつてゐた小鯛と庖丁とを俎の上にほり出して置いて戸外に出た。

長助はその權幕に驚いて一足すさつた。お春は細そりとした肱を張つて突つかゝつて行つた。「もう一度云つてみるが好い。」

「ヘツ、この氣違、一度でも百度でも、何度でも云つてやろ。」と云つて、長助は枴で女の體を支へやうとした。

「口惜しい。」と云つて、お春は男の枴を持つた手首に微に齒を當てた。

長助は叫んで枴を持つた手を放したが、片手を閃かして女の頭にかけやうとした。と、他の力の强い手があつて、その手をむづと掴んだ。背の高い主人の體が其所にあつた。

「喧嘩してはなりません」と、三右衛門は長助の顏を見て云つた。

長助は一方の手で頭を掻いて、苦笑ひしながら、三度ばかり續けて頭をさげた。三右衛門は掴んだ手を放した。

お春は夢中になつてゐた。彼は身を顫はして泣いてゐた。

三右衛門は輕くその手を掴んだ。「此方へお出で、」と云つて、連れて行かうとした。

お春は片手で顏を押へながら、片手を主人に預けて引かれて行つた。

二人は奧の縁側から上つて、主人の室に這入つて行つた。室へ這入ると三右衛門はお春の手を放した。お春は泣きじやくりをしてゐた。

室は南向になつてゐた。一間の平床が付いて萩と女郎花の枝をさした德利のやうな陶器を置いてあつた。平床の左並びの壁に佛壇を設けた棚が釣してあるのも見えた。三右衛門は床を右にして北向になつて座つてゐた。古い觀音經をのせた小机が右の手の觸はりさう

な所にあつた。

『長助と何を云ひました。』と、三右衛門はやさしく云つた。

『長さんに水を汲んで貰ひますと、内へ入れてくれないで、軒下へほりつ放しにするもので御座いますから、内へ入れてくれと申しますと、此所で澤山だ、それで惡るけれや、おでこへ置いてやらうかなんて、さんざ毒づいて置いて、まだその上に、私を胡摩擂りだの、切支丹の魔法を習ふだのと申しますから、私は口惜しくつて、口惜しくつて仕方がないんですから……』と云つて、若い女は恥かしさうに笑つて、主人の顔を見上げるやうにした。

『さう。それで長さんと喧嘩しました。喧嘩は宜しくありません。世の中の人は皆兄弟であります。互に愛し合はねばなりません。怨みあつたり、憎みあつたりしてはなりません。』と、三右衛門は穩な言葉で訓誡にかゝつたが、何時の間にか己れの言葉で、己れの情を高調さして來た。『人は己れに善をなす者を愛するばかりではいけません。己れに敵する者も愛さなければなりません。お前さん達の切支丹と云つて恐れるジエエズスは、自分を死に渡した人をも愛しました』と云ひかけて、あはてゝ口をつぐんだ。

お春は視線を落して俯向いた。

三

三右衛門は轉んでゐた。それが爲に自由は極限せられてゐても、十人扶持と婢僕とを給せられて、餘生を送るには不自由のない身分となつてゐた。彼がジエエズスの名を口にして、驚いて口をつぐんだのもそれが爲めであつた。併し、彼は決して心からの改宗者ではなかつた。氣長く時期を待つてゐて、一人でも迷へる者を導いて、神の使徒として此の職責を盡したいと思つてゐる者であつた。

お春の父は牛込佐内坂に住んでゐた旗本の臣であつたが、お春が六つの時に何處ともなく姿をかくした。母は仕方なくお春を連れて、根岸に住む貧しい侍の許に後妻に行つたが、二年前にその母も亡くなつて、身

寄りと云つては、冷酷な義父と、神田にゐる母の從妹の二人しかなかつた。お春は淋しい己れの姿を顧みる毎に、姿をかくした父の事を思ひ出さずにはゐられなかつた。父が姿をかくした原因に就ては何の手がかりもなかつた。只だ家出をする一年位前から、夜々誰れにも知らさないやうにして、そつと庭の隅にあつた稲荷の祠を拜んでゐた。それに氣が付いた母は、お春に添寢してゐた寢床をそつと出て、その後をつけて行つてみた。それは薄月のさした暮春の夜であつた。父は祠の前に立つて、白い片手の指を胸のあたりに閃かした後に、「じえぇずす、まりや、はらいそう、はらいそう、」などと怪しい祈りをしてゐた。母の耳には人を呪ふ呪ひの言葉のやうに聞えて、背筋が寒かつた。父が姿をかくした後に、その稲荷の祠を開いてみると、確に父の筆で書いたらしい魚の繪があつた。母はある時お春の耳に口をつけて、「私は、お父さんは切支丹ぢやなかつたかと思ふ事があるよ、」と囁いたりした。又ある時は、「切支丹であつたら、長崎から異國の方に行つたかも分らない。」とも云つた。お春には、切支丹の言葉は懷かしい言葉であると共に、又恐ろしい言葉でもあつた。

　三右衛門はその日、神に關する事は、一言云つただけであつたが、お春を機縁にして呼び覺される物のあるのを感じた。

四

　お春は主人の室を出て、勝手の流槽元に歸つて來た。長助は竹箒を持つて庭先を掃いてゐた。

　お春は長助に對して、氣の毒にもなれば、恥かしくもあるので、此方から何か云つて、打ち解けたその顏を見たいと思つた。ほり出してあつた魚の料理をはじめながら、長助の顏を見やうとしたが、彼は横の方を向いて、濟まして箒を動かしてゐた。

　長助は女の流槽元に歸つて來た事は、チラと見て知つてゐたが、忌々しくもなれば、極りも惡いので、知らん顏をしてゐた。それでも彼は、女の聲が待たれた。今日の二人の感情の破裂も、原因はと云へば、彼

の心に向つて、圓い、やはらかな物を要求した結果であつた。

お春も早く何か云ひたかつた。彼は三度も四度も男の方を見た。男は矢張り向ふを向ひてゐた。

長助は庭の隅へ行つた。二羽の雀が屋根の方から石塀の上へ横なだれに飛んで來て、喰ひ合ひながら啼聲を立てた。

「この氣違雀ッ、」と、長助は怒鳴りながら、竹箒で石塀の前を叩いた。雀は塀の外へ出た。

お春は驚いて顔をあげた。男の笑ひ顔が此方を見返つた。お春もにつと笑つて見せた。

長助は塵埃を隅の方に集めて置いて、箒を持つて引歸さうとすると、又につと笑つてゐる女の顔に出くはしたが、それだけでは物足りなかつた。彼は箒を壁に立てかけ、家の横手になつた自分の室に行つて、狹い三疊の上り鼻に腰をかけながら、何か物を待つやうな氣になつてゐた。

長助は傳馬町の牢屋から、三右衛門附を命ぜられた者であつた。下谷長者町の組屋敷に生れた放蕩者であつた。當時吉原の遊女屋では、市内の風呂屋で艶かしい風をして若い男を引き付けてゐる湯娜を敵視してゐた。吉原贔負の男は、「猿、猿」と云つていやしめた。それは客の垢をかくからだと説明する者があつた。神田の佐柄木町と雉子町の續きに堀丹後守の屋敷があつて、その前あたりの風呂屋が湯娜の本場であつた。寛永十三年のお達しまでは、多い家は二三十人もさうした女を置いてあつた。晩の七つ時に風呂を仕舞ふと、上り場に用ゐてゐた格子の間を座敷に構へて、金の屏風などを引廻はした。湯娜は黒い半襟の付いた煤竹王子色の袖口の寛かな晝間の木綿著を拔いて、綺麗な小袖に著かへながら、燈火の傍で三味線を鳴らしてゐた。お達し後は、一軒に三人と云ふ事になつて、ひどくさびれてゐたが、それでも丹後殿前の丹前には、未だ王緣の編笠に裏付の袴を履いて、細作りの大小をさした若い男が風呂屋の前を往來した。吉原贔負の長助は、昨年の夏、月の綺麗な晩であつた、一人の遊び仲間と

丹前に行つて、湯娜をひやかして廻つてゐる中に、ある家で、其所の雇人と喧嘩をはじめた。雇人は額と腕に傷を受けて店先に倒れた。それが爲に長助は傳馬町の牢屋に送られてゐた。

　長助は何時の間にか横に寢そびつて、頰杖をしてゐた。彼の頭の何處にか、喧嘩をした晩に見た湯娜の大柄な白い顏が覗いてゐた。

「おい、猿、山猿、」と云つてからかふと、女はにつと笑つて長助の方を見た。入口の牀床に雇人が腰をかけてゐた。鼻の先の赤い小さな男であつた。一所に並んでゐた友達が、「この番頭ア猿に似てゐるぞ、」と云つて笑つた。喧嘩はそれから始まつた。長助はおかしくなつたので、唇の薄い口元で淋しく笑つた。

　湯娜の顏は、富士額になつた引締つた女の顏となつた。と、長助は、お春の笑顏を見せた事を思ひ出した。二度までも笑顏を見せたのは、ただ極まりが惡いと云ふだけで笑つたであらうか、それとも自分と仲直りをして貰ひたいが、口に出すのが極まりが惡ひので、それで笑つて見せたのであらうか、喧嘩は自分が買つたにした所で、女の癖にそれを買つて出ると云ふ法はない。それを考へないで、極まりが惡い位で澄ましてゐるやうでは、賴母しうない人間だ。が、待てよと長助は頭を振つてから、あでやかに笑つた笑の奧を見極めやうとした。併し、どう考へても深い奧はないやうに思はれて來た。長助は淋しさうな顏をした。

「長さん、」と云つて、お春が這入つて來た。

　長助は頰杖をしてゐた手を疊に突いて、半身を起した。

「お前さん、怒つてゐやしないの、」と、お春は極まり惡さうに云つた。

　長助は笑つて見せた。「怒るもんか、」

五

　お春と長助との感情は、喧嘩の日から新らしみと親しみの在るものとなつた。二人は夜遲くまで、勝手の火鉢の前で話してゐる事があつた。

　併し長助には、何か物足りない所があつた。それ

主人の室からさがつて來るお春が、何か遠くの方に憧憬れ求むる物のあるやうな容をしてゐる事であつた。そんな時には、長助は氣拙い顔をして默つてゐた。

お春は長助がそんな風をすると、「どうしたの、何か私の事で氣を惡くしたのぢやないの、」と心配さうに云つて、その顔を覗いた。

「そんな事はない、」と、長助は仕方なく云ふ。

「それなら好いけれど、私は又お前さんが、何か氣を惡くしたと思つたから。これからはもう、仲好く仲好くしませうね、」と、お春はやさしい眼付をした。

かう云はれると、長助の心は急に晴々としたが、お春の憧憬れ求むるやうな眼付は止まないばかりか、日増に深くなつて行つた。長助は嫉妬に驅られて、そつと主人の室の傍へ忍んで行つて、主人とお春との話しを聞かうとしたりした。

それは翌年の春早々であつた。牢屋敷の構内にも梅が咲いてゐた。長助の食事が不規則になつて來た。晝ばかし飯を喫つたり、晝と晩を喫つて、朝を喫はなかつたりするやうな事が四五日續いた。お春は心配して、自分の室に默りこくつて考へ込んでゐる長助を見に行つた。長助はお春の顔を見るのが如何にも辛いと云ふやうな風をする時があつた。お春は首を傾けた。

ある日、長助が夕方まで勝手に顔を見せない事があつた。もう來るであらう、もう來るだらうと心待に待つてゐたお春は、待ちかねて長助の室を覗きに行つた。長助は相かはらず腕を組んで考へてゐた。

「長さん、氣持ちが惡いなら、御膳を持つて來やうか、」と、お春は云つた。

「好い、好い、何んともない。喫べたくないから行かなかつた。直ぐ行く、」と、長助はあはてたやうに云つた。

長助は遂に勝手に來なかつた。お春はその夜、雨戸を閉めた後で、袂で手燭の火を圍ひながら長助の室へ這入つて行つた。

長助は起きて被てゐた蒲團の上に坐つた。お春は手燭を壁の方へ寄せて置いた。

「長さん、お前さんは、何か心配でもあるの、」と、お春は云つた。

「なに、別に……」と、長助は兩手の指を擦り合せた。手燭の明りに照らされたお春の顏は、何と云ふ事なしに赤らんで來た。「何かあるでせう、あるなら云つておくれ、一所に心配をしやうぢやありませんか。」

「別に何も……」

「無い事はないでせう、」

長助は默つてゐた。そして暫くして、彼は吃々として、懊惱と希望とを綯ひまぜた話をしだした。彼の眼には燃えるやうな情熱の閃きがあつた。

「……長さん、私は切支丹になつてゐるが、それでも構はないの、」と、お春は小さな聲を顫はして云つた。

「おいらも切支丹にならう、」と、長助が云つた。

「本當、」と、お春は念を押した。

「本當とも、」と云つて、長助は强く握り締めた。

六

長助はお春と一所に、三右衞門から神の國の福音を聞くやうになつた。神の下部たる三人の者は、三右衞門の室で、法悅に恍惚としてゐた。三人の眼には、天使の群が現はれて、その上に十字架の輝くのが見えてゐた。

初夏の明るい日であつた。お春が晝飯の後始末をしてゐると、番所の下廻の老人が來て、番所へ來いと云つた。

お春が番所へ呼ばれるのは、珍らしい事ではなかつた。主人は夜は何をしてゐるかとか、どんな事を云ふかとか、又、怪しい祈りをしてゐはしないかとか、三右衞門の言行を調べる爲めに、好くお春を呼んで聞いた。お春は今日もこんな事だらうと思つて、老人に從いて番所へ行つた。

番所では三人の役人が何か云つて笑つてゐた。お春の姿が見えると、角顏の平べつたい男が體の向きを變へた。「春、その方は親許の願ひによつて、歸る事になつた、二三日の内に代りの者が來るから、それが來たら歸るが好い。」

お春は己れの足許を根こそぎに切られたやうな氣がした。

「その方は、切支丹の話を聞いた覺えはないだらうな。」と、役人は云ひ足した。

お春は番所から歸つて來た。長助が勝手の上り鼻に腰をかけて待つてゐた。長助はお春の蒼ざめた顔に眼を止めた。

「どうした。」と、長助は心配さうに聞いた。

お春は長助と並んで腰をかけた。「困つた事が出來たよ。」

「どんな事だ。」

「お父さんから願ひ出て來たもんだから、私は代りの人が來たなら、二三日の内に歸らなくちやならないよ。」

「歸つてどうする。」

「さア、お父さんに考があるんでせうが、私には分らない。」

「そいつは困つたな。」と、長助は考へて、「おいらはこんな體だし。」と云つて、又默り込んだ。

明るい穏な朝だつた。長助とお春の二人は、連れ立つて番所の方へ歩いて行つた。三右衛門は室の前の緣側に立つて、ぢつと見送つてゐた。

番所では朝になつて交代したばかりの役人が茶を飲んでゐた。長助とお春は、其所へ這入つて行つた。

「何か用か」と端の方にゐた若い眼の鋭い男が云つた。

「お願ひが御座います。」と、長助が頭をさげて言つた。

「申せ。」

「それでは申し上げます。私と此所に控へて居りまする春とは、御法度と存じながら、切支丹を信仰して居りました。」

「たわけ者、氣でも違つてゐやしないか。」と若い男は長助の言葉を遮るやうにして云つた。

「いや、決して。」

「氣が違つてゐないと申しても、氣が違つてゐる、その方は切支丹の御定法を心得て居るか。」

「その御定法の通りお仕置を受けて、ジエエズス樣のお傍に行きたい心願で御座います。」と長助はきつぱり

と云つた。

「このたわけ者め、……春、その方も、この長助と同様か、」と、若い男はお春の方を見た。

「へい、同様で御座います。」と、お春も悪びれずに云つた。

二人の自訴は、切支丹奉行所を驚かした。奉行所では種々評議の上、三右衛門、長助、お春の三人に永牢を命じて、今まで空であつた牢屋へ、別々に入れた。三右衛門が眞中の檻倉にゐた。三人は隔ての板壁をトントンと鳴らし靈を傳へ合つた。そしてそれぞれ死んで行つた。

その前後に三人の泥棒が土藏に忍び込んで、切支丹の器具の幾等かを竊んだので、表門の前の谷川に架けた橋際で獄門にした。その橋は庚申橋といふ名であつたが、夫以來獄門橋とも幽靈橋とも呼ぶやうになつた。

大塚行の電車で、竹早町で下りて、左に行くと急な坂がある。これが切支丹坂で、その坂を下りて了つて向ふの坂に上らうとする所に小さな橋がある。それが庚申橋である。昔の切支丹屋敷は、その庚申橋を渡ると直ぐ石段があつて、その表門に行けたものであつた。

憶、秋山海軍中將

海軍大佐　水野廣德

大正七年二月四日帝國海軍の巨材秋山眞之中將病を以て小田原に逝く。中將年を享くること僅かに五十一。男子五十は働き盛りなり。中將雋英の天資愈練れて、思慮圓熟、經驗蓄積、理情並び展びて將に大に活躍せ

んとするの時、不幸にして天壽を假さず、滿腔の經綸、遠大の抱負、尙ほ未だ施すに至らずして、雄魂空しく幽境に去る。歐洲の大戰未だ局を結ばず、世界の變勢容易に逆睹すべからず、帝國の前途將に益多事ならんとするの秋、一朝忽として此の有爲の材を失ふ。獨り我が海軍の損失のみにあらず、亦實に國家の大損害と謂ふべし。宜なり、中將の訃一たび傳へらるゝや、擧國痛惜、不識の少年尙ほ書を寄せて弔意を表す。僕中將と同鄕の後輩として其の眷顧に浴す、哀痛の情更に切なるものあり。聊か故中將の平生に就きて聞知する處を述べんと欲す。記事中素より他人よりの又聞もあり、又々聞もあり。左れど忽忙の際。一々訊すの暇なく、唯記憶のまゝに筆を執る。

中將は伊豫松山の人にして、軍事參議官陸軍大將秋山好古將軍の末弟である。中將は僕より數歲の年長たると、且つ相互の住居稍や距りたるが爲め、其の少年時代に關しては多く知る處がない。唯僕幼時、中將の親戚の家に寄食したる關係上、同家の從兄弟が屢中將の畫きたる紙鳶繪を貰ひ來たるを見て、秋山順サン（中將の幼名順之亟）と云ふ繪の上手な人がありし事を知れるのみである。其の後中將は上京せられしことを聞きしも、其の果して何年頃でありしかを記憶しない。多分鄕里の中學校が縣政の犧牲となつて閉校されし頃ならんと想像する。當時僕の縣には三個の中學校ありしも、如何なる理由か、縣會の決議を以て、全部一時に廢校して仕舞つた。之が爲め鄕里の靑少年は忽ち就學の途を失ひ、貧乏士族の子弟の如きは、他鄕に遊學するには資力なく、或は家職を手傳ひ、或は官衙に奉職する等、四離五散の悲境に陷り、爲めに一生の方針を誤まつたものが尠くない。恐らく中將も此の離散黨の一人でありしならんと思ふ。是に於て鄕黨の先輩達之を憂ひ、松山の子弟中遊學の資力なく、且つ人物優秀なるものを選んで、舊藩主より學資を給し、東京に於て修學せしむることゝした。中將も其の一人として故正岡子規、現大藏大臣勝田主計などの諸氏と相前後して出京し、大學豫備門とかに入られたと云ふことで

ある。當時中將の志望は軍人でなく、學者若くは政治家に在りしもの丶如く、子規居士など丶盛に文を談じ俳句などをひねくられたそうである。左れば兄好古將軍が中將に勸めて、海軍を志願せしめた時には、大分不服を唱へられたそうであるが、一たび意を決して兵學校に入るや、運命を大觀し職務に忠實なる中將は、熱心なる海軍主義者となり、親戚の青年などに對して大に海軍熱を鼓吹されたと云ふことである。斯くて海軍兵學校に於ける螢雪四年を經て、明治廿三年首席の榮譽を擔ふて江田島の學校を卒業せられた。他日日露の大戰に東鄕司令長官の帷幄に參し、神策鬼謀を運らして露國艦隊を全滅したる當時の秋山中佐は、七ッ釦に短劍姿の可憐の候補生として、此の時初めて海上の人となつたのである。惟ふに中將は我が江田島兵學校の生みたる最も偉大なる人物の一人であらう。

僕が初めて中將に會つたのは、否な中將を見たのは、中將が尙ほ兵學校在學時代である。或る冬學校の休暇にて歸省せられたる中將は、僕の寄寓せる親戚の家へ正月禮に來られた。當時僕等の鄕里は未だ文明の恵澤に浴せず、巡査の姿を見てさへ犬が吠へ付く程、洋服なるものは珍らしかつた。されば其の頃金釦美しき兵學校の制服を着したる中將の勇ましき姿は、未だ海軍の何たるを知らざりし僕等の小さき心をして、憧憬と羨望とに躍らしめたものである。中將が歸られた後で、伯父と伯母とが「腕白者の順サンも暫らく見ない間に立派な方になられた」と感心しつ丶話されるを聞き、小供心にも何となく偉い人であると感じた。

次に之も中將が尙ほ兵學校生徒時代の出來事である。元來僕等の鄕里は神傳流水泳術の本家として、舊藩以來水泳は非常に隆盛であつた。維新後も尙ほ其の道を繼承して、毎年夏期には御崎池と呼ぶ舊藩時代の水泳場に道場を開き、六七才より二十歲位までの青少年は顏も體も墨の如く黒焼にして、南海の暑き夏の半日を此處に泳ぎ暮らすを普通とした。場の規約としては、稽古時間中は會員以外の者の無斷游泳を禁ずること、水泳中は必ず六尺褌を締めることとの二個條で、違犯者

は情實なしに泥水制裁を加へたものである。然る處或る日聯隊の兵士が兩三名來りて無斷游泳を爲さんとした。兵士たる點に敬意を表し、取締の先輩が場の規約を彼等に說示したるも兵士等は頑として應せず、傲然として水泳を始め、無褌絕對禁の水泳場に赤裸の醜體を筏の上に暴露した。左れど當時の兵士は頗る粗暴なりしが爲め、何人も彼等に對して手を下すものなく、唯徒らに憤慨切齒するのみであつた。偶々夏期休暇にて歸省中なりし中將來り、之を見て大に怒り、直に衣を脫して水中に飛び入り、傲慢なる兵士達を擲ぐり付け遂に彼等を追ひ歸へした。以來秋山順サンの勇名鄕黨の少年間に轟き、三十餘年を經たる今日尙ほ僕等仲間の語り草に殘つて居る。蛇は寸にして人を吞むとか、中將の膽勇は此の時旣に儕輩を拔いて居たのである。

兵學校在學中の中將に關しては、同窓者の語る處區々にして定まらず。或は平凡にして何等特異の點を見ざりしと言ひ、或は旣に栴檀の香ありたりと言ふ。唯其の負け嫌ひにして勝たずんば止まらざるの氣慨は、各種の競技運動の間に現はれたるは衆說の一致する處である。殊に其の頭腦の明晰なりしは、机を嚙つて點取勉强に浮身を窶さずして、尙ほ克く首席を贏ち得たるに徵しても明らかである。

兵學校卒業後少尉候補生より少尉となり、明治二十七八年の日淸戰爭を經て、明治三十年大尉を以て米國留學を命ぜらるゝまでは、中將の準備時代にして、鳳兒未だ羽翼成らず、唯俊秀なる一個の靑年將校として多少先輩に着目せられたるに過ぎなかつた。而かも夫とても豪放磊落にして細節小禮に拘泥せざる中將の性格は、一部の先輩には寧ろ橫着物として、あまり持てなかつたと云ふことである。米國留學は中將をして他日の名提督たる運命を開拓せしむる上に於て無上の好機會たりしのみならず、延いて帝國海軍の爲めにも至大の幸福であつた。中將の在米中偶、米西戰爭起り、中將は帝國海軍唯一の觀戰武官として、米國軍艦に乘り組み、サンジヤゴの封鎖、同港中の海戰に從ひ、親しく近世海軍の戰爭を觀察する事が出來た。中將は又今

當時世界海軍學者の權威（オーソリチー）として令名高かりし、故マハン大佐に就きて海軍に關する諸般の研鑽を究め、學理と實地と幷せ修めて、天資の俊敏更に益精英を加へたのである。中將が米國より我が海軍當局者に寄せたる各種の意見、建策の如きは、其の識見の高邁なる卓違なる、其の文章の雄偉流麗なる、今日より之を見るも堂々として海軍經略の大文章と謂ふべし。到底白面一大尉の筆に成れるものとは思はれぬとの評である。日露戰爭に天縱覆地の鬼略を振ひたる中將の腦力と手腕とは、多く此の間に練られ且つ鍛はれたのである。

三年の米國留學を終はりたる中將は、歸途歐洲を巡遊して明治三十二年歸朝せられた。其後或は艦隊の參謀となり、或は海軍大學校の教官となり、常に樞要の職に在つて着々自已の抱負を實行せられた。殊に大學校に在つては米西戰爭の實驗と研究とに基き、之に日本の史實と國情とを加味し、戰略、戰術、其他各種の兵學に根本的改正を施こし、茲に帝國海軍の兵學に秋山式なる一新紀元を開かれた。由來帝國海軍多士濟々兵學兵術に長じたるの人少なしとせなかつた。併し今日我が海軍大學に、科學を經とし、史實を緯とし、組織あり統一ある兵學の講義を見るに至りたるは實に中將の賜と云ふべきである。

左れど中將は机上徒らに兵を談ずる趙括でなく、彈下克く籌を運らす孔明であつた。日露戰爭は實に帝國安危の岐るゝ分水嶺たりしと同時に、中將の器略と才能とを實地に試むべき大試驗であつた。回顧すれば既に十餘年の昔、日露の風雲漸く急を告げたる明治三十六年の暮、當時海軍大學校教官の職に在りたる中將は、特に東鄕司令長官より望まれて其の先任參謀と爲り、精悍の短軀を再び旗艦の艦上に現はすに至つた。上に偉大なる東鄕長官あり、中に賢明なる島村參謀長ありとは云へ、聯合艦隊作戰計畫の眞中心點たる先任參謀としての任務は、尙ほ少佐たりし中將に取りては誠に過大の負荷であつたらうと思はれる。左れど中將の兵學に於ける大なる蘊蓄と、深き造詣とは、其の計を立立つるに精に、事を行ふに斷に、機を見るに敏に、時

を察するに明なる資質と、尚ほ之に加ふるに不撓不屈の勇猛心と、不休不倦の精進力と相待つて、計畫實施常に宜しきを制し、優勢なる敵艦隊を旅順及日本海に全滅することが出來た。かくて中將は最優等の成績を以て此の眞劍勝負に合格し、其の英名は海外までも轟き渡つたのである。此の戰爭に於ける中將の偉勳大功は、世上既に周知のことにして、今更玆にクダ／＼しく繰り返へすの必要を認めない。皇國の興廢を決したる日露戰爭に於ける帝國海軍の功績の少なからぬ何分の一かは、實に中將の力に俟つものと云ふべきである。世人或は中將の筆に成れる、彼の豪宕にして而かも艶麗なる戰報文に魅せられて、中將の名文家たるを知るも、其の卓絶せる軍略家たると共に傑出せる實戰家たるを知らぬものがある。惟ふに文章の如きは、中將に取りて僅に其の半面の片影に過ぎずして、何等中將の爲めに重きを爲すに足らないものである。

雲雨を得たる蛟龍は最早や池中の物にあらず。嚢中の錐見事穎脫して、海軍の秋山は今や日本の秋山否な世界の秋山となり、名聲隆々實に帝國海軍を厭するの概があつた。日露戰爭後中將は再び海軍大學校に入つて教官と爲り、更に實戰に依つて得たる智識を以て專ら育英の任に膺られた。今日我が海軍の中堅人物として要路に在る俊才の大多數は、中將の薫陶指導を受けた人である。唯孔子に十哲あり、基督に十二使徒あるも、何れも先師の一面を承傳するに過ぎず、中將の門下英才多々、或は戰略に、或は戰術に、或は戰務に、各々其の長ずる處あらんも、中將の如く一身にして總てを兼ね有するの人、果して有りや無しやを知らない。聞くが如くんば中將戰術の講義を終了したるの日、學生に對し、「戰術は唯戰に於てのみ用ゆべきもの、決して之を人事に應用すべからず」と訓戒せられたと云ふことである。權詐陷穽是れ事とする今の世に於て、獨り軍人のみならず一般人士の深く味ふべき言であると思ふ。

其後每に拔擢、儕輩に先んじて、大佐に進み、少將に進み、艦長となり、聯合艦隊參謀長となり軍務局長と

なり、到る處快腕を振ひて勢望益高く、秋山の言說と云へば各方面に重きを爲し、殊に青年將校間には殆んど盲目的に信仰する程であつた。一昨年春歐洲戰爭視察の命を受け、約半年間親しく露英佛伊等の戰場を視察し、歸朝後水雷戰隊司令官に轉じ、將に新方面に腕を揮はんとする際、不幸にして昨年五月盲腸炎に犯かされて將官會議々員の閑職に移り專ら靜養に力められた。昨年十二月中將に進むと同時に待命仰せ付けられ、近時病氣漸快の報を聞き、心私かに復職の遠からざるべきを歡びし甲斐なく、過ぐる一月下旬に至り突然前病再發、臥床僅に數日にして逝かれたのである。以上は僕の知れる中將經歷の概略に過ぎぬが、以下少しく中將の爲人に就いて話さう。元來狷介にして無性なる僕は、從來殆んど先輩の門に伺候せず、同鄉人たる中將の邸にすら、前後僅に數回に過ぎない。併しながら中將に對する僕の尊敬の念は、敢て人後に落ちない積りである。職務上に於ても亦、僕が中尉時代に數ヶ月間、中將と同艦したるのみである。當時中將は常備艦隊の小參謀として大尉であつた。元來此の小參謀なるものは職務柄小言が多いので、兎角旗艦の若い士官達には小姑の如く嫌はれ勝ちのものであるが、天性無頓着なる上、自由國なる亞米利加歸りの中將は、比較的放任主義自治主義で、あまり口やかましく小言を言はれなかつた爲めか、若い士官仲間には非常に評判が宜かつた樣に記憶して居る。中將否な大尉が轉職退艦せられる際に、僕を自室に呼び「御前達若い士官が唯ぼんやりと其日暮らしでは駄目ぞい、是からの海軍將校は何でも宜いから或る科に就いて專門的に硏究しなけりや、いかんぞい」と訓戒せられた。之が僕が中將から受けた、後とも前とも唯一つの訓戒である。其後も逢ふことは屢々逢つたが豎子敎ゆべからずと思はれたものか、遂に再び其の敎訓に接しなかつた。此の如く中將と僕との交際は手紙の往復以外、公私共に淡薄であつた爲め、中將の性行に關しても、あまり深くは知らない。從つて此に述ぶる處も、他人より又聞きしたる事柄が尠くないことを重ねて陳謝して置く。

中將は元來非常なる精力家で所謂「ぢつとして居れぬ人」であつた。背はあまり高くはなかつたが、炬眼隆鼻、全身精力の結晶とも云ふべき風貌であつた。中將の成功は半ば此の絶倫の精力に依るもので、日露戰爭中の如きは全艦隊の作戰計畫を一手に引き受け、櫛の齒の如く集來する各方面の情報を綜合判定し、蛛の如く輻湊せる諸戰務を處理裁斷する傍ら、大小の命令訓令を立案し、尙ほ餘暇を以て雄渾の筆に戰報の名文を綴る。縱ひ頭腦の明徹と處務の敏腕ありと雖ども、此の絶倫の精力あるにあらずんば、安んぞ能くする處ならんやである。中將は又非常に勉强家であつた。僕が中將と同艦したる頃、中將は多忙なる隊務の餘暇を以て、毎夜一時頃までも佛蘭西語の稽古をして居られた。又米國留學中の如きも、暇あれば必ず書店に行き、一時間も二時間も、店頭に於て諸種の書物を繙き、必要の個所はノートに書き取り、而かも未だ曾て一冊の書物も買つたことがない。流石自由主義なる米國書店の番頭も其の圖々しさに呆され、横着なる日本人として頗る鼻摘者となり、小僧の如きも殆んど相手にしなくなつた。併し中將はそんな事には少しも頓着せず、不恰好なる洋服姿を相變らず其の書店に曝らし、手當り次第に書物を引き出し店頭のロハ讀を續行せられた。斯して三月經ち四月經つ中、××書店の日本人と云へば附近の一評判となつた程である。此に至つて書店の主人も遂に中將の根氣と熱心とに降參し、後には店の書物を全部中將に開放し、尙ほ新刊書物の如きは態々取り寄せて見せて具れたと云ふことである。中將は又我慢の强きことに於て殆んど比類なく、今回の病氣に際しても腸管閉塞の爲め瓦斯充滿して、腹は大鼓の如く膨らみ、今にも張り裂けさうなのにも拘はらず終に一度として苦痛の言を吐かれなかつた。其の忍耐力の强烈なるには、並み居る醫師も驚歎したと云ふことである。

中將は多藝多能にして、趣味の廣汎なりしこと誠に驚くべく、殊に事物に對する研究心の强きは、所謂孔子の博奕と雖ども亦益する處ありと主張で、スリ泥棒と

雖ども研究の價値ありとせられたのである。左れは巧拙は知らねど、碁も打ては將棊も差す。謠曲もド鳴れは淨瑠璃もウ鳴る。詩も作れば發句もやる。興到れば畫も書けは書も書く、殊に其の書畫は既に素人離れのしたる自家獨特の流を成して居た。若し夫れ將軍の文に至つては、世既に定評がある。日露戰爭に於ける豪宕にして簡潔、雄健にして流麗なる幾多の戰報は、全國民の血を沸かし、心を躍らしめたものである。而かも中將の文を作るや、推敲せす、思索せず、煙草片手に談話しながら、筆下自ら章を爲すもので、其の速かなること殆んど他の模倣を許さない。殊に彼の復雜錯綜せる各隊の報告をば、自家腦中に統合し、排列し、之を一條の文脈として筆端に繰り出す樣、恰かも繭より絲を繰るが如きに至つては、獨り文辭の豐富なるのみならず、其の腦力の如何に組織的にして、綜合力と分析力とに富めるかを思はしむるものがある。而かも其の文を見れば理路井然として、贅句なく、缺辭なく、堂々たる大文章となつて居る。中將の如きは實に天成の文章家にして、文を作ると云はんより、寧ろ文を書くと云ふ方或は適切かも知れぬ。中將は又運動に趣味を有し、海軍兵學校に始めてベースボールを輸入せしは中將なりと聞きては、今昔の感あると共に、多少の滑稽味を覺へざるを得ない。此の如く中將の趣味廣くして研究心の强き、頭腦の透徹明敏にして手腕の快捷果決なる、加ふるに膽略と、機才と、押しと、我慢を兼ね備へたる資質は、行く處として殆んど可ならざるなく、學者としても、實業家としても、又政治家としても、必ずや一流の人物と成られたであらうと思ふ。中將が其の放膽なる性格を以て比較的窮屈な軍隊に身を投じ、自由手腕を振ふ能はざりしは、中將個人としては或は損なりしやも知れぬが、海軍としては誠に幸福であつたと謂はねばならぬと信ずる。

中將は趣味の多方面なりし丈け、其の交友の範圍も餘程廣かつた樣である。支那人中にすら中將の知己は尠なくなかつた。就中孫逸仙の如きは中將に對して多大の信頼を抱いて居たと云ふことである。殊に實業家

方面に多數の知己ありしことは、中將逝去の際各方面の有力なる實業家より、續々弔問弔慰のあるを見て、流石物に動ぜぬ好古將軍も聊か驚かれたるものゝ如く「あいつ色んな人間を知つて居る、不思議な男じや」と言はれたに徴しても判かる。由來中將は海軍の充實には國富の增殖と工業の發達とを必要とし、力めて實業家と意志の疎通を圖られた樣である。彼の山下氏との厚き交際の如き、世上兎角の評ありしも、一は竹馬の友たりし關係もあるが、一は亦右の理由に基づくものであらう。中將今回の發病以來、山下氏が中將の爲めに盡したる友情は、縱令金の力に依るとは云へ誠に至れり盡せりで、療養上に何等遺憾の無かりしは、僕等の深く山下氏に感謝する處である。開放的な中將は殆んど總ての客に對して來者不拒主義を取られたる爲め、中には往々孟嘗君の客然たる鷄鳴狗盜的の徒もあつたが、此等に對しても中將は能く面倒を見てやられた樣である。唯何故か兩三年以來、新聞記者に對しては一切門戶を閉鎖せられたと云ふことである。

中將は職務上の事を處理する上に於ては、頗る細心緻密であつたが、身を持することは極めて豪放洒磊で言はゝ無頓着であつた。禮儀作法などの末節に至つては殆んど眼中に無く、服裝の如きもカラが曲がろとネクタイか横向うと、そんなことは平氣の平左であつた。殊に其の無作法たるや、何人の前であらうと一切御構ひなく、其の狀時に天眞爛漫たるが如く、時に故意の面當なるが如く、往々傍觀者をしてハラ／＼せしむる事があつた。中將は由來出物腫物處嫌はずの自然主義であつた。中將がまだ十二三歲の少年時代に於て路傍に放尿中巡査の發見する所となりて、叱責せられしも、中將少しも驚かず、騎虎の勢中道に降るべからずと云ふ態度で、悠々用を果したる後、始めて巡査の說諭を受たるなどの奇談もある。中將の露天用便主義は既に少年時代に於て育成されたものと見へる。水交社前庭の松樹、中將の肥料に依つて幾年の壽を延ぶるであらうか。中將の放發亦極めて開放的にして、或は後甲板に時ならぬ祝砲の響を聞き、或は談話中靑天の

霹靂に驚かさるゝ事がある。而かも御當人ピクともせず、顔の筋一つ緩めず泰然として平氣なり。暫らくして自ら「少し臭い」。中將又夏期に至れば足指の間に水蟲を病む癖がある。場所を擇ばす靴を脱いで痒きを掻く、眞に傍若無人に近い。先般の洋行中、在歐邦人の崇洋熱高きを快しとせざる中將は、列車内にて又此の奥の手を出し、同乘の洋婦人をして辟易せしめて、隨行の士官をして赤面せしめたと云ふことである。中將時に此の種の皮肉を演ずることがある。其他談話しながら鼻毛を拔き、鼻糞を丸める如きは、免状付にして人見て最早や怪しまなかつた。斯くの如きは形式的道德上より論ずれば、或は是非の評あらんも、膽力の有る人にあらざれば容易に爲し能はざる處である。

中將は獨り他人に對してのみ無遠慮なるにあらず、己れ自身に對しても亦極めて無頓着の構はず屋であつた。中將時に水交社にて入浴する事がある。多數士官の洗ひ落したる垢澤山の湯槽の中にて、顔を洗ひ、頭を洗ひ、決して上がり湯なるものを使はれなかつた。

中將は酒は相當に飲まれた様であるか、其の酔態なるものは曾て一度も見た事がない。飯の食ひ方は隨分亂暴な方で、手摑みで魚の頭をシャブるなどは平氣であつた。海軍省あたりで中將と食卓を共にしたる人は、秋山式食ひ方に大分當てられたものもあると云ふ事である。而かも之が後輩や同僚ばかりの前でなく、先輩の前でも御構なしと來ては、凡人には一寸眞似の出來ぬ藝當である。此の無頓着と構はず主義の點に於ては、兄好古將軍も亦相當に猛威を發揮されるので、兄弟能く相似て居るとの評判であつた。

中將は金錢に對しては極めて淡泊であつた。其の代はり屡々金がない〳〵と言はれて居た。交友か廣かつた丈け其れ丈け交際の費用も嵩むので、軍人の俸給位では到底一圓の餘裕は無かつたであらう。中將程の身分となれば、普通は子供に學校服位は造つてやるのであるが、中將は其さへしなつた。西郷南洲は子孫の爲めに美田を買はずと言つたが、中將は妻子の爲めに美服を買はすであつた。況して家おやで、中將は兄好古

將軍と等しく今尚ほ借家棲居である。此の豪放なる中將を輔佐しつゝ、多くの子女を養育せられたる中將夫人も亦賢婦人であると思ふ。

中將の性行並に逸話に關しては尚は書くべきことが尠くない。併しあまり長くなるので玆に筆を止め、中將臨終の模樣に就きて一言しようと思ふ。中將の思想は頗る進歩自由主義で、世に謂ふ軍人的なる狹き型に拘はれて居なかつた。大隈伯は中將を評して型に嵌まらざる軍人と云はれたさうである。併しながら中將は決して現今流行の皮想なる民主主義者でなく、常に心を皇室と國家に傾け、誠心誠意、皇室の安泰と國家の隆昌とを祈られたので、其の忠愛の念は終始一貫して渝はる處がなかつた。殊に中將の尊皇心は極めて徹底的で所謂忠君屋なるものではなかつた。中將唯一の著書とも云ふべき「軍談」中、獨逸を論ずる點の如きは口を極めて獨逸の惡辟を責むるにも拘はらず、カイゼルに對する言葉は頗る丁重で、我が皇室に對すると殆ど同樣の敬語を用ゐられて居る。敵國と云へば皇帝も泥棒も同一扱ひにする世間の多くの人々とは、餘程趣を異にして居る。又中將の病漸く重きに及んでや、腹部膨滿して恰かも護謨球の如く、苦痛殆んど堪へ難きにも拘はらず、遂に唯一言の苦痛を訴へらるゝことなく、其の語る處は悉く國家並に海軍に關する問題ばかりであつたと云ふ。以て中將が如何に國家を思ふの念か厚かつたかを窺はれる。

＊　＊　＊　＊

大正七年二月三日の夜もいつしか更けて、早や十二時を過ぎた。秋山中將は小田原なる山下氏の別莊の一間に、其の重き病體を橫へて居る。醫師は今宵ぞ最も大切なる時であると診定した。中將の病床には連日の看護に面やつれしたる中將夫人が白衣の看護婦と共に靜かに枕頭に侍し、苦悶を忍ぶ中將の青き面をば、眉毛の微動だも見逃がすまじと、深憂の眼を以て見詰めて居る。次の間には東京より招聘したる名國手と親戚知己の誰れ彼れが交はる〲當直をして居る。中將重病の報を聞きて各方面より馳せ付けたる見舞の客も、

今は或は散じ或は退き、廣き別莊寂として聲がない。唯岸打つ波の音と、松吹く風の聲とが、琴々淙々として遠く聞ゆる中に、覺めたるか眠むれるか、中將の弱き息の音が微かに而かも斷續的に聞ゆるばかりである。醫者も家族も知人も、せめて夜の明くるまでと、時計の針の進みの遲きを恨んだ。併し中將の脈は次第に弱くなるばかりである。注射も既に若干回施されたが、既に運命の歸決を自覺せられたる中將は、此の上の注射を拒まれた。中將は某氏を枕頭に招き、餘人を退けて、帝國海軍の將來に關する自己の意見を當局者に傳へるべく諄々と陳べられた。やがて曉の霜に凍ふる四時の鐘が鳴つた。中將は明らかに之を聞かれた。意識は尙は明確であるが、脈搏は愈弱く、醫者は終に絕望の匙を投げた。危篤の報は傳へられた。家族知人達は今生最後の暇を告ぐべく、せき來る淚を呑んで順次枕頭に進んだ。中將は夫人並に十四を頭に四人の兒女を一人〳〵招き寄せて最後の訓戒を遺し、親戚知人に對しても一々別れを告げられた。人誰か情なからん。幼き多くの子を遺して逝く中將の心は、遺言を聞く子の心よりも更に一層つらかつたであらう。こゝ正に一場の大悲劇である。斯かる間に五時の鐘が鳴つた。中將は之をも意識せられた。一同に最後の永別を告げたる後、中將は瞑目して徐かに死の使を待たれた。滿坐肅然、人は暗淚を呑んだ。やがて五時を過ぐる三十五分中將は「もうイカン」との一聲を漏らさるゝと同時に自ら胸間に合掌し、徐かなる大往生を遂げられた。斯して帝國海軍の英と匂ひし秋山眞之中將は、胸中偉大の抱負を持しながら其果未だ熟さざる間に溘焉として遠く逝かれたのである。葬儀の際、中將知人の詠みたる弔歌に、

國の爲め勳を樹てし君なれど、尙ほ國の爲め惜しき君かな

實に中將に對する總てを言ひ現はして居る。中將辭世の句に

不生不滅夜明け鳥の三羽かな

句の眞意は知らねど、中將の勳功は眞に不滅である。

（大正七年二月十八日）

趣味の雛祭と成金振りの雛祭

笹川臨風

今は雛祭と云ふが、もとは雛遊で、今云ふ姉様ごつこである。女の子供が人形を並べての遊戯であるから季節も定まつてゐなかつたのだが、上巳の秡と混同して、三月三日と云ふことになつたらしい。貞徳の御傘には雛を雜の部に入れてあるところを見ても足利の季世までは、季節が一定してゐなかつたと見える。増山の井と云ふ書の三月三日の條に、「ひゝなあそびこそ愷なる期もあらねば、打まかせては雜なるべし(中略)但聊あひしらひあらば、此比の俗にまかせて、今日の事にもなりぬべし」とあると云ふことである。此書は寛文三年印行とあるが、山崎美成の説に依ると、「増山の井は書肆のみだりに名を改めしにて誤なり、此書浪華の紹運と云ふ人の撰にて、名を俳諧水鏡といへり、享保十五年九月下浣日とあり、それを戸倉屋といへる江戸の書肆の板木買求て、その比季吟の山の井殊の外世上に行はれし故に、此書をも猥に増山の井と題し、末に年號と季吟の名を加へしなり、云々」とある。とにかく江戸の初期頃に漸く三月三日を雛祭の季節とした風俗が行はれたことゝ思はれる。雍州府志に、「倭俗紙を以て小偶人夫婦の形を作り、是を雛一對と謂ふ」とあるに徴しても、其の粗末さは分る。鴻の巣雛だの、小米ひいなだの、糸巻雛だのは、いづれも其質朴さを表はしてゐるが、江戸の盛なるにつれて、此祭も盛大に行はれ、次郎左衛門雛を初として、人形師も其精巧を競ひ、調度類などにも贅を見せて來た。

一時は雛祭も廢れてゐたが、近來は世の太平に伴つ

て、頗る復興の氣運に向いて來た。如何にも雛祭は、其名の如く、可憐な優雅なもので、王朝の氣分が漂うてゐる。新緑季の端午が男性的なると事かはりて、桃花季の雛祭は女性的の情調を發揮してゐる。端午の節季には中心がない、主腦を缺く。金太郎にしても、加藤清正にしても、神功皇后武内にしても、飾馬、太刀、鎧にしても、花兜にしても、いづれも附屬物で、主腦ではない。幟はあつても、矢車はあつても、吹流しがあつても、それは、大將の陣營を飾るもので、どこを探したところが、其中心を見出すことが出來ぬ。遊戯にしても、お祭りの本尊がなくては張合ひがないと云はねばならぬ。そこへ行くと雛祭りは一糸紊れざる整然たるもので、雛一對を主位として、官女があり、矢大臣があり、櫻橘樹があり、五人囃子があり、仕丁があり、衣服調度が秩序善く備つてゐる。所謂上下燦然として觀るべしで、禮儀三百威儀三千が具備してゐると云つてよろしい。雛の壇淸水坂を一目かな。燃えるやうな緋の毛氈に花の如き人形や調度が並んで、白酒の香が搖曳するのは、又と類なく美しい。貴賤貧富おしなべて行ふものであるから、融々たる太平の氣象が横溢してゐる。

禮は奢らんより寧ろ儉せよ。まして遊戯的氣分に富んでゐる雛祭のことであるから、總べてが趣味を以て成立せねば、無意味である。黄金金具や銀金具で脅しつけたり、金持振りを見せやうとする雛祭りならば、折角趣味の上に立つ雛祭りがめちや／＼になる。近來俄分限者又の名成金が出來るともに、此忌まはしい傾向が見えて來たのは、決して面白い現象とは云へぬ。金さへかければそれで善いと云ふのは、素町人根性で王朝の優雅な風俗を模本とした、雛に對しても、恥づべきである。同じ金をかけるにしても、もつと趣味ある金のかけやうがあるではないか。古代雛の名作を探し求めてもよい、今の名工に苦心の作をさせてもよい、紫宸殿の模型に慘憺たる經營をさしてもよい。今の俄分限者どもの金のかけやうは、甚だ拙劣で下卑である。

近頃變り雛と云ふものが年々目新しく創作せられて來た。中には目先の變つた面白いものもあるが、隨分智慧のないのもある。可愛らしく、品が好くなくては、折角の雛祭の目的に添はない。怪奇滑稽に陷つてゐるのは、寧ろ雛祭を侮辱するかの如き感じをする。此勢で進で行くと、今に夫婦喧嘩の雛が出來たり、野合雛が出來たり、心中雛が出來やしないかゝ懸念する。可憐な優美な氣分を失つては既に雛祭にふさはしくない。

昔の雛には隨分大きいものがあつた。近年のものでも關西物は關東物より大きい。けれど、雛祭りの性質から云ふと小さい方が可愛くて善い。祭るものもお客も人形のやうな可憐な少女である以上は、大きなものより小さいものが相當してゐる。近年の傾向は一般に小さいやうであるが、之は然るべきことゝ思はれる。

二月二十七日より三月二日までひいな道具賣、中橋尾張町一丁目、十間棚、麹町四丁目、人形町、此所に賣るなり（江戸鹿子）とあるは、もう過ぎ去つた時代の雛市である。十間棚を初め、其他にも雛市はあるが今では呉服屋や、デパートメント、ストアの方が卒先して、之を賣り出してゐる。早きを競つて、現今は二月一日から賣始める。呉服屋の樓上に、御約定濟の札打つて、俄分限者振りの雛壇を陳列して、見物の衆にあつと云はせてゐる。つまらない趣向だ。同じ俄分限者振りを發揮させるつもりならば、目に立たぬところに金をかけて驚かせた方が、趣味の養成にもなる。過去の江戸つ子には、あゝ云ふ街氣はなかつた。金ぴか／＼の帯が巾幗社會に流行するのと、同じ傾向で、これでは風流も洒落もあつたものでない。

文展でごて／＼細工の屏風を買ふ俄分限者があつたから、それはどう云ふ了簡だらうと、さる人が聞いたから、自分が買つたと云ふ、見得をするまでのことさと答へて置いた。まあそんなものであらう。さる關西地方の旅館に此頃流行る成金とか云ふものも來るだらうねと尋ねたら、成金は一目見るとすぐ分ります。頭の先から足の底までが、一切新しづくめです、鞄も毛

布も蝙蝠傘もすべて新調ですから、すぐに分りますと云ふ。定めし御祝儀やお手當がよからうと云ふと、ちつともいゝことはありません、唯空威張りに威張るばかりで、自動車と電話とばかりを善く使ふ動物ですと云つた。

さる關西の或温泉場に例の分限者がやつて來て、一泊した。翌る朝お茶代として百金を投じたが、氣骨のある亭主は承知せず、こんなに澤山は頂けません、貴方(あなた)方はそれでよいかも知れませんが、私の家は大へん迷惑でございます、あすこへ成金が泊つて一晩百圓の茶代を置いたげな、さう云ふ家には滅多に行かれぬと、お得意のお客も來なくなり、一寸來て見やうと云ふお客は皆無になり、貴方(あなた)のお陰で商賣がさびれます、と亭主は甚だ不機嫌である。此う云ふ筈ではなかつたがと、成金先生、苦笑して、そんなら半分にして五十圓やらう。之は滅相もないこと。そんなら二十圓にしやう。お斷り申します。然らば十圓か。いけません。頑固だね、さらば五圓と云ふと、五圓ならば時々置いて行くお客さんもありますから頂戴致しますと、五圓だけ貰つた。成金先生器量を下げること甚しで、どうも
あすこの親爺は頑固で、因業で分らんで困る。

此う云ふ手合が、妻君や娘にせがまれて、雛人形買ひに天晴れなる成金振りを見せようとするのであるから、たまらない。それで紀文が朱舫を隅田川上流から流して、舟遊にかへたやうな風流な趣向は、此雛の步想するところに非ず。唯無上に高いものを注文して、御約定濟に凡俗を驚かせやうとするのが身上である。序に約定主の名が明記されたなら、愈々以て本望であらうが、そのことのないのは定めし遺憾とする所であらう。已みなん〳〵、儕輩に誇つて、何大したものでもない、安いものさと氣取りたいが關の山であらう。雛もこれでは有難くも何ともあるまい。

祇園第一との評判を取つた、未開紅を五百金投出して、手折つた成金殿があつた。此ために憐れや未開紅の評判が頓に下落したとは、未開紅に取つては氣の毒千萬のことであるが、京都人士としては大出來と賞め

てよからう。金の横暴に對する反抗心である。此成金殿が京都通過の際は、朝早いのに、此未開紅を先鋒として、幾十人の紅紫絢爛なやつを停車場に整列させて頭を下げさせるのだらうな。花代がつけてあるから、そこは現金なもので、顔も洗はず、嗽もせずに驅り出されて行くのであるが、ほんに眠うをすッせ、とはいよ〱以て愛想のつきる話さ。同じ成金でも、飛行機のためや研究所のために寄附するのとは、其差豈千里ならんやと云はねばならぬ。

信實の三十六歌仙が、佐竹家の寶藏を出て、まごついてゐたが、某成金の手で三十五萬圓とかに買はれたと云ふ噂が立つた。又一説に實は其成金が買つたのでなくて、某男爵の手に歸したとも云ふ。若し後説がまことならば、其男爵は奥床しい。定めし之は、在來からの富豪で、斯る評判の立つのを忌んだものであらう。富豪は此位の細心な心がけがなくてはならぬ。そこに新しい成金との區別が存在する。之に比すると啓書記の瀟相八景が長らく宇宙に迷つたのは、甚だ心外千萬である。

しかし世の中は紙本より絹本の貴い時節である。何でも高ければ善いと、滅法界の畫料を出して、得意がつてゐる連中も少くない。畫家には結構であるが、藝術の進運とは沒交渉である。自家の爲に畫を買ふものはあるが、藝術の爲に陳列館を建てるものはない。天晴れの後援者振りを發揮して、多額の寄捨をしたやうに吹聽さるゝものもあるが、洗つて見ると、所藏品の價格を上げようとする魂膽だなど惡口する者もある。惡口するものが非か、寄捨するものが非か、そのへんは固より夷の思ふところに非ず。

畫が高くなる、骨董品が賣れるわく。其餘波を受けて人形の價までが、盛に騰貴する。美術倶樂部の賣り立にも人形の陳列が多くなつた。摸造品までが横行して、人形道樂も容易ならざる形勢に立ち到つた。嵯峨人形は固より、衣裳人形、加茂川人形、御所人形までが

時を得顔になつて來た。しかし此等はいづれも過去のものであるが、現在の人形は如何、まして將來の人形は如何。奈良人形師にしても森川杜園以後大した名人の名も聞えず、土ひねりにしたところが名人と云はれたものは多く過去の人である。雛祭の盛なるについても、名人の仕立てが必要である。佐四郎會だの、百馬會だのはあつても、唯同好者限りであつて、未だ十分に名人氣質を發揮させるには至らぬ。之には後援者があつて、宜しく指導し援助しなくてはならぬ。雛祭りの爲に成金振りを見せる人々は、せめて人形師の名人を作るやうに方向を向けたらばどうであらう。必ずしも過去のものには、唯過去と云ふ銹がついたばかりでない、過去の香が人を眩惑させるばかりでない、其技に非凡なところがあるは疑ない。今出來の嵯峨、加茂川、御所などを見ると、過去の佳作との間に著しい溝渠が截然として存するのが分る。人形造りは小技のやうで、決して小技でない。技に大小なし、要は其凡と非凡とにある。趣味の雛祭に憧憬れてゐる人は又大に此に留意せねばなるまい。

米相場の話（附、投機の群衆心理）

田中正之

生活問題は、大分騒々敷なつて來た、米穀は國民食料品中の重要部分を占めて居る丈に其の價格の騰貴は綿糸の騰貴よりも、綿布の騰貴よりも、麥、豆、芋、野菜、肉類の騰貴よりも、一層痛切に國民の感情を刺戟する。

大正四年八九月頃、深川正米市場に於ける玄米の平

均相場は十一圓四五十錢、其の當時の最低十圓八九十錢、東京米穀取引所に於ける定期米の相場も、當地先物の相場で十一圓一二十錢であつた、地方農家が、恐慌來を叫んで救濟を求めたのも、大隈内閣が、米價釣上應急策として正米の買上を斷行したのも、此の時であつた。

當時、地方に於ける、農家の手放れ相場は一駄七圓五十錢といふ安直を現はした處もある、平均一石十圓を割つた處が多かつた、如何に巧みに十呂盤を採つても、一石十圓以下の安直では、生産費だに償ふことは出來ぬ、農民の苦衷、農村經濟の疲憊、延いて一般經濟上に及ぼす惡影響の、忍ぶ可からざるものがあるとして、政府の應急策を驩迎した。

爾來、今日に至る、僅に二ケ年間に於いて、米價は奔騰、又奔騰、深川正米市場の玄米の平均相場は二十四圓九十錢、上米は二十六圓八十錢、定期米先物の相場も之れに準じて二十五圓五六十錢と、二年前の安直から見ると、確實に二倍以上の高直を現はして居る。

小麥の相場も、一圓に三升八合、(換算一石二十六圓餘)麥粉の相場も一袋六圓(換算一石二十六圓四十錢内外)、大麥の相場も亦一圓に七升何合といふ唱へ直であるが、前年來、小麥作に力を入れて、大麥作を閑却した爲、大麥は物資の缺乏を訴へて居る、陸軍糧秣廠なども、實際問題として、之れには閉口して居る、同廠が、年度代りまでに買入れやうとする五萬石の馬糧の如き、強いて其額を充たさんとすれば、更らに如何なる高直を出ださんも知れない。

單に、麥價との釣り合上から見ても、米價はマダマダ割が安い、否、代用食料品中の重用部分を占めつゝある麥價、既に然りとすれば、今日の米價は、尙ほ此等の代用品を代用せしむる丈けの權衡が採れて居ない。況して、麥その者も、物資の缺乏を訴へつゝある今日、米價は更らに大に騰貴せざるを得ぬとは、各當業者の主張する處である。

果して騰貴を繼續する哉、否哉、素より速斷を許さゞる處なるも、既に今日の相場を以つてして、耐へ難

き暴直なりとせる消費者側にとつては、此の上の騰貴は忍びざる處なる可く、若しも此の上騰貴を継續するやうなことがあつては、如何なる問題を惹起せんも測り難し、先づ其の相場を作りつゝある、取引所を閉鎖するに若かず、などと鹿爪らしく論議する者もある。

大正四年、米價が十圓臺に下落せし時も、取引所中止論起り、今又米價の暴騰するに迫んで、市場閉鎖論を聞く、取引所取引は左迄有害無益の長物であらう歟。安くなる時は、取引所の相場が何時も先驅して、安直々々と附けて行き、又高くなる時は、高直々々と高直の水先案内者となつて居る、而かも取引所の取引は其の大部分空賣買で、實際の取引とは、一見沒交渉の觀がある。

昨年下半期間に於ける、東京米穀取引所の賣買出來高總計は、實に五千萬石といふ巨額の數字を計上して居るが、この五千萬石に對する受渡高實數は、勿驚、タッタ二十七萬餘石に過ぎなかつた。五千萬石に對する二十七萬石は約二百分一强である、即ち實際の受渡高に對する二百倍に近き者は空賣買であつて、其の空賣買の爲に、相場を激騰さしたり、激落さしたりするのは不都合であるといふのが、閉鎖論の要點らしい。

一應尤もなる所見である、二百倍に近き空賣買で、相場の激變を釀成する者とすれば、單に社會公益上好ましからざることであるのみならず、激落に際しては、生産者を苦境に陥れ、激騰に際しては消費者たる國民をして、その生活を不安ならしめる。

然かし、取引所取引は、放從的の者であつて、其の放從的賣買關係から、無量の機能を發揮して居る。取引所の取引は、單に、價格の調節機關なりとの極めて狹義なる見解からするときは、或ひは其の目的と背反することも無きに非らずであるが、取引所取引の機能は、單に價格の調節を以つて目的の主眼とはして居ない。

寧ろ、米穀の如き、生糸の如き、綿糸の如き、物産取引に在つては、價格の激變を以つて、其の機能の性命として居る、乃はち、物資の供給不足を訴へんとす

る時は、價格先づ暴騰し、而して之れを節約せしめ、食延ばさしむる歟、或ひは他に補給の道を啓かしむるか、必らず供給の不足を訴ふる事前に於いて、之れを調節せしめ得るといふ偉大なる力を有つて居る、之れに反して、物資の供給過剩せんとする場合は、價格を激落せしめ、以つて之れを濫費せしむる歟、乃至は他に之れを消化すべき適當の道を開かしめ、而して其の目的は達せらるゝのである。

取引所の取引は、或る程度まで、自づから價格激變の先覺者となり、水先案内者となつて、需給の過、不足を事前に防ぎ、其の過、不足より生ずべき危險と、被害の大部分を取引所取引業者、自づから、之れを負擔することゝなるのである。故に人爲的干渉によつて、價格のみを壓迫し、之れを制限せんとすれば、取引所取引の機能は沒却せられ、需要、供給の道は破らるゝ道理である。

取引所の取引は、無限の出來事を無限の人々によつて判斷し、先きの先きまでの出來事まで豫期して、賣つたり、買つたりするのであるから、其の相場表に現はれたる數字は一見單簡なる者のやうに思はるるが、其相場の中には、世にありとあらゆるすべての出來事が包含されて居るのである、其の相場に影響すべきすべての、事實の實現して相場に影響する以前、取引所の相場に其の事實が實現せし者として之れを相場の上に現はして仕舞ふのであるから、着實なる生產者及消費者は當然受く可き被害の或る部分は、事前に於いて、投機業者に轉嫁し、危險界より脱する譯である。

本年の如く、通貨膨脹し、購買力の增長せる歲柄には、其の購買力の前に於ける物資の供給は、餘程充實せしめ置く必要がある、カツ〱一ぱい位な供給力を以てしては、此增長せる購買力の前には、不足を免かれぬ、購買力と對抗して、其の市價を抑壓することは出來ない。最近農相の説明する處によれば、昨年度の產米は五千五百萬石、平年作以上の收額があつた、前年の剩餘米もあり、朝鮮米も移入する、臺灣米にも供給が仰げるから、斷じて本年の供給に不足を訴ふるが如

きことは無いといふて居る。

今假りに農村に百歩を讓り、前年の剩餘米七八十萬石ありとし、朝鮮米の移入百七八十萬石、臺灣米の移入八十萬石、外國米と內國米との輸出入差引の超額七十萬石とするも、之れに實收額五千五百萬石を加へて尙ほ且つ、五千八百九十萬石に過ぎない、過去五ヶ年間の平均消費食料米は、一ヶ年六千萬石から六千一二百萬石を要して居る、本年も六千一二百萬石を要するものとすれば、其の供給總額に於いて、既に二三百萬石の不足を告げて居る勘定では無い乎。

各物產の中にも、米穀の如きは、其の收穫は一期にして、一期に一ヶ年間の供給の全部は、斯界に提供されるゝのである、一般經濟界の疲弊せる時は、其の全供給額の提供を受けたる、謂ゆる新穀時代は、意想外の打撃安を見ることもあるが、本年の如く、資金豐富にして、經濟界の順境に在る時は、假りに其の全供給額の三分二、乃ち六千萬石に對する四千萬石の者が、農家の手を離れて、金融界の御厄介になるとしてもが、餘り大なる影響は受けない、況んや、前途供給不足を免かれないといふ懸念の之れに伴ふ限り、資力を盡して之れが買思惑に熱中するは、商人の本性であり、且つ又資金の性質として、夫れ等の確實なる、利殖目的物に集中するは、自然の數である。

我が國の經濟界は、時局發生以來長足の進歩發達を遂げ、其の實力の上から見ても、其の機關運用の點に於いても、過去十年前とは、殆んど隔世の觀がある、彼の流通貨の如きも、明治四十一年の四億千七百餘萬圓時代より之れを見る時は、實に倍額に近き激增を示して居る、舊臘末日銀の兌換券發行高が八億二千四百萬圓といふ新記錄を造りたる事實に見ても其の間の消費が說明される。

大正五年の五億八九千萬圓から見ても、尙ほ二億圓からの激增である、通貨の膨脹は、一面に於いて資本信用の膨脹となり、各般に於ける融通力の增加は、數の免かれざる處である、殊に戰亂勃發已來、時局の影響を受けて、企業資金の拂込れたる者、新設、擴張と

を通じ二十六億七千萬圓の巨額に達して居る、大正三年末、全國株式會社の公稱資本金三十億七八千萬圓であつたといふことであるから、今は約倍額に近き者に達して居る、其の他公債、社債、證券の類は、數倍額に上ぼつて居る、此等の有價證券は極めて內輪に見るも百億圓に近き巨額に達するであらう。

大正三年末十五億圓に過ぎざりし、銀行預金が約三十億に上ぼりたる、又手形交換高が大正六年度に於いて一躍千五百萬枚、三百十七億圓といふ巨額に達したるが如き、財力、及信用の膨脹を數學的に立證するものである。

此の資本及信用の膨脹は、有形的に、無形的に購買力を助成し、購買力の膨脹は、更らに物價の騰貴を促がし、物價の騰貴は、更らに通貨の膨脹を促がす、之れ斯界の通則である。

過去數十年來の實績に徵するも、通貨の流通高と、米價の高低率とは其の揆を一にして居る、如何に購買力の盛衰が、直接資本信用に、深き關係を有するか、將た購買力の增減が、直接物價の高低に影響を及ぼす程度の甚大なる者あるかは思ひ半ばに過ぐるものがある。

而かも通貨は、尙ほ引續き增加の趨勢にあり、軈て十億圓を突破することある可しとは、一般識者の期待する處にして、民間購買力は、之れが爲に益々增長し、通貨の價値の激落は、廉價なる物資に對する供給不足を免かれざるに至る、之れ經濟上に於ける通有性ともいふ可く、米穀の如きも亦、若し之れを單なる普通商品として、普通商品の調節機關によつて調節の目的を達せしめんとする時は、此の老大なる購買力の前に供給不足を來たし、如何なる突飛の高直を現はさんも測り知る可からずである。

戰時經濟は、平時經濟とは異り、戰時に於ける通貨膨脹の惡影響は、平時々代の夫れの如く、大ならざる可しとは勝田藏相の說明する處なるも、而かも平時同樣の狀態に在る今日の日本の經濟界にとつては、決して其の惡影響の鮮少ならざる可きを知る、且つ、平時

戰時に係はらず、常に活動性の性質を帶びたる資本の性質として、道理ある利殖方面に放下さるゝは、常然の數たる可く、今後此の膨脹せる資金の、漸次山深く土臭き地方に瀰漫するに從ひ、米穀をはじめ、一般生產品に對する、投機熱を助成し來たる可きや、睹易き事實である。

消費の實數を充たし得るに足る供給力さへも、危まれつゝある本年度の米價は、此の局に臨んで、果して平然たるを得るであらう乎、供給の實數、假りに過剩すべき成算ありとするも、幣價下落の權衡上、廉價に之れを置くを許さゞる今日の場合、米を買ふ者は奸商なりとの僻見の下に、之れを處罰し、以つて調節策なりとするが如きは黴菌の巢窟に觸れずして僅かに這ひ出だしたる者の一部を揉み潰する類にあらずして何ぞ。

人口の增殖に伴ふ需要增加はいはずもがな、尙ほ人の餘り氣附かざる、文明に伴ふ米食者の增加、購買力の增加よりする消費額の增加等も、時々の經濟事情によつて新たに起り來たる現象である、前年供給總額六千萬石を以つて、其の需要の總べてを充たし得たりとて、本年も亦同數量によつて、果して能く其の供給を支へ得可きかは、周圍の經濟事情に鑑みて速斷を容れざる處である、假りに、これ等の方面より來たる必然的の需要增加額は、今之れを玆に數へず、本年も昨年同樣の經濟狀態にある者として、昨年以下の供給額を以つてして、果して其の需給の權衡を保たしめ得べき乎。

需給の實數に於いて、供給の需要に超過したる昨年度に於いても、流通貨の膨脹に伴ふ購買力の增長に對抗して、市價を抑制することは出來なかつた、況んや本年の如く、供給の數量に不足を生ぜんも知れぬといふ懸念のある場合には、一層投機的、思惑熱を助成し不足の供給をして、一層大なる不足を感ぜしむるに到る、之れ群集の心的發作とも謂ふべき乎。

市場に於ける、群集心理は、或る場合は流動體の如く、又或る場合には火焰の如き性を帶びた者である

……米國は愈よ貿易の大制限令を發布した……といふて、一人が賣り始じめると、今まで燃え揚がつて居た市場の買氣は、ガラリ一轉して總悲觀に傾き、我が經濟界は奈落の底にでも墜ちさうな心理狀態になつて、賣り崩して來る、賣物が出て相場が安くなれば、安くなるに隨ひ恐怖が增し、田舍者が江戶の火事見物をしたかのやうに、齒の根も合はぬ程、ガタツキ始じめる、一昨年から昨年にかけての盛況時代、一日平均三十萬株からの出來高に達した東京株式取引所の商況が、舊臘の不況時には、其の十分一の出來高にも達しなかつた、此等の事實は群集心理の反面を說明する者である。

本年は供給不足を免かれないといふ掛聲は、蠣殼町や堂島市場の人氣を緊張せしめたるのみならず、土嗅き地方農家に、如何計り强き暗示を與へたるか、新穀期に於いて、新穀の廻着不足するは、船腹の缺乏、運賃の暴騰、貨車不足等運輸機關の故障に由來する處も少からず、又秋上げの天候不良にして、收穫期の後れたることも副因の一なる可く、養蠶、麥作其の他副生產物の成功によりて、農家の金融緩漫なることも亦其の副因の一に相違無しと雖も、此の際、賣損つても、ドウセ供給不足の米、何時かは想外の珍高値を現はすことがあるに相違無いといふ感想が、以心傳心誰れ言ふと無く、彼等農家の頭腦に深く〱刻み込まれたといふとも有力な原因である。

汐留、品川、秋葉ヶ原、板橋、兩國、淺草、錦糸町、北千住、隅田川等の各鐵道驛は、今や東京の咽喉部ともいふ可く、東京に於ける貨物の吞吐集散は、其の大部分此の咽喉を通過することゝなつて居る、海運に係る者も無きに非らざれども、米穀の如き比較的荷嵩の嵩張れる、運賃の低廉なる者は、船腹缺乏、海運賃暴騰の際、海運界には驩迎されぬ、勢ひ運賃の低廉なる鐵道便に依らざる可らざるに至るは數の免かれざる所である、獨り米穀のみならず、百貨皆其の事情の容す限り、鐵道輸送に附せんとするは當然の徑路である、限りある輸送力の到底其の目的を達することの出來ぬは明白なる事實である。

米穀は、國民の主食料品なるが故に、之れが輸送上に就いては、鐵道院の諸公も、可成的、優越權を與へつゝあるは事實なるも、限りある貨車なれば其の目的を達することは出來ない、東京市内の消費額、一日平均二萬七千俵内外のものを支ふるには、餘程の努力を要することであらうと思はれる、獨り東京のみならず、大阪然り、兵庫然り、其の他の集散地何れも東京同樣の窮狀に陷入つて居る。

一歩踏み過れば食料米の輸送にさへ差支へつゝある今日、五十萬俵も、百萬俵もの假需要を取引所の取引で起されては、輸送力が之れに伴はない、輸送力が之れに伴はないから、賣方の渡米は期日までに調達することが出來なくなる、期日までに賣方は、賣つてある丈けの米を渡すことが出來ぬといふことが、分つて來ると、其の賣買關係の假需要に對する不足の供給を目的に、相場の騰貴を見越して群集が寄つて買廻つて來る、元々渡米調達の見込の無い處へ、買物が益々殖へて來るから、益々賣方は窮地に陷入り、遂ひに自づから其の賣渡す積りで先賣してあつた米を、買戻さねばならぬことゝなつて、徒らに買方の勢援をするやうなことになる。

斯くの如くして、群集は水の低きに就いて流るゝが如く、缺所に乘じて集中する、其の心的發作は、實に偉大なる勢力を有つて居る、人熾んなれば天に勝つ、群集の向背如何は、實に市場の何物をも防遏するに足る勢力を有つて居る、左れば群集の心的發作によりて其の機能を發揮しつゝある取引所取引に對しては、須らく相當の對應策無からざる可からずである、單に輸送力に伴はざる、假需要を起すは不正當なる買占なりとて、既に取組たる賣買契約に對して、解合（和解）を强要せしむるが如きは、商取引の機能よりする按配を不能に終らしむるの虞れがある。

渡米を不調に歸せしめたるは、市場に於ける投機的假需要の勃發にあるや勿論なりと雖も、當初之れを賣りたる賣方中には、渡米の用意として、地方に正米を買附けたる者もある可く、又自己の營業が米屋であ

したなら、其の商賣品の米を、地方に向つて仕入れるに當たり、地方に其の米を買附けると同時に、保險の意味で取引所の定期取引に先賣りするものもある、此等は投機の意味で、定期米を賣つて居るのでは無く、其の買附た米の相場の變動からする危險を避けんが爲にする行爲である。

然かるに、一方の、定期取引の賣物を强制的に解合はさして仕舞ふといふことになれば、其の地方に買附けた正米に對する、相場の上の危險の全責任は米屋自づから、之れを負擔せねばならぬこととなつて、確實なる問屋業は、成立しない、政府にして、眞に此等の弊害を悟り、弊害を矯正して、米價の調節を期するならば、先づ輸送機關に着眼すべきである、鐵道貨車は此の上配給の餘地無しとすれば、何故に船腹を與へざる、船舶管理令は、與國に對する供給船の豫備行爲のみでは無からうとの批難攻擊あるは無理からぬ次第である。

如何に奸計に長けたる奸商と雖も、無謀の計劃の成功は期待せぬ、輸送機關の不備といふ缺所に乘じてこそ、始めて其の計劃が成立するのである、否な敢へて奸商に非らざるも、供給不足の虞れある者は、買ひたくなる、之れ人情の然からしむる處にして、取引所に於ける當限物の渡米が不足するとか、本年度に於ける全供給に不足を生ずるとかいへばこそ、群集之れに雷同して來るのである、地方の農家が高く止まつて賣急がないのも、亦、此處にあるのであつて、之れをしも奸商と呼ぶは亂暴も極まれる者である。

斯くの如くして、新穀の出廻匆々、米價を釣り上げ、其の突飛なる高値に持來るを手放したる地方農家の購買力は、彌が上に增長すべく、地方農家の購買力は、將來に於ける米價の大なる潛勢力となる可く、米價の向上は益々其の勢ひを增加する道理である。

投機に伴ふ投機者の操つりから生ずる富の消費や、生產者の損害及投機業者が、各自其の資力に超越した思惑を試み、且つ純然たる賭博の精神を以て投機に耽り、延いては一般公衆の風紀を頹廢するといふやうなことが、取引所取引に反對する有力な理由になつて居

る、中でも時々物議を醸すは、投機業者の操つりの一なる買占である。

買占の結果、時々相場が暴騰して、生産者を利するかのやうに思はれるが、一方消費者にとつては、景氣を崩さるゝのみならず、投機業者が此の操つりによつて、暴利を壟斷するといふ、道徳本位からする罪惡を防がなければならぬといふに在る。

一見、道理ある言葉のやうに思はれるが、市場を操つる買占又は空賣は、生産者及消費者に損害を與ふるまでに、夫れ程永く繼續するもので無い、若し斯る投機的發作が、永續するとすれば、其は他にヨリ以上の大なる原因が存在するのである、人爲的操りを、人爲的に永續せんとするは、恰かも天に向つて唾するが如き者で、操つるより速く退却するが斯道の祕訣である、操つり即マニピュレーションを施しながら、退却することを知らざる時は、其の反動より來たる可き損害の總べては、操縦者自身に於て負擔せねばならぬこととなる。

而かも、投機業者は其の競爭者が、策略の爲に渦中に溺るゝこともあり、自づから損害の犧牲者となることもある、投機は生産地の相場と、中央市場の相場との産額(直鞘)を縮少せしむる上に偉大なる力を有つて居る、乃はち生産者及消費者の當然蒙る可き損害は、投機業に於いて之れを負擔することになる。

株式投機に對しても、其の理由は一である、正直な放資者を迫害したり、又は一定の工業をして、其の經營を、株式相場に隷屬せしむるといふが如きことは絕對に無い、其の事業に對する缺所と長所を精査研究して、投機者自づから、之れを誘導し、之れが先覺者となつて、其の事業の補佐役を力めて居る、時局發生已來各種事業の勃興に際し、船舶業を好しとして之れに資金を投下したる、紡績業を有望として之れに放資者の蝟集したる、化學工業、炭礦業、造船業、毛織、モスリン、キャリコ等の織物業に投資したる、砂糖業、石油業に投資者の多かりし等何れも皆投機業者の採擇に俟つて始じめて、其の目的が達せられて居る。

乃はち、企業當時、此の事業は前途有望であるが、といつても、資金の本性として、果して成功するやら成功せぬやら、分らぬやうなものに誰れが、眞面目に放資する者があらう、此の危險時代に於いて放資する者は投機である、故に投機は一たび當たる時は其の利益も莫大であるが、其れと同時に危險も之れに伴ふ冒險的性を帶びた者である。

講和が成立したら、戰時經濟施設は根底から覆される、各事業會社の收益の如きも、先づ半減は免かれまい、中には事業の成立を阻止される者もあらうといふて、減多矢鱈に悲觀して、講和成立前の今日、既に兜町や、北濱市場の彼方は、早や講和が成立したかのやうに、平和克復氣分が漂ひ、第一流の株劵として、あがめられて居る彼の郵船會社の株でさへ、一割以上の好利廻りまで下がつて居る（增資の新株を加へて）其の他鐘紡の如き、東洋紡の如き、砂糖の如き何れも一割以上の好利廻りに下落し、二流三流處の株式に至つては二割近い好利廻りまで、叩き落されて居る者である。

當然、價値ある株劵を、實價以下の安直に叩き落して居るのは、投機的群集心理の發作に外ならぬ、比較的安全で好利廻りだといふ郵便貯金に預金しても、年四分八厘にしか廻はらない、昨今市中の金利が稍々引締つたといふても、一錢五厘なら幾らでも貸し人がある、現金を積んで銀行に預入せんとすれば年四朱が關の山である、年四朱か五朱にしか廻はらぬ今日の狀態に於いて、其の資産は拂込資金の十倍にも二十倍にも見積れるといふ大會社の株劵が、一割以上の好利廻りに、冷遇されて居るといふことは、嘘のやうな眞實の話である。

講和が來て、其の會社の利益が半減して仕舞つた者として、其の利益半減を、十呂盤の基礎として居る投機業者の眼には、最早平和が來ても、會社の利益が半減する時代に逢着しても驚く處は無い、各資産家、事業家も、兜町や北濱の相場師は、餘りに譯が分らな過ぎる、此の利廻りを見よ、此の收益を看よとは、當時

口嘴沫を飛ばして、のゝしつた處であるが、今日では、平和接近の曙光を眺めて、只管投機者たる相場師に三拜九拜するのみである。

投機業其の者は、冒險的であつて、成功至難の難業である、一歩履み誤まれば賭博常業の博徒と見違へられる程世の擯斥を受けて居るが、其の投機業者の、日々行ひつゝある投機は、斯くの如く、世界潮流の先覺者となり、水先案内者となり、事前に於いて自づから損害の負擔者となつて居る、換言すれば、投機業者は經濟市場に於ける、大なる意味の犠牲者であり、且つ調節者であると斷ずることが出來る。

斯くいふ時は、相場師先生、無茶苦茶に増長するかも知れない、郷株式理事長や、指田米穀理事長は、天下でも取つたやうに喜ぶだらう、實際相場師乃ち投機師の運用宜しきを得ば、社會に功獻する處も、頗る甚大なる可き筈である、然かれども、悲しい哉、現行制度は、眞に此の投機の眞價を發揮せしむることの出來ぬ場合が往々にある、否な多くの場合其の機能を自づから破壞することゝあるは遺憾千萬である。

法の不備、制度の不良に就いては、別に說くことゝして、投機取引及投機業なる者の、社會政策上片時も缺く可からざる必要々件であるといふことは、前述の如くである、然かるに、最近米價の騰貴するや、政府は之れを以つて、投機業者の買占的操つり作用に由る者と做し、當時最も多數の買思惑をして居た、津の岡半右衛門なる者に、暴利取締令違犯者として、農商務大臣自づから、之れに戒告命令を發し、其の買ひたる米の全部を、賣拂ひ若しくば、買契約に對しては相解せしむることゝなつた。

岡半なる者の買占は、東京、大阪其の他、全國三十有餘の取引所に亙つて、約三十萬石足らずの數に過ぎなかつた、一ヶ年六千萬石の供給米を要する日本國内に在つて、三十萬石足らずの端した米を買ふたからとて、大局に影響する道理が無いやうに考へられる、且つ一片の省令位で國法を左右するは違法であるといふ反對論も、大分猛烈な容子である。

法曹界の雄士を俟つまでも無い、違法は違法であらう、併かし昨年水害當時は、同省令の爲に一部の奸商は確かに鳴を鎭めて、社會上多少好果を收むる處のあつたのは國民一般の認むる處である、而して其の當時之れを謳迎しながら、且つ斯る法律の存在することをも知りつゝ、此の省令を馬鹿にしてかゝつた岡半右衞門なる人の行動も、甚だ不穩當であつたといはなければなるまい。

違法、違憲といふが如きことは、暫らく論爭界に讓るとして、恰かも在米の稀薄なる、輸送力の不充分なる時に乘じて、岡半が巨額の受米を迫り、猛烈なる買煽りを敢行したといふことは、省令を廢れて買切れなかつた全國の人氣を掻破した。鬱沒たりし米界の人氣は、此の岡半の勇往邁進に覺醒し、群集の買氣を一時に誘發されたといふことは隱れ無き事實である。

愈よ、防波堤が切れた、米價は上がるより外に道が無いといふ觀念を與ふれば、無限の資力は、立ち處に集中して來る、之れ、群集心理である、未だ上がる可き理由を知らざる者までが、誰れそれが買ふから、己れも買ふと云ふ風に、郵船會社の株券がドンな者やら、何々會社は如何なる事業をして居るやらも知らずに、株熱に逸つてボロ株を背負込むのも道理は皆一ッで、買へば儲かるといふ心的發作は、理窟も糸瓜もあつた者で無い、其の勢ひの猛烈なる一時は決河の一時に押し寄するが如き概がある。

彼の岡半の買物は極めて、小額の者に過ぎなかつたが、其の買占が、群集を操つる上に於いて有力な導火線となつたのは事實である、即ち大阪が之れが爲に突飛の高直を現はす、大阪が高いから全國も之れに準じて上がるといふ有樣で、各地と大阪とは相呼應して向上の氣分を造つたのは掩ふ可からざる事實として認められる、ソコで政府は、買方の先鋒隊たる岡半を退治さへすれば、誇張せる群集心理を蹉跌せしめ得るのみならず、延いて一般市場に於ける假需要を一掃せしめ得る者と做し、彼の戒告命令を發した者であらうと察せられる。

麥の萠芽も、踏みにじられた時は、一時其の姿を沒する、群集の心的發作の如き、有るが如く無きが如く、漂然として譯の分らぬ者であるから、ボカリ一ッドヤされば、忽ち消散する、之れによつて起れる假需要の如き何千萬石あつても、一夜の裡に雲散霧消して仕舞ふが、併かし之れを以つて米價の調節を成し遂げたりと見るは、誤謬も亦た甚だしい者である。

新芽を、踏みにじられたる麥も、其の株根に障害無き限り、再び、以前より、ヨリ以上の良新芽を吹き出だす、米穀市場に於ける假需要とて、其の假需要を起す可き根源に觸るゝ無く、其の枝葉のみを切り落したりとて、其の目的は達せられる者では無い、人爲的に之れを抑壓した反感は、一般大なる反撥力を起す、之れ亦群集心理の一端である、卽ち嚴冬踏みにじられたる麥が、必らず豊作するの理と一般、當然上がるべき理由を有する米價に對して、其の原因を矯めず枝葉のみを切落し、而して之れに對する何等對應策を施さゞるの結果は、何時のまにか大反動に襲はるゝを覺悟せねばならぬ。

無限の假需要と無限の相場の激變とを生命とし、機能とせる取引所の取引に對して、斯くの如く假需要に制限を加へ、假需要制限の目的又價格の制限にありとすれば、取引所に於ける生命と機能とは、既に沒却せられたると一般である、機能を沒却したる取引所の取引は死物同樣であつて、其の存在を認められない、機能を奪はれたる取引所に對して、自治調節を期待せんとするは木に緣つて魚をもとめんとするの類に外ならぬ、市場の機能を略奪せられたるを知らずして其の職に恬然たる、取引所理事者の厚顏にも呆れざるを得ず、其の機能を奪ひたる農相又他に其の缺陷を補ふ可き施策無きは、取引所取引の機能を解せざるの愚物である。

二十五圓以上の玄米が民度に適應せざる甚直なりとして、其の價格以上の、假需要を禁止し、價格を抑制せんとするならば、何故に其の價格を壓迫するに足る補給の道を啓かざる。

年額二百萬噸の輸出餘力を有する西貢米は、時價ヨ

斤四圓三十錢である、高率なる運賃と高率なる關税とを、之れに加ふるも尙ほ且つ本邦着、概算一石二十圓か二十一圓止まりで供給が出來る、若し夫れ關税を撤廢せんか一石の上に就いて二圓五十錢を更らに遞減せしめ得べければ、一石十八九圓の白米が吾人の食膳に提供し得られる譯である、西貢米は輸出制限ありと雖も之れ對敵防禦策にして、月額二萬五千噸までは特許輸出を認められて居る、蘭貢米の如きも聯合軍側には無限に供給し得られることになつて居る。

市中小賣白米、一石三十四圓何十錢、內國米に比し一石に付十五圓方も低廉なる米を供給せんと欲すれば供給し得るにも係はらず、何故か遲疑逡巡、之れを斷行せず、商業の調節機關に向つて、干涉するが如く、干涉せざるが如く、食料政策を布くが如く、布かざるが如く、各當業者をして玆に不安と、疑惧とに襲はしめて居る。

各當業者が、不安と疑惧とに襲はれ、思ひ切つて、取引に身を入れることの出來ざるは、機關に對する政府の壓迫である、地方に正米を買附け、其の正米が豫定の期間內に廻着すれば、何等の被害は無きも、一朝其の買附けたる正米が輸送機關の都合上、豫定の期間內に廻着せぬといふやうな場合には、渡米不調の故を以つて强制的に解合はされるかも知れず、他に牢乎たる確信のある者ならば兎に角、取引所の取引を利用して、買附米の保險を爲さんとする者は何れも買附米を差控へざるを得ざることになる。

正米を地方に買附け、其の買附けたる正米を、取引所の定期取引に賣つてある者は、其の正米を賣つた定期取引は、恰かも正米の積載船のやうな者で、買附米に對する相場の變動よりする危險の全部は、定期取引に轉嫁されてある、故に此等の買附米にとつては、定期取引の强制解合は、積載船の轉覆のやうな者で、定期取引の保險を賴りに、地方に正米を買附けた者は、强制解合に遭遇して、買附けた正米は自づから背負みとなり、一定の手數料口錢位に甘んせざる可からざる單簡なる商行爲は、機關の運用阻止によつて、其の買

附米の思惑者とならなければならぬこととなる。

取引所に於ける定期取引は、素より斯る實物の保險賣買のみには限られず、其の賣買總出來高に對する、九割何分までは暗より暗に葬り去らるゝ、相場の上の差金を目的とする投機取引に過ぎざるは勿論であるが而かもこの九割何分に相當する投機取引あるが故に、實物取引に對する危險を之れに轉嫁せしめ得るのである、投機取引の奬勵は、假需要を奬勵するものにして、假需要の增加は、物資の供給を益々不足せしむる者であるとの議論もあるが、假需要は、軈て起り來たる可き需要に對する豫備行爲であつて、眞に需給の調節を圖らんとするには、豫備行爲たる假需要の激增は大に驩迎せねばならぬ道理である。

取引法の不備に乘じて、奸計を運らす奸商は防ぎ切れず、之れが爲に、却つて其の目的を達する能はずとならば、宜しく其の不備の點に改良を加ふ可しである、只だ譯も知らず、需給の豫備行爲たる、假需要に、壓迫制限を加へんことにのみ急にして、其の豫備行爲たる、假需要に應じ得べき施設をなさゞるは、飽くまで生產者をのみ庇護せんとする者にして、消費者たる國民を度外するの甚だしき者である。

米價に制限を附するにも非らず、商業の調節機關たる取引所取引の商的發作によつて之れが調節を全うせしめんとするにも非らず、的も無き處に矢を射て、徒らに被害者を造るが如き政策は愼しむべきことに屬す、政府にして飽くまで干涉し其の終始を全うせんとする誠意あらば、政府自づから食料政策を布き、調節分配の任に當たる可きである。

土に親むものゝ春に逢へる歡び

▽春の壓力

篠原溫亭

瀧田さん

あなたに御會ひしたのは二月の七日でしたね。其時私は他から歸つて來た所で、新開社の前であなたの何時もの赭い顏を見ました。そしてあなたはその時「土に親しむ者の春に逢へる歡び」と云つたやうなものを書いて見ないかと仰しやつたのです。私も永い間さうしたことを考へてゐました。あなたの背後には黑塗の光つた俥がありました。其傍らにはまだ芽吹かぬ梧桐が立つてゐました。けれども私には其れが芽柳で枝を長く垂れてゐるかのやうに思へました。あなたは直ぐに俥に乘つて、俥は後ろを向けて一散に馳せ去りました。雨あがりの午後の日が麗らゝでした。

もう春が來てゐたのですね。

私が花いぢりを始めたのは十年‥‥もつと前からであらう、私は生れ落てから其んな面倒を喜んだものではない。以前に郷里から老母が來てゐて朝顏や浦島草を植ゑたのでさへ、側から見てゐて五月蠅いと思つたりした位である。思へば夫れも不思議である。

私の同僚にDと云ふ男がゐた。多趣味で、犬でも鷄でも花でも弄そんでゐた。其男に引張られて私は新宿の花戶に一日を無趣味に暮したとがある。其時Dは私にダリヤの一根を買ひ與へた。私は其を迷惑がつて、歸路Dの家に其れを置去にした程であつた。

其の翌年の春であつた。私は其頃赤坂臺町に住んでゐて京橋に通よつてゐたから能く溜池を通つた。或日其處を通ると、ふと興農園の店看板に眼を落した。そして去

年Dを買つたダリヤの根つこのことを思ひ浮べた。ふらくと店先に立寄ると其處には種々の色合した、人を引着けるやうな花形を刷つた種子袋が並んでゐた。私は不知の世界に入つた人のやうに己を忘れて只だ呆れてゐた。辛つとダリヤを思ひ浮べて、其の紅や黄や紫の箱から其の一袋を撰び出して持ち歸つた。

種子を卸す術べさへ碌に知らなかつた私の無學にさへ、双葉は咎め立をしないで、すく／＼と幹を延して行つた。五月下旬から六月に入つて咲き出した。今から思へば單瓣の小輪物で、ダリヤの中でも最下層に位するのではあつたが、私の喜びは其時測り知れざるものであつた。此まで見ない色を見せられた、此まで見ない形ちを見せられた、多分花と云ふものを面と向つて見たのは、私には此が始めてで有つたからかも知れないけれども、私はまだ知らぬ世界が此にも一つ有つたことを確かりと摑んだ。此が私の土に親んだ初めであつた。

それから薔薇を植ゑて見た。此も豊明と云ふ今から思へば平凡な安バラではあつたが、蕾が物になつて、段々と太つて行くのに私の氣は引立つて行つた。開いてからも、もつと、もつと太つて行く、何處まで太るのかさへ私には不安な喜びであつた。色は淡紅から移つた白であつた、其の白に拔けて行く色でさへ自然の約束が其處にあるかのやうに、見外してはならぬもの丶やうに私には思はれた。拔けるだけ拔けて、白に止つた時、太るだけ太つて其處に停止があると思はれた時、滿潮の靜けさと力とを思はせた。私は見入つてゐると靜としてゐられぬやうな壓迫を感じた。そして「今だ」「今だ」と云ふ耳語きさへ聞かれるやうであつた。けれども夫れ以上私には何樣進めることも出來なかつた。そして未だいら／＼する氣のみが其處にあつた。斯して私は種々の花物を植ゑて行つた。

其頃私は非常の激務に服してゐた。午前十時から出て行つて、歸りに赤電車に驅込むことが出來れば、其れは餘程仕合せな時であつた。多くは俥で居睡りしながら歸つたが、もう草臥れきつて床の中に匍ひ込むの

で、過度の倦怠は却つて神經を刺戟して容易に眠つかせなかつた。まるで大病人の心持であつた。だから明日はとても勤めに出られまい、此の床に醫師を向ふるのでは有るまいかと思ふのは毎晩襲はるゝ私の恐怖であつた。けれども朝の世界が小さい私の家にも見舞つて來て、家内が賑はしくなると、困憊し切つた私も目覺める。目覺めると庭の花物が眼前きにちらついて來る。私の身體は自然と床を離れるのであつた。掌大の庭にも種々なものがあつた。見廻つてゐると水を灌ぐものもあれば芽を摘むものもある、鉢を寛めてやらねばならぬものもあつた。私の手は次第に汚れて行く、さうして鍬取りをすることもあつた。斯うして私は私の現在の生活から離れて全く別な世界に入つて行つた。そして家人に時間が來たと促がされる時は、私の頭は汚泥を一掃されて潑溂となつた時であつた。私は斯うした時疲れ切つた私の勤めを鮮やかに眺めて、一刻も早く走せつかねば大なる缺陷でもあるやうに思はれ出した。そして手早く洋服を着て勤めに出かけるのが常であつた。私の勤めた新聞社の社長は、自ら「最好園」と云ふ號を選んで、自ら揮毫して、之を額に仕上げて贈つて呉れた。社長も私に此の道樂を許したのであつた。社長は此の私の別世界を稱して離隔的精神と云つた。

大正元年は明治の年號が取替る程大きな變動のあつた年であつた。そして小さな私の身の上にも、私に取つては一生忘るゝことの出來ない革命があつたのである。私は戲に爲てゐた園藝を職業的に進めねばならぬことになつた。斯うして大森の山奥に入つて、麥畑を刈り倒して花畑を拵へ上げた。温室も出來れば事務室も建つた。小さな家を建てて私自身さへ其花園の中に住むことになつた。

園藝者の與へられた命數として冬ばかり欝陶しいものはない。私はまだ經驗しないけれども、何時も此の季節に雪國の冬籠りを想像するのである。晩秋の日が澄切つて暮れた夜には、星の光りが尖りを帶びて來るものである。斯うした夜が二三度續くと必ず明けた朝

は眞白な霜が來て屋根から木梢まで一思ひに抹殺し去るものである。此の抹殺が來るゝ此までの天地が悉皆同轉して了ふ。さしも昨日まで著飾つたダリヤも菊も。紅と云はず黄といはず、紫も白も一なぐりに眞黑にされて了ふ。そして再び其の艶でやかさを見ることが出來ない。葉も花もべた／＼に煮へ爛れて捨てられた茶殼も同樣になる。種子は袋に收まる。根つこは穴庫に隱れる。フレームは蓆を被る。見る限り土と云ふ土は眞黑に眠つて了ふ。周圍に立つた雜木までが何時の間にか手ばしこく葉を振ひ落して草箒のやうになつて了ふ、丁度災難は私も同樣です、私共の咎ではありませんよと云つた風に。何と云ふ寂寥であらう。尻を持つて行く處がない。

溫室に入つて見ると、夏から住み馴れた古參ものも、今まで驅込んで來た新參ものゝ多勢に推し詰められて、手さへ足さへ自由が利かぬらしい。室中が推し合ひ犇し合ひで、只だもう生きんと藻掻くのみである。難破した多勢が一艘のボートに縋り付た時が思はれる。斯うして冬百日を死んだ氣でじつとして居らねばならぬ。何と云ふ虐たげであらう。私は花壇から溫室に、溫室から花壇に、或物を求めては輪廻するのであつた。

立春と云ふ聲に威かされて、——それはまだ智識のみの働きで——何時もする慣例から櫻草を堀つて見ると、何時も出會ふ意外さを以て其の太く膨らんだ芽を見出すのである。何時かしら人の眼にかゝらぬ内に、此處には春が來てゐた。私はわく／＼した思ひで櫻草を植込むのが何時もの例である。

手水鉢の氷が圓く解けて、梅の梢が花に成つて行く時、私は庭下駄のまゝ木戸から花園に出る。霜柱で堅まつてゐた畝々がぽつぽと煙つてゐる。蓋取つた燒甘藷の壺を思はする。其處にはチユリツプやナーシスサスの芽ざしを鷄の足のやうに認める。ヒヤシンスの畝では水に溺れて頭だけ出したやうな葉先の眞中に、鈴のやうに押し固まつた蕾さへ見出すことが出來る。そして日向の維地に咲いてゐたと小供達が蒲英公の一輪

二輪を摘んで來るのも此時である。

さうした時は煙るやうな小雨が能く降る。其の度びに土の色が黒く濃くなつて行く。此と正比例して畝の色が或は鳶色に或は萌黄に濃くなつて行く。穴庫を開けて幾段かになつてゐるダリヤの球根を見廻ると。長い眠りから眼覺めて、粟粒のやうな米粒のやうな芽を薄闇の中にチラ〳〵見せる。そして細毛根をお互の背に走らせ、更らに壁にまで張らせてゐる。もう起きたさか一杯で、うづ〳〵してゐるのである。彼岸が見舞つて來たのである。

斯うなると、もう種子蒔が忙がしくなる。蜜柑箱を三つ割にして淺い蒔箱の幾十かを作つて、之に篩ひ土を入れて種子を行儀よく揃へる。溫かい水を細かい如露で灑いでやる。土の中で嬉々の聲が聞へるやうである。新聞紙か何かを一枚被せて日向に溫めて置くので。暖かに布團著せて夜ざとく眠れと、頭ならべた子供達の上を見やる母親の情けがそれでなくてはならぬ。二三日四五日と經つと、小さい寢床の中から双葉を拔き出す。此が前と同じ關係から、麗らかな朝の光に起きたがつて騷ぎ立てる子供等の伸ばす腕で無くてはならぬ。

私共の氣が緊張して下男等の擧動が敏活になるのは其から間もない事である。蒔箱の中には生々した若苗が本床に直るのを待つてゐる。私共は一々其の住居〳〵を見計つて、或ものは花壇に或ものは鉢に植込んでやる。此が幾萬千の箇人〳〵を持つてゐる譯で、婿にやり嫁にやる氣持で假令一本でも疏そかにしてはならぬ。それから實生に氣を取られてゐた私共は忘れから蘇み返つて穴庫の中を覗かねばならぬ。其處には待兼ねたダリヤが芽を延してゐる。私共は其の親株から一々の小球を取離しては花壇に分遣する。それが又持場持場を固める爲めに送らるゝ戰線の兵士のやうにも思へる。私共は斯うした時只だもう春を忘れて春に使はれてゐるのである。芽生を抱へて土の舞臺を驅け廻る間に、ヒヤシンスが咲く、ナーシスサスが咲く、チユリツプが咲く。そして又櫻が咲いて來る。そして世

間では花見だ遊山だと云つて騷ぎ出すのだけれども、私共はじつと其を横目に見て、遠い世界の噂さのやうに聞てゐるのに何のこだわりも其處に見出さぬのを誇りとしなくてはならぬ。

私は今年又――今落つかせるやうに降る春雨の中に、黒くなつて行く土を眺めつゝ斯う考へて居る。

▽「眞の母」なる土に對する親しみ

加藤一夫

昨日の風にひきかへて今日は殊のほか穩かだ。溫かい春の陽が萬物を光被し、青い薄靄のエールが効外の森や畑をふつくらと包むで居る。私の今歩るいて居る路傍の垣根の灌木も、彼處此處に聳り立つて居る杜の大樹も、凡てはみな、默然として充ち足れる心の落着きと靜けさとを保つて居る。そして畑の麥も……。子供も嬉戯して居る。百姓のお神さん達も呑氣なおしやべりをつゞけて居る。殆んど軒別に飼はれて居る鷄は庭の塵埃溜をあさりながらコー〳〵と友を呼んで居る。

路傍で桶の輪を入れかへて居る爺さんの側で一人のさう年のとらない女が誠實のこもつた眞面目な口調でしかし包みきれない喜びをその面にあらしはながら語つて居る。

「……あの邊ならまだ土地も安いでね、――反三百圓か三百二十圓だからね、あたしのところでは三段ばかり買つたよ、姉のところでは六段買つたんだがね、うちでは三段買つたよ。千圓ちかくかゝるけれど、今年は麥の値がいゝんで、たいした足しにはならないよ」

「さうかね、それは强毅だ」

「弟のとこでは三千圓ばかの薪山を買つたんだよ、四町歩ばかりあるんだとさ」

「三千圓な」老人は驚いて眼をまるくした。

「あゝ、三千圓。」女は威丈け高に答へた。「弟はかたいもんだから人さんも信用して呉れてね、此頃は商買も繁昌して居るよ……」

何と云つても百姓は景氣がいゝんだなと私は思ひながらそこを行き過ぎた。

街に行くらしい百姓が、マントを着たり、中折帽を被つたりして、盛裝してやつて來るのに逢つた。藥師さんの前の旅館は、輝く日光を店にうけながら客をよぶ準備に忙しい。

も少しさきに行くとパシヤア／＼と樹の枝のゆれる音と共に丁丁と響く音もきこえた。見れば道の傍に立つて何か話して居る男がある。その男と垣根越しに今一人の男が居て、そこに倒されて居る大きな樫の樹の枝をちよぎつて居る。

「薪にするんかね」と途に立つて居る男が訊ねた。

「あゝ」と仕事をして居る男は答へて、またその枝をちぎり初めた。

廣い野が、今私達が立つて居る地點の四圍に展けて居る。富士の白峰が曇りなき蒼空のうちにすつくと立つて居た。チョー／＼と枝を切る音はした。しかしその音が一種音樂的な調子にきこえる程、自然は飽くまでも靜謐である。途の反對の側では、親子三人づれの百姓が、ゆつたりとした口調で、何か親しげに話しながら移植する麥に元肥を施して居る。

それを見て居ると、大きな自然の、無心な永遠の流轉を感じないでは居られない。そしてこれ等の百姓達もその永遠のうちに同化して一つとなつて流れて居るのがわかる。――たとひ彼等自身がそれを意識して居なくとも。

「思想が何だ、藝術が何だ」と私は思つた。「思想や哲學や宗教や藝術や、皆これ、眞の自然を離れた、それ故に此の永遠を失つた、哀れな孤兒が、その僞りの母の懷から眞の愛に似たものを探し出して居るに過ないんだ。ウォーズォースは、人間は大人になるに從つて繼母の懷になつけられ、かくて次第／＼に眞の母、自然、を忘れてしまふのだと嘆いた。その眞の母、永遠

を知つて居たのだらう。けれど彼だとて、これ等の百姓達ほど、その母と自分との區別がつかないまでに、それを意識しないまでに——密接にとけ合つて居たのではなからう。だから彼も此等の百姓だけの本當の生活を送ることが出來なかつただらう。」

自然は人間の故郷だ。土は人間の住家だ。自然に歸るとき人間は生命を得る。土に歸る時人間は眞の喜びを感ずる。そして今、春が來て、土を失ひ土を離れた我等にも幾分かそれに親しむ機會を與へて呉れる。

もう春だ。萬物が芽生へる時だ。花壇の花の種や、畑の野菜の種も、直きにその溫かい土におろされねばならぬ。

私は去年の今頃のことを思ひ出す。去年の今頃は、私は落合の方に住んで居た。そして、そこから餘り遠くない狐塚に住宅を新築したTが病身な赤ん坊を抱いて朝はやくから散歩に出かけた序に、また、勉强に倦むだ時に、ことによると一日に二度も三度もやつてきて、同じやうな空想に耽り、同じやうな空想を實行しては喜んで居たものだ。

「人間はみな勞働者でなければならぬ」と私は云つた。

「私達のやうな半勞働者の修道院(モナステリイ)をつくりませんか」とTは云つた。

Tの畑には空豆と豌豆とがよく出來た。私の畑には菜つ葉や蕪菁大根がさかへた。段々と春がふけるにつれて、馬鈴薯、玉蜀黍、大豆、生姜、春菊、小松菜、ふだんさう其他の種が蒔かれた。朝起きた時の一番の樂しみは畑に行つて見ることであつた。そしてその芽ばえや成長するを見ることであつた。

貧乏な私しは、肥桶を買ふにも不自由した。そこで、Tのところから舊い肥桶をかりて來て、直徑三寸もありさうな太い竹の棒で、二三町さきの畑まで肥を運ぶのであつた。

柔かな土にふれる足に快よい感觸、溫かい光にふれる膚の感じ、外光に照らされる神經の歡び、勞働の後の輕い疲勞。その時の食事の美味さ。

Tはよく、新築の家の庭に植ゑる植木を買ひに長崎村の××と云ふ植木屋に行つた。私も折々一緒に行つて、安いのを二三本買つて來た。そして何時引越すかも知れぬ借家の庭に植ゑた。

Tも私も、昨年初めて父となつての春を迎へたのだ。私のやうなものにも父としての新しい感情が芽生えて居た。やゝもすれば私は、自分の行く末を思つては心を暗くした。そして此の子供が何うなるのだらうと思つた。

友人から贈られた果樹に肥料を與へながら私はその實の坊やの口にはいる時の事を想像した。銀杏の實を蒔きながら（それは遂に生えなかつた）私は、直ぐ自分が死んで行くのに、子のためもしくは孫のため、若しくは何人ともわからぬ人のため、かうしたことをする事に寂しさと歡びとを併せ感じて居た。

ところが私は今、こゝに來て居る。その樂しい僅かばかりの土をすら捨てゝ、私はやがてもつと生活の樂な石神井村を撰んだのだ。だが、そこでもまた長くは居られなかつた。私はまたそこへも少しばかりの借りた土と、蒔いた大根や菜つぱと、そして何時かは大きな果樹園をつくつてやらうと云ふ計畫とを捨てゝ、此の中野に移らねばならなくなつた。

こゝでは畑は宅地なみでなければ貸して呉れないので、私はもう澤山の畑を借りるわけには行かなかつた。僅かばかりの隅地が今、今のさびた鍬の刃を待つて居る。

あゝ私は、思想や哲學や宗教や藝術で假りの母を得たくはないのだ。あの百姓達のやうに意識しないまでに永遠に融合したいのだ。だが、私は土を奪はれて居る。そして今の我々の社會の制度では、澤山の資本がなければその土地を取りかへす事が出來ないのだ。そして私はその資本を持たないのだ。

私は今、僅かばかりの地を庭さきに借りてある。私はそこに鷄を飼ひたいと思つて居る。今飼つて居る數羽の鷄はよく卵を産む。そしてそれは倦むことのない喜びと樂しみとを與へて呉れる。創造、生産、成長、

何れにしてもそれは愉快だ。

鷄を飼ふのにはさう澤山の土地を要しない。私は今の空想は養鷄に在る。　——二月十七日——

▽土に親めるもの丶春に遇へる悦び

「土に歸れ」の著者　鳴海うらはる

○

土が斯う何か語り出しさうなのが雪國の春だ。

雪國——と言つても、私は青森縣の南津輕だが——に生れ、雪國に育つた私等には、東京へ初めて出た時などは、雪の積りも消えも爲ない國に、何處に春だの冬だのがあるのだといふ氣が爲た位だ。尤、直きに雪が積らないでも、花が咲かないでも、それは立派に四季の心持位は解つて來るが。

「春に遇へる悦び」といふことは、興趣ある詩的な言葉に違ひない。雪國に棲んで居る人達には、一層それが明かに感ぜられる言葉の樣であるが、餘り眼前に突付けられた色彩は却て判斷がつき難い樣に、其感じが、餘り熾烈で濃厚な爲めに、興趣も詩的も通り越して、却て何事にも思はないかも知れない。

結局、悦びの深いものは、何事も知らないことだ、左も無ければ寧ろ苦みだ。

殆ど半年間雪の中に埋もれて、やうやううらゝかな春の天地の前に放り出され、其憧れに憧れた土の熱蒸を嗅ぐのだもの、いはゞ胎兒が月滿ちて母體から生み出された樣なものだ、悦びといふのは名前ばかりで、其實新年を祝する痛苦の熱哭、これこそ彼等の春に遇へる悦びだ。

○

私の幼き記憶に斯う云ふのがある。

吾等に、春は八甲田の山巓から明けて來る。それは表二階の窓の障子を開け放つと、峰の尖端の數から斯う云ふ名に呼ぶのだと云つて、度々其れを數へた八甲

田の前面の雪が斑に消え出す、其黒みが自然の奥に通ふ孔に見え、其れから春が吹き漂はされた。今劇作家で知られて居る秋田雨雀君も私と同じ向きの窓を以つた二階に居つた。それで秋田君の作物の中に能く此處の事が書かれるが、吾等には更に、其八甲田の嶺より流れ出す一線白い水が、吾等の町の兩側に通ずる二本の小流に注ぐ、それへ街路に固まり凝り着いた殘雪が、斧に碎かれ、雪掻に掻かれて叩き込まれる、夜となく晝となく此殘雪が二本の小流に押流される。叩き込む殘雪が多ければ、時々停滯して水が道路、庇の下に溢れ出して湛へる、其處からも春が湧き出る。學校の退けに家へ戻らず、田甫の草に燐寸で火を付け、其上を着物の儘轉げて歩いたり、綿の入つた筒ぽの半纏を脱ぎ出し、其れで以て、草原の火を拂つて消防を氣取つたりしも、其れからも春が綻び出した。

確、尋常科四年の卒業試驗の休みの頃だ、秋田君は其時分德三のトを取つてトッコと呼んで居た。其トッコと私と、今一人の同年の友と三人が野火に誘ひ連れた。

三人の幼年の影が、淺瀬石川の川瀬の音に話聲を消されたり、田圃の凹凸や川岸の土手に姿を沒したり、田の畔の枯草に火を放つたりして暫く彷徨うた。

徑四五間の沼、沼と言ふよりも水溜りだ。其れへ三人が行當つた。水の岸に三人が草を敷いて座つた。

遙かに津輕平野の南端を限る矢立峠の連峰が、正午過の春の太陽を斜面から受けて、雪の色が少し赤みを帶びて光つて居る。川瀬の音が遠く聞えたり近く聞えたりして居る、陽炎が田圃となく土手となく、一面に立上つて居る。妙に綿密な考へをする私は、「句を作らう」と言ひ出した。

「句つて何爲るんだ?」

トッコが言つた。もう一人の友も、「句なんて其んな面倒なもの嫌だ」とも言つた。五七五と詞を並べて思ふことを言ふのだと說明して、無理矢理に納得せしめ、到頭三人が各自懷の中に手を忍ばせて、其「句」とか言ふものを數へ上げることに成つた。

トッコの數へたのも、もう一人の友の數へたのも今は記臆に無い。

Ah, tohok miwatasu har no yamagesiky!

(あゝ遠く見渡す春の山景色！)

私の數へた是が、不審議に自分にも記臆されて居るし、此頃秋田君に逢つた時も、同氏から其れを話されたりもした。

○

Har no mid, nagare nagarete yuku swe ha kimy
ga mne ni mo simi ya si nu ram?

(春の水流れ流れて行く末は君が胸にもしみやしぬらむ)

これは其れから十年程も經つてから私の書いたもので、「土に歸れ」といふ書き物の中に收めてあるが、唯、耻かしい思ひの儘だ。

○

私は心を破つて、二十五の春に斗南半島に渡つた。蒸汽船が發達して今の樣に青森が開けて來ない迄は、北海道へ渡る旅行者の風待客で相應に繁盛した其名殘を止めて、一見茅屋ばかりに見える佐井港に半年程、それから尻屋燈臺の南に當る田代といふ戸數僅に十戸よりない小村に一年半程、兩方で二年其半島に暮した。

私の最も憂愁な時代であつた。太平洋の波浪に消込んで行く席の樣な大吹雪の一雪片にも心を驚かし、夕日に輝く白い燈臺の屹立にも魂を消したりした。

田代の私の宿つて居た處は、十戸の村の村端に立つた小學校の舍宅であつた。其處は窓を明け放つと、四方、太平洋の波瀾の樣に一面に起伏した丘陵を上から望むことの出來る位置に在つた。

私は三十人餘の小學校の生徒に數へた。春が來れば北海道へ漁夫に身を賣つて行く十數人の若者に夜學もしてやつた。私は「善き事を爲れば、如何に苦み悶いても光明と希望は失ふことが無い」と自信を高めて、其職務の遂行を期したが、何の甲斐も無かつた。私の教育は迚も善き事迄に至らなかつたのである。私は

も闇黒な生――心の――を此處に送つたのである。

「春」!

眞先に呼んだものは啄木鳥であつた。太平洋の波浪の樣に起伏した見晴しの丘陵が、雪の衣を脫いで肌を見せた。枯草と落葉の下には早くも萌黃の地熱の脹らみが脹らみ出した。

彼は北海道へ漁夫に身を賣つて行く若者の身の寧ろ自由さを羨んだ。

Usuakaki ureli wo yama no kmagma ni utali toyomosu akegutu no tory.

(薄赤き憂を山のくまぐまに歌ひとよもす明け方の鳥)

○

今私は、巢鴨の染井の墓地の側に在つて、ローマ字の國語表現法を考案して居る。一事業の創設は恰も春である。人生の大浪は寄せて此の木葉に等しい私等の小舟を覆さうとして居る。他から見て縱んば詰らない事であつても致し方が無い。悦びと言ふには足らないが、力を盡して漕ぐ。

將來に注目すべき新進政治家

▽將來の政友會と憲政會

（黨首と幹部）

前田蓮山

一、中橋德五郎氏

◎政友會第四代の總裁は誰だらうか。原總裁は今年六十三だらうと思ふが、あの體格健康の樣子では、今後十年が大成期で、其の間、國家の重きを荷ふて大に活動するだらうと想像せらるる。總裁自身は七十になれば政界を退くと言つて居るさうだけれども、山縣公が八十に達して尙ほ政治の中心勢力を占めて居る樣子を見ると、少くとも今後十五年は總裁の任に居ることが出來るであらう。

◎此の十五年間には、元田肇氏も野田卯太郎氏も山本達雄氏も高橋是淸男も岡崎邦輔氏も悉く老衰して了ふだらう。右の內總裁より年下ば元田氏一人で多分六十一だらうと思ふが、他は皆な總裁より二つ三つの年上である。斯く數へ來れば、現在の政友會最高幹部中、殘る所は中橋德五郎氏、床次竹二郎氏の兩氏で、中橋氏が五十五、床次氏が五十三である。

◎シテ見ると政友會第四代の總裁として、最も可能性を持つて居る者は中橋氏と床次氏とであると言はねはならぬ。世間には第四代總裁は何れ黨外から這入つて來るだらうと豫想して居る者もあるが、其れは此の兩氏は總理大臣たる器を備へて居ないから、他から總理大臣格の人物を迎へて總裁に推戴するの外に道は無か

らうと云ふのである。

◎然らば問はん。現在中橋氏床次氏年輩以下の政治家で、今後十年間に總理大臣級に進み得る者は誰れであるか。憲政會にあるとしても之れを推戴するわけには行かぬ。貴族院や官僚の方面に於て求むれば誰れであるか。仲小路廉氏か、岡田良平氏か、一木喜德郎氏か、勝田主計氏か、水野錬太郎氏か、有松英義氏か、伊集院彦吉氏か、內田康哉氏か、石井菊次郎氏か。

◎此等の諸氏と中橋、床次兩氏と幾何の差異があるだらうか。此等の諸氏にして總理大臣たるを得ば、兩氏も亦た總理大臣たるを得るのであらう。然らば外に誰れが居る。舊藩族の間に居るか、吾人は未だ特に傑出したる人物を知らない。

◎然らば政友會內に於て、兩氏を飛び超えて總裁とならうと云ふ望みある人物が居るか。是れ亦た見出す事が出來ない。果して然らば、第四代政友會總裁は中橋、床次兩氏の內、孰れかに定まるであらうと豫想するのも、強ち無稽の事ではなからうと思ふ。

◎世人多くは、否な凡てと云つても可い程に、中橋氏を重く見て居ない。吾輩が氏を將來政友會總裁の候補者の一人として數ふる事を聞かば、呵々と笑殺して問題にせぬであらう。併し吾輩の觀察は彼等と異つて居る。今後十年間に於ける中橋氏の進步は、刮目して見るべきものがあるであらうと思ふのである。

◎氏は明治十九年大學選科を卒業して、判事となり、衆議院書記官となり、農商務省參事官となり、遞信省參事官となり、約十年間トン／＼拍子に進んで鐵道局長となり、卅一年七月官を罷めて大阪商船會社の社長になつた。

◎其れから約二十年間、悲況に陷つて居た商船會社を整理し擴張し、獅子奮迅の勢を以て遂に今日の盛況に仕上げ、自己の財產も今や千萬圓近くになつて居るさうである。併し吾輩は其の財產の量には驚かない、唯だ其の手腕と努力とに敬服するのである。

◎氏は目的に向つて猛進する男である。氏は目的に對して明瞭なる自覺を有し、全力を傾倒して之れを仕遂げんとするのである。其の勇氣と精力とは實に驚くべき程である。氏は常に目的に對する明瞭なる自覺を有するが故に、其の爲す所は能動的、自發的で境遇に攪亂せらるゝ事なく、氏の經歷中には僥倖と偶然と流行とは、全然とは言はざるも、殆んど之れを見出すことは出來ないのである。

◎故に氏が今後の生涯を政治に拋つべく決心した以上は、必ずや全力を傾倒して勇往邁進するに違ひない。吾輩は未だ氏の政治的經綸を聞いた事がない。然れども唯だ努力止まざる勇氣と觀察判斷の聰明とを知つて居る。十年の後、如何に大成するか、決して注意を逸すべからざる人物であると信ずる。

二、床次竹二郎氏

◎床次氏の識見手腕も亦た決して人後に落つるものではない。然れども目的に對する明瞭なる自覺を有して、勇往邁進する點に至りては、中橋氏に若かざる遺憾がありはせぬか。氏は少なからず境遇の利益を蒙つて居る。權門の寵兒であつた事は其の主なるもので、若し氏に此の境遇がなかつたならば、一生を良二千石として終るか、或は貴族院に若朽するかも計られなかつたのであらう。

◎嚴格に忌憚なく評すれば、氏は些か御調子に乘る方である。自ら貴族院議員たることを辭退して之れを水野氏に讓り、衆議院議員として打つて出たる如きも、多少は御調子に乘つた傾きがあるのである。

◎併しながら、氏は唯だ一つ、其れは人の最も難しとする、而して一國の宰相として最も必要なる、德望を有して居る。氏の凡ての短所は此の一つの長所に依りて塗り隱すことが出來るのである。

◎スマイルスは曰つた『天才は常に人の感賞を受くるものであるが、最も人の尊敬を得るものは品性である』又た曰く『品性は財産である。最も貴重なる所有物である。一般世人の好意と尊敬とで成つて居る財産である』と。又た曰く『才能や天才は決して世間に稀有なものではない。併し才能や天才は賴むに足るであらうか。正直、誠實の上に立脚しないならば、賴みとすることは出來ぬ』と。

◎岡崎邦輔氏は『初めて會つて見て、評判よりも偉いと云ふ印象を與へる人間は大人物ではない。大人物は初めて會つた時に、評判よりも愚物だと云ふ印象を與へるものだ』と云つた。此の意味は、大人物と仰がるゝ人は智慧よりも德望であると云ふのであらうが、如何にも妙味のある言葉だと思ふ。

◎多數政治の政治家に於て、殊に德望の必要を感ずる。床次氏は第四代政友會總裁として決して不足は無い人物である。而して氏が官界から出て來たといふ點が、中橋氏が實業家から入つて來たと云ふよりも、日本人の目には善く映るらしい。

◎又た何時まで續くか知らんが、兎も角薩閥の背景を負ふて居ると云ふ事と、長谷場氏の後を襲ふて九州團體の後援を以て居ると云ふ事が床次氏の大いなる强味であるが、中橋氏には山本氏や高橋男の如き財界に於ける勢力もなく、長谷場氏の如き先輩の地盤を受繼いだと云ふ因緣もなく、唯だ是れから段々政界に勢力を作らうとするのだから、唯今の所、何うしても床次氏に勝目が多い。或は中橋氏自身も元田氏や山本氏と競爭して終る位の望みしか持つて居ないかも知れぬ。

◎又た中橋氏は金を持つて居るのが床次氏に比して大なる强味であるが、其れも或程度の地位を作るまでの事で、其の程度を通過すれば金は大した功用をなさぬ。吾輩は中橋氏がもう五年ばかり早く政界に這入つて來なかつた事を惜しむのである。

三、濱口雄幸氏

◎第二代憲政會總裁は誰れだらうか。加藤總裁は今年五十九である。何か持病があつて、其の健康は原總裁ほどには無いと云ふ事だけれども、原總裁の比例にすると、今後二十年は總裁の地位を保つわけになる。

◎此の二十年の間には、武富氏も尾崎氏も凋落することは言ふまでもない。若槻禮次郎氏は五十五で、加藤總裁と若槻氏との差は僅かに四つであるから、是れ亦單に年齡の上から見ても、既に加藤總裁の後嗣になられぬ事は判つて居る。

◎吾輩は第二代憲政會總裁を濱口雄幸氏に擬したい。原總裁の六十三に對し床次氏が五十三、加藤總裁の五十九に對し濱口氏が四十九、共に十歲違ひであるのも奇合で、天が床次、濱口兩氏を政友、憲政兩黨の將來の首領として地に下したのではないかと思はれる。

◎床次氏と濱口氏とは、其の品性の高尙なる點に於て似て居る。其の淸貧に甘んずる點に於て似て居る。其の悠然と落付きたる點に於て似て居る。其の荒削り然たる點に於て似て居る。其のヌーボー式なる點に於て似て居る。而して人格の內容の多少單調に失する缺點に於て亦た似て居る。

◎然れども床次氏は情性的ヌーボー式で、濱口氏は智性的ヌーボー式である。同じく悠然たる間に、床次氏は情性的緊張を保ち、濱口氏は智性的緊張を保つて居る。故に動もすれば床次氏は御調子に乘り、濱口氏

は小理窟を並べるのである。

◎床次氏は綜合的であるに反し、濱口氏は分解的である。故に床次氏は大處より達觀せんとする傾向を有して居るが、濱口氏は部分的に囚はるゝ嫌ひがある。議場の討論に於て見るも、床次氏のは大鉈を揮つて薪を破るが如く、濱口氏のはメスを執て人體を解剖するに似て居るのではなからうか。

◎床次氏は明治二十三年の帝大政治科卒業で、二十八名中六番の成績、濱口氏は二十八年同じく政治科を卒業し、三十名中三番の成績であつた。共に頭腦は良い方であつたに相違はないが、水野錬太郎氏や有松英義氏などのやうな頭の働きはない。

◎床次氏も濱口氏も、初對面者に「評判程にも無い」と云ふ印象を與へるに違ひない。而かも兩氏には言ふに言はれぬ魅力がある。其れは即ち人格の力である。人格者に現代に於てよりも後代に於て、近き周圍に於てよりは却つて遠き傍觀者に依りて、渇仰欽慕せらるゝ事があるものである。

◎濱口氏も亦た床次氏の如く、境遇の授けを得て居る事が少なくない。若し氏にして土佐人でなかつたならば、大藏省の能吏として、貴族院議員として終はるべき方向を辿つたかも知れぬ。氏が土佐人といふ境遇は氏を黨人として、殊に憲政會內に於て重望を得せしめた原因の一つでないとは言はれぬ。

◎政友會に於ける床次氏、憲政會に於ける濱口氏と並び稱せらるゝに至りたるは、前者は長谷場純孝氏の後嗣として九州政友會と云ふ歷史ある政黨地盤から出で、後者は三菱と緣故ある土佐、多数の先輩を有する土佐憲政會の地盤から出たと云ふ事が世人に深い感動を與へたのも、其の原因の一つである。

◎右の如き地盤から出た兩氏に對して、世人は大に期待し信用した。何故なれば兩氏が政黨に這入つたのは付け燒刃ではない。官僚が一時の氣まぐれに政黨に這入つたのでは無いと信じたからである。大正政變以來、官僚の政黨に入つた者は數多いけれども、見渡した所、本氣らしいのは此の兩人より外に無いではないか。又た本氣にしろ何うにしろ、政黨を退かうとも退かれぬ境遇に居る者は此の兩氏だけではないか。此點に於て兩氏は犬塚勝太郎氏や下岡忠治氏よりも、パット評判を取つたのである。若し犬塚氏が薩州人たり、下岡氏が土佐人であつたならば、恐らく床次、濱口兩氏よりも、或點に於ては世人の歡迎を受けたかも知れぬ。

三、政友會幹部

◎十年後、假りに床次竹二郎氏が政友會總裁になるとして、扨て最高幹部を組織する者は誰々であらうか。一寸見渡した所、小川平吉、鶴澤總明、田中隆三、山本悌二郎、小久保喜七、江藤哲藏、三土忠造、松田源治、横田千之助の諸氏は先づ有望な所であらう。

◎小川平吉氏は若槻禮次郎氏等と共に、二十五年の帝大出身。政友會唯一の支那通で精力、膽力、術數に長じ、年齡五十。鶴澤總明氏は法學博士と云ふのでも其の法學上の學殖は推知せらるゝ。演説も上手で而かも力がある。唯だ辯護士業に忠實な代りに政治には餘り熱心でないので黨內には一寸受けの好い方ではないけれども、黨の看板になる人である。

◎田中隆三氏は廿二年の帝大出身で床次氏よりも一年の先輩である。地方事務官から鑛山局長まで進んで、實業家になつてからモウ十年以上になるであらう。官吏時代は頗る腕利きの評判があつた。長州人ならばもう大臣になつて居るかも知れぬが、不幸にして秋田に生れた。山本悌二郎氏は獨逸仕込みの經濟學者で第二高等學校の教授にもなつた人。久し

く實業に從事して今は巨富を貯へて居る。年齡四十九。江藤哲藏氏は早稻田出身であるが、外國も巡遊して見聞を博め、智略に長じて小才ならず、黨務に熱心な人である。年齡四十七。

◎三土忠造氏は高等師範の卒業者で、英獨に三年の留學を積み、歸朝して高等師範教授、韓國學政參與官等に歷任した。非常に頭の良い人で、政友會有數の豫算通である。年齡四十八。松田源治氏も亦優秀なる頭腦を有し、殊に辯力では世既に定評がある。年齡四十四。横田千之助氏は故星亨の子飼ひの弟子で、膽略俠氣に富み、精悍無比と云ふ人物である。年齡四十九。

◎小久保喜七氏は自由黨以來の有志家で、正直律義な人。黨の古老として一種の勢力を保つであらう。年齡五十四。此の外川原茂輔氏は既に六十歲に達して居るから望みはない。戸水寛人氏は有名な博士であるけれども、是れ亦た年を取り過ぎて居る。小山温博士も代議士は一時の腰掛けかも知れぬ。水野錬太郎博士は再び政友會に戻つて床次氏の相談相手になるであらう。若し夫れ林毅陸氏以下の有望者を擧げんか、屈指に暇はない。

四、憲政會幹部

◎濱口雄幸氏が憲政會總裁となつた時の最高幹部は誰々であらうか、先づ第一に指を屈すべきは下岡忠治氏である。此の人は濱口と同期の帝大卒業で年齡も同年である。大浦式の辛辣な手腕を有し、或點に於ては濱口氏を稜駕する人物であるが、何うも人望が集まらぬ缺點を有して居るのは惜しむべしだ。

◎次に富田幸次郎氏。此の人は黨内に於て粗製の大山公と呼ばれて居るさうだが、如何にも打ち見た處、體格が大きくてボーッとして居る。所が實はなか／＼狡い智慧の廻はる男である。政友會の野田卯太郎氏位にはなれるかも知れぬ。唯だ少しく人望上に就て缺點がありはしまいか。年齡四十七。

◎早速整爾氏は財政通として久しく名を著はして居る。辯力も頗る達者で、品格も卑しくない。政友會の山本悌二郎氏と並び進む人であらうが多少山本氏よりは田舍臭い所がある。年齡も五十一。

◎次に小寺謙吉氏は何と言つても將來の幹部である。現在の片岡直温氏位の地位には進めるだらう。年齡四十二。又た齋藤隆夫氏がある。早稻田を卒業して米國に遊び、學問も相應に出來て、演說も上手である。年齡四十九。關和知氏は前途甚だ有望である。人間が確かりして居て思想も文明的である。吾輩ならば先づ此の人を第一に總務にしたいと思ふ程だ。年齡四十九。

◎現在の憲政會の人物は老人にあらずんば若輩と云ふ有樣で、中老に人物が少ない。藤澤幾之輔氏、安達謙三氏、町田忠治氏の如き既に可なりの年輩の人達で、十年過ぎればモウ駄目である。此の分で行くと、十年後の政友會と憲政會とは、幹部格の人物に非常な差を生ずるであらうと思はれる。

▽現時の新進政治家

鵜崎鷺城

近年は何の方面にも凡物庸人がウヨ／＼して、新進俊抜な人間が出さうに無い。財界は今猶何事といへば澁澤、早川、淺川、中野等の老物が頼役然として出娑婆る。最も能率の高くなければならぬ筈の學界からして

舊物が大部分を占め、一世に傑出した學者が出ない。新しい學問を仕入れずに、手垢で眞黒に光つたノートを唯一の虎の卷にしてゐる古ぼけた博士達が二十年一日の如く同じ講義を繰返してゐる。文藝界だつて謂はば有象無象が獨りで好がつて低い鼻を高くし合つてゐる。力士に傑出したのが無ければ、俳優も歌、羽左、菊、吉、左といふ顔觸れで相も變らずである。花柳界も美人の品切れで一山百文のスベタ許しである。第一東京市長が奧田の死後未だに停電してゐるのを見ても、人物の少いのに驚くでは無いか。

　他の社會と違つて政界は比較的新陳代謝の行はれ、少壯の士が進んで腕を揮ふ餘地がある。近年は大分若手が働くやうになつたが、概して定つた人間がいつも〳〵定つた事をしてゐる形である。然らば其等の顔觸れに何程優れた人物がゐるかといふに、多くは虚名と閲歴と年配で惰力を維持してゐる連中で、頭の禿げ上つたもの、老眼鏡を掛けたもの、耳の遠いもの、口をモグ〳〵させるもの、謂はゞ血の通はぬ脈の上つた丸で生きた死骸同然な代物が老閥を形造つてゐる。尤も一概に老人を排斥する譯にも行くまいが、惰勢的人物が徒に場塞ぎをして新陳代謝を妨げ、足手纏ひになるのは政界の進歩の爲めに好ましい現象でない。日本の政界がいつ迄も彼等の存在を必要とし、又た彼等の發言權を容認せねばならぬ程に後れてゐないとすれば、彼等は自分と時代の距離を考へて、好い加減年貢を納めるなり遠慮をするなりしたが好い。又た新進の士が、大に奮發して取つて代るのが必要である。新進家が中心の勢力となるやうになれば、自然政界の空氣を新しくして、議會も政黨も活氣を帶びるやうになる。今日の如く一種老廢の氣が政界に滿ちてゐる限り、或る程度まで舊來の老物崇拜、老閥萬能の弊を打破し、而して政界の偶像破壞(アイコノクラズム)は少壯新進の士に俟たなければならぬ。

　そこで今の政界には時代の活氣活勢に觸れて、舊來の虚名家、閲歴家惰勢家を凹ます丈けの元氣力量のある新進の政治家がゐるかといふ問題になると、實は心細く感ぜずにはゐられぬ。嚴格に言へば學問、人物、識見、抱負、手腕を具へた新進政治家は殆んど皆無と言つて好いが、唯だ舊退政治家に對照して新進有爲を意味するものは幾分かある事はある。其の中から稍々注目と嘱望に値ひしさうなものを若干物色して見ようと思ふ。

　此の議會に於て床次竹二郎は税制案の時にも、豫算案の時にも代表演説をして、一廉の働役者になつてゐる。新進としては少し薹が立つてゐると言ふかも知れぬが、曾て知事、局長、次官を經て鐵道院總裁となり、吏として可なり經驗を積んでゐるにせよ、議院政治家としては未だ日が淺いし、特に春秋にも富んでゐるから、新進の中に數へて好い。彼は役人時代から政黨でなければならぬと思ひ、特に西園寺の見識に感服したのが政友會に關係する元となつたのであるが、入黨後も薩派系統に屬し、今では故長谷場純孝に代つて薩派の牛耳を執つてゐる。大學時代から茫洋とした方で役人時代にも他の官僚と違つた風格があり、第一容貌清秀風采堂々として押し出しが好いし、何處かに人間の大きい處が見える。然らば何ういふ點が傑いかと言ふと、實體はハッキリせぬが、不思議に磁石性を有つてゐる。ラジュウムは如何なる點に效力があるか化學的に分析して說明されぬけれども、一種の力があることになつてゐる。床次も丁度ラジュウムのやうな人で、人物分析の出來ぬ處に一種のパーソナリチーがあるのであらう。此の人は學問、意見に富むと思はれず、又た黨略や議場の掛引に長ずる智者でなく、精力を以て敵と渡り合ふ闘將でもないが、必ず幾人かを纏めて行くだけの徳がある。政治上の進口に於最善主義が行はれなければ次善、次善が不可なれば三善で行かうとし、

必ずしも自治を固執しようとする程に感覺力に乏しくない。一旦言出したことは無理に通さぬ迄も、己れを明かにする丈けの事をして曖昧のまゝ泣寢入らうとしない丈けの强味も持つてゐるやうである。初め最初貴族院議員を辭出して故長谷場の補缺選擧に立ち、進んで野武士の新生涯に入つた丈けに、政黨化して行ける人である。蓋し彼は地方官時代から多少禪を學んだことが人物の大處を修養にするに與つて力あるが、薩人通有のヌーボー式が輪廓を大きく見せる點もないではない。尤も近頃黨内で、彼の奥行と幅の程度を云々するものがあるらしいが、兎に角首領の器だといふことに相場が定まり、入黨後著々地位を占め、各方面を通じて重んぜられてゐるから、近き將來の大臣は動かぬ所だらう。

政友會には江藤哲藏、横田千之助、山本悌二郎、三土忠造等が近頃メキ〱頭を擡げて來たやうである。いづれも明治ッ兒のチャキ〱で、此の中でも江藤が一番若い。彼はもと松田系統であるが原にも好く、誰にも敵がない丈けに、餘り如才なさ過ぎる嫌ひがあるが、人間はオットリして熊本人通有の妙な氣質を脱してゐる。從來表面の運動に頭を出したが演壇に立つたことは皆無であるが、元來物分りのする方で、事の大體に通じ、政治の寸法を解し、幹事長時代にも黨を如何なる方嚮に進めて行けば好いかといふ事について、理窟よりも實際的に考へてゐた。從來政友會では野田卯太郎とか、伊藤大八とか、奥繁三郎とか、顏の立つた人間を幹事長に押立てたが、原は初めて江藤を幹事長にして新銳拔擢の例を開いた。横田の幹事長も矢張それである。横田は元と星の玄關に居た男で、舊自由黨の生抜きである。是れまで黨内で餘り用ゐられず、陣笠の中位に燻つてゐたが、大隈内閣の初期に議會で却々味な攻擊振りを見せて以來、俄に賣れッ子となり、政友會の爲めに缺くべからざる少壯闘士の一人として名を喝せらるゝに至つた。山本は舊獨逸協會學校を出てから獨逸に行つて經濟學を修め、暫く佃島の商業學校で教へてゐたが、校長と喧嘩して出てから實界と政界に乘出して突込み、今では實業家株取締役として成金の一人に數へられ、政黨の關係から後藤系と言はれて居る。政友會では多少新智識があるのと、金があるのとで粗末に扱はれず、昨年の臨時議會には豫算委員長に推され、本年は小川平吉、鳩山の方を譲らねばならぬので、院内總務補佐役に廻つたのである。三土も智識派の一人で、元と教育に關係した處から、議會で教育行政問題を論じ、政友會を代表して教育調査會にも入つてゐる。本年は豫算委員長の運動をしたさうだが、其の代りに總務補佐役になつて幹部に列し、自ら新進政治家を以て任じてゐる。

此の外に松田源治、林毅陸、兒玉亮太郎、小阪順造、堀切善兵衛等が將來ありと言はれてゐる。松田は初めて議員になつたとき、時の首相桂の面前で『愛妾あり其の名をお鯉といふ』と思切つたことを言ひ、而もそれが桂内閣と政友會の妥協時代だから一層痛快がられた。併し近頃は政治家氣取りになつたから、ソンナ木通なことは言はない。彼の得意は憲法論で、憲法上の造詣は疑はしいが、人間が木强で厭味がなく、精力が旺盛で辯舌に長じてゐるから、横田と共に錚々たる闘士である。林と兒玉は一は言論に長じ、一は原の寵兒で品の好い年少紳士である。小阪は信濃毎日の社長にして金もあり素養もあり、世擦れた處がなく眞面目で正直である。堀切は少し衒ふ風があつて、學問はあつても演説は學校の講義めいてゐるが、いつも幹部から有望のやうな少壯代議士と、目を掛けられる一人である。兒玉、小阪、堀切等は年と共に地歩を占めて、伸びる丈けの素質がある。

昔は人物揃ひと言へば進歩黨に限られた形であつたが、今の國民黨にはそれ程のエラ者がゐさうにない。此の點になれば政友會も憲政會も

十歩百歩である。特に憲政會に至つては生きた屍が累々として横つてゐる。顧問とか相談役とかいふ中には月經の上つた政治家が多い。國民黨では大内暢三、植原悅二郎、堀川美哉、内河次郎、近藤達兒等が少壯のチヤキ〳〵で、將來是等が中堅になつて働かうとしてゐる。其の中で注目すべきは大内で、年こそ達はぬが議員として三度舞臺を踏み、從つて政界の情僞にも通じてゐる。早稻田を出て故近衞公に愛せられ、嘗て公と共に洋行したことがある。今の東亞同文會の創立に關係し、以前幹事をしてゐたと思ふ。彼は變からの如くして變からならず、ハイカラの如くしてハイカラならず、氣骨もあれば抱負もあり、誰とも相應にあつて、内外の政治に對して大體の見通しが附いてゐる。特に支那問題については確て一隻眼を有し、支那通を商賣のやうにしてゐる自稱支那通よりも頭に根柢がある。此の男は感情よりも理性が發達し、輕快洒脫にして何人とも調和して行ける。近年黨界の變化に伴ふて、自分の地盤を守るには人知れぬ苦勞をしたが、其の苦勞と共に人間は益々垢が拔けて練れてゐる。若し彼がモツト執着力があつて政治に專らになれば、將來必ず成功すべき將來を有つてゐる。

　植原は昨年初めて議員になつたとき、新人物の一人として期待を嘱せられ、次いで昨年遺米議員の一人に選ばれたので、益々一部に嘱された。元と彼が外國へ行つて一人前になつて歸るまでは隨分苦學をした人で、年少時代から負けぬ氣な處があつたから、今でも人に屈しない偏執な風が拔けない。明大の教師をしてゐるからとて必ずしも學者と言へぬが、憲法については一家の見解を有し、外國の事情に通じ、政治に趣味を有つてゐる。將來政治家として世間の期待に副ふか何うかは未知數であるが、少くも若手の議員中には目星を附けて好い人物である。堀川は財政經濟の新智識で、新聞記者の經驗があるから、實際的の頭を有つてゐる。唯だ寡女無慾であるから政界の事情には暗ひし、幾多遠慮の氣味があるも、今に頭を上げて來るだらうと思ふ。白河は元來文士として聞え、政治に不向な人の如く思はれるが、而も政治上の理解と人間の恬淡な點とは、樋口龍峽などよりも數等上である。近藤は玲瓏無垢の人格を有つた人で、優しひ顏をしながら鋼鐵のやうな意志があつて、辯護士臭い點は微塵もない。經驗と年とにつれて向上する見込は充分にある。

　憲政會には政友會の床次に對照して濱口雄幸がゐる。彼も官僚出身の新進政治家と稱され、今日は院外であるが、早晩再び議會に歸るべき人として、憲政會では顧問の位置を與へられ、一般に未來ありと言はれてゐる。此の人も多少ヌーボーの方で、一見鈍味を帶びてゐるが、頭が好いから意見も立ち辯力も相當にある。特に財政經濟の方では藏相の勝田よりも一日の長ありと言はれ、人物も少し大きいやうである。後藤男の如きは以前から濱口に惚れ込み、今でも非常に褒めてゐる。今度憲政會總務になつた下岡忠治も、元と官僚としては知事、次官、樞密院書記官長となつた人であるけれども、政治家としては新進の一人である。特に政黨關係は最も新らしい。役人時代は官僚系の麒麟兒と言はれ、大浦の懷刀、山縣の氣に入りであつたが、議院政治家として大成功するかせぬかは疑問である。が、小男ながら小手の利く方で、智惠は相應にあるから案外働くかも知れぬ。併し床次は濱口に比べると人間の型がズツト小さい。迚も人物で押して行く方では無い。最近彼が他の舊顏を拔いて院内總務又は黨の總務に擧げられたのは、新進拔擢といふ以外に、二つの意味があるらしい。一は合同前の舊無所屬代表が表面の理由である。今一つは加藤總裁が常に山縣の機嫌を損ねぬことに懸命になつてゐる事實に反襯して、其の間に日く言ひ難い意味がありはせぬか。

　一時有望の如く言はれて其の實餘り有望らしくないのに横山勝太郎で

ある。彼が憲政會に入つたのは止むを得ぬとして、態度の自重を缺き、唯だ機會さへあれば、無責任な、辯を弄し、演説の仕放しさへすれば好いといふ癖がある。是れは政治家として成功する所以でない。それよりも關和知の方が少壯家として何程か將來がある。關は元と米國の太平洋沿岸で皿洗ひ靴磨きの苦しみを嘗め、日本に歸つてから二三の新聞にゴロ／＼してゐたが、二度とも選擧に失敗して二度とも次點補缺でお鉢を掘り當てた。それが大隈内閣のときは、副參政官といふので最高點で當選したのだから、誰しも政權の味は忘れられぬ譯である。彼は國民黨時代から前途のある男として嘱目せられ、議會に於ても可なり評判が好かつた。國民黨に後砂を蹴つて出たのは當時の事情餘儀ない結果とするも、彼が舊政友の惡聲を放つたのは、皿洗ひ根性のやうで人が好く言はなかつた。併し兎に角憲政會の年少政客のチヤキ／＼で、島田擬ひの演説ながら、有數の雄辯家として注目されてゐる。國民黨にゐる頃は、帶小質にも困つてゐたが、憲政會に行つてからは多少餘裕が出來たと見え、貧乏臭味を脫したらしい。是れ丈けでも一の進歩である。小成に安んぜずして一層政治家の修業を心掛くれば、モット發達するに相違ない。此の外に小山東助と上島長久とは見込のある人だが、兩人とも健康體でないから氣の毒である。

一寸言ひ殘したが、小林源藏は初め新人物の如く言はれて多少頭を擧げさうに思はれたけれども、實際は政治家として伸びさうに無い。此の間の委員會の鐵道質問などは隨分非常識でレールに乘つて居ない。是れで鐵道院時代に一廉の俊材の如く騷がれたのが不思議である。さすれば官僚のヤリテと稱せらるゝものは、大概高の知れてゐることが分る。古谷久綱も唯だ伊藤の秘書官、勅任式部官であつたといふ丈けで、政治家としては大して物になりさうに思へぬ。政尾藤吉にした處で暹羅の推皇族で自殺を脅すものゝ、遣米議員團の團長が關の山で、政治の方では注目線外にゐる。新政會の秋田清は何様か望を掛けて好いと思ふ。

最後に博士の肩書ある學者議員（尤も博士は必ずしも學者と限らぬが）に少し言ひ及んで置く。我輩の見る所では學者と名の附くものが政治家になるのは了見違ひで、結局は大概失敗に終つてゐる。戸水博士は議會に入てヘミツユルンドになり、懲罰委員長か請願委員長にして貰ふのが關の山である。とは悲哀を感ずる。大場茂馬は誤つて議員になつて頭腦を疑はれた。小林丑三郎も牛の小使のやうなダラ／＼長い講義演説で欠伸を招いた以外に、何の認めらるゝ所なくして終つた。第一博士とか學者とかいふものは政治の寸法が分らぬ。寸法の分らぬ癖に自分に都合の好い理窟を附けて進退するから始末に了へぬ。今井嘉幸でも小川郷太郎でも議員になつたときは、政界の新人として迎へられたが、其の後の模様では新進政治家として期待を囑し兼ねる。將來學者にして政治家を志願するものが無いとも限らぬと思ふから、我輩は其等の人が何處までも學者として立つの賢明なる所以を豫め忠告して置く。

▽現在の若手の働き者

中野正剛

日本の政界の沈滯せる現狀を嘆息するものは、よく政界に新人物が無いと云ふが、其實現在の政治組織では新人物の活動を許さないのである。新人物の蹶起を促すやうな氣運が動かないから新人物が現はれないのである。一體大政黨を統帥して、天下國民の歸嚮する處を指示しなければならぬ政友會の總裁が、是々非々など云ふ譯の分らぬ事を公言し、之に

對抗する憲政會が內閣には反對しながら、閥族政治の元兇たる山縣公を怖るゝ事甚だしく、私かに後門から欵を通じ、政友會と閥族との間が惡くなつたら、今度は山縣公のお摩掛りで天下を取りたいなどいふやうな奇な考を起して居るやうな狀態では、我國の政治家の能力は、一種の妙な術策をやる事に出つてのみ　擯せらるゝと云ふやうな有樣で、迚も世界の大機運に添ふやうな新らしき人物の活動すべき餘地はないのである。强いて政界の働き手を數へると、妙な手品使ひ許りを擧げなければならぬ。少し理想ある人物を擧げると、其人達は實際の政界に働きの無い者許りになつて終ふ。愿んな風で眞に働きあり、經綸あり、理想ある新進政治家と云ふ者を、烏渡擧げるに困しむ次第である。其處で理想的にまた現實的に、凡ゆる意味に於ける新進政治家數人を擧げて、其人達が何故に注意するに値するかを話して見よう。

先づ大政黨たる政友會から初める。曾て床次竹二郎氏は大變な人氣で、他日政友會を背負つて立つべき人であるかのやうに評判されて居つた。其後寺內內閣の成立前後に其主張が有耶無耶であつたと云ふので、大分沽券を下げた。然し自分は今日でも矢張床次氏は、政友會中で嘱目すべき人物であると思ふ。議會に於いての演說を見ると、格別名論を吐くと云ふ程ではないが、一通り常識があつて、輕薄にも氣障にも流れず無難にやつて退け、人から馬鹿にされぬ位は何と云つても見上げたものである。演說の內容其物から云つたなら、政友會幹部の二流三流中にあれ位の事を云ふ人は他にあるであらうが、何うも床次氏程人から重んぜられない。矢張人格が物を言ふのと思はれる。段々政治家の品格が下つて來た際、政友會內に於て床次氏位の氣品を有つた政治家が他に無いのは、床次氏の頭腦其物に對して疑を抱く者もある今日、依然として同氏が政友會內に於ける必要人物と目せらるゝ所以である。薩州の大西鄕は明治維新獨步の英雄で、知るも知らぬも其人格を仰ぐ點に於て、他に例類が無い。床次氏が西鄕に似て居ると云つたら、西鄕の方で地下で泣くかも知れぬが、今日の政客中西鄕風の千分の一でも有つて居る人物を擧げやうとすると、先づ床次氏を想ひ起さねばならない。田舍の青年でも、知るも知らぬも床次と云ふと大變氣受けが良いさうである。此德望は人の有つて生れたもので、容易に他人の追隨を許さない。例へば今日地方の青年團體から政友會の本部に、然るべき人物の講演を乞ふと云ふやうな場合に、眞逆か大岡育造氏を出す譯にも行くまいし、元田肇氏でも感服出來まい。と云つて吉植庄一郎といふ柄でもあるまい。さうなると矢張青年の血と共鳴する人物は床次氏の外に無い。下品の人達の揃つた政友會の內にあつては、床次君は會の寶物と云はねばならぬ。政界の親分と成るには金の融通を着けてやる事が要件の一つになつて居るやうだが、床次君には此の腕前は無いらしい。此腕前が全く無くして今の地位を維持し、相應に用ひられる處を見れば、あの人矢張尋常一樣の凡物ではない。政治家がブローカーと成つて終つた今日、床次氏の如き徑路を遊んで來た人物は、他から大いに尊重するがよい。あの風の人間を迂遠であるとか手腕が無いとか云つてコキ下げると、其代りに極く粗末な、所謂腕利きなるものが跋扈するやうになるのである。

床次氏が少しく流行らなくなると共に、烏渡ドンヤと云はれたのは中橋德五郎氏である。中橋氏は資力もあり、烏渡威勢も好いので大變聲望を荷つた譯だが、別して黃金の臭ひを有難がる陣笠や批評家に持囃された。而し何うも其後の行動を見ると、それ程のもので無く、烏渡元氣の好い議論を唱へて大向を唸らせたやうであるが、矢張原敬氏の節度に服して早く大臣に成りたいと云ふ外に大した抱負も無いらしい。對支問題の如きも最初立派な意見を有ち、日支親善兩民提携と打つて出て、政黨以外

日支協會を携げて政治家と實業家とを引纏めて立つの氣慨を示した所は天晴れであつたが、此頃は何を云ふにも政友會本位で、一向天下に躍起を伸すと云ふ意氣込みが見えない。も少し眼を開いて世界の大勢を觀るがよい。政黨一點張りでは歐米の先進國でも巧く行かない。今日のやうな無能の官僚を叩き潰すのは眼前の急務であるが、又今日のやうな無節操な政黨に天下を委ねて堪るものか。官僚も政黨も叩き仆して、國民が直ちに國家を負擔するといふ時代が、今に來るのは必然である。之れが見えない位では、折角の中橋サンが政治家に成つた甲斐が無いではないか。何でも彌きに國民提携を唱へた中橋サンが、先日邊りは支那に對しては政府を相手に仕事をする外は無いと云つて、寺内流の政府提携で熱を吐いて居つたさうだ。此人此調子なら、金が有つても、意地張りは強くとも、御親類の床次君には到底及ばぬかも知れぬ。床次君の遣り口と中橋君の遣り口とを比較して、何方が現代に成功するか、鳥渡見物である。此二人の他政友會の少壯者には可也の人物があるが、例の黨の節制と云ふものに縛られ、政黨に對して伸縮奉公をするやうな氣位に成つて居るので一向駄目だ。氣の毒だと云ふ外は無い。

憲政會に移つて見ると、落選はしたが濱口雄幸氏は立派な人格であるやうだ。政治家の品隲をするのに、直きに人格を擔ぎ出すのはお門違ひだと云ふものもあるかも知れないが、何と云つても人格は能力の一種である。否、能力以上の或物として、政治家の資格中の第一に數へざるを得ぬ。濱口君は人格は良いが、其能力は大藏事務の才たる以上に出でないといふことだ。政治的經綸と眼光とには缺けて居ると唱へられて居る。落選したのは官僚の壓迫に由るさうだが、政治家として落選は餘り名譽でない。少くとも足許の戰に拙い處があるからだと見るべき場合が甚だ多い。(評者も落選黨の一人だが、自分で考へて鳥渡も名譽と思つて居ない。)詰り濱口氏は人格あり、事務の才あり、而して小手先きの利かない政治家であると思ふ。彼れ是れ批評はしても、現代に多く得難い人たるを失はない。

濱口君の正反對を行くであらうと思はるゝ人物は、下岡忠治君である。氏は官僚の出身であるから、何處までも官僚風に押通さうとする。規模を大にしたら大浦風とでも云ふのであるが、此人は床次君や濱口君に比べると確かに「現代に新い意味の」を解して居る。先づ日本の政界が山縣といふ老人の頤の傾け方によつて一蹴せられるといふ事を知つて居るので、せつせと山縣公に參謁する事が政治家としての能力を發揮する所以であると心得て居るらしい。總選擧の憲政會が、一戰して脆くも少數黨に陷ちた時、加藤總裁すら甚く失望したさうであるが、下岡君はなかなか匙を投げないで、待てば海路の日和ありで、色んな下地作りも缺かぬ、何時か老公と政友會との感情が面白く無くなる場合も來る、其際に老公の懷に飛び込んで巧い仕事をして見せると云ふ自信を何處までも失はなかつたとやら。先きに平田加藤聯立内閣を策したのも此人である。今後も暗中に飛躍して何か才覺を試むるであらう。此點から觀れば此人は確かに政治家である。併し官僚出身の悲しさに、世界に瀰漫たる國民思想の潮流は御了解ない。糊付け當座で一時を糊塗し、それで巧くやる事を唯一の秘訣として居るやうでは情ない。併し此情けない頭腦が、現代政客中の出色と見られて居るとあつては、此現代も情ない。

ずつと氣勢は揚らなくなつたが、國民黨の方に眼を轉つて見よう。木堂が外交調査會に行つたのは何か深い考があつたのでもあらうが、其部下三十六人の屁古垂れ方と云つたら話にならない。國民黨には國民黨で矢張侃々諤々の議を逞うしてこそ木堂も官僚に對して押が利く。つまり國民の勢いが盛んであれば、外交家も之を後援にして列國と十分に對し

する事が出來ると同然である。木堂が侠義の標的となりながら、多少遊した事のあるのは疑を容れないが、然し部下三十六人は何の態だ。高木益太郎が詰らぬ事を議會で喋舌つて、己れの額に御用黨の札を貼つたのも、高木獨りの罪ではない。國民黨内の空氣が恁んな喜劇を演出する背景となつたのである。人物の拂底國民黨より甚だしきは莫しと云はねばならぬ。關直彦君などもソロ〳〵隱居したがよからう。あの黨内で人物を擧げるならば、僕は野添宗三君と古島一雄君だと思ふ。野添君は故櫻井一久氏の後繼者で、人格は確かに素晴抜けて居る。對座しただけでも確かに人間らしい香りがある。少し虚榮心でもあれば副議長は同氏のものであつたらうが、何でも濱田共人に泣き付かれ、自己を副議長に推さうとする黨員大多數を鎮撫して、濱田君に讓つたさうである。此人少數黨に居るから顯はれないが、政友會に持つて行つたら床次格であらう。才幹は床次君ほどに行かんとしても、膽力が床次君より定まつて居る。恁んな連中が國民黨中で、も少し勉强して氣勢を上げて貰ひたい。第四十議會のやうであつては國民黨の自滅である。

古島君は人間もサツパリして居つて、腕も利く。犬養氏の帷幄にあつて唯一の働き手である。他黨の交渉などに、關直彦君なんどでは直きに色氣を出したり、言質を取られたりするが、古島君ならそんな事はない。早捌きで無駄が無く、話も分れば押も利く。さうして政界に對する大局の見透しがよく、一流の政治家と正應して要領を得ると云ふ天稟を有つて居る。此人の缺點を擧げれば不勉强と云ふ一點に歸着する。文筆を以つても古一念時代から出色の人物であるが、段々筆を執る事も面倒になつたのであらう。政治家としても碁を打つ事と花の栽培などに時間を空費するので、働きの方は伸びなくなりはせぬか。更に飾り物に對する直覺力が强いので、政治問題を眞面目に研究する氣にならず、逐々怠慢に流れる事になりはせぬか。古島君あたりが國民黨の現狀に責任を感じて大に奮發するのでなければ、あの歴史ある政黨と、盛名ある御大の前途は何うなるのか。高木君のやうな連中が幾何ら喋舌つても物にならぬが、古島君のやうな分別ある男も寢てゐては物にならぬ。本人大いに反省すべきではあるまいか。

新政會などは何うせなつてゐないから、此の内で人物を品騭する事は止めにして、御用黨臭味の方面から臼井哲夫君と秋田清君を紹介しやう。臼井君が收賄事件で人の罪を引冠つた事は男らしいと云ふので世評すものがある。が、恁んな事が政治家の良い人格として見られるやうでは情ない。あの男などはつまり與太摘の空氣の中で泳ぎ廻る人間で、政界が眞面目になれば生存の餘地が無くなる人間である。此人今の才骨を試み、權勢と財力とで粗末な人間を操縱する事が政治だと心得、居る不屆者である。何でもボンヤリ構へて不得要領といふ風に押出し、其間に巧智を働かす事がエライと思つて居る。あれは禪家で云へばほんの小悟りである。悪悟りである。下司悟りである。權力家の門なら何處にでも出入する。權力と財力の間を縫つて歩くのが自慢である。三浦將軍の門下などにも頻りに參趨するやうであるが、一體何うして取入つたのか不思議である。理想境界の古島君を可愛がる三浦將軍が、猫を村の關左衛門も贔負にするなどは不屆である。然し老人達の心理を巧く理解して幇間にもなれば、籠土にもなり、早川邸の名張會合の末席を汚す事位が此人の目得であらう。論評して居る間に、段々臼井君のお鉢が悪く廻つたが、別に臼井君を悪口する必要は毛もない、唯恁んなものが重寶がる、現代を慨るので、語氣が自ら烈しくなつた次第である。山縣公や寺内や其他國一門の連中は、臼井君が悪口せられたと思はず、自分等が悪口さるるものと思つて此責めを引受けて下さい。

秋田君は以上列記した政治家から見ると、ずつと地位は落ちるが、働きはなか〱大したものである。若くて「二六」の社長となり、代議士となり、新政會の事實上の總裁となつた腕前は、確かにエライに相違ない。併し此意味のエラサでは御川黨さへ巧く纏まらない。新政會には官僚の餘瀝を嘗めると云ふ詰らぬ政治ゴロも居るが、其中には政權を有する者に弓の引けない丈けで、別に邪氣の無い金持も澤山ある。此金持ち連や無邪氣な學者達が、秋田君の如き人にコキ使はれるのが殘念だと云ふので、今度の騷動が持上つたらしい。後ろに官僚の力を控へ、目から入つて鼻から拔ける秋田君等が新政會を纏め得ないのは何故であるか。世間は器用許りでは行かぬものと見える。

此處邊で人物評は御免を蒙るが、以上列記した人達を以て新進政治家としてエライと主張する次第ではない。先づ此邊が働き人として、其働きつゝある手段と立脚地とを述べ、現政界を諷した次第である。

▽政界の實力

（將來注目を惹かんとする新進政治家）

鐵拳禪

一

少壯者必ずしも有爲の人物に非ず、新政會の松田三德の如き其の例なり。三德は衆議院切つての少壯者にして、慶應義塾の出身なり。腕力と耳學問を便りにして代議士たる、壯士上りの徒に比すれば、其學才識見實に霄壤の差のみならんや。されば相當に憲政に對する理解もあり、代議士の言動苟もすべからざる事位は承知し居るべき筈なり。何事ぞ、彼れが[illegible]政會を脫して新政會に入る、其の態度の公明正大ならざる。縱令曼陀羅線の事なしとするも、彼れが脫會の理由を明かにせずして、突然脫走せしを見れば、其の裏面に何かの事情伏在すと認むるは當然なり。況んや曼陀羅線の成立を期せんが爲に、節を男後藤に屈したりと謂ふに於てをや。成程該線は彼れが選擧區に關係あり、其の成否如何は彼れが將來の利害に影響するが故に、自己一身の重大問題たるべし。然れども、彼れが主義主張を擲ち、政命を賭して迄も、爭ふべく餘りに小問題なり。斯の如き小問題を以て政黨を出入せば、一議會毎に朝蘇暮移して、遂に歸着する所を知らざらんとす。苟も志ある者の爲さざる所なるは勿論、夫の老朽者と貶され、壯士上りと輕視さると者と雖も、爾く淺利多智の言動を敢てせざるなり。

少壯新進の徒、多くは議會生活に慣れず。動もすれば選擧區の有志家に脅威され、政府者の好餌に魅惑されて、其の身を誤らんとす。餘りに賣名に焦燥し、餘りに議會に於ける一己の收穫に腐心し、餘りに營利に敏なる者に於て、殊に其の然るを見る。されば、議會の多辯饒舌のみを以て前途有望なりとも稱し難く、政黨の驅引に巧なるを以て有爲の人物とも認め難し。幾分にても新思想を抱き、所謂經綸抱負なるものを有し、主義主張に忠實なるを以て、足れりとせざるを得ず。少壯人物にして先輩を凌駕し、嶄然頭角を顯はさんと欲せば、非常の確信と勇氣を以て邁進せざるべからず。

少壯議員中にありて、躍進の狀目ざましきは、齋藤隆夫、松田源治、古谷久綱、法博小川郷太郎、法博今井嘉幸、秋田清、小山東助、植原悅二郎、林毅陸等なり。其の總てを目ざましの一語に包括せんには、多少の不平あるべしと雖も、近時漸く政界の視聽を惹かんとするの事實に、

之を等しく認めて可なるを覺ゆ。横田千之助、三土忠造、江藤哲藏、法博鵜澤總明、關和知等、少しく粲が立ちたるも、亦新人の雄たるを失はず。鳩山一郎の如き、將來發達の素質を有するも、現在の所、智識あり腕力ある彌次として知らるゝ外、他の推重を受けざるは惜むべし。尤も今期議會に於ては、何程か從來の態度を改め、鮮かなる委員振を見せたるも、未だ以て素質の優良を發揮するに至らず。

齋藤の憲政會に於ける、松田の政友會に於ける、其の幹部に反抗の氣勢を張るを以て、對幅の如く許せらる。政友會には重要問題起る毎に、政府との駈引上、正義派なる者の崛起を見る事あり。最初萬丈の氣焔を揚ぐるも、漸次下火となり、終に全く死滅するに至る。この正義派の幽靈化は、駈引功を奏して、妥協に結局せるを示すものなり。松田は未だ幽靈的戰法を辯せざるか、將辯するも之に同ぜざるかを知らずと雖も、彼れは反抗の聲を揚ぐるや、最後の一矢を射盡く迄も踏み止まらんとす。彼れの強さは、玆に在るも、之を貫くの勇氣を缺く。齋藤は其の過激なるに於て、徹底的なるに於て、少しく松田の上に出づ。冷靜なる頭腦を以て事理を闡明し、而も自己の主張を貫徹せんとするや、言辭行動熱を伴ひ來る。熱無くんば、彼れの言辭は檢事の論告なり。熱有るが故に、涙ゝ味あるものとして受取らる。法律の形式に拘泥するの嫌あるは、二者の免れ難き弊なり。松田黨内の信用を失して、振はざるの狀あるに反し、齋藤默々乎見故に却て發ゝの觀あり。關、小山の二者は、思想問題を捉へて、言論界の爲に氣を吐かんとするの點相似たり。一は淺けれども、一は深し。關は法律の頭腦を以て思想上の問題を取扱ひ、小山は信念の上に立して之を批判せんとす。其の論鋒に至りては、前者の鬪士的精悍あるに比し、後者些か遜色あり。小山は豫算委員會に突擊大に努めたるも、調查に缺陷あるが如く、未だ政府の急所を抱するに足らざる憾みあり。秋田は烏合の集團たる新政會を分解し、統合して、兎も角も交涉團體たる體面を維持す。何となく策士岡崎、秋山を髣髴せしめ、將來政界の謀士たる才略辣腕を有す。

古谷と林は、其の性格に於て、相反せる印象を與ふ。一は才氣縱横の快さを皮膚一重に裹み、一は思索の淋しさを頰の邊りに漂はす。古谷は新聞記者の文藻と、官人の事務的手腕とを併せ有し、怜悧に立ち廻り、骨身を惜まず奔走する所、如何にも精力に富めりと見ゆ。雄辯家として陣頭に立つよりも、寧ろ黨人を操縱し、議場の駈引をなすを得意とせん。林は論文を書くの態度を以て政界に臨み、理論的に突進せんとするも、思が緒にならざるに惱む風あり。一本調子と見えて、一本調子ならず、臨機應變的分子の存するを見る。論壇の人として筆力弱く、熱に乏しと雖も、理路井然たるの組織に頭腦の明晰を現はす。未熟なる演說を好み、政治家たらんと努むる所に、彼れの本來はあり。清新の文、論旨平明、乾燥せる砂中の潤氣を思はしむ。其の人、又斯の如くなるに非ざるか。學者の立場にありて犬養を非難し、未だ容許ならざるに大浦の內援を乞ひ、代議士に當選するや國民黨に入り、更に「犬養とロイド・ヂョージ」の一書を公刊して敬意を表す。皮肉を以て自らに報ゆるものありと謂はば、又何をか評せん。斯の如き態度は、彼れの前言を飾る所以に非ず。今井は對支外交の失敗を糾彈し、一家の見識を示せり。單に議會に咆哮するのみならず、輿論を喚起すべく活動し、主張の貫徹を期せんとするを多とすべし。小川の處女演說、鋼鐵事業の包圍に陷りて、牛耳を放たずと雖も、遣り通すだけの勇氣はあり。其の豫算委員會に於ける質問の如き、頗る研究的にして、重箱の隅を小楊枝にて掘るの嫌ありしも、熱心は熱心なり。漸く議會生活に習熟するに至らば、財政上の論議大に聽くべきもののあるを期せられず、唯彼れが京大教授なるが故か、三越

は主張の合せる爲なるか、權勢に媚附するが如き態度に非ざるあり。

二

如上の新人乃至闘士は、實際政界に何程の勢力あるに非ず。其の政界の表裏に活躍し、潛行するは、黨首と陣笠との中間に位する人物なり。所謂幹部の人々なり。是等幹部に在る比較的新しき人物は、政新の中堅をなす者と見て可なり。黨首乃至顧問と云ふが如き元老に較すれば、確かに新進人物なり。寧ろ此の程度の人物を以て「新進政治家」と爲さば、新進政治家の意味始めてあり。

政友會の床次竹二郎、小川平吉、山本悌二郎、憲政會の下岡忠治、濱口雄幸、早速整爾、國民黨の鈴木梅四郎、古島一雄等、其の中堅を以て目すべし。現に、又は以前より其の名を知られたる人々なれど、今後政局轉換の際、更に大注意を惹かんとする人物なり。鈴木は近來少しく驕慢の態あり、同黨の將來に暗影を投じたれば、多くを期待すべからざるに似たり。古島は黑幕の人。文に秀で辯に拙からずと雖も、闘士として政戰場を馳驅するよりも、政治劇のマネージャーとして、其の才力を發揮す。三黨首合同劇の如き、擧國一致劇の如き、其の舞臺裏を覗けば、子三浦と犬養を操るの彼れあり。床次は政友會總務、最も犬養と接近す。其の薩閥海軍の關係よりなるか、或は擧國一致劇以來の所緣なるやを詳にせざるも、交際の密度は、何としても單純なる關係と思ふ能はず。

床次は薩派を率ゐるの强味あるも、一部には又その薩閥に傾倒することに反感を持つ者あり。然れども、彼れは成るべく智者階級乃至少壯者の包容に努め、其處に信望と勢力とを築かんとす。鷄鳴狗盜の士は、彼れの眼中に無きが如し。以て其の志の小ならざるを知る。政黨改善の如き、素より彼れの手に俟つ所尠からずと雖も、今少しく彼れは、氣宇の廓濶と識見の高邁とに於て學ぶ所なかるべからず。小川の志士を以て鳴りたるは、床次が未だ刀筆の吏たりし時に在り。今日政友會の地位、小川に對して何ぞ薄遇なる。前議會議長を爭ひて腰を折り、今則ち纔かに豫算委員長を贏ち得たるに過ぎず。人物奇激に失し、狂熱餘りあるに出るか。そは彼れの外面にして、内面沈着にして怜悧なり。對支政策、機鋒漸く鈍りたるは、其の見陳套を脫せざるに由るか。超然内閣の擁護は、彼れの適所に非ず。人氣の衰へんとする、亦無理ならぬ事なり。山本は金力を擁するが爲に幅を利かし、其の財嚢に用心深き眼を輝かす事に依りて勢を失し、黨内に於ける彼れの地位の高低逆賭すべからざる者ありしが、近時少壯者と稱する中年派に結束的勢力の上に、其の地步を占むる事を得たり。

早速は論戰の士なり。濱口は少壯總務として、既に其の人物手腕の優越性を認められたり。明敏にして而も怜悧と見えず、鈍重と見えて而も智略ある所に、何物かの潛在するが如く思はるゝが德なり。一たび藏相の椅子に凭らしめ、之を實地に試驗すること勝田の如くせざれば、其の財政計畫の頭腦と、豫算按排の手腕とを知る能はずと雖も、愈よ蓋を開けんまでの興味はあり。下岡の官僚より急轉して政黨に投ずる、公山縣の間諜として、黨界の攪亂者として、其の任務に服する者なるべきを思はしめたり。最初隈閣の御用黨たる公友俱樂部を統率し、之を政黨化せしめんとしたるも能はず。土崩瓦解するに及んで、憲政會の策士と一緒せり。彼れは隈閣の倒潰に際し、公山縣を勸說して、平田加藤聯立内閣を促成せんと努めたり。勿論伯寺内の蹶起に由りて畫餅に歸せるも、彼れは何その目論を抛擲せず、時機を待ちて之を實現せんと期するに非ざるなきや。表面は公と絶緣せるも、裏面に於て聲息を通ぜずとも限らず。實際彼れが進んで撚を戻さんとすれば、撚を戻し得ざるに非ず

るに公の郎黨間に知己多きを以て、其の目論見を遂行するを便とすべし。寺閣沒落の兆現はれたるの今日、之を拱手傍觀するの彼れならざるは明かなり。

憲政會に在りて、彼れの策を有し、彼れに倍して鬪氣勃力の盛んなるは、前内閣翰長たる江木翼なり。彼れは下岡の老成なきも、躍らんとする若さを有す。而も聰明にして、手腕又之に伴ふ。吾人曾て當時拓殖總裁たる元田と會し、談偶ま部下の江木に及べるに、彼れは宮尾よりも江木の頭腦手腕の卓絕を稱したりき。實に江木は法制局に在る頃より、殖民行政の研究に着手し、而して我が殖民政策に關する一家の見を樹てたるなり。殖民地經營の智腦として推重されたる、固より其の所なり。彼れは斯かる特色を有し、斯かる手腕を備へ、加ふるに養父千之が貴族院に於ける勢力の連繫を以てす。將來政界に意味ある活動を成さんと欲すれば、即ち成し得るに最も便宜の地位に立てり。

三

貴族院の空氣、世人に好感を與へず雖も、中に隨分新進氣鋭の貴公子あり。又頭腦手腕見るべきものある、少壯勅選の群あり。政界の將來、又是等の人物を逸すべからず。

最も若き人として公近衞文麿は老いたる公侯と伍し、乃父の衣鉢を襲ぐに足るべしとも、足らざるべしとも決せざる、未知數としても政界の目を惹けり。公德川慶久、侯細川護立、子青木信光、子前田利定、男東鄕安等、種々の意味に於て將來に期待を持てり。侯細川は請願委員長として、今期議會に其の無爲ならざるを示せり。公德川は赤門の政治科も中位にて出て、頭腦も惡しからず、十五代將軍の貴子として門地高く、威望自ら備はるが故に、貴族群に對して押が利くべしとの事なり。此の押が利くべしとの一事に由りて、公は將來議長たるべしとの目あり。子青木は研究會の幹部、動もすれば新舊勢力の衝突よりして紛紜を釀さんとする時、その調和的人材として、之を收拾すべく必要視されつゝあり。子前田及び男東鄕に至りては、門地其物よりも、爵位其物よりも、少壯論客として頭角を顯はし來れり。子は論難に長じ、文藻も有し、而して鋭利なる批判力は總ての問題に向つて注がる。研究會に在るも研究會の弊に染まず、直言直行、何物にも囚はれざるの概あり。往々理論の末に走りて、理窟の爲に理窟を並ぶるが如き、苦情投入的駄問を試みる事なきに非ざるも、比較的大局に通ずるは斯の人なり。官僚思想の殼を脫して、新思想に觸接せば、其の論難更に一段の光彩を增すべきなり。男東鄕は緻密なる頭腦より組織せる、討論の才能を以てす。突擊の巧智、時に見るべきものあり。子前田に比し、氣魄稍足らざるが故に、先輩の壓迫を突破するだけの舌戰を講ずる能はず。男坪井九八郎は、臺東製糖の一重役たるに過ぎざりしが、現閣の農商務副參たるに及んで、政界の視目に映じ來る。

中年の實力者に、子井上匡四郎、伯林博太郎、伯寺島誠一郎、侯德川賴倫あり。子三島彌太郎は年齒最早五十を過ぐる數歲なるも、怪腕を揮つて貴族院に雄視す。勅選の若槻禮次郎、法博水野錬太郎等、未だ今後の政界より閑却さるべく思はれず。水野は現に内務次官。その爲に政友會を脫したるも、全然緣が切れたるに非ず。若し彼れを非難すべくんば、政黨を脫して超然内閣の屬僚たる無見識を以てすべきも、在來官僚生活を甞めたる者なれば、舊巢を戀ふるの是非なしともすべし。現に男後藤の懷刀として、其の鋭利を揮ひつゝあるが、政局の變轉に際會せば、政友會の爲に一臂の勞を惜む者ならず。其の切れ味の鋭き點、床　に勝るとも劣らざるなり。若槻の現内閣に肉迫する、自家の財政意見を彈丸と

し、之を發射するに辛辣の舌頭を以てす。其の自信、精力、勇氣に於て優に鬪士たるに足れり。若き江木と策應して、現内閣を居らずんば已まざらんとす。子井上、伯林は學者なるも、論難應酬に就て、法博小川の如く快備ならず。衆議院の學者、庶民的氣焔を揚ぐべくして揚げず、貴族院の有爵學者、却て庶民的氣焔を揚ぐるは奇觀なり。侯德川は政界に新運動を起し、若くは政權把握に奔走する人ならずと雖も、隱然たる勢力を有す。子三島、屢藏相に擬せられたるも、未だ藏相たらず。危險少き日銀總裁に、打算の日を送るも、彼れは閑く政權に恬淡たるに非ず。彼れの容易に入閣を肯んぜざるは、短命内閣の自家の地位を危くするを知ればなり。貴族院に於ける、彼れが朋黨的勢力は、常に内閣を組織する者の恐怖なり。彼れは長く此の勢力を擁して、陰に内閣を控制するを得意なりとするや知るべからず。彼れも亦、政界の強者なり。（大正七・二・一九）

▽四十年一日の政治界

川尻東馬

（一）

△何れの社會、何れの階級に於ても、老人跋扈、古物崇拜の風潮は、今以て却々強き潜勢力を有し、後進新人は徒らに不平を並べ、空しく絶叫しつつあるかの觀あるは、是れ現代の僞らざる實相寫眞である。然も靜かに最近十年間の社會狀態を精査するに、時運の進展、世態の推移は爭はれざるものにて、不知不識の裡新陳代謝の行はれた跡歴々たるは勿論各種の社會、雜多の階級を通觀するに、其中堅人物は殆んど皆新進後繼者たらざるなきの實狀である。中には表看板に先輩を擁立し、因襲の久しき舊人物を社會に代表せしむる處なきにあらざるも、多くは是れ全くの名義人に過ぎずして、實權は擧げて後進の掌中に歸し居るの内情と云ふも、恐らく過言であるまい。

△現に實業界に於ける澁澤、中野兩先輩の位置は、今や實權實力と遠ざかりたる、全くの總領問又は相談役格ぢやないか。又學界に於ても、最近重鎭株の勇退盛んに行はれ、二十年又は二十五年勤續祝賀會なるもの、帝國大學其他の各學校に於て、頻々として擧げられつつあるぢやないか。此外各方面に於て、殆んど同樣の意味を含む、後進の路を開く爲めの先輩退隱に、續々として實現されつつあると、近時一種の風を成し居るかの觀がある

△然るに獨り政治界の實況はどうか、官僚系の大頭目山縣公の大勢力は、依然として我國朝野の政治界を壓倒し居ると、是れ何人も否む能はさる事實である。更らに政黨界を瞥見するに、自ら稱する大政黨の政友會は、伊藤公、西園寺侯、原君と、其黨首をこそ代へたれ、今に以て獨力内閣を組織するの抱負自信なく、陰に山縣公の機嫌を損ぜざるに力め[illegible]に隱居の西園寺侯を政界に復活せしめて、其餘澤に浴し傘下に雨宿りせん、悶掻きつつあるぢやないか。憲政會に至りても、大隈侯、桂公、加藤子と黨首は既に三代目なれども、是れ以て徹底的獨力獨行の決心を缺き、一昨年加藤内閣組織を目論見て失敗せる以來、確信内に鈍り、元氣外に殺がれたるは勿論、當時の高言豪氣今何處へやら、躊躇逡巡、將さに其岐路に迷ひ居るかの觀がある、否な事實五里霧中に彷徨の狀態である。

△是も活氣に富み、社會各階級各部面に比較して、最も進歩的發展的な

るべき筈の政治界が、然らば何故斯くも退嬰與廢に沈滯しつつあるか。因循姑息宛も老人の態度を持しつゝあるや。其他の各方面各階級に於ては、新陳代謝の行はるゝと共に、常に幾分進歩の痕跡を印し、新活力の添加を認みられつゝあるに拘らず、不思議なるかな、政治界に在ては三十年一日の如く些の進歩發達の跡なく、或ひは或る魔力に依りて、一所に膠着するの餘儀なき運命に、支配されつつあるに非ずやを疑はしむるものがある。否な寧ろ年一年其組成分子の低下劣惡に退化しつゝある事實を、往々にして認むる場合がある。是れ主として何に原因するか。吾人をして率直に之を云はしむれば、其中樞人物は何れも四十年來殆んど何等の變化更代なきこと、確かに其主因なることを確信するものである

(二)

△先づ政友會より之を見るに、總裁の原君は三代目故暫らく別問題とするも、大岡、元田、岡崎の諸君は、既に前代の遺物である。中途より參加したる山本、高橋の兩君は、黨人としてこそ新らしけれ、是れ亦要するに分別役に廻るべき先輩株、活氣縱横、新に劃策し發展すべき進取敢爲の英氣に至りては、之れを此人々に望むべく、餘りに老成の人物である。別に新進の中橋君ありと雖も、之れは畢竟世に所謂大臣病の患者、以て一黨派を指導し運用其宜しきを得べく、總裁を補佐し能ふの實力がない、更らに抱負がない、又人格も伎倆もない。之れを官僚系政治家に類例を求むれば、宛も仲小路農相である、自已中心の野心滿々たる以外、政治家として些の價値を認むることが出來ぬ。

△更らに憲政會はどうか、世間に多士濟々と云はるゝに拘らず、尾崎、武富の兩君を始め、河野、島田、高田、箕浦、片岡の諸君、皆以て四十年來の名士である、即ち古物である。黨人として新らしき仙石、若槻の兩君は、人物伎倆に於て申分なきこと、宛も政友會の山本君同樣であり、殊に若槻君の如きは、尚春秋に富むの人、總裁を補佐して新たに計劃し立天地を開拓するには勇氣もあり又前途も大にあるが、現在の位置及び其人物より見て、寧ろ老成の方面に傾きかけて居る、加之一黨總員に對しては幾分親和の方面に缺くる憂がある、此點に於ては仙石君、更らに一層相應しきかの觀がある。但し政友會に於て山本君が、原總裁に於ける最も有力なる相談相手たると同樣、憲政會に於ける此兩君は、尾崎、武富の兩君と共に、加藤總裁の片腕と頼まるゝ有力者である。

△其他に於て國民黨の犬養君、之れ以て四十年來の名士、憲政の神樣で一寸色揚げしたが、昨今は其色揚せぬ以前よりも一層褪色して了つた。外に花井君といふ名物男もあるが、之れは政治家といふよりも寧ろ政論家と稱するを適當とすべく、而も夫れは選擧問題とか、其他の法律問題丈けに範圍が局限されて居る、無論以上述べた諸名士に比較すると、政治界に於ける位置も實力も餘程距離のあること云ふ迄もない。前述の諸名士を假りに第一流とすれば、同君の如きは元より第二流である。

△更らに官僚系其他の人物を物色しても、其中樞者を以て目さるゝは、依然として平田、伊東の兩子を始め、牧野男、清浦子、小松原君其他の前大臣乃至樞密顧問官連で、其間殆んど些の新味を見ることが出來ぬ。中に甚しきは、老警の方便を擔ぎ出さんと企てる者さへもある程で、寧ろ時代錯誤の代表的事實を提供する者と云つて差支ない。只多少變つた人に後藤内相はあるが、之れは餘りに脫線的で、政治家としては注意人物である、否な寧ろ危險人物と云ふべきであらう。極端なる自己本位、本能發揮が其全生命で、世間兎角の惡評は、全部之を信すべきにあらぬも、烟の騰る處必ず火あるの諺、公人として殊に一國の政治に立ち觸るべき資格は、遺憾ながら吾人之を認むる譯には行かぬ。若し夫れ貴族院

に至りては、極端なる老人跋扈の場所、新人後進は愚か、多少其功成り名遂げて動選された先輩連中に在りても、年老へざれば、宛然たる小僧扱ひを以て遇さる、特殊世界である。

(三)

△斯くて吾人は、政治界の中心人物更代、新陳代謝の最も急速ならんとを痛切に要望する所以であるが、流石に政黨方面には、官僚系に比して幾分、反省的進歩的な血液の流るゝと見え、其證據は近時政友會にも亦憲政會にも、多少其形を現はして來た。即ち後進者の秀でたるを抜いて先輩同格に伍列せしめ、漸次後進者を養成せんとの企圖あることが是れである。政友會は漸進的に數年前から弗々實行しかけたが、憲政會は一昨年の立黨當時に幾分其曙光を見せ、今年の大會に於ては思ひ切つて幹部の新陳代謝を行つた、實は餘り遣り過ぎたとの世評をさへ受ける程斷行したのである。

△新人物の抜擢、後繼者の養成、權力中心の推移、何れにしても皆人心を新たにして、玆に自ら新天地を開拓し、新生面を展開する新味活氣の伴ひ來るのは明かな結果であるから、吾人は此傾向此現象に對し、寧ろ餘りに遲過ぎたることをこそ咎めるが決して突飛な急遽な斷行だとは間違つても云はぬのである。若し新に擧けられ任ぜられたる者無能不適任ならば、更らに新たに抜擢し重用すべき人物を物色すれば事足れりで、斯くて幾度も新陳代謝する間には、自ら新人物の出現し、又傑出者の醸成せらるゝこと、自然の理法である。極端なる論者は曰く、繼續破壞は同時に繼續建設であると、隨分思ひ切つた言ひ方だが、或る一面から見れば、眞理は確かに此内にも含まれて居る。

△吾人は斯く政治界に於ける新人物を歡迎し、後進者出現の急務を說いたが、然らば現代に於て誰々が最も將來に注目し、他日を屬托するに足る新進者であるか、政黨界、官僚系、多々從々其人物に乏しからぬとは此處一寸斷言し兼ぬるが、されはとて數人又十數人の候補者なしとは云はぬのである、否な如何に政治界人物拂底の今日とは云へ、大臣級の人物は、政黨界、官僚系を通じて、少なくも二十名以上の及第者は、之を發見するに何の苦もないことである。‖勿論自分免許の大臣候補者は除外に置いて‖中には多少未知數の卵も包含せらるゝが、併し現内閣大臣の如き粗成品をも許容するとせば、夫れは更らに多數の候補者を物色し得て餘りあるのである。

△但し吾人は玆に一々其新人物、候補者を列擧するの遑がない、又限りあるの紙幅、編輯者としても恐らく之を許し得ぬことであろ。依りて今は其最たる人物、即ち一等一席に位すべき主人者丈けを擧げようと思ふ。曰く、政友會に於ては床次竹二郎君、憲政會に在りては濱口雄幸君官僚系に於ては有松英義君。吾人は各派各系統を他日に代表すべき新進後繼者としては、恐らく此三人者たるべきことを保證するものである。只玆に一應斷つて置くべきは、政治界の離合集散である、其人々の健康問題である、又不測の災禍厄難である。斯様な個人としても亦公人としても、殆んど不可抗力同様なる事件の結果として、其人々の前途を遮る場合は、自ら別問題とせねばならぬ。

(四)

△床次君の政友會に於ける勢望實力は、憲政會に於ける濱口君の夫れに比して、或ひは一籌を輸するかも知れない。併し其人格、品性、更らに渾然として自ら長者の風格を備ふる處、政友會内有為有用の後進者少なからずとするも、何人か君の右に出で得るものがあらう。政治思想に於

ても、官僚出身者に似合はぬ立憲的要諦を了解會得するは勿論、何人にも免れ能はざる一種の官僚的臭氣なく、遠慮せず、小刀細工なく、無論自家廣告の野卑、自己本位の劣情を起さざるのみならず、泰然として常に自ら政治界の重きに任じ、有象無象の雜然騷然として、腐肉を爭ふ餓狼の夫れにも比すべき渦中に棲息しながら、出來得る限りの力を以て、之れが肅情開發に精勵する處、明かに群を抜き衆に秀でたる人物と斷言し得て憚らぬのである。

△時として初め脱黨の勢を示し、何時の間にか終りは處女の夫れに比すべき行動あり、世間の一部には、變說改論の達人、眞の立憲思想を有せずと貶するものなきにあらぬも、萬事御都合主義、便利現實主義の本尊原總裁を頂く以上は、時として斯の如きの變通、境遇上よりして或は止むを得ざるのである。吾人は此點に對し、寧ろ君の心事に同情を禁じ能はぬものである。苟くも政黨の領袖として行動言議する以上、政治道德の何物たるかを了解し、言論責任の重大は之を感知すると、公人として當然の義務觀念なりと雖も、然れども一方政黨なる團體として行動し又進退するに際しては、自ら其處に圓滿協調の歸一點を發見せざるべからず、況んや時代の事情形勢變轉の裡には、其間黨略戰術の之れに伴ふべきは當然の結果、之れを以て君の政治的道德心に缺け、言論責任の觀念に薄きとなすは、之れ評するものの聊か酷に過ぐと云ふべきであらう。

△只夫れ頭腦精緻を缺き、自然に經綸抱負の見るべきものなく、他日の政治界に立つて國政を料理せんと、恐らく其任に孤負する處あらんとの批評は、遺憾ながら吾人又感を同うする節なきにあらぬ。されど然らば政友會中、何人か君の此の缺點を補ふて、爾も其右に出で得る人があらうか、吾人は精査物色の結果、終ひに其人ありとは發見し得ぬのである。況して頭腦の一點に至りては、官界生活時代より既に定評あり、最早試驗濟みの問題に相違なきも、經綸抱負の以て見るべきなしとの一事、印に未知數の事題に屬し、只單に其閃きが今に見へぬとの前提を以てして、早計にも無經綸無抱負の政治家と斷定するは、聊か酷評に過ぎずやの感もある。

△舊自由黨系の一部には、君に對して尊敬心を起さぬ内情は否むべからざる事實なるも、一方閨閥なる有力の後援あり、先輩次第に凋落老衰の時代にも遭せば、自然に人心歸向の中心人物となると、宛も原總裁の往時而して今時と同一の徑路を辿るに至るべく。彼の下劣感情的なる黨派心薄く、常に國家國民の大局重要問題に着眼して、茲に立脚地點を發見せんと努力する處、政黨の領首として付陣笠連の最も人心を收攬し能はざる缺點なりと雖も、吾人を以て云はしむれば、此の心事態度こそ、却つて將來の政治界に重きを爲す、最大要素なることを確信するものである。

（五）

△憲政會に於ける濱口君の聲望は、實に外間の想像以上である。但し比較的年若く後進者の故を以て、實力の未だ之れに伴ふものなきも、君の大成と將來の政治的地步は、黨員一人として之れを豫測し、確信せぬものはない。人格と頭腦、伎倆と品性、之れは世間既に定評あるから改めて贅する必要はないが、凡そ何事に對しても眞面目の態度を持し、孜々として勤勉し、其間經へて倦怠の跡を見ざる處、如何にも頼母しき人物である。官僚出身者は、兎角一種の臭味を帶び、政黨育ちの人々に對して、渾然融和すると能はざるは、何れの政黨に於ても同一轍の常態であるが、不思議なるかな、君に於ては毫末も此の缺點隔離がない。從

つて政黨育ちの一般黨員間にも、極めて好評調和よく、彼の世間に稱する官僚系、政黨系杯、其の間には一抹の感情問題さへ起らぬのである。是れ恐らく君が個人的に有する一種の德であらう。

△床次君の態度は、堂々たる間にも温良柔和の風格を現はし、之れに對して君は純朴剛毅の影子を見せて居る。床次君を美丈夫とすれば、君は古英雄の風骨を備へて居る。世間に荒削りの仁王樣と稱さるゝ君の風貌は、一見して拔群の偉男子たることを認め得るのである。殊に些の私心なく其の境遇と運命に甘んじ、未だ曾て一度も自ら求めたることなき、君の官海生活の歴史は、先輩同僚の均しく推賞する處にして、同時に下僚の以て今に範としつゝある處なりと聞くに於ては、政黨に於ける君の現狀動作、成る程故ある哉と首肯せしむるのである。

△政黨員として尙訓練を缺くの點なきにあらぬも、是れは今日の勉强熱心を以てして、相當期間を經過せば、自から其域に達し得べく、又政黨の領袖として餘りに正直過ぐるの缺點は、恐らく君自身も之れを感知し居らんが、徒らに權謀術數を弄し、常に黨略に囚はれて動もすれは國家の大事を冷眼視する傾きあること、現時政黨界の通弊なるを思へば、吾人は寧ろ君の正直過ぎる此缺點に與せんと欲するものである。何等の愛嬌なく、些の好言令色なき處、一寸初會者をして誤解せしむる廉なきにあらぬも、會見應接すること二度し三度するに於て、漸く對手者をして其親切誠意あるを了得せしむるは、是れ又知れる者の間に於ける定評である。俗に干鱈に均しき人物と評され、噛み締めるに從つて益々其の味を知るとは、洵に君の如き人物を云ふのであらう。

△有松君に對しては、遺憾ながら人格者と評することが出來ぬ、又些の私心なく誠心國家の爲めに努力終始するの未來ある大政治家とも稱することが出來ぬ。併しながら其手腕と頭腦の一點に至りては、官僚系の後進者中、君の上に位置するもの恐らく一人もあるまい。安廣伴一郎君の智謀と頭腦、或ひは君の右に出づるものあるべしと雖も、安廣君の恬淡なる性格は、到底未來に奮鬪發展せんとの熱心思ひもよらず、殊に辛辣徹底的なること、問題の成否に對し、飽迄手段を擇ばざるの恐ろしき信念に至りては、安廣君の性格行動中、最も缺如たる處である。斯くて安廣君は恐らく現狀に甘んじ、有松君專ら官僚系最後の大立物として、奮鬪努力すべく想像せらるゝ所以である。

△床次君を良家の子女とすれば、有松君は流れ歩きし酌婦上りの如く、濱口君を堂々陣を張る武將とすれば、有松君は山寨を根據とする山賊の頭目に見立てよからう。故に奇兵を用ひ伏兵を使ふ變妙自在の技倆に至りては、床次、濱口の兩君、到底其の敵にあらぬのである。有松君の一點隙なき用意周到の態度に對し、床次、濱口の兩君は、遺憾ながら處々に乘ぜらるべき缺所を殘して居る。卽ち床次、濱口の兩君は常に大上段に構へる劍士であるが、有松君は小手打ち專門の早術師である。有松君は手取力士、床次、濱口の兩君は、大關格の力士である。從つて時々大關は土俵の上に砂をつけらるゝ廉がある。議會に於ける質問應答に際して、時に此光景を實演しつゝあるは、今更ら事新らしく云ふ迄もあるまい。

△元來官僚政治は公明正大ならぬ政治である、裏切り、揚足取り、反對者の弱足につけ込む杯、手段は飽迄も陰險辛辣を根本方針とする樣に見へるが、此點に於て有松君の性格と而して其歷史は、實に堂に入つたものとの世に定評がある。但し此の陰險辛辣が一私人の爲めに非ずして、官僚系なる一團體の爲めに行使し行動する處、確かに君の價値であり、努力であり、又世間惡評を立てつゝある間にも、其手腕實力を認め居る所以である。吾人は斯の如き政治家を最も嫌忌する一人であるが、併

情感と事實とは自ら別問題、注目すべき未來の政治家としては、決して輕視し能はざる人物である。只一言最後に斷つて置くべきは、床次、濱口の兩君同様、自らなる總帥の天分資格は毫頭備へて居らぬことで、又君自身としても恐らく斯様な野心を持つては居るまい。要するに君は何者かの總帥に對する參謀長格の人物で、將帥者其の宜しきを得れば、君は殆んど天下無敵の好參謀長たるに至るかも知れぬ。

▽三十臺の代議士

日吉町人

□政黨に何等基礎を有たない超然内閣の見じめさは這の四十議會に遺憾なく暴露された。其の是非は姑く措いて時代は既う何と言つても政黨内閣ならでは、我政務の運用が出來難くなつたこと丈けは事實が痛切に明確に證據立てた譯である。政友會の某が近頃議會で言つたやうに寺内内閣を以て官僚内閣の最終と做すには何人も異議を挾むべき根據がなくなつた。然らば次で來るべき政黨内閣とは抑も何人に賴つて組織せらるゝものである乎。恐らく山縣公と云ふやうな元老が目の黑い内は容易に無爵の原敬君などに總理大臣のお鉢か廻つて來ることぢやない。西園寺侯や平田子や其の他そう云つた老練な剛氣のない代りには安心の出來る昔の人物を引張り出して恰度大隈内閣のやうな工合ひに政黨を操縱せしむるに過ぎまい。我政黨内閣と謂ふものが未だに斯んなものであるとしたら、少し血の氣のあるものは奮起せざるを得ないではないか。

□更に一歩進んで原君や加藤子が總理大臣となつたにしてからが原君は六十三歲加藤子は五十九歲、犬養、武富兩君は六十四歲、尾崎愕堂でさへ六十の老齡である。今や所謂る時局である、日本の政治をして眞に新しき優れたるものゝ上に立たしめ少くも列強角逐の間に力あるものたらしめんとせば左樣な老政治家は先づ凋落せしめなくてはならぬ。ケーレンスキーが三十六の壯年を以て大宰相となり大元帥と稱した時代である。敢てシーザーやナポレオンの昔を追懷するまでもないではないか、乃で吾等は年少政治家を物色し鼓舞して而して新しき思想と若々しき感情とを以て新興日本の政界を風靡せしめたい、少くもそうした革命的空氣を我政界に醞釀せしめたいと切に思ふのである。

□是れを衆議院議員に求むるとせよ、床次竹二郎、下岡忠治等の諸君にして既に五十臺の人である、苟も老悶を以て硬化せんとする我政海に新血液を注入し新人物を吸集せんとするならば、極端に言ふ、三十臺の少壯政治家をして此の重大なる國家負擔の運命を有せしめてもいゝではないか、強て年齡に拘泥する譯ではないが、新社會の中堅を支持するものは凡そ此の時代の人物を標準とするも敢て失當ではないのである。現に衆議院には三十臺の代議士が三十六人選て居る、其の數こそ衆議院全員の十分一にも足りないが政友會の堀切善兵衞君の知き憲政會の瀧正雄君の如き大學教授や、無所屬の今井嘉幸博士や孰れも其の識見に於て品性に於て辨舌に於て決して年老ひたる有名政治家に劣るものではないのである。堀切君は既に定評あり、瀧君亦た學殖の豐なるは人の識る所、今井博士が支那通として特に重要なる政治部面に働くべき時機は將來益々夥いのである。但だ南支顧問らしき辯論を行つて以て失敗した最近の演說は博士の一考を煩さゞるを得ないものだ。

□三十臺の議員には一體新聞記者と辯護士との出身者が多い、歐米政界に於ける新聞記者の勢力は拔群で、佛國の如き革命以來其の政界に雄飛

せる政治家は殆ど記者出身であると云つてよい。英米亦然ることは更めて言ふまでもあるまい、辯護士は出來能辯家だが常に張膽明目して單なる議事規則の末を論議する癖のあるのは甚だ好まざる所なるも、議院生活に於て法律智識の缺くべからざるは勿論である。新政會の秋田清君は記者としての文章辯護士としての辯舌共に優れたるもの あるのみならず、頭腦緻密才氣煥發、洵に將來を囑目するに足るものあるも夙く陰謀團と稱せられたる櫻田倶樂部の人となつてより、徒に政黨的の駈引にのみ沒頭し年少なるにも拘らず自稱策士を以て終らせるのは甚しく遺憾である。近く新政會で若尾璋八君の德望と小川郷太郎博士の學識とを左右に籠絡して新米議員を操縱し、政府の御用を懸命に努めたなどは少しく調子に乘つた傾もあり、遂には職業的政治家の名に依つて多數から擯斥せらるゝに到つたのである。反省するには最も好い機會ではあるまいか。

□憲政會の小山東助君も先頃まで東京每日新聞の主筆として得意の健筆を揮ひ、其演説も亦た議政壇上に異彩なる人格を表白して餘りあるものであつた。君には宮城縣の多額納税者舛田某の經濟的後援あるを以て議院生活の保障がある丈けに其の潤飾の質は一段の加磨を望まざるを得ない。政友會に於ては曾て國民新聞經濟部長たりし河上哲太君、現に朝鮮公論社長たる牧山耕藏君、共に議院政治家としての素質を有するが故に特に修養が肝心である。一宮房治郎君も新聞記者だそうだが其の人となりは知らない、憲政會では悼公門下である國民中學會の河野正義君、報知新聞社會部に宮廷記事を以て鳴らした田中萬逸君などは未だ眞價が表はれて來ない、川崎克、櫻井兵五郎兩君の辯舌には未來がある。國民黨の堀川美哉君は東京日々新聞記者としても有數な讀者で年少議員中の優なるものであろう。大堀米君も記者生活の經驗があるそうだが大した事はないらしい。無所屬の赤木鉛君は格堂として文名高きも政治家として果して適當なりや否やまだ判斷がつけにくい。

□辯護士畑では政友會の岩崎勁、鳩山一郎、高見之通、前田米藏の諸君、憲政會では三木武吉、鈴木富士彌兩君などだが、岩崎君が今期議會の進行係りとして好成績を擧げ、高見、三木兩君が相次で名を賣つたのは若聞のことである。高見君の品性熱心、三木君の才氣辯力は大に囑すあるものがあるだけに自重を望まざるを得ないのである。鈴木君は特に辯論に秀で相當の野心もあるから或は議院政治家の上乘なるものとなるかも知れない、鳩山君は好箇の紳士である、焦燥せずんば終には乃父の名を恥かしめざるの政治家たるを得べき乎、前田君は政友會の横田幹事長の乾兒で努めて倦まずんば一廉の政治家となり得るであらう。辯護士ではないが憲政會の古屋慶隆君が法律經濟に關し熱心なる研究家たることは軈て君の未來をして有望ならしむる所以である。

□其の他政友會に於て吉原正隆君が未だ其の名顯れずと雖も將來の九州を背負つて立つべき勢力を醞釀し居り、土屋清三郎君が辯論に聞みつゝあるは共に其の前途に注目すべきである。林信良、西海支四郎、高野有働門の諸君は唯だ實業家と云ふに過ぎまい、憲政會で澁谷の高木左五衛門正君が大隈内閣の爲めに男爵の誘約に釣られて議員となり眞鍋豐川に借金を拵へたなぞは寔に氣の毒なことである。山田亘年君も無理に政界に引張り出された人、三門寄介君が十三回選擧に山口縣からは一人も反對黨議員を選さぬと傲語した兒玉伯の言に猛突いて當選したのは夫れ丈けの人望がなければ出來ぬことだ。山道襄一君は牧山君と共に朝鮮通であるやうに荊棘良一君は支那通である。國民黨の中井櫻太郎君は年少なるにも係らず兵庫縣國民黨の重鎭である。將來果して岡山縣の犬養君のやうに兵庫縣の政界を席捲するや否や、新政會の松田三德君は例の

四國蔦陀彌鐵道問題で隨分後藤内相との浮名を立てられたが年齢尙ほ卅三歳議院の最年少議員だけに未來に充分にある。清和倶樂部の上田彌兵衞君は大阪米穀取引所の理事として關西財界には相當の勢力を有つてるそうだ、松島肇君も少壯實業家としての才氣は軈て政治家としての前途を豐かならしむるものがある。

□吾等が物色して鼓舞しやうとする三十臺の代議士にして以上の如しとすれば甚だ心細い譯だが、孰れも相當相應の素質を有つて居るが故に社會が之を起用したならば必ずや活潑なる政治を爲すに違ない。現に以上擧げた代議士は數人を除く外悉く政黨の幹事となり議會の常任委員として重要なる議院の職務を掌つて誤りがないではないか、其の外僅かに四十を越したばかりの代議士中には政友會の島田俊雄、憲政會の小寺謙吉、横山勝太郎、國民黨の植　悅二郎、高松正道、清和倶樂部の尾崎敬義諸君の如き有爲の人物も尠くはないのである。西洋には青年にして偉大なる政治的働きを爲した者は數ふるに遑がない位に多い、我國政治界に數十年間中心勢力となつて居た老政治家はいゝ加減に葬り去らねばならぬ。時代思想を解せざる者に政治さるゝ國民は憫に不幸ではあるまいか、終りに年少議員を故らに紹介したる文の目的は決して人物批評でないことを斷つておく。

四月一日に發行せらるべき次號即ち
春期大附錄號
に掲載せらるべき**創作七篇**の
豫告は本號の最終頁に詳なり

評論

製鐵所鋼片拂下問題

法學博士　吉野作造

(一)

二月初旬下院の問題に上つた製鐵所鋼片拂下問題は、事柄自身はさしたる大問題では無いけれども、之によつて偶々我國政界の暗黒面の一端を曝露したる點に於て、又良心の麻痺したる我國の政界が政治的罪惡に於て如何に不徹底なる態度を執るかを明示したる點に於て、少からず吾人の興味を唆るものであつた。此問題が何人の何の動機によつて提出せられ、又如何に結末を付けられたかは、吾人の國民的利害に殆んど何の係りも無いが、唯此問題の内面に潜む政治道徳の問題は、飽くまで之を闡明して國民と共に將來を警戒するの必要がある。

事の起りは大正五年春製鐵所第三期擴張案が議會の問題となれる際にある。當時の特別委員大多數は民業を振興するの名の下に、鋼片の拂下げを希望する旨を主張した。時の農商務次官及び製鐵所長官は最初此要求に應ずるを欲せざりしも、不同意を固執するは案の圓滿なる通過に妨げあるべきを怖れて遂に贊成したとある。其結果擴張案も無事通過を見た。五月に入り時の政府の與黨たる憲政會の一議員は民間實業家の一團を代表して拂下の出願をした。之に對して七月時の農商務大臣は承諾の指令を與へ、其指令に基き製鐵所長官と出願者との間に内相談が纏り、十月いよ／＼東海鋼業株式會社の設立を見るに及んで、向十ケ年間毎年

三萬噸の鋼片を拂下くべきの假契約の締結を見た。次で翌六年の八月に至り本契約の締結を見、十一月工場の一部落成と共に先づ以て六十噸の鋼片を拂下げたといふのである。而して三萬噸といふ巨額の鋼片を一會社に獨占せしむるのが不當であると云ふので、政友會の一議員が、此點に關する警告を附加して農商務省の豫算を承認しようといひ出した。之れが今度の問題の起りである。而して現農商務大臣が、此警告は如何にも尤もだ、前内閣の當局者が一會社と斯かる契約を結んだのが不都合の極である、國家の利益の爲めには何とか之を處分せねばならぬと言明せるに及んで、事柄は益々紛糾した。加之、豫算分科會並びに總會及び本會議等に於ける提案者の演說する所に據れば、當時憲政會の某總務が、拂下の承諾を求むる爲めに當局者を不當に脅迫したとか、之が爲めに一部の政客が不當の利益を貪つたとか云ふやうな事實も擧げられ、果ては河野前農相其他の人身攻擊も加味せられて吾人をして何等か許すべからざる罪惡の此問題の裏面には潜むに非るかを思はざるを得ざらしめた。而して當時の討論の模樣から察すれば、現當局者も亦確かにか丶る罪惡の伏在を信じ、此事件の問題に上つた事によつて政府反對黨の名譽を傷け得たるを些か痛快とするの概が見えた。

（二）

此事件の問題となるや憲政會側の議員は切りに辯解を試みんとした。否、或點まで辯解を試みたが、併し十分辯解の機會を與へられなかつたのは、傍觀者たる我々の最も遺憾とする所であつた。一體斯くの如き問題の起つた時には、敵味方を問はず、事個人の名譽に關する重大問題なるが故に、少くとも進んで之を欲する限り、十分辯解の機會を與ふべきである。否、假令當人が辯解を欲せざるも、十分事件の眞相を露出して、政界一般の名譽の爲めに天下に向つて毫末の疑ひも之を明白にすべきである。此種の事件について曖昧の態度を執るのは、假令其動機が責任者の過失を庇護せんとするの好意に出づるにせよ、之れ一片の私情に

出づる所謂老婆心に過ぎずして、決して國家の爲めに計る所以ではない。予輩は、此事件の眞相を十分闡明せずして、分つた樣な分らぬ樣な曖昧模稜の間に葬り去らんとせし議院内の所謂老功の士に多大の遺憾を禁じ得ざると共に、少くとも當面の責任者たる河野翁の如きが、何故奮然起つて辨解の雄辯を振はれざりしかを怪むものである。沈默も事にこそよれ。重大なる名譽を傷けられんとして、而かも仍ほ默々たる態度を改めずとは寛容を過ぎて殆んど無神經に近しと謂はれても仕方が無いではないか。予は固より河野翁に對して平素多大の尊敬を捧ぐもの此一事に依りて決して翁を上下するものではないけれども、只此事が偶々瑣末の問題に熱中する議會が個人の名譽といふ重大問題には比較的冷淡だといふ冠履顛倒の事例を示すものとして政界の爲めに甚だ遺憾の情なきを得ずとするものである。之と同時に此事件は偶々此種の暗黑面の一端を曝露せしに過ぎずして、現今の政界には此種の事尚多かるべきを思うと吾人は更に〱長大息を深くせざるを得ないのである。

此問題の處理に對する政友會の態度も亦甚だ煮え切らぬものがあつた。一體政友會は何の爲めに此問題を提げて起つたのか。眞に國家の爲めに政界を廓清せんとするの至誠に出づるものならば、底の底まで事件の眞相を抉るべきである。縱しんば敵の弱點を掴まへて攻擊の武器となすの私意に出でたとしても、飽くまで之を窮追するのが男らしい態度であり、且つ又吾々國民の希望する所でもある。然るに問題の漸く紛糾し、憲政會側も亦起つて精細なる辯解を爲さんとするを見るや、政友會の一總務は起つて本問題は唯此議員が會計法其他の法規に抵觸するといふ見地から、當局者に警告を與へるといふ丈けの趣意で、それ以上誰が不正な事をしたと云ふやうな點まで立ち入らんとするものでは無いと述べて之を遮つた。無論表面の形式は當局者に警告を與ふるといふ丈けに過ぎない。けれども會計法其他の法規に抵觸するや否やの單純なる法律問題とするならば、會計檢査院でも之を取締れば又決算の

方でも監督する事が出來る。何を苦んで豫算委員會に人の名譽に渉る批難の聲を擧げてまで、喧々囂々の論を鬪はすの必要があらう。現に攻撃者は已に二三關係者の氏名までを擧げて道義的批判を加へて居るではないか。故に我々局外者から見れば、政友會の態度は、唯此暗黒事の一端を仄めかして唯譯も無く敵黨の名譽を傷け、それ以上事件の眞相を曝露するを避けて、唯一場の陰險なる政爭の具に供せるに過ぎざるものゝやうに思はるゝ。若し夫れ一二の新聞の說くが如く、此種の事件を剔抉する事が偶々また自家の古疵をも曝露せらるるの因縁となるべきを怖れて、最初より突進的態度に出づるの考は無かつたといふ說にして眞なりとせば、其心事や實に言語道斷と云はなければならない。

（三）

醜陋なる分子の附帶するにせよ、せざるにせよ、若し此事件を不當なりとして警告するに決定したる以上、其責任の一半を現農相も亦負擔せざるべからざるは事理の當然である。何となれば假令拂下の出願に對して承諾の指令を與へしは前農相なるにせよ、正式の契約は去年八月即ち現農相の下に結ばれたるからである。尤も現農相は、此契約は前內閣よりの懸案にして、製鐵所長官は前內閣時代に與へられたる權限の範圍內で正當に契約をした、從つて自分は此事件には何等の係はりも無い、內容も最近に至つて知つた、といつて事實上の無責任を主張して居る。けれども事實上の無責任は、決して法規上の責任を免除するものでは無い。自分の局に當つて居る間になされたる凡べての不當處分については、彼はすべて其責に任ずべきである。斯の如き重大なる條件を全然與り知らなかつたといふのも如何かと思はるゝが、果して知らなかつたといへば、少くとも職務上周到なる注意を缺けるの譏は免かれ得まい。法規上の責任論は暫く之を措くも少くとも道義上に於ては、彼は男らしく此問題の責任を負ふべきであつた。此點に於て予輩は農相の態度にも甚だ男らしからざるもののあるを遺憾とする。而かも政友會の攻撃に裏書して前內閣の處分を不當と主張せる

の結果、當時の責任者たる製鐵所長官を窮地に陷れて、遂に其辭職を見るに至らしめたのは、法規上政治上の論は暫く別問題としても、彼の政治的態度に餘りに餘裕無きを思はしむる。

更にも一つ予輩の怪訝に堪へざるは、彼が前內閣の處置を不當とし、加之政友會一議員の攻擊批難を裏書するの態度に出づるならば、何故に更に一步を進めて何故當時斯かる不當の行はれしかを窮めて疑雲を一掃するの所置に出でざりしかの點である。之れも單に當時の處分を不當とするといふ事丈けが問題となつたのならば未だしもである。現に一二の人の口より政治的罪惡の此間に伏在するやの暗示が與へられたではないか。然らば農相は政界の名譽の爲めに、又政界の廓清の爲めに挺身事情の調査を敢行して、天下の疑惑を晴らすべきであつた。尤も彼は此事件に對して全然無責任とは云へない。然しながら彼の言明するが如く事實上全く與かり知らなかつたといふならば、それ丈け彼に强味がある。故に若し彼にして眞に國家の爲めに政界の腐敗を廓清するに意ありしならば、此事件を累せる凡らゆる罪惡を剔抉し、後めたき政治家をして完膚なからしむべきであつた。之を爲すに彼は現に最も適當なる地位に居る。而して若し彼にして此事件に對する一半の法規上の責任を負ふて高蹈勇退の意を決し、其責任の歸する所を明白にして更に罪惡窮追の態度に出でなば誠に男らしき處置として天下は齊しく彼に同情と感謝とを捧げたであらう。職を抛つの決心なき以上、斯かる快擧は何人にも求められない。殘念な事には彼は結局彼の名譽の爲めに又國家の爲めに盡すべき最善の途を取り損つた憾がある。人あり或は曰ふ、斯くの如き快行を彼に求むるは誤りなりと。知らず、彼にして若し此至誠と勇斷とを缺かば、平素の侃々諤々の論議も畢竟何の爲めにするものぞ。(二月十七日)

講和條件の一基本として唱へらるゝ民族主義

法學博士 吉野作造

(一)

講和條件の一基本たるべきものとして民族主義と云ふ文字の盛んに用ひ初められたのは、露西亞の革命後、凡そ去年の五六月以後からであらう。委しく云へば民族自決主義或は民族自定主義と譯すのが正しいかも知れない。民族は總て其希望に基いて其政治的運命を決し得ざるべからず、或民族が他の民族を其意思に反して支配して居るのは不當である、若し從來斯くの如き不當なる境遇に置かれて居つた民族があつたならば、其民族には一般投票の方法により、新たに其政治上の所屬關係を自決するの權利が與へられなければならない。之が民族自決主義の主張である。而して之が講和條件の基本として唱へらるゝ所以は、啻に其主張そのものが正當であると云ふ許りではない。此正當なる主義が從來十分に承認されなかつた事が、實に禍亂の原因であり、從つて世界平和の障礙であつたと云ふ見解に基くのである。今度の戰爭を機會として、姑息の講和は之を避けよう、根本的に永久の平和を保障すべき原則を發見し且確立しようと云ふ所から、此の所謂民族主義も亦唱へらるゝやうになつたのである。

此思想が十分明確な形を取つて唱へらるゝ前から、之に相類した思想——結局は此思想に到達すべき思想は、戰爭の初めから唱へられないではなかつた。例へば英佛側が開戰の理由の一つとして掲げた、小國權利の擁護と云ふが如きは即ち此類である。墺洪國內の南スラブ人に自治權を與ふべしとか、波蘭民族に獨立を與ふべしとか云ふやうな議論は民族主義には相違ないけれども、然し當初は、民族の正當なる權利を保護すると云ふ見地よりは、寧ろ從來永く歐洲の煩累たりし禍源を絶つと云ふ見地より主張されたものであつた。

然るに露國革命後芬蘭の獨立、ウクライナの獨立等あり、時の政府が各民族の權利を尊重するの主義から、公然此等民族の獨立を承認するに及んで、初めて純然たる民族主義の思想が表面に現はれて來たのである。而して英佛側も、或はアルサス、ローレンの問題を處分するについても、將た又南スラブの問題を處分するについても、個々別々の問題として取扱ふよりも之を一括して所謂民族の權利尊重、或は民族自決主義と云ふ形式の下に主張する方が便宜なりと認めたので、之より段々此文字が盛んに行はるゝやうになつた。而して之が永久の平和を保障すべき講和條件の最も重大なる基本原則として唱へらるゝやうになつたのは、去年十二月下旬、露國過激派政府が獨墺側に示したる一般講和條件に於てゞある。而して本年一月初旬ロイドジョーヂ並びにウイルソンも亦取つて以て之を其講和條件中に數ふるに及んで、今や民族主義は、將來問題となるべき講和條件中の最も肝要なる一原則たるべきことは已に人の疑はざる所である。

此問題が他日講和會議に於て如何樣に解決せらるゝかは、各交戰國の等しく皆利害を感ずる所である。我日本も決して其影響の外に立つものではない。何となれば此原則を極端に遂行すれば、即ち朝鮮臺灣の獨立を認めねばならず、假令然らずとするも、かゝる主義の何等かの形に於て承認せらるゝ事は、少くとも朝鮮臺灣の土民間に獨立の思想を起さずしては已むべからざるを以てゞある。故に此等の點に關して、豫め愼重なる講究を重ね、出來得べくんば今より之に對する一定の態度を定むる事は、極めて肝要なる問題であると思ふ。されば今年二月議會に於ても、此點に關して政府に質問するものがあつた。唯當局者が言を左右に托して全然其說明を拒んだのは、我々の甚だ遺憾とする所であつた。

（二）

民族主義の提唱に對して帝國の態度を決定するに先立ち、先づ念頭に置かねばならぬことは講和條件の一基本として之を提唱することは同一なるも、之を適用

すべき範圍に關しては之を主張する者の間に多少相異る所あることである。少くとも此問題に對して露西亞と英米との間には相當の徑庭がある。況して獨墺に至つては尙更らに其距離が遠い。少くとも露西亞と英米と獨逸とは、此點に關する三つの異つた考を代表して居ると思はるゝ。

第一に露西亞の民族主義の提唱は、此原則を凡べての國の凡べての問題に適用せんとする點に於て特色がある。今度の戰爭に問題となつた、例へばアルサス、ローレンとか波蘭とかに之を適用するのみでなく、今度の戰爭に何等の關係の無かつた地方、例へば愛蘭や印度や印度支那や、又は朝鮮臺灣にも洩れなく之を應用しようといふのである。さうでなければ根本的に永久平和を保障するの途が立たないといふのである。

然るに第二の英米の方は、必ずしも此處まで極端には進んで居ない。本年一月の双方當局者の言明には、此原則を今度の戰爭に關係ある獨墺の領土內の諸民族に適用するとは言つてあるけれども其他には渉つて居ない。而して本年二月の米國大統領の演說には、今度の戰爭に關係ある地方について此原則を適用するというて居るから、戰爭に直接關係せざる地方の事は之を問題外とする積りであらう。而して今度の戰爭に直接關係ある地方といへば、主として獨墺側の領內の問題であり、聯合國側の屬領地は、概して戰爭に關係無きが故に、米國大統領の後の宣言の趣意は、必ずしも英米當局者の前の宣言と相容れざるものではなからう。而して露西亞は、表面何と辭を飾るにしろ、斯くの如き英米の態度は畢竟利己主義の甚だしきものなりとして、之を攻擊して居る事は言ふまでも無い。

若し夫れ第三に獨逸の態度に至つては、表面民族主義を承認して、事實極力之が適用を拒まんとして居る事は又多く論辯を俟たずして明である。蓋し此主義の適用を受けて損をするものは、專ら自分側丈けであるからであらう。けれども一見公明正大の主張であるから、無下に之を排斥するも穩でない。そこで出來る丈けは此主義を採用しようとはいふて居る。

けれども、自國領内の民族に如何なる政治を與ふるやは、もと國内の問題にして、國際協約を以て迫るべき筋のものではないといふのが、獨逸の熱心に主張する所である。併しながら、講和條件の一基本としての民族主義の實際的重要は此主義の内容如何にあらずして、寧ろ之れが國際的の約束として各國家に遵奉を迫るを得るや否やの點にある。之を國内の問題に放任しては到底民族の自由を得らるべくもなかつた事は、從來歴史の證明する所である。故に之を國際問題とするでなければ、折角之を問題とした甲斐が無い。從つて國際問題とするを拒むは、即ち此主義の適用を事實上拒絶する事になる。獨逸は即ち此態度を執るのである。

(三)

以上說く所によつて觀るに、此問題に關する將來の思想が、若し露西亞側の主張する所の如くなるとすれば、我日本の朝鮮臺灣は直に直接の影響を受くる。現に過激派政府では今日まで日本に朝鮮放棄を迫るの言辭を弄した事は一再に止らない。併しながら英米獨佛等が他日皆露西亞に兜を脱いで一々其指揮を仰ぐの日あるべしとは期せられないから、將來一番有力な說としては恐らく米の主張ではあるまいか。さうすれば朝鮮と臺灣とは、直ちに講和會議の問題とはならずして濟む。此點は些か意を安んずる事が出來る。

併しながら朝鮮臺灣が直接の問題とならないからというて、我々は民族主義の潮流に對して盲目的に安心する事は出來ない。何故なれば今度の戰爭に關係なき部分にまで此原則の適用を及ぼさないといふのは、講和條件の成立を促進する爲めの便宜手段に外ならずして、主義としては、すべて此原則が如何なる方面にも洽ねく行はれん事を希望し、且つ期待するといふのが、今日世界に流るゝ思潮の大勢であるからである。故に此主義は一旦講和會議に於て認められたる以上假令其差當りの適用は或る一局部に於て制限せられても、主義夫自身の道義的勢力は滔々として止る所を知らざるべきが故に、戰後に於ける民族區分の問題は、所謂民族自決主義を以て其大勢とするに至るべきや、

を俟たない。故に假令直接に講和會議の問題とならなかつたとしても、之に安んじて民族壓迫の態度を執るのは、卽ち大勢に逆行するものである。故に我々は講和會議に於ける民族主義の提唱が米國流になつたからとて安心する事なく、卽ち此主義の由つて來る所以の根本的動機に鑑みて、今より早く植民地統治の方針を改め、以て戰後の大勢に處するの準備を怠つてはならない。（二月十七日）

憲政三十年の獲物

大山郁夫

此頃の流行語となつて居る「憲政三十年」といふ表現は、我國の議會の現狀に對して極めて皮肉なる響を持つて居るものであることを、誰が氣附かないものがあらうか。

我國の憲政の現狀に對する不滿は、言ひ飽きもし、聞き飽きもした所である。けれども如何に頻繁なる反復に依つて最早常套陳腐となつて居る改革の聲と雖も、その目的の貫徹に依つてそれを主張する必要の消滅するに至るまでは、飽くまで之を高唱し、之を絕叫せねばならぬ。併し斯の如き改革的主張の繼續的反復をなすためには、異常なる執着力乃至耐久性を必要とするものであつて、而して又斯の如き執着力乃至耐久性は問題の根本若しくは核心に對する完全なる理解より生ずる信仰より湧き出づるものであらねばならぬ。

憲政開始以來年所を經る事三十、而かもそれが尙ほ甚だ幼稚なる原始狀態の域に彷徨して、當然なし遂ぐべきだけの發達をなし遂げないのは、國初以來の專制政治の下に馴致せられたる我國の社會的基礎が、その順當なる發達のために容易ならざる障害を提供して居るとはいへ、それにしても明治維新に際して時勢の必要に驅られて採用せられたる開國進取の政策の當然の歸結として產まれ出でたる立憲政治が、その發達過程の第一次的階級をさへ突破することを得ずして、年々

歳々、同種類の陋態を繰返して居るに過ぎざるは、さりとは餘りに腑甲斐ない次第ではないか。この事情の近因及び遠因は極めて多端複雜であつて、一言にして之を盡くすことの出來ないことは言ふまでもないが、常にその奥底に潜在して居るものは、我國民間の憲政の終極目的に對する徹底的理解の不足、及び之より生ずる信仰の缺乏である。素より憲政改革の必要は、常に絶叫せられる。時としては憲政擁護運動といふが如き劇的興味に富める事件さへ突發することもある。けれども當該問題の核心に對する徹底的理解より湧き出づるに非らざる言説や、確固不拔の信仰及び之に伴ふ熱と情操に根據するのではなくて、只單に吶喊の衝動に依つて發作的に火花の如く生じ火花の如く滅する運動は、憲政の質實なる進歩のためには、比較的無意味のものたるに過ぎざることも亦、多く論ずるまでもない平明の道理である。

憲政三十年――而して憲政期成運動のために身命を賭して奔走し奮闘したる當年の志士の不安の精靈を弔ふために立憲幽明會といふ一種凄愴なる語調を帶ぶる追悼會が催された今日、我等は曾つて「自由は死せず」といふ凛然たる一喝を命を取りに來た刺客に浴びせ掛けた當日の祭主の此頃の痛ましき凋落を見て無限の感慨に打たるゝよりも、又は我國の憲政の常軌的發達を阻害する主要素たる官僚政治家がその席上に臨み、若くはその祭文が志士の靈前に代讀せられた事實に依つて一種の場所錯誤より生ずる滑稽感に襲はるゝよりも、先づ憲政三十年の獲物の餘りに貧弱なるに、今更の如く驚異の眼を見張らざるを得ないのである。

蓋し明治六年の征韓破裂後、民選議院建白のあつた時より、明治二十二年の憲法發布の時に至るまでの期間に於て、激烈なる憲政期成運動が行はれ、幾多の志士が辛辣なる官憲の壓迫に對抗して、侃々諤々として自由を論じ民權を唱へ、時に或は危地を踏んで政府顚覆の擧を企て、生命財産を惜まず、累紲の苦を意とせざる氣慨と熱情を示し、廟堂有司の國會尚早論をして遂に屏息するの已むを得ざるに至らしめたのは、―

に國會開設、憲政樹立といふ大目的、大理想を掲げて居たからである。然るに絶大なる期待を以て迎へられる立憲政治が一たび開始せられてからは、その運用が兎角思はしく行はれず、その以前より國政の上に確固なる地歩を占め來りたる特殊階級たる閥族官僚が依然として實權を握り、政黨はその政治的勢力を次第に增大して居るといふものの、尚ほ未だその立憲政治の上に於ける本來の使命を十分に果たすことを得ざる有様であつて、斯くて憲政三十年の今日に於ても、政局が明治二十三年頃の時代に比して、何等顯著特異の展開を示して居ないのは、是れ果して何に基因して居るのであるか。思ふに斯の如き情態の主要原因の一は、我國民が幾多の志士の絶大なる奮鬪に依つて、如何なる種類の國家的目的を實現せんとするかに就いて明確なる意識を缺如して居るからである。單なる國會開設、憲政樹立そのものが當面の目的となつて居た間は、その事業が如何に困難なるものに見えても、その問題が比較的簡單であつた。處が既に樹立せられたる憲政をば、如何なる國家的目的を實現せんがために運用すべきかの段になると、問題が極めて複雜となり、從つてそれに關する理解が困難となつたのである。換言すれば、憲政樹立の必要が叫ばれた間は、憲政その物が目的であつたが、憲政が既に樹立せられてからは、憲政そのものは、手段――即ち更に或る他の目的を實現するための手段となつたのである。是に於てか、憲政問題を徹底的に理解せんと欲せば、單に憲政そのものゝ運用問題の研究だけに止まらず、之に依つて實現せんと欲するその奥の國家的目的を研究し、理解するに非らざれば十分とは謂へなくなつたのである。

我國の憲政に依つて實現せんとする直接の目的は、官僚政治家や政黨政治家の聲言、若しくは各政黨の宣言とか政綱とかの如きものゝ上に、朧げながら表はれて居ることは事實である。夫の國務の伸張とか、民力の振興とか、敎育の刷新とか、產業の助長とか、社會政策の實行とかいふ如きものが、即ち是れである。併し乍ら仔細に考察すれば、是等の事も亦、國家生活の

廣き立場より眺むる時は、是れ亦他の更に重要なる目的を實現するための手段たるに過ぎないものである。然らば他の更に重要なる目的とはいはゞ何であるかと云はゞ、それは人に依つてそれぞれ見解を異にするであらうが、我等の信ずる所を以てすれば、それは民族國家の眞正の要求たる國家の統治關係の倫理化でなければならぬ。單に我國の統治關係のみならず、現代世界の各國の統治關係は、その複雜なる外殼を擺脫して、その核心を剔抉する時は、畢竟するに優勝群（若しくは征服階級）が劣弱群（若しくは被征服階級）の上に課したる抑壓關係の上に基礎を置いて居るものである。而かも不祥なる血の洗禮若しくは國內的革命に依るに非らずして、國民的自覺より來れる社會的、政治的機會均等主義の實現に依つて、斯の如き統治關係の上に改造を加へ、その抑壓關係（卽ち力の關係）を倫理關係に引き直ほすことが、立憲政治の終極目的であらねばならぬ。夫の公民的社會建設の理想といひ、將又、政治の國民化の理想といふが如きものは畢竟するにこの大目的を指して居るものである。苟くも此點にまで到達せざる國民的自覺なるものは、眞の國民的自覺ではない。外の事は必ずしも憲政の常軌的發達に依らずとも、之を成就し得べき可能性があるが、只此事だけは端的に憲政の常軌的發達に依つてのみ之を實現するより外に仕方のないものである。

憲政改革運動は、右の一點に關する徹底的理解より來るものでなければ、之に必要なる宗敎的信仰の如き熱と情操と、從つて執着力の耐久性とを伴ひ來ることを得べからざるものである。不幸にして我國の過去の憲政改革運動の基底には、斯の如き根本問題に關する理解が缺乏して居つた。是れ我國に於ける憲政より幾多の重要問題が未解決のまゝ取り殘されて居て、人をして轉た憲政三十年の獲物の意外に貧弱なるに驚かしむる所以である。けれども我國の內外四圍の情勢は今や健實なる國民的自覺を刻々に促しつゝある。而して此傾向の表はれの一つとして、憲政上の諸問題の討議が、今後益す活況を呈するに相違はあるまい。否、

國民的政治とか、國民外交とかの表現が、既に我國の言論界の常套語となりつゝあることは、この時勢の推移を隱約の間に反映するものと見るべきものである。素より反動的政治思想が、我國の社會の一部に於て、今尙ほ盛に行はれつゝあることは、官僚政府の實勢力の存續と共に、事物を正視せんと欲するものゝ當然十分に認識せざるべからざることであるが、同時に之に向つて戰ひを宣する新思想が漸次その勢力を增大しつゝあることも亦、之を無視すべからざるものである。殊に青年學生の間に政治的改革思想が廣く瀰蔓しつゝあることは、近年勃興したる月刊雜誌上の新政論に或る程度の交涉を有して居るものに相違ないと思ふが、兎に角それが或る社會的勢力となりつゝある事は注意すべき事實である。所謂青年急進團の行動の動機の純不純は、我等の毫も關知せざる所であるが、之を外にしても尙ほ、選擧權擴張若しくは普通選擧運動が、小規模ながらも、直接部下の青年の手に依つて行はれ、若しくは青年に依つて最も熱烈なる歡迎を受けつゝあることも亦、周知の事實である。此機運が次第に成熟して何等かの効果を產むに至る時は、軈て過去に於ける憲政期成運動に身命を殞し、若しくは憲政の發達のために異常の盡瘁をなしたる幾多の志士の英靈が多少の慰安を得る時であらう。

進行中の第四十議會

大山郁夫

第四十議會の經過の細評は、いづれその終了後に於て述べる積りで居るから、本號に於ては只、現今迄の政府對政黨の關係、及びその他の二三の要點に就いて、極めて簡單なる印象批評を試みやうと思ふ。

有體に言へば、第四十議會の開會前に於ても世人は餘り多くの期待を之に繫がなかつたが、その開會後に及んでは、尙ほ更その緊張の不足に對して不滿足を表白した。

時局の重大とは、官僚政治家も之を口にし、政黨政

治家も之を口にし、一般國民も、之を口にして居る。時局は如何にも重大である。所謂「曠古の時運」とは、決して政治演説家の修辭的表現に止まるものではない。然るにこの重大なる時局に際して、軍國議會が嚴粛なる緊張味を缺き、惰氣漫々裡に閉ざされ、國民の之に對する興味も亦、從つて極めて稀薄なるは決して慶賀すべき現象ではない。

議會は素より劇場でもなければ、角技場でもないから、俗人の耳目を恰ばせる様な興味を有することを必要としないのみならず、寧ろ之を有することを病ましとすべきものである。此點より見れば、愚劣なる彌次の叫び聲や、議員の辯論を妨害する議場の騷擾が、只管低級なる傍聽者の興味を唆る道具となつて居る我國議會の現状は、顰蹙すべきものであり、唾棄すべきものである。今年の休會明けの議會が比較的靜粛に取り運ばれた爲めに、大岡議長の如きは、之を我國議員の一進歩と呼んだ。「一進歩」と聞くのは少々可笑しかつたが、兎も角、多少でも忌むべき彌次の聲や議會の紛擾が減退したのは、先づは結構な事であると思つた。處が其後の議會記事を讀むと、愚劣なる彌次の聲も、擯斥すべき議場の騷擾も、共に依然として相應に盛に行はれた様である。果して然らば、大岡議長の議會の一進歩の讃辭(?)も、立派に裏切られたものである。

所謂議員心理上の議會氣分とは、如何なる種類の氣分であるかは知らないが、それは要するに各員が群衆の間に立ち交つて自己の個性を失墜する結果より生ずるものであらねばならぬ。憲政改革主義者が、第一に國民に要求する事の一つは、群衆の間に在つて個性を維持することである。然るに國民の選良たる代議士の多數が、議會氣分の名の下に、彌次的發言を逞しうし若しくは議場の騷擾の仲間入を敢てすることを愧ぢざること斯の如きは、沙汰の限りである。殊に我國の議會に於ける彌次的發言が、概ね卑猥低劣聽くに堪へざる種類のものであるのは、その當該議員の品性や日常の言動が思ひ知られて、淺猿しさの至りである。此點に關しては、斯の如き低級議員をその代表者として選

に迄りたる選擧區民の、宜しく猛省すべき所である。

斯の如く劇場式、角技場式興味を以て低級なる傍聽者の興味を挑發することは、多くの場合に於ては、議會の品質の劣惡を反映するものとして耻づべきものであるが、その代りには、苟くも議會が重要なる國家の政務に關して自由討議をなす言論府である限りは、その議事に於て飽くまで眞面目であつて、常に嚴肅なる緊張味を維持しなければならないものである。無論政黨組織の發達の結果として、議場に於ける雄辯が直ちに議決を左右するが如きことは、現今に於ては殆んど絕無に歸したけれども、それにしても眞面目なる議會の言論――殊に一廉の卓拔なる見識を包含する議會の言論は、議院の內外に相應の反響を與ふることに依つて將來の政局を導く一勢力となるものであることは、之を無視すべからざるものである。

且つ又、議員の質問、及び之に假托して陳述する意見、及び國務大臣並びに政府委員の答辯は、之を適當に行ふ時は、當該問題に關して議院の內外を啓發することの多きこととの測り知られざるものであるから、この兩者の飽くまで眞面目なることは、極めて望ましきことである。又政府者の便宜に依る答辯回避の如きも、それが如何に合法的なる場合でも、專制時代の遺物にして、從つて非立憲的のものであることは免れないのである。又秘密會の濫用の如きことも、議會の性質上否認すべきことである。殊に秘密會の內容の如きは、隱すより顯はるゝはなしの譬の如く、直に外間に漏洩し易きものであることよりして見れば、秘密會の實際的效果は、甚だ稀薄なるものであると謂はねばならぬ。

尙ほ之に關聯して一言すべきことは、去る都下の新聞紙の痛論したる如く、我國の議會が新議員の處女演說に對して、常に極めて冷酷なる待遇を與ふることである。殊にその處女演說が、專門の學者、若しくは學者肌の議員に依つて行はるゝ際に於ては、此傾向が殊に甚しい樣に思はれる。我國の議會に學者的見識の過度に缺乏して居ることは、その短所として羞づべきこ

とでこそあれ、決して長所として誇るべきことではない。然るに我國の議會はこの寥々たる學者的見識のその間に介入することをすら寛假すまじと待ち構へて居る。夫の前議會に於ける植原氏、及び今議會に於ける小川(郷)氏、並びに今井氏等の處女演說の不成功は、その責任の演說者自身の上に在るか、抑も亦議會全體の上に在るかに就いて、我等は今尙ほ惑つて居るのである。今議會に於ける小川氏の或る發言に對して、去る議員が「小川氏の意見は學者の說としては聽くべきも、實際政治家の說としては聽くべからず」との主意を小賢しくも述べ立てたのは、眞面目には聞いて居られない評言である。自分自身としては、小川氏の議員としての現在の立場に些の同情を有して居ない者であるが、それにしても、單に彼が學者たるの故を以て、平凡なる古參議員が彼に向つて偏狹なる姑根性を示したことに對しては、强き反感を起さずには居られないのである。

第四十議會の今日までの經過は、明かに政局の行詰りを語つて居る。超然內閣はその財政計畫を無慘に切斷せらるゝことに依つて、衆議院に眞に賴りになる與黨を有せざる苦味を十分に嘗めた。今期議會の初頭に於て早くも政友會に對して妥協の餘地あることを仄めかした勝田藏相は、衆議院の多數が財政計畫を散々に修正したもの丶、酒稅、戰時利得稅、及び所得稅に關する三案を容れたがために、幸に現內閣の施政の眼目たる國防計畫遂行に支障を生ぜざるを得た故に、之と妥協したものであることを揚言して居るが、その國防計畫なるものは、各政黨共之を不完全不徹底極まるものと見做したけれども、只將來の完成を條件として之を認容したものであると聲明して居る所のものである。加之、現內閣の財政計畫の原案は、その就任の際に於て標榜した善政主義を具體化したものとして、可なり重要なるものであつた筈である。然るに國防計畫には非常なるケチを附けられ、財政計畫には多大の修正を施され、斯くて事實上十分なる不信任を表白せら

れ、且つその閣員の二三は政治道徳的責任問題の焦點の上に立つて居るがために、普通の場合ならば、疾くより致命傷を受けて居るべき筈の寺内内閣が、氣息奄々として居ながらも尙ほ一脈の露命を繼ぎ得る所以のものは、偏に現下の不自然なる政局に負うて居るものである。

若し夫れ現内閣の外交上の施設は、その最大弱點を構成して居るものであることは、外間よりも直に窺知し得らるゝことであるが、此點に於て憲政會より猛烈なる攻擊を受けながらも、外相始め各閣僚が比較的悠長に構へて居られるのは、是れ偏に外交調査會の關係上、政友會及び國民黨の支持を有して居るためであることは、改めて言ふまでもない。

併し乍ら外交上に於て寺内内閣を支持する政國兩黨が、その他の諸點に於ても徹頭徹尾之を擁護するものならば、寺内内閣の天下は最も泰平であるが、事實に於て此兩黨が「主義に於て」寺内内閣を否認することに功を爭つて居るのは、極めて興味ある現象である。世人が寺内首相の頃日の病氣が單なる風邪のためのみに非らざることを邪推するのは、決して無理とは謂へないのである。

政友會及び國民黨が「主義として」寺内内閣に反對する一致點は、憲政會と同じく、その成立の基礎に關してである。此點に關して三大政黨が一齊に飽くまで超然内閣たる現政府を攻擊して餘す所がないのは、一は過去に於ける政黨發達の歴史にも基因して居るが、一は將來の國民の輿望の收攬にも關係して居る。この事は無論我國民間に漲溢せんとして居る政治思想の底流の方向を暗示して居るものである。

現政府の財政計畫に關しては、國民黨は社會政策の名の下に、政府の五税案に賛成し、他の五税案に反對し、政友會は纔に三税案を容れ、その他を排斥し、憲政會は只單に條件附に戰時利得税を認むるのみといふ風に、三大政黨の態度の間に多少の程度の差異があつたが、要するに何れの政黨も全然政府案を是認して居るものはない。而して此間に在つて政友會が首尾よく

自黨の主張を貫徹して議院の内外にその威力を示したのは、全くその院内に於ける數の優勝に依るものである。

斯の如く三大政黨が一齊に國防計畫に於ては政府案を通過しながらも、之に不完全不徹底の極印を打ち附け、財政計畫に對しては之に根本的修正を施すことに依つて、立派に寺内内閣に對する事實上の不信任を表白したにも拘らず、憲政會が後れ馳せに提出したる形式上の不信任案に對しては、他の二大黨が共に之に反對したのは、我國ならでは到底見ることを得べからざる憲政上の奇現象である。不徹底、矛盾、撞着は、決して官僚政府の專有物ではないのである。

政國兩黨は彼等の態度を辯護して、重大なる時局の前に政變を反覆することの不可なることを論じて居る。けれども理屈は附け樣に依つてどうにでもなるものである。されば時局が左程重大であるならば、彼等が信頼せざる内閣を破壞して、更に强固なる内閣を建設すべきであるとも謂へる。否、斯く謂ふ方が更に合理的である。問題は只寺内内閣よりも更に强固なる後繼内閣を如何にして建設すべきかの一點に在る。

政黨は次第に大なる政權を獲得し、且つ益す多く財權に接近しつゝある樣になつたけれども、兵權に對しては全然無關係である。然るに平時に在つてもさうであるが、殊に現今の如き軍國多事の秋に際しては、我國の政黨には到底軍閥を統御して政權を行使する實力なきことは、平明の事實である。是れ此際政變の來るべくして來らざる事實の最大原因ではあるまいか。

加之、最近喧傳せらるゝに至つた鋼片問題は、官僚政治家にも痛撃を與ふると同時に、各政黨にもそれ〴〵創痍を加ふる可能性を有して居ることは、此際それが政黨の勢力を抑制する程度は、恐らくそれが官僚政治家の勢望を損傷する程度以上に出づるであらう。政黨の翹望する政黨内閣の出現を妨害する要素の一つは、政黨自ら之を作りつゝあることも亦注意して觀察すべき所である。

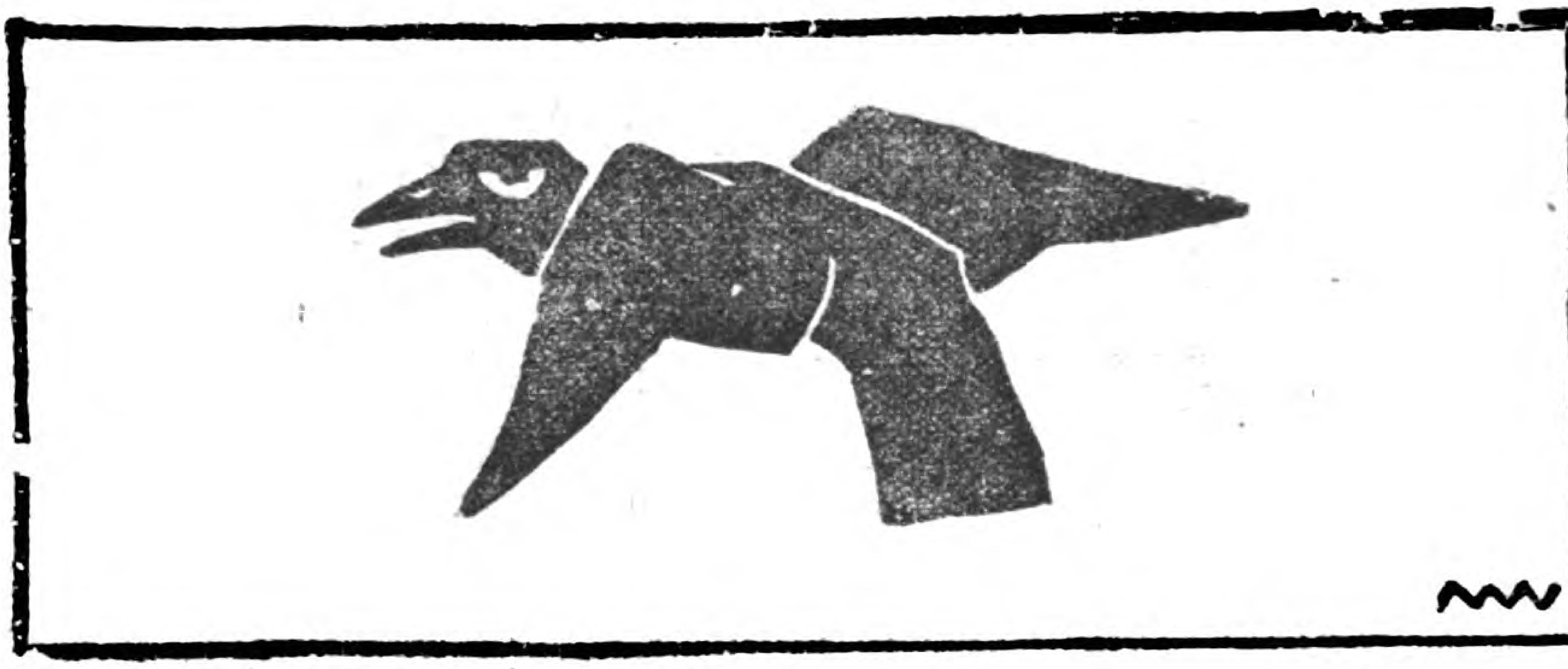
與黨の嚮背の賴みにならぬことに加へて、現内閣

唯一の御用黨たる新政會の分裂した事は、來るべき政變の時期を早めるものであると噂されて居る。寺内内閣の影が薄いとは、専ら巷説に上つて居ることは事實であるが、誰しも、その後繼内閣の問題に躓かざるものはあるまい。理論上政友會内閣の出現が順當であるとも謂へるし、原加藤の聯立内閣が望ましきものであるとも謂へる。けれども我國の政治關係の現實は、斯の如き單純なる理論を容易に實現することを許るさゞるものが多々存在して居る。觀じ來れば我國の憲政の前途も極めて遼遠であると謂はねばならぬ。併し乍ら來るべきものは、遂に來らねばならぬ。否、如何なる手段を用ひても、寸刻も早く來らせねばならぬ。此點より言へば、我國の憲政上の戰士の負擔は、決して容易ならざるものがある。而かも彼等に取つて最も必要なるものは、憲政の終極目的に對する徹底的理解より生ずる信仰と、勇氣と、希望と、執着力と、耐久性とであらねばならぬ。

附記。　筆者は本月の上旬より最近まで關西旅行をして居たために、落ち附いて評論を書く餘暇を有しなかつた。是れ今回の分が文字通りに一夜作りの雜駁なる印象批評となり了つた所以である。自分の裏情を割つて言へば、斯の如き粗漏千萬なる原稿を印刷に附することは、極めて心苦しいことであるが、發行者に對する約束も履行しなければならないから、進まぬ乍らも之を引渡した次第である。切に讀者の諒恕を乞ふ。

（七―一一―二一）

（中付二の五）



敍事詩劇

サラセンの王宮（四幕六場）

河野義博

人物

アラビヤ（サラセン）國王　ワリド
王子（王の甥）　ワサ
王兄（ワサの父）　ムサ
王妃　フアチマ
宰相　ラーマン
印度總督　カアシム
王子の老僕　アリ
印度王女　プルムーラ
同　ララ
其他宦官武士牢番舞妓侍女等

場所

アラビヤの首府ダマスクの宮殿

時代

西紀　七一五年

第一幕

第一場

ダマスク宮殿の廣間。舞臺の上手寄に王座、其上には天蓋が垂れる。王座と向合つて下手に王子ワサの座。後方はサラセン式の廊で柱列の間から美しい庭園が見える。入口は其廊の中央と下手、王子の座近くにある。時は春の宵、生温い風が廣間の隅に垂れた帳をゆすつて芳しい花の香を送る。廣間の中央には大きな紫水晶の燈架を釣り其中には香油を燃やす。燈架からは美しい金銀の網を張つてそれには種々の花が掛けてある。床には美しい繪模様のダマスク絨氈が敷いてある。王座に近い大香爐には盛に沒藥が燻つてゐる。國王ワリドは五十位、酒太りの醜爛した肉體、怪しく黒光りのする目。並んで坐した妃ファチマは三十に近く意地惡るさうな目付をした女。王子のワサは二十位、聰明で冥想的な貴公子。階に控へた老僕のアリは六十に餘る律儀者。其他には宰相のラーマンと印度から呼寄せられたカアシム、黒い顔をした宦官など。幕の上つた時眞紅の衣をまた三人の舞妓と眞青な衣をきた二人の舞妓とが侍女等の彈く琵琶に合せて媚の舞を舞つてゐる。侍女等は彈きながら歌ふ

火がもえる
蛇の舌から女の胸から
青い火赤い火
思の火
誰を燒く
仇し男を
仇し女子を
戀のむくろを

時々間の手に太鼓を打込む。

踊と歌と殆んど同時にやむ。ワリド王は手にした酒盃を置いて

王　うむ面白い。仇し男を燒くか――ハ……（頸飾の寶玉をとつて）當坐の褒美だ。とつておけ。

舞妓の一　（進んで受取り）誠に難有う御座います。

王　（好色の目付きで其顔を見）お前は美しいなハ……（妃を顧みて）お前も何か褒美をやらんか。

妃　（少し嫉妬の起つた様子で）あれしきの踊に何の褒美が入りませう。その褒美でも勿體ないほどです。

王　お前には踊が分らんと見える。妃になる前はお前

も踊を踊つて予の氣に入つたものだが。こりや舞妓共退がらずともよい、(盃をとつて)美しい女子を見るのはよい氣持だ。ことに處女であれば猶更のことだ。女がいつも若く美しかつたら神樣は入らぬ。わしはその女を神と思うて仕へてゆく。

妃 あなたは馬鹿らしいことばかり仰有います。少しはお愼みなされたがよう御座います。

王 氣に逆らつたかな。ハ……(王子ワサの方に向いて)こりやワサ、今夜の酒宴はお前のために開いたものだ。樂しくすごしてくれ。久しく此處を離れてゐて歸つてきても故郷のやうの氣もすまい。お前が此城を出てもう何年になるな。

王子 十年近くなりませう。

王 早いものだな。お前達にもいかい苦勞をかけた。予は國を奪はうと思うてしたことではない。あのまゝにして置けば兄上はどのやうのことを爲さるか知れぬ。お妃に亡くなられてから兄上は氣が狂るはせられ、あのまゝにして置いたら折角四海に雄飛した此アラビヤが滅びたかも知れない。それで家來どもとも相談して罪深いことではあるが、兄上を位から下し予が代つて王位に上つたのだ。惡く思うてくれるな。わしは皆んなアラビヤのためを思うてしたのだ。ワサ、予はお前の叔父だ。お前に害を加へやうなどとは夢にも思はぬ。此年になつてもわしには子がない。お前の所在を尋ねて呼寄せたのも予の跡を繼がせたい心からだ。お前は兄上の忘形見、これからは予の子になつてアラビヤ國の王位をついでくれ。決して思違をしてくれるな。

王子 叔父上のお心は難有く存じて居ります。あの時は年もゆかず、何やら、たゞ恐ろしいことに思つて爺と一緒に拔出したので御座います。これからは決して心得違はいたしません。

老僕 王子樣をお連出し申したのは皆なこの爺が仕業で御座ります。王樣お許しくださりまし。あの折はたゞもう御謀反のことゝばかり合點して、このまゝにしてゐたら王子樣の御身も危なからと前後の思慮

もなくこのお城を抜出し、一先づバグダードの知邊に身をかくし、そから此處に一年彼處に一年と彷徨の年月を送りました。

王　いかい苦勞をかけたな。予も近頃年の故か世嗣のことが氣にかかつてゐる矢先、メッカの巡禮から歸つてきた僧の口からお前達のことを聞き、早速人を遣はして呼戻したのだ。これも神樣の御手引だ。ワサ予を實の父と思うてくれ、わしはお前を實の子と思ふてゐる。

ワサお前は涙ぐんでゐるな。

王子　何もかも夢のやうで御座います。長い間の漂浪やら今の身の上を考へると、人間の運命といふものが不思議でなりません。それで何やら涙ぐまれるので御座います。

王　さうでもあらう。併し人間は運命の開拓者にもなれる。わしなどはさうだ。運命は意地の惡い荒馬のやうなものだ。乘手次第で言ふことも聞くし振落しもする。併し高が馬だ。御せぬといふ筈はない。お前は長いことメッカにゐたか。

王子　二年あまり居りました。あすこは靜な神の國です。砂漠に立つて星の光を眺めながら人生を思ふと、神の力の偉大さ、自然の不思議さに心戰いて、私は砂漠の土に身を投げ、たゞ泣いて見たう御座いました。

王　お前は優雅い心をもつてゐるな。併し人間は神樣ばかり讃仰てはゐらない。神樣は空氣を淸める香油や香料と同じだ。心の曇つた時信心すると邪念がとれて心が澄む。其外には餘り効能はないものだ。

王子　でも叔父上、一度はメッカへ御參詣なさるがよう御座います。そして椰子の木影に美しい夕星のかげを眺めながら砂漠の夜を御覽なさるがよう御座います。

王　砂漠の景色も面白からう。併し、わしは自然の景色や神參よりも人間界の快樂の方が好きだ。わしの尊ぶものは此世の權力、帝王の豪奢だ。その權力を彌ケ上にも大きくして思ふがまゝの快樂に耽つて見たい。酒もよい。女もよい。踊も歌もよい。

快樂は權力の侍婢だ。權力のあるところ快樂は必ずついてくる。右の手に權力、左の手に快樂を握つて國王の座に坐つてこそ男と生れた甲斐がある。財寶の國と言はれた印度も去年から予の領地になつた。印度を征伐したのは其處にゐるカアシムだ。わしはカアシムに禮をこそ言はねばならぬ。カアシムは忠義者だ。お前が謀反を計るなど、、ハ、、、、信ぜられぬことだ。

カアシム　仰の通りで御座います。この私が何の不平があつて王樣に御謀反など、思もつかぬことで御座います。私も俄に御召喚の御命令をうけました折は一向に合點がまゐりませなんだが、察するに誰か私の功を妬む者があつて王樣に讒言したものと見えます。

王　併しそのやうの風說を耳にしたからは一應實否を正さねばと思うて召寄せたのだ。もう疑も晴れた。わしの爲めに忠勤を勵んでくれ。わしは正直の者が好きだ、正直は鐵のやうのものだ。融通はきかぬが、これさへあれば安心が出來る。今夜は目出度い祝の席だ。さあ改めて樂しく飮まう。皆の者、わしとワサの爲めに祝盃を上げてくれ（盃をとる）こりや血のやうに赤いキプロスの酒をなみ〳〵とつげ（侍女注ぐ）ワサお前の爲めに飮むぞ、皆も飮め。

一同　（盃をあげて）國王萬歲、王子萬歲（飮む）

妃　あなたは私のためにも盃をあげてくださるでせうね。

王　うん飮まう。皆、妃の爲めに盃をあげてくれ、（一同盃をとる）

妃　待つておくれ、私は血のやうな赤いお酒は嫌だ。私はあの黃金のやうなお酒が好きだ。カアシムの土產の黃ろいお酒が好きだ、（宰相に目配ばせする、宰相は侍女に其意を傳へる）

王　さうだ、予は忘れてゐた。こりや、カアシムの土產の酒をもて。何とやらいうたかなあの酒は。

カア　印度ではソーマと申して居ります。貴い五穀の

精を搾つて作つた靈液だと申すことで御座います。

王　ソーマか。黄金の國といふ印度では酒までも黄ろいと見える。凡て物の美しさは色と匂にある。わしは酒をのぞいては香油と女が好きだ。この二つはわしの目と鼻を樂しませてくれる。イヤそればかりではない敬虔の心をさへ起させてくれる。もつと香を炷け、香油を燃やせ、(盃を取上げたが下に置き)イヤ々々黄ろい酒ならば同じ色の琥珀の盃で飲まう。あの盃は海の上の月のやうに透通る。もし酒に毒でもあると直ぐ色が曇る。私の御先祖があの盃のために野蠻人のすゝめた毒酒の難を免れたことのある貴い盃だ。あの盃をもつてこい。それはさうと、プルムーラはもう來さうなものだ。

カア　(獨言のやうに)　プルムーラ——

王　お前が印度を從へた折わしの吩咐で送つてよこしたアロルの王女だ。これからわしの妻にしやうと思ふ、イヤ妃にする心だ。印度の野邊にさくといふ雛芥子のやうの乙女、まだ此世の雨風にも遇らたことのない蕾の花だ。あゝ男を知らぬ女は貴い。

妃　あなたはプルムーラを妃になさるのですか。

王　妃にする。アラビヤの國王は教祖の定に從つて四人迄妃をもつことが出來る。プルムーラは生れたまゝの處女だ。予には男を知らぬ清淨さが貴い。おゝプルムーラが來た。(プルムーラ美しく着飾つて後方の廊から入る、侍女一人その裳をもつ)プルムーラずつと近く寄れ、もう俘虜の身ではない。アラビヤ王の妃だ。此處へきて予に並んで坐れ(プルムーラ王の隣に坐す、十六歳ばかり、豊艶な肉體に玉虫と海老色の衣をつけ黒く大きな目をもつた印度の女)

王子　(プルムーラを熟視してゐたが思はず獨言)　よく似た女だ!

王　これプルムーラそのやうに伏向かず、もつと面を上げろ、花のやうな顔色もうつむいては眺められん。

妃　(聲をとがらせ)　さあ皆私の萬歳を祝うておくれ。

王　おゝこれは忘れてゐた　(持つて來た琥珀の盃を取

上げ）酒を注げ（侍女注ぐ）カアシム、お前の土産のこの酒は嘸よい味がするであらうな、（飲まうとしたか俄かにやめて盃を凝視し）うむ、此酒は濁つてゐるな――イヤさうではない、こりや琥珀の盃が曇つた！（俄かに聲を荒らげ）毒を盛つたな（一同驚ろく、妃と宰相が顔を見合せる。王は酒を注いだ侍女を睨んで）こりやそこな女子、お前は予(わし)に毒をもつたな。

侍女 （慄えながら） 王様私は毒など盛つた覺えは御座いません。

王 默れ、盛つたに相違ない、それでなくてこの琥珀の盃が曇る筈がない。

侍女 私は一向に存ぜぬことで御座います。

王 きつと知らぬといふか。

侍女 ハイ 王様、

王 誰か謀反人があると見える。お前の盃を見せろ（妃の盃をとつて見る）この酒はこのやうに澄んでゐる。毒を盛つたに相違ない。こりや女子、盛つた覺えがなくばこの酒を飲め、（盃を突出す）

侍女 王様私は一向覺えは御座いません、お許しなされてくださいまし。

王 エヽ飲めというたら飲め、不埒者め。こりや、あの女めにこれを飲ませろ（侍士盃をとつて逡巡する）何をグヅ々々する、王の命だ。口を開けて注込め、（侍士無理に侍女に飲ませる）

侍女 お慈悲で御座います。王様、アレお許しなされて――

妃 あなたは殘酷(むご)いことをなさいます。許しておやりなさい。

宰相 恐れながら王様、そのソーマとやら申す酒はカアシム殿が印度から持參された品で御座います。誠忠なカアシム殿の獻上物で御座いますれば、其中に毒など含み居る筈もなからうかと存じます。

王 イヤさうでない。世の中は決して安心は出來ぬものだ。樂しい夫婦の床の中にも短劍が潛んでゐることがある。氣をつけねばならぬ。

宰相 成程左樣に承りますれば世の中は心の許されぬ

ものて御座います。（王の氣を引くやうに）それについて思當らぬことがないのでも御座いません。

王　お前は何か心當でもあるのか？

宰相　と申すわけでも御座いませんが――（わざと氣を引くやうに）世の中は兎角間違の多いもの故噂などいふものは餘り信ぜられぬものでは御座いますが――

王　お前は謎のやうのことをいふな。何か聞込んだことがあるなら正直にわしに言うてくれ。

宰相　御覽なされ王樣、女めがソロ〳〵苦しみ出しました。確かに毒を盛つた者があるに相違御座いません。ひよつとしたら手前の推量が――

王　お前はわしに何か隱してゐるな。知つてゐることがあるなら早く言うてくれ。

宰相　これは私が粗忽で御座いました。この胸の中に藏つて置くべきことを遂口に出し王樣のお心をまでも亂しました。御免なされませ。併し王樣、惡事は私が申上げずとも自然と現はれるもので御座います。誠忠だ忠義だと言ふて心は許されません。お妃樣は何と御思召されます（意味ありげに妃を見る）

妃　お前の言ふ通りだ。その酒はカアシムの獻上品、一應調べて御覽なさるがよう御座います。

王　（言葉を怒らせて）カアシム、お前の土產の此酒に毒があるとは何事だ！罪は免れぬぞ。

カア　恐れながら王樣、これには深い仔細のあることに相違御座いません。私は一向に存ぜぬことで御座います。

ブル　（苦しんでゐる侍女を見てゐたが、カアシムの言葉に氣がついて其顏を眺め、忽ち忿怒と怨恨の情に燃上り）おゝ惡魔！

王　（驚いて振返り）ブルムーラ、どうした？

ブル　（それには答へず忿怒の血相すさまじく）惡魔！あの惡魔めが――（立上つて詰寄せさうな樣子、皆々驚く）

王　惡魔とは誰のことだ。

ブル　（カアシムを指し）國を滅し、親達を殺し、そ

して私を、私を――(情が激して身體を慄はす)

王　どうした、プルムーラ、

妃　カアシムが何か惡いことをしたに相違ありません。

王　カアシムがお前をどうした？

プル　私の國は彼奴の爲に滅ぼされ、父上や母上は非業の最後をお遂げなされ、そればかりではない、あの惡魔めは私を捕へて――

カア　プルムーラ様、いえ、アラビヤのお妃様、私は――

王　(聲を怒らせ)お前は默つてゐろ。プルムーラハッキリ言へ

プル　考へても恐ろしい。血に塗れた母上の屍の前で私を組敷いて、あのやうな恐ろしいことを――

王　なに、カアシムがお前を――

プル　辱しめました！(悲痛な涙を流す、王は猛然としてカアシムを睨み)

王　おゝ己れ！あゝ遂今迄淸淨の乙女と思うてゐたに――己が散々弄んだものをわしに薦めるとは憎んでも足らぬ奴！謀反を企んだといふ噂も嘘ではあるまい。そして今の毒酒！　カアシムに繩をかけろ。

カア　王様、もつての外のことで御座います、私が謀反などゝ！

王　ゑ默れ、ソーマの靈液だなどゝ詐つて予を毒害しやうと計つたのは汝に違ない。あの苦みを見ろ、顏も紫色に變つて彈丸に當つた獸のやうに展轉ちまはる様を見ろ、己が罪の恐ろしいことが分らんか。ラーマン、謀反を計つた惡人とはカアシムに違ひあるまい。(毒酒を飮まされた侍女は斷末魔の苦悶)

宰相　誠に驚入つたことで御座います。

カア　王様私が何のお恨みがあつて此様な恐ろしい企をいたしませう。これには深い仔細のあることに相違御座いません。陰謀の原をたゞさねばお身の上が危なう御座います、私が謀反などゝ――

王　默れ、己が罪を棚に上げて人事らしく言う憎い奴、早く繩をかけろ、どのやうの惡事を働くか分らぬ奴だ。(武士カアシムを縛す)

カア　私は繩などかけられる覺はありません。王様を

王　毒害しやうなどゝけもないよ、誰か謀反を企む奴があつて其罪を私に著せやうとするので御座います。

王　まだ言ひくるめうとするか、（倒た侍女を指し）その證據を見ろ。コーランをもつて來い。

カア　お慈悲で御座います王樣。

王　惡人に慈悲は入らぬ。入るものは死ばかりだ。

カア　王樣御賢察下さい、私は二十年の間劍戟の間を往來してたゞアラビヤの爲に、王樣のために身命を擲つて御奉公いたしました。去年印度の戰には此身にも數個處の傷を負ひ、（左の足を投出し傷跡を示して）この通り足に殘つた傷跡が戰の苦勞を語つて居ります。世の中には正しい目はないか。お情なう御座います王樣。

王　白々しい奴め、己が罪の恐ろしさが分らんか。予が今、裁いてくれる。

カア　お慈悲で御座います王樣——

王　（象牙の臺にのせたコーランを取上げ、恭しく額づいて祈を上げる、一同跪く）　慈悲仁慈におはします神の御名を唱へまつる。讃ふべきかな御神、天地萬物の主、愛憐仁慈に厚く永劫の世の裁斷の主、われら主にのみ御救濟を願ひまつる。われらを導きて邪路に踏迷ふことなからしめ給へ、彷徨の群に混じ戾天の徒と共に行くことなからしめ給へ。われらを正しき道に導きまたへ、

ラ、イラー、イル　アラー

モハメット　レゾール　アラー

（最後の二句を一同聲を揃へて和す。王はコーランを開き刑罰の條を見る、聲を嚴かにして）

神の仰だ、カアシムの首を斬れ。（コーランを閉ぢる）

カア　無慈悲だ。天にも地にも神はないか。お恨み申します王樣。

王　自業自得と諦めもせず恨むとは太々しい奴め、それ早く首を刎ねろ。

宰相　御言葉にそむいては恐多う御座いますが、此處は王子樣御歸國の目出度い祝の席で御座います。斯樣な喜の席に血を流すも如何かと存じますれば、カ

アシムは私にお下げくだされたう御座います。

王　さうか、それならば引出して首を打て。あゝ折角の興もさめてしまつた。今一度席を改めて飲みなほすことにしやう。プルムーラ今夜は退れ。フアチマ奥へ行かう、舞妓(まひこ)も來い。（立上る）

妃　私は何やら心が晴々しました。さ參りませう。（王は皆を從へて下手から去る、宰相は武士と共にカアシムを引立てゝ侍女の屍を運ばせて廊から去る）

プル　あゝ仇がうてた、お父樣やお母樣の仇がうてた。早く行つてラヲを喜ばさう。（廊から去る、ワサは其後姿を見て考込んでゐる。老僕は氣遣しさうに傍によつて）

老僕　もし王子樣、何を考へておゐでなさります。

王子　爺、私は恐ろしくなつた。あの靜かな砂漠の中から歸つて來て見れば此城の騒がしさ、恐ろしさ、樣々な陰謀や暴逆や嫉妬や悲みやらが漲つて魔宮殿とも思はれる有樣、今も今、ただ一杯の酒のために二人の人間が死んだ。何といふ恐ろしいことだらう。

老僕　併し王子樣、かうして御歸城(おかへり)なされた上からは、さういふ諸々(もろもろ)の惡事を除いて世を泰平にお治めなさるがあなた樣のお役で御坐ります。シッカリなさらねばいけません。

王子　（考込んで）罪惡の横行(はびこ)つた宮殿の中に花のやうな乙女がゐる——爺お前は先へ行つてやすむがよい。私も後から行く。

老僕　左樣で御坐りますか、ならばお先へ御免蒙りまする。だがなあ王子樣、必ずともにお氣を丈夫にお持ちなさりまし、事物(ものごと)は餘り深くお考へなさるものでは御坐りません。これから此國はあなた樣のもので御坐ります。俺(わし)も長年の苦勞がやつと實を結んで、今夜のやうに嬉しいことは御坐りません。（ワサの肩に手をかけ孫にでも言うやうに）なあ王子樣、此上は爺が死ぬ迄にお妃樣をお迎へなされて、玉のやうな和子樣を此爺に抱かせてくださりまし。それがもう此爺が冥土への土産で御坐ります。さう言へばあのメッカのお娘御のことはサラリとお忘れなさるが

よろしう御坐ります。長い間のお馴染ゆゑ嘸思慕に引かされもなさらうが、そこをよう諦めさつしやつてなあ――

王子　爺そのことはもう言つてくれるな。

老僕　これは爺が惡う御坐りました。折角忘れてゐなされたものを餘計の口を叩いて申譯御坐りません。年をとると愚痴が多くなつて入りもせぬ取越苦勞までいたします。御免なれまし。そんなら王子様、おやすみなされまし、(未だ心配さうに)必ずともにな――

(去る、王子は廊の柱に凭れて)

王子　懷かしいメッカへはもう行けんか――それにしてもブルムーラとやらは、よくあの女に似てゐる。

(考込む。奥で踊の歌、太鼓や琴の音)

――幕――

第二場

カアシュの繋がれてゐる牢。舞臺の上手に階段。それを下りて右へ折れると牢の入口。鐵の扉には錠が下りてゐる。幕の上つた時牢番は階段の下に腰を下ろし、カアシュは繋されたまゝ牢の壁に凭れて首垂れてゐる。宰相を先きに布で顏を蔽つた妃が灯をとつて階段を下りてくる。

宰相　(牢番に)　これこれ扉をあけろ。(牢番は宰相と妃を見て驚きながら腰の鍵をとつて錠を開ける、宰相は妃に、入れとの意味で手眞似する、妃一寸内の様子を見、それからを灯をとつて入る。)お前は階段の入口で番をしてゐろ。お妃様が手を叩いたらわしに知らせるのだぞ。(宰相は牢番を連れて階段を上り去る。カアシュは入つて來た妃を見て驚き立上らうとする、妃制して覆面をとる。)

カア　お、お妃様――

妃　私はお前に話があつて來た。(壁に灯をかけ)此[illegible]身になつてお前も嘸口惜しからう、私はよく察してゐるよ。

カア　お妃様の前ながら王様が恨めしう御座います。

妃　今更ながら非道な王様、連添ふ私でさへも恐ろしいと思ふことが度々ある。あの癇癖な好色家――お前は嘸ぞ無念だらうね。

カア　餘りと言へば無道な爲されかたで御座います。お妃樣、あなたのお力でお助けくださいませんか、御恩報じは必ずいたします。

妃　（聲を蜜のやうにして）眞實私はお前が可哀さうでならない。お前の縛られたその姿を見ると涙が出る、私の身もいつかお前のやうになるのかも知れない。私はもう王樣に捨てられたのだ。（わざと落膽した樣子）

カア　と仰有るのは何故で御座います。

妃　捨てられたと同じことではないか。王樣はあの印度の女に心を移して私をば振向きもしない。お前だけは私の心を察してくれるだらう。兄の王樣を幽閉めて國を奪つた横道者、此儘にして置いたらお前のやうな忠義の者は皆な退けられ、惡人ばかり世にはびこり、長年盡したお前の赤誠も泡となつて印度も人手に渡つてしまはう。お前は殘念とは思はないかへ。

カア　無念とは思ふものの致方がありません。お妃樣、あなたのお力でとうぞ命の助かるやう、御前を取りなしては下さいませんか。

妃　今もいふ通り私はもう、あの人の寵愛を無くしたもの。願つた處で聞届けては被下さるまい。命が惜しくばお前自身で助かるやうにするがよい。私も出來るだけのことはしてやらう。

カア　（悄氣て）と言つて今となつては、どうすることも出來ません。此繩目さへ解けたなら又方法もありませうけれど――

妃　と言ふと手足さへ自由になれば、それでよいといふのかへ。

カア　さうすれば私は此城を拔出して――

妃　拔出して？

カア　印度へ走り（急に心付いて口をつぐみ）イエ〳〵そんなことはしません。

妃　ホヽヽ隱さないでもよい。お前は印度へ走つて兵を集め此恨を報じやうとするのだらう。あゝそれでこそ、ほんとにお前だ。私はお前に加擔して一緒

に私の恨を晴したい。だがよく考へて御覧、お前が印度へ行かぬうちに、あの人は屹度お前を捕まへるよ。そんな危険いことをするよりも復讐する心があるならば幾程も手近な道がある。（氣を引くやうに）明日とも言はず今でもある。お前どうだね。さうして見る氣はないかへ。だけれども、お前の心が確かでなくては、とても覺束ない。

カア （段々網に引込まれ）さう仰有るのはどういふことで御座います。

妃 お前の心さへ確なら言うて聞かせてやる。ねえお前世の中で勝つのは善人ではないよ。あの人のことを思つても分る、今の榮華の身になつたのも兄の王様を幽閉めて位に即いたからではないか。力量からいつたらお前の方があの酗飲者の王様よりは、ずつと上だ。そのお前も時と場合で此様な目に遇ふ——私はほんとうに氣の毒でならない。（眞から憐むやうに）縛られたその姿はねえ——涙が出るよ。

カア 世の中で強いものは力ではなくて位地です。私も自由に力が振へる位地が慾しかつた。

妃 お前の覺悟次第で位地はこれからでも得られるよ。お前ほどの男を犬死させるのは、ほんとに惜しい。誰も皆さう言つてゐる。目的を貫く爲めには善惡を覗ぬのが男だ。カアシム私が來たのはその爲めだよ。確く決心して私の言ふことを聞いてくれるなら、其の縄を解いてやらぬでもない、命が助からぬといふでもない——（網が段々深くなる）

カア 命が助かると仰有るは——？

妃 お前は今手足が自由になれば印度へ走つて復讐の兵を擧げると言つたね。（駄目を押す）

カア イエそれは——

妃 心配は入らぬ。此處は私達二人のことだ。其の覺悟のあるを見込んでこそ此様相談もする。ねえカアシム、その覺悟があるならば印度まで行くには及ばない。今直ぐ此處でやつたらどうだ——

カア 此處で——？

妃 此處で。誰の手も借りずお前一人で——

カア　（無言で妃の顔を見て考へる）

妃　思ふ度に腹の立つはあの人の癇癖と好色。お前も知つてゐる通り、元は私も侍女ではあつたが、かうして妃になつて見れば何時までも妃でゐたい。他の女に位地や寵愛を奪はれる位なら、いつそ死ぬか、それともお前のやうに先方を殺すか——取る道はたゞ二つだ。女が大事に思ふものは榮華と愛。カアシムお前はよく私の心を察してくれるだらう。

カア　それで、私に王を殺せと仰有るのですか。

妃　私の爲めではない。お前の爲めだ。かう打明けたからは、私の言通りにするがよい。後の憂は少しもない。叔父とはいふてもお父樣の仇だもの、王子もあの人をば恨んでゐる。却つてお前のすることを喜ぶだらう。

カア　（無言で考へる）

妃　考へてゐる處を見れば不承知か、（嚇してかゝる）それならば又それでよい。（立上つて）私にも考へがある。お前が謀反することはよく分つてゐる——（行かうとする）

カア　お妃樣——（止める）

妃　だが考へても見るがよい。人の命と自分の命とどつちが貴い。今夜限りで首を切られるか、それとも私のいふ通りにするか。どうせない命なら、恨を晴らすだけでも犬死するより增ではないか。（隱し持つた刀を出して）此刀を御覽。お前が生きるも死ぬもこれ一つできまるのだ。お前も野心のある男ではないか、潔くどつちとか返事をおし。

カア　（無言）

妃　あの廣い豊かな印度、お前が血を流して從へたあの國を人手に渡す氣か——カアシム、今のことは承知だらうね。

カア　あゝ命には代へられぬ！

妃　おゝそれでこそお前だ。それでお前の恨も晴らせる。（耳に口をよせ囁く）手筈は分つたらうね。（入口へ行つて手を叩く、宰相階段を下つてくる）カアシ

ムを出しておやり。さあ、ラーマンと一緒に行くがよい。手筈を違へないやうに。(宰相カアシムを從へて去る。入違つて牢番登場)これこれ、そこらに誰もゐないだらうね。

牢番　はい、誰も居りませぬ。

妃　こゝへおいで、(牢の內へ引入れる)お前に賴みがあるが聞いてはくれまいか。

牢番　身に餘ることで御座います。私にかなふことなら何なりといたします。

妃　お前は忠義者だ。賴みといふは外でもない。(耳に囁く)

牢番　へえ――ブルムーラ樣を――

妃　生かして置いては爲めにならない。今夜のうちに首尾よくやればお金は澤山やる。

牢番　後のお咎は御座いませんか？

妃　何の咎があらう。お前に迷惑はかけない。お金をどつさりやるよ

牢番　(嬉しさうに)へへお金をくださいますか。

妃　やるとも、(懷から金を出し)そら手附だ。

牢番　お情深いお妃樣、(金を數へながら貪慾な笑みを浮べ)お金、へへゝゝゝお金(頰擦する)・生御奉公しても此程のお金にはありつかぬものを――お慈悲深いお妃樣。お金へゝゝ

妃　此刀で殺すがよい。(刀を出して與へ)今夜のうちだよ、よいか。

牢番　畏まりました。共代りどうぞ後の半分をな。

妃　やるとも、他言は無用だよ。

牢番　充分心得て居ります。ではこれから直ぐにやつつけませう。(牢番去る。妃は殘忍な笑を浮べて後を見ながら)

妃　思通りに行つた。ラーマンも好色家、今のうちに無き者にして置かねと先きが案じられる。

(宰相のラーマンが階段を下つてくる、疑深い目で四邊を見ながら妃に近づく)

宰相　今迄何をしておゐでです。

妃　お前は一刻でも私から目を離さないのだね。(少し

腹立つた樣子）

宰相　油斷のならないお方ですから。

妃　それはお前のことだ。私はお前ほど氣が多くはない。

宰相　氣が多くなくてどうして私を手にお入れなすつた。ハヽヽヽ　それはさうとカアシムも甘々と謀に乘りましたね、

妃　毒酒には失敗したが此度は間違なからう。後で殺されるとも知らずに手先に使はるカアシムも可哀さうなものだ。

宰相　命の瀬戸際になると人間は白痴(うつけ)になる。アラビヤも印度も明日からは私とあなたのものです。世間の奴等は皆んな馬鹿なものだ。ハヽヽヽヽ

妃　でもあの王子は——

宰相　あんな靑二才が——少しも心配は入りません。

（二人は話しながら階段を上る）

——幕——

第二幕

プルムーラ姉妹の室。上手から少し斜に舞臺の中央まで突出す。前へに廊が附いてそれを上つてよき處に入口がある。廊の下は庭で夾竹桃や檸檬(レモン)の茂み。後方には睡蓮の池、其の向は糸杉の木立と黑い塔のかげ。同夜のこと。月は朧に照してゐる。プルムーラは妹のララと廊の柱の處で話してゐる。柱には鳥籠がかけてある。

ララ　姉樣、カアシムはもう殺されたでせうか。

プル　殺されたらうよ。これでやつと當の仇が打てた。今夜ほど嬉しいことはないよ。此上はあの國王を殺して思ふ存分國の恨を晴してやりたい。（ララを抱いて）ねえララ、姉樣はきつと、さうして見せるよ。この身體(からだ)と命を投出して乾度仇を打つて見せるよ。

ララ　（抱返して）さうなつたら、まあどんなに嬉しいでせうね。姉樣きつと仇を打つてください。そして早く印度へ歸りませう。

プル　歸らう。懷かしい故郷へ歸らうね。あそこにはお父樣やお母樣が埋つておゐでなさる。あの恐ろし

い戰の後、二人は敵の目を盜んでお父樣とお母樣の亡軀を、お城の裏の菩提樹の森に埋めた。(妹の手を取つて)お前と私の纖弱い手で穴を堀り御亡骸を埋めて土をかけた。(涙聲になる)あの折私は一緒に穴の中へ入つて死んでしまひたかつたよ。今頃はもうお二人とも土になつて堀返してもお姿は見えぬだらう、(二人は相抱いて泣く)殘つてゐるのは凝固つた怨恨を語る骨ばかり、あゝあのお恨は仇の血でなければ解けぬ。

ララ　姉樣！(縋付く)

ブル　あゝ私に力があるならば仇の血潮を雨と降らせ瀧と流してお墓場の上に灑がうものを。私達二人は手をとつて血潮の雨に醉いながら墓を廻つて踊狂ひ、倒れた仇の屍を踏みながら歡喜の歌を空までも轟かさうものを――女と生れた腑甲斐なさに此度に敵に捕はれて身の自由も奪はれては恨を晴すことも覺束ない。

ララ　姉樣私は毎晩神樣にお祈りしてゐます。早く仇のうてるやうに祈つてゐます。神樣はきつとお助けくださいます。

ブル　國は亡び親達は死ぬ。廣い世界にお前と私とが吹流された小舟のやうに生殘つた。毎晩お前の小さな身體を抱いてゐる時、私は心の底から二人の運命の淋しさを思つては泣く。私達は高い崖の上から突落され、途中に生えた一本の草にシガミついて生きてゐるやうなものだ。助けを呼ばうにも咽喉が涸れて聲も出ぬ。其中には草の根もゆるんでくる。私達は身體中を戰慄せ血の涙を流しながら苦しまぎれに崖に喰付く――それが私達の今の身の上なんだよ。(間)あゝそれにしても故鄕は懷かしい、今頃はお城の裏の菩提樹の森に月がかつて溫い夜の氣にマタビの花が芳しい氣息を吐いてゐるだらう。地に埋もれた人の恨も知らぬ顏に夜鳴鳥が夢のやうな歌をうたつてゐるだらう。

ララ　シリシャの花も咲いてゐませう。婆羅門のお祭も直ぐで御座いますよ。私は早く印度へ歸つて赤い

鳥のなくお城の森で遊びたう御座います。

プル　早く其日が來るやうに二人して神樣にお願ひしやうねえ。お父樣やお母樣にお願しやうねえ。

ララ　お祈しませう。此のお城はほんとに淋しい處ですねえ。姉樣もう行つて寢ませう。

プル　あゝ行つて寢やう、寢て神樣にお祈しやうねえ。

（二人戸の中に去る。塔の方から鐘の音、王子ワサ出づ。夾竹桃の下に立つて何か考へてゐる。室の中から低い哀れな歌の聲がする）

迦陵頻伽（かりようびんが）の鳥なく國は
朝も夕も鐘の聲
菩提樹の森、波羅密（ハラミツ）の園
野邊にや眞紅（まつか）な芥子が咲く、
北はヒマラヤ南はガンガ
象にのせられ廣野の涯を
吹かれ吹かれて旅行く先は
波斯（ペルシャ）アラビヤ魔法の國よ
雲は流れる故郷の空を
離れ行く身はいつ歸られう
赤い夕日は砂漠におちて
しよんぼり淋しい椰子のかげ。

ワサ　（恍惚と聞入つて）あゝ歌の聲、歌の聲！メッカの女もあんな聲で歌をうたつた。あゝ、過つて此思を打明けたい。（廊に近付く。戸が開いてプルムーラが出てくる。ワサは思はず身を退いて夾竹桃のかげに隠れる。プルムーラは柱の鳥籠を外し内に入らうとする。ワサは呼止める。）プルムーラ。

プル　（驚いて振返り）誰です。

ワサ　（前に出て）私だ、ワサだ。

プル　何ですか。

ワサ　私はお前に——話したいことがあつて。

プル　私に用などある筈はありません。（中に入らうと

する、ワサ追縋つて）

ワサ　待つてくれプルムーラ（プルムーラ立止る、ワサ近づいて）私はお前が――（感情が高まつて思はず取縋らうとしたが冷たいプルムーラの凝視に遇つて）そんな顏をして見ないでくれ――まあ腰を下して私のいふことを聞いておくれ、何から話してよいか分らない（プルムーラは奇異の感に打たれて鳥籠を持つたまゝ王子を見る、ワサは腰を下して）私は長いこと諸處を彷徨ひ歩いて種々恐しい思をした。私の故郷は此處ではなくてメッカだ。メッカで私は一人の女を知つた。僧の娘でアエシャといひ、お前によく似た女だつた。カアバの神殿へお參詣に行つた折ミナの溪で初めて知合ひ、それから互に思合つて樂しい日を送つた。私はたよりない自分の淋しさを忘れ、アエシャの愛に醉つて此二年を夢のやうに樂しく暮らして來た。このまゝに行けば私は何の悲しさも知らずに世を送つたものを運命は殘酷だ。アエシャは熱病の爲めに介抱の甲斐もなく死んでしまひ、私は此城へ歸らねばならなくなつた。

プル　（少し好奇心をそゝられ）どうしてゞす。（坐る）

ワサ　叔父の迎が來たからだ。今の王は私の叔父だ。まだ年が行かなかつたのでよく分らなかつたが父は叔父の野心の爲めに氣狂にされ（背景の塔を指し）あの塔に幽閉められた。今日聞けば父はまだ死にもせず、あの塔の中にゐるといふ。私は明日にも遇つて見たい。

プル　あなたは王の子ではないのですか。

ワサ　さうではない。お前と同じやうに誰をたよりにする人もない淋しい者だ。父上が幽閉された後は、あの爺の手一つで育てられ、誰といつて心を語る友もない。いつも一人ぼつちだ。長い間の漂浪の末に漸く戀人を見付けたけれど、今はそれにも死別れて又元の一人になつてしまつた。プルムーラ私の心を察しておくれ、私を愛しておくれ。

プル　（輕蔑したやうに）愛す――

ワサ　愛しておくれ、私の友達になつておくれ。さうすればこんな淋しさはなくなつてしまう。

ブル　（冷たく）　私は愛といふことを知りません。又そんなものは欲しくもありません。

ワサ　人生の一番美しいもの、生命のこもつたものは愛だ。愛は神の心の現れだ。人間はお月様のやうに何時までも一人淋しく生きてはゐられない。愛さなければならん。愛さなければならん。

ブル　私はその愛を捨てゝしまひました。愛されやうとも思はず、愛さうとも思ひません。何も仰有らずにお歸りください。（立上る）

ワサ　お前は何か思違をしてゐる。ブルムーラ、私のいふことを信じておくれ。私はお前をアエシャだと思つてゐる。アエシャを思ふやうにお前を思つてゐる。私は此處にお前の前に跪いて心の底からお前の愛をもとめてゐる。かう思ふ心に塵ほどの僞もない（跪く）

ブル　私は卑屈な眞似は嫌です。

ワサ　お前はわざと其樣な無情いことを言つて私の願を退けやうとする。自分の心を亂すまいとする。お前はほんとに愛といふものを知らないのだらうか、女の情といふものを知らないのだらうか。そんなことがある筈がない。お前の心の優和は姿に現れてゐる。私が眞心からいふことが分らん筈はない。ブルムーラその優しい心があるならば私を愛しておくれ。私の願を聞いておくれ。私は誠心になる時は毎時も涙が出る。私の目を見ておくれ。私を愛しておくれ。

ブル　私は涙は嫌です。

ワサ　お前は情ないことをいふ。併しそれはほんとの心ではない。お前は情を知らんのではなくて、わざそれを殺してゐるのだ。その温かな胸に起る優しい心に強いて冷たい水を注すのだ。ブルムーラこれほど思ふ私の心がお前には分らないか。誠の心には敵もない、仇もない。私を愛しておくれ、愛しておくれ。（ブルムーラの手に縋る）

ブル　（少し心が折れて）　私だとて情を知らないので

はありません。だけれども私はそれを知る前に無情な運命の手に苛責れて情も戀も思ふ暇なく大きくなりました。(段々氣が弱くなつて腰を下ろし)乙女心羞恥も柔和も無くなり、此世に對する憎惡ばかり先立つて温い心が持てなくなりました。夢見がちな乙女の胸に宿る戀の優和も樂しさも、私の心には生れて來ず、只夜晝となく胸に通ふは恨を晴らす念ばかり、復讐の血に醉ふ心ばかり。——

ワサ　そんな心でゐるのか。

プル　私は心を墓場へ埋めてしまひました。親達の亡骸と一緒に土に埋めて死神の手に渡してしまひました。二度と其處から出て來やうとは思ひません。私は愛すよりも憎みたい、復讐がしたい。どうかすると張詰めた此心も弛むことがあります。其時私は心に太い針を刺し、蛇の毒を飼ふ。此樣なことを續けてみたら心は張切つた箍のやうに自分と自分でハチ切れるでせう。それまでは生きてゐます。

ワサ　(自分の戀は忘れて)　哀れなお前の心！

プル　(怨憤の情に燃えて)　私は血を流したい。鐵槌を振つて水甕を折割るやうに仇の身體から熱湯のやうな血を流してやりたい。復讐の快味に醉ひながら血烟の中に躍つて其儘死んでしまひたい。アロルの戰に打負かされて無殘の死を遂げた幾千人の魂魄は、私一人の胸に宿つて恨を晴らせと叫喚きたてる。夜寢てゐると闇の中から恐ろしい物音が聞える。それはアラビヤ兵に切倒された屍がお城の眞白な階段を轉落ちる音だ。焔に閃めく刄の下を髮を亂して逃げまどふ女共の喚聲だ。其聲は打物の響と一緒になつて暴風に伴ふ雷のやうに鳴渡る。お城は恐ろしい血の雨に含まれて、お濠に咲いた白蓮の花も猩々緋のやうに赤くなつた。(呼吸を吐いて少し落付き)あゝ私は復讐の神の犧牲に生れてきたやうなものだ。どうかして免れやうと思つても、あのヒマラヤの山のやうなものが私の心に壓蓋つて身動きも出來ず氣息も絶々になつてしまう。私を思つて下さるなら此心を察してください。私を助けて心の重荷をとつてく

ださい。

ワサ　お前は恐ろしい女だ。豪(えら)い女だ。お前の言葉を聞いてゐると何時か私までが強くなるやうな氣がする。私はお前を助けてやりたいやうな氣がする。

ブル　私を助けてくださいますか。

ワサ　だけれども私の力で出來るだらうか。私は弱い男だ。とてもお前ほどの力はない。

ブル　あなたはアラビヤの王子ではありませんか。なさらうと思へばどんなことでも出來る筈です。私を愛してくださるなら私の力になつてください。私を此の苦しい哀の境遇から引出してください。

ワサ　どうすればよいのだ。

ブル　仇をとつてください。怨恨(うらみ)を晴らしてください。

ワサ　仇をうつ――

ブル　私が命を欲しいものはカアシムの外にまだ一人あります。あなたは其人を殺して私を印度へ歸らせてくださいますか――イエ／＼とても駄目だ。思もよらぬことだ。王子樣、どうぞお歸りください。もう何も仰有らずにお歸りください。

ワサ　私は歸らない。ブルムーラお前の望を言つておくれ、私はきつとする。

ブル　言つたとて出來ることではありません。私とあなたとは別の世界に住んでゐるのです。どうぞこれでお歸りください。（立上る）

ワサ　ブルムーラ私はお前を――

ブル　もう何も仰有らないでください。私は人を愛すことの出來ない女です。（戸口に行く、ワサ縋つて）

ワサ　ブルムーラ――（ブルムーラ振拂つて内に入る）可哀さうな女だ。（庭に下りて暫らく躊躇してゐたが吐息しながら去る。間。牢番出づ、四邊の樣子を伺ひながら戸口に近づき刀を拔いて戸を開けやうとする。ワサ後から牢番の足をとつて引倒す。牢番は不意を喰つて倒れる途端に刀を取落す。物音に驚いてブルムーラが戸を開けて出る。牢番は起上つて逃げやうとする、ブルムーラは着てゐた寢衣を引被せる。牢番は目を隱されて度を失ひ倒れる。ワサとブルムー

ラは上から押付ける。)

ブル　紐をもつておいでララ、紐を紐を、(ララ帶をもつて出る。ブルムーラはワサと共に牢番を縛し柱に縛ぐ。ワサは刀を拾上げる。)

ワサ　何しに來た。白狀しろ(牢番は無言、ワサは刀を突付け)さあ言へ、此麼刀などもつて忍寄つたのはブルムーラを殺さうとするのだらう。

牢番　全くもつて左樣の儀では御座いません。どうぞ幾重にもお慈悲をもつて此處のところはお見逃を願ひたう存じます。

ワサ　イヤ〱白狀する迄は許さぬ。ブルムーラ此男を知つてゐるか。

ブル　少しも知りません。私を殺しに來たに違ひありません。

ワサ　それに相違ない。これ有體に言つてしまへ。隱すとお前の爲めにならんぞ。何の爲めにブルムーラを殺しに來た。白狀しろ。お前の心でか、人に賴まれたか。言へ、言はねばかうしてやる。(刀を鼻先に突付けて脅かす)

牢番　申上げます申上げます。命ばかりはお助けてください、お慈悲で御座います。

ワサ　白狀するなら助けてやる。さあ包まずに言つてしまへ。

牢番　白狀いたせば此儘お許し下さいますか。

ワサ　許してやる。

牢番　それならば申上げます。先刻のことお妃樣が私をお呼びになりまして今夜の中にブルムーラ樣を殺すやうにと嚴重の御命令で――

ワサ、ブル　(同時に)妃が!

牢番　左樣で御座います。私に少しも罪はないので御座います。どうぞお許しなされてくださいまし。私は根が正直物で御座いますので、いつも惡い奴に瞞まされて飛んだ馬鹿の目を見るので御座います。今夜お妃から其事を仰付けられた折、私は幾重にも御辭退いたしたので御座いますが、是非ともしなければ許さぬと、嚇されるやら賺(すか)されるやらで遂々(とうとう)心に

もない惡いことをいたしました。それが證據にはその刀はお妃のもので御座います。王子樣プルムーラ樣命ばかりはどうぞお助けなされてくださいまし。

ワサ　プルムーラお前はどうしてお妃に恨をうけた。

プル　知りません。何の爲めに私を殺さうとするのでせう。

牢番　嫉妬で御座います。お妃はプルムーラ樣が王樣の御寵愛をうけてお妃樣になるのを妬んでゐるので御座います。惜いお妃で御座います。あの女は男好で嫉妬深くて手に終へぬ奴で御座います。私がよく存じて居ります。

プル　それに違いない。あゝ危ないことだ。

牢番　かう有體に白狀いたしました上は、どうぞ命ばかりはお助けください。お慈悲で御座います。

プル　（斷然と）私は許さない。

牢番　お情深いプルムーラ樣、どうぞ許してくださいまし。私は遂金に目が眩んだので御座います。決してあなた樣を殺さうなどゝ其んな曲つた心はもつて居りません。あの女に瞞まされたので御座います。プルムーラ樣お慈悲で御座います。もし王子樣、これ此通り血の涙でお願ひ申して居ります王子樣。

ワサ　助けてやれプルムーラ。

プル　私に慈悲はありません、此奴も仇の一人（ワサから刀を取り）覺悟するがよい。

牢番　（縮上つて）お、お慈悲で御座いますプルムーラ樣、もしそれではお約束が異ひます。プルムーラ樣——（プルムーラ牢番を斬る）

プル　あのカアシムも私の手で殺したかつた。ホヽヽヽ血が流れる。滅ぼされた國の恨は一人の血では償へない。王子樣先刻のお言葉は嘘では御座いません。眞實私を思つてくださることがよく分りました。此上には王子樣今一つのお願を聞屆けてくださいまし。

ワサ　願とは——

プル　（刀を差出して）私を殺さうとした此刀で——

ワサ　（無意識に刀を受取り）此刀で——

プル　あの女を殺してくださ い。

ワサ　妃を——

プル　私を思つてくださるなら妃を殺して此身の難儀を救つてくださ い。

ワサ無言でブルムーラを見る。ブルムーラはワサの前に跪く。

——幕——

第三幕

第一場

妃の室、同夜の深更、上手奥は垂帳で包んだ床、二隅に燭台、少し下手へ寄せ美しい氈をかけた寝椅子、少さな象牙の台、其上には腕飾などが置いてある。入口は下手前の方にある。それと反対の側に網格子の高い窓。幕の上つた時人影は見えない、暫らくすると宰相が下手入口に顔を出す、同時に帳が開いて中から妃が出てくる。室中を一寸見廻して去る。上手の燭が消える、ワサ登場、床に近付き帳を排して中を見、妃の居ないのに一寸怪訝た様子をして急足で去る。間。遠く鐘の音。微かな後夜の祈禱の聲。暫らくして妃が王を引いて入る。王は酒の疲れで眠さうな様子、妃の腕に凭れながら舌の廻らぬ口で

王　わしを何處へ連れて行くのだ。女共　そのやうにわしを嬲らないでくれ、お前は舞妓だな。お前の身體は蛇のやうにしな〳〵して豹のやうに力强い。お前の腕で抱締められると氣息が出來ん。——あゝ予は轉がりさうだ。これ〳〵もつとしつかり抱いてくれ。(王は躓いて倒れる) 轉んだ。確かに轉んだ。わしが轉ぶとアラビヤ帝國が轉んだやうの大きい音がするぞ。ハヽヽあゝ先刻喰べた七面鳥めがまた腹の中でグゥグゥ鳴いて居るわい。しぶとい奴だ。(妃は起さうとする) これ〳〵待て〳〵、腹の中で鴕鳥が踊を踊つてゐるぞ。こりや拍子をとつてやらずばなるまい (轆々たる腹を打つ。妃引起す) これ〳〵、わしを何處へ連れて行く。どうも今夜はひどく女に好かれる。奇體だな。身體の十ばかり慾しいものだ。いゝわしが起きるのはアラビヤ帝國が起きるのだから中々容易でないぞ、ハヽヽヽ (妃床に引いて行き帳を閉ざす) あゝ此處は安樂の國だ。帝王の國にも夜が來たと見える——(妃帳を出づ、安心したやうに四

邊を見廻し灯を消す、月の光格子窓より入る、妃去る。間。ワサ入る、月光をたよりに床に近づき劍を拔いて中に入り妃と思つて王を刺す、王の悲鳴、唸聲カアシム入る。床に近付かうとて出て來た王子と突當りさうになる。二人は驚いて劍を取直す。間、外で人殺々々と叫ぶ女の聲、續づいて人の馳違ふ足音。俄かに騷がしくなつて大勢の呼聲や足音が近くなる。武士や侍女を先きに妃と宰相が入る。宰相は武士に相圖する、武士はカアシムを捕へやうとする。カアシムは武士を切つて一散に逃出す。混亂。）

宰相　曲者が逃げた。カアシムだ。カアシムを捕へろ——（武士後を追ふ。王子は殺したと思つた妃のゐるのに驚き、劍を落して床に走り帳を開く、中には血のたれる王の屍。王子は驚いて倒れる）

ワサ　ヤツ　叔父上！

宰相　王樣が殺された、謀反だ〳〵。それカアシムを捕へろ、曲者を捕へろ、（王子は王の手をとつて泣出す。妃は落ちた血刀を拾上げ不思議さうに見る。）

——幕——

第二場

王兄ムサの幽閉されてゐる古塔の二階、同夜の明方近く。塔の內部は略五角形をなし正面後方の壁は龕になつて其中に異形の偶像、前には香爐等。眞中に柱が立つてよき處に鐘がかゝる。左手の壁に大きな窓が開き月光が流込む。右手の壁の一部は透かに退いて階段の降口になつてゐる。幕の上つた時王兄は柱の下に眠つてゐる。肉の落ちた頰、茫々たる髮、破れた汚い衣、見るからに憐れな樣子、年は六十に餘る。王子が階段を上つてくる。喪心した蒼い顏をしてオヅオヅ內に入り眠つた父の姿を見て感慨に堪へぬ樣子。靜かに父上と呼ぶ、父の眠はさめぬ、王子は搖起さうかどうしやうかと思惑ふ樣子、今一度父上父上と呼ぶ。父は覺めて茫乎とワサを眺め、

王兄　（力のない聲で）誰だな、わしに喰物を持つて來てくれる人か——

ワサ　（跪いて）父上。私で御座います。

王兄　（起きて、ワサを繁々眺め）ホーこれは珍らしい言葉を聞いた。父上？　わしのことを言うのかな。

父上？　かい、わしには子があつたかな？（立上る）

ワサ　さう仰有るのも御尤です。父上、久しくお別れしてゐたワサで御座います。

王兄　ワサ？　わしにも昔子供といふものがあつたと覺えてゐたが――慥にあつたに違ひない。わしの妃が時々腕に抱いてゐるのを見たことがあつた。

ワサ　父上その子供が私で御座います。ワサで御座います。

王兄　あゝ美しい妃！　わしが命よりも大事にした女、年もわしとは親と子ほども違つた故、わしは毎時も捨てられはしまいかと心配した。美しい女も、もう死んでしまつた。

ワサ　母上はお亡くなりなされても私はかうして生きてゐます。父上私がお分りになりませんか。

王兄　わしには妻もない子もない。人間にあるものは淋しい自分の命ばかりだ。運命の悲しさばかりだ。

ワサ　その運命が悲しう御坐います。私は運命に弄ばれ苛責まれて心の底まで深い傷を負ひました。今はもう此廣い世界に私を救つてくれるものは何一つありません。戀も運命の惡戯でした。弄ばれ傷けられた私に此上頼るものとては父上、あなたばかりです。（父の足下に跪いて）私はあなたのお胸に抱かれてこの苦しさを忘れたう御坐います。父上憫れんでください。私は誤つて叔父を殺しました。（ワサ泣いて父に縋付く）、

王兄　（怪訝な樣子でワサを眺めながら段々身を引き）これ〳〵そのやうにわしに抱付くな。それでなくてもわしは倒れさうだ。離れてゐろ、離れてゐろ。

ワサ　（すりよつて）父上私はあなたの子です。此樣に苦しんでゐるのがお分りになりませんか。私は誤つて人殺をしました。意地の惡い運命が私を弄んだのです。あゝ私はお胸にすがつて思ふ樣泣きたい。父上罪深いあなたの子を胸に抱いて幼い昔に歸らせてください。血を分けた親の懐の外に身をよせる處はとう〳〵無くなつてしまひました。（縋付く）

王兄　（茫乎考込み）人間の悲み！若い者の悲はすぐ

直る。年寄の悲は墓場の中までつゞく。あゝわしはいかい年寄だ。

ワサ　父上、あなたはまだ私が分らんのですか。

王兄　（窓からさす月光を仰ぎ）あゝわしの妃、美しい妃があそこにゐる。淋しいものに月ほど親しい友はない。悲しげな友よ、私はお前を待つてゐた。お前ばかりが一生の友だ。墓場への友だ。

ワサ　（泣きながら見上げて）父上。

王兄　お前を見てゐると心地よい淋しさがわしの胸に湧いてくる。お前にもいかい悲があると見える。わしは毎晩鐘を鳴らしてお前を迎へ其胸の淋しさを物語る。するとお前はニッコリ笑つて、さもわしの心を察したやうに點頭(うなづ)いてくれる。

ワサ　そのお悲があるならば父上、私の心をも察してください。十年前は父上のお胸に抱かれてゐた私です。母上をお忘れなさらないなら私をもお忘れなさらんでせう。

王兄　（過去を回想して夢見るやうに）あゝわしの美しい妃。鼓がなる。琴がなる。婚禮の歌が聞える。待女郎が花をちらす。赤い着物をきた舍人(とねり)が美しい氈(かも)を敷く新婚の床を飾る。玉のやうなわしの妃。わしはお前に眞珠の玉を振かける。珊瑚の雨を降らせる。お前はお月様のやうに其中から生出る。

ワサ　父上、そのお妃の忘形見が私です。

王兄　（依然と夢をつゞけ）踊が始まる。椅子に凭れた妃の顔は夜明の月のやうに白くなる。身體(からだ)が風に飜る旗のやうにゆら／＼する。赤い袍を着たわしの胸にがつくりと倒れる——あゝ眞白な花が崩れた。（ガックリと窓に凭れる）。

ワサ　父上——（縋付いて父を仰ぐ）

王兄　妃はもうゐない——（間）わしは今夜も鐘を鳴らしてお月様をお迎へしやう。すると空の向から眞白い馬が飛んで來てわしを乘せ、遠い世界へ連れて行く。わしは其處で花嫁に遇うて昔話をする。わしはもう此世では年を取り過ぎた。悲の爲めに年をとつて一人ぼつちになつてしまうた。もう何處へも行

處はない。墓場ばかりだ。わしはいかい年寄だ。

ワサ　（足下に身を投げて）　父上。

王兄　（深く思に沈んで）　人間の悲み、若いものの悲は直ぐに直ほる。年寄の悲は墓の中までつゞく。（鐘を鳴らす。間。下が騒がしくなつて傷をうけたカアシムが氣息を切らして上つてくる。）

カア　助けてください。助けて下さい。

ワサ　（驚いて）　おゝお前はカアシム――

カア　王子様ですか、どうぞ私を助けてください、切拔けてやつとこれまで逃げて參りました。何處へか隱してください。

ワサ　どうしたのだ。

カア　危ぶみながらも遂ひ瞞まされました。王子様御用心なさらんと危なう御座います。彼奴等は心を合せて惡事を企んで居ります。何處か隱してください。（身を隱さうとする。二人の武士とラーマンが上つてくる。武士はカアシムを捕へんとす。激しい格闘の末カアシムは縛される。ワサは其隙に逃げやうとする、ラーマンが立塞がる）

宰相　それ王子をも、（武士ワサを捕へんとす）

ワサ　私は捕はれる覺えはない。

宰相　無いとは仰有られまい、（王を殺した刀を突出し）此刀に覺えがありませう（ワサ無言、武士縛す）

宰相　王子はその柱へ繫いで置け、老耄にはよい相手だ。カアシムは下へ引張つて行け。

武士はカアシムを引立てゝラーマンと共に段を下る

ワサ　父上、助けてください。繩をといてください。

王兄　（獨言のやうに）　世の中は騒がしい。こゝは靜かだ。誰かゞわしを此處へ入れて外へ出さぬやうにしてしまつた。淋しさに馴れると人間は却つてそれを慕ふやうになる。初めて此處へ來たものは、籠を取換へられた鳥のやうに居心地が惡いと見えて、頻りに出たがつてゐる。暫らくするうちには馴れてしまう。

ワサ　父上これほど申しても私が分かりませんか。白分の子の見さかいすらつかないのですか。

王兄　わしの子供？父と子は遠い世界にゐる。

ワサ　イエ〳〵あなたの子は此處に居ります。あなたの前に縛られて苦しんでゐます。お情けない父上。あなたは悲の爲めに心も破れ、お目も曇り、眞實の子が傍にゐるのもお分りなさらん、情けなう御座います。

王兄　人間は一生一人のものだ。はかない己が命一つをたよりに生きて行く。お空を眺めてゐると月の光の中から蜘蛛の糸のやうの細い糸が風に吹かれて流れてくる。あれが命の糸だ。何時切れるかも知れぬ。心細さに戰きながら手繰りよせる。わしも長い間手繰りよせた。糸はもうつきさうだ。あゝわしはいかい年寄だ。

ワサ　かよはい命の糸。あゝ私もそれを手繰つて來た。糸の先きには死より外にないのも知らず、美しい愛や戀や華かな人生が結付けてあると思ひながら手繰つて來た。私の手繰つた糸は月の世界からは來ず、暗い運命の世界から來た。砂漠の涯までも彷徨ひ歩いて其末に死ぬ。それが私の運命だ。（伏して泣く、窓から見える空には曉の光がさす）

――幕――

第四幕

同じ塔の外、明けた日の夕暮、舞臺の上手に塔、その前に石段、石段を上ると鐵の扉。扉には錠が下りてゐる。扉の右には窓、その中にはカアレムが繋がれてゐるのだが幕の上つた時は見えぬ。石段を五つ下ると舞臺の中央になる。石段のあたりには血のやうな曼珠沙華が咲き、塔の壁に凌宵花が絡んで今を盛りと咲いてゐる。後方は糸杉の木立その後は城壁になつてゐる。日は今沈んだばかりで空は赤く焼けてゐる。ララが一人歌を歌ひながら曼珠沙華を摘んでゐる。

摩伽陀の國に咲く花は
赤い雛芥子、毛莨
西方淨土の金色の
雲の中からおちてきて
眞赤に咲いた曼珠沙華

歌をたよりにしてブルムーラが尋ねてくる。

ブル　ララお前そこにゐたのかへ、姉樣は探してゐた

よ。

ララ　姉様御覽なさい、こんなに曼珠沙華が咲いてゐます。アロルのお城にも此花が澤山咲いてゐましたねえ。

プル　お城の石垣や岡の上に咲いたのを覺えてゐる。でも私は此花が嫌だ。血のやうな色をしてゐて氣味が惡い。（西の空を見て）あゝもう今日も暮れた。あの赤い日の沈む國は何處だらう。

ララ　姉様きつと印度で御座いますよ。私達の故郷の。

プル　いゝえ印度は此方(こつち)だよ。（反對の方を指す）御覽、ララ、赤い旗のやうな雲が故郷の方へ流れて行くよ。砂漠を越え海を越えた遠い空の彼方(かなた)に私達の故郷があるのだねえ。

ララ　あの赤い雲の行く方にお父様やお母様が眠つておゐでなさるのですねえ。菩提樹の森で私達の歸るのを待つておいでなさるのですねえ。

プル　人は死んでも靈魂(たましい)は殘るといふから、屹度私達を待つておゐでなさるに違ひない。お墓の上にはもう草が生えたらう。（カアシムが塔の窓から顔を出して二人を見る）

ララ　私達は人にも神様にも見放されたのですねえ姉様。

プル　神様も恨めしい。何故私達をも一緒に殺してはくださらないのだらう。命は貴いけれど生きゐるのは死ぬよりも辛いことがある。ララ、二人は一緒に死なうね。姉様はお前一人を力にし頼りにして生きてゐるのだよ。お前はお父様とお母様の形見、私はお前をお母様と思つて抱く、お父様だと思つて縋りつく、私の命と思つて抱寄せる。（ララを抱寄せて）破れた心に殘つた有丈の愛情をお前に注ぎかける。するとお前は細い柔かな腕で力一杯私に抱きついて姉様と言つてくれる。其聲はお前の心の底から出てくる温い愛のこもつた貴い聲だよ、靈(たましい)の底から出てくる生命の聲だよ。それを聞くと姉様は俄かに心丈夫になつて、沈んだ氣も引立ち身體(からだ)中に力が湧いて來るよ。一人だと思つた此世に私の親身(しんみ)の妹がゐる、

血と肉を分けた姉妹(けうだい)がゐると思うと嬉しいのか悲しいのか熱い涙が湧出して止度もなく流れるよ。今もその涙が――（妹を抱締めて泣く、ララは堅く姉に抱付いて泣きながら）

ララ　姉様！

プル　私の可愛いゝララ――死ぬ時もかうして死なうね。（二人は相抱いて泣く、夕焼は薄らぐ。間。）

カア　プルムーラ様（プルムーラ驚いて振返る）プルムーラ様。

プル　（初めて窓の中のカアシムを見付け）オヽお前はカアシム、まだ生きてゐたか！

カア　あの時殺されてしまつた方が却つて仕合でした。併し私はまだ死なうとは思はない。プルムーラ様、私は今迄の罪をお詫びいたします。私が好んであなたの國を滅したのでもありません。皆んなあの無道な國王の命令です。

プル　お前は自分の罪深いことも思はず、まだ私に辯(い)解(わけ)するのか、（詰寄る）

カア　さうではありません。罪深いことも知つてゐます。プルムーラ様。男らしくない私を笑つてください。命が惜しいからです。仇が打ちたいからです。どうぞお慈悲に刀を貸してください。此縄さへ切れゝばよいのです。

プル　仇に刀をかす馬鹿者が何處にある。

カア　あゝ自分ながら恥かしい。人間は一つ躓くと心の定りがなくなつてしまうのです。プルムーラ様どうぞ願をお聞きください。私を出してください。其代り私は此國を亡ぼして、あなたのお恨を晴らします。お二人を印度へお連れ申します。

プル　恥も情も知らぬ人非人。戦に勝つたとて無残極まる亂暴をした鬼め、泣叫ぶ母親の腕を切つて娘を奪つたのはお前だ。子供の私をまで捕へて監の底までも蹂躙つたのはお前だ！（情が激して泣きながら窓の下に身を投げ）跣足(はだし)で針の山を歩るかせても、軀(からだ)を臼で砕いても飽足らん。まだ生きてゐたなら此手で殺して骨を噛んでやりたい。（間）

カア　許してください。罪の應報が來たのです。欺かれるとは知りながらも命の惜しさに彼奴等の言葉をきいたのが誤りでした。ブルムーラ樣死ぬ前の只一つのお願ひです。私は此の恨を晴したい。私ばかりではない。王子樣も彼奴等の爲めに此塔の中に縛られておゐでなさる。

プル　王子樣が此塔の中に――

カア　お命も危ないでせう。ブルムーラ樣どうぞ此處から出してください。

プル　自分を喰ふ虎を檻から出す奴が何處にあるものか。よい今に私が殺してやる。それまでは縛られてゐるがいゝ。（窓を離れ石段を上つて扉を開けやうとする、扉は開かない。あたりは何時か夜になり煙るやうな月夜。）あゝ扉が開かない！（身悶えして、段を下り塔の上を仰いで呼ぶ）王子樣――ララお前も呼んで御覽――王子樣――（塔の上で王子の答へる聲）王子樣今私が助けてあげます。窓のところへおいでなさい。

ワサの聲　繩が解けんブルムーラ

プル　切れませんか。ララ早く行つて姉樣の短刀をもつておいで（ララ行かうとする、）いゝ私が行く――（行きかけたが止まつて）イエ〳〵私は此處にゐなければいけない。早く行つておいで。早く。（ララ飛んで行く）王子樣今助けてあげます。（アチコチ歩廻りながら）王子樣あなたはお一人ですか、え？お父上と――　今私が刀を上げます。それで繩を切つて出ておいでなさい。縛られておゐでなさるなら何故お父樣に解いてお貰ひなさらんのです。え？　お父樣も縛られておゐでなさるのですか？（窓を仰ぎながら身悶えして）繩は切れても、どうして出て來られるだらう。戸は明かぬ。窓はあんなに高い。（イラ〳〵しながら歩廻る）飛下ることは猶更出來ない、どうしたらよいだらう。神樣智慧を借してください、王子樣をお助けください。（跪いて祈る、ララ短刀を持つて馳せてくる）おゝ持つて來たか。王子樣刀をあげます。（窓を覘つて投げる、數回して入る）王子樣

それで縄を切つて――切れましたか――縄を何處へか結付けて下りておいでなさい――（塔の上から縄が下がる）早く下りておいでなさい。（凌霄花の咲いた中をワサが縄に縋つて下りて來る、ブルムーラ下から抱きかゝへる）

ワサ　ブルムーラ――（感激して抱付く、ブルムーラ思はず抱返し）

ブル　王子樣――（少し間）どうして塔などへ入つたのです。

ワサ　私はあの恐ろしいことをした後、身の置所がなくなつて此塔へ逃込んだのだ。

ブル　身の置所？　あなたは私をお忘れになつたのですか。何故私のところへ來てはくださらないのです。私は今朝から、あなたを探してゐました。

ワサ　私は運命の恐ろしさばかり思つてお前のことは忘れてゐた。お前の顏を見るのが怖はかつたのだ。苦しかつたのだ。

ブル　（怪訝な顏をして）私に遇ふのが苦しい、怖ろい？

ワサ　（悄氣げて）運命の恐ろしさを思ふからだ。私は罪を犯した。

ブル　罪を？　王を殺したことですか、自然の應報です。あなたは正しいことをなすつたのです。私の爲めに仇を討つてくだすつたのです。何とお禮申してよいか分りません。あなたは私や妹の大恩人です、私の國の恩人です（跪く、ワサは益氣を沈ませ）

ワサ　さう言はれると餘計に苦しい。私はお前のために叔父を殺したのではない、誤つて叔父を殺したのだ。

ブル　誤つて――

ワサ　あゝ運命は殘酷だ。妃だと思つたのは叔父だつたのだ。

ブル　それではあなたは私の爲めにではなく間違へて王を殺したのですか

ワサ　さうだ、私は罪を犯したのだ、（聲を低くして）お前のために。

ブル　私のために――あなたは、それで私を恨んでお

ゐでなさるのですか（聲を鋭くする）

ワサ　ブルムーラ許しておくれ、私はあの恐ろしいことをした後お前を憎んだ、戀を呪つた。でもかうしてお前に遇つて見れば矢張お前が戀しい、思切れない、憎まうと思つても憎めない。私は恨むことの出來ない男だ。

ブル　（凝然と見てやがて憫れむやうに）ホヽヽヽ男のあなたが、何故そのやうに氣が弱いのでせう。私は思のまゝに憎むことも出來ず愛することも出來ないやうな弱い心を持ちたくはありません。

ワサ　私はほんとに弱い男だ。お前のいふ通り思のまゝに憎むことも出來ず愛することも出來ない男だ。私の心は何時も運命の不思議に戰き人生の頼りなさに泣いてゐる。私は孤獨と悲哀の子だ。果てしらぬ夢に包まれて生きてゐる哀れな男だ。

ブル　（詰るやうに）そのあなたが何故私を愛してくだすつたのです。

ワサ　私は靈魂を求めたのだ。難船したものが助を呼ぶやうに私の心は何時も孤獨の淋しさに泣きながら永遠の友を求めてゐる。私の愛は靈魂の求める聲だ。果敢ない幻影とは思ひながらも、それがなくては生きてゐられない。砂漠の夜を行く旅人が星の光を頼にするやうに私はたゞ美しいものに自分の命を托さうとするのだ。思へば愛も幻だ。人生の矛盾は愛によつて消え又愛のために起つてくる。私はそれが悲しい。

ブル　あなたは靈魂の世界ばかり夢に見て此世をお忘れなすつたのです。生きるも死ぬるも皆んな此世でのことではありませんか、此世を措いて何處に生きる處があるのです。

ワサ　此世は恐ろしい業因の巷だ。人間は運命の踊を踊つてゐる。私は此世をのがれて運命の手の屆かない靜かな世界へ行きたい。砂漠へ行つて星の光を眺めて考へてゐたい。ブルムーラ私と一緒に行つてくれ。

ブル　砂漠へ行つて運命が免れられるものなら人生は

詰らんものです。あなたはアラビアの王位を捨てゝ砂漠へ行き隠者のやうな生活をなさる積りですか。私は嫌です。運命と組合つて勝つか負けるか。二つに一です。

ワサ　アラビアの王も運命の前には虫一匹と擇ぶ處はない。躓く石の一つにも運命は宿つてゐる。

プル　（冷笑的に）あなたは私が怖いのでせう。（威壓的に）王子様私は決してあなたを離しません。私は私の心をあなたに注込み、私の愛であなたを強く、思の晴れる時まで私の傍に引着けて置きます。（命令的に）さあ王子様、あなたは第一に、あの扉を開いて中にゐるカアシムを引出してください。

ワサ　お前は強い女だ、私はお前を愛すには餘り弱過ぎる。

プル　（詰寄つて）あなたは私を捨てゝ砂漠へ逃げるお積ですか。

ワサ　それが出來るほどなら此麼苦みもない。私はお前が思切れない。お前の強い心に引着けられて離れることが出來ないのだ。

プル　嘘です。あなたは叔父の仇だと思つて私を憎んでおいでなさるのでせう。

ワサ　（叱るやうに）ブルムーラ（老僕のアリが旅仕度をし駱駝を引いて出てくる、ワサのゐるのを見て嬉しさうに近寄り）

老僕　おゝ王子様御無事で御座りましたか。

ワサ　おゝ爺か。

老僕　（もう涙聲になつて）あゝ御無事でこんな嬉しいことは御座りません。昨夜からあなた様のお行衛がかいくれ分らず、宰相のラーマンめに殺されなされたなどとの噂を聞いた時は、ほんまかと思うて玉のやうの涙が流れました。子のやうにしてお育て申した、あなた様のこと故わしは氣も轉倒して地平（ちべた）へお伏つて泣きましたぞ。まあ〳〵御無事で此麼嬉しいことは御座りません。やつと手を廻して此塔におゐでのことを聞込みお救ひ申す用意をしてこれまで參りました。

ワサ　さうだつたが爺、私はお前にも遇へず殺されてしまうのかと思つて、そればかりが悲しかつた。

老僕　御尤ぢや〻〻〻、お優しいあなた様のこと故嘸泣きもなさつたらう。今、町の知邊から駱駝をかり繩梯子の用意をしてお救出した上は一散に此城を逃出さうと旅の支度をして參りました。それはさうと、どうしてまあ塔を拔出して此處までおいでなさいました。

ワサ　ブルムーラが助けてくれたのだ。

老僕　左樣で御座いましたか、ブルムーラ樣誠に難有う御座いました。さあ王子樣此上は一刻も猶豫はなりません。早くあの駱駝に召して裏門から、こつそり落延びませう。お城は皆んな仇で御座ります。グズグズしておゐでなさるとお命が危なう御座ります。

ブル　お前は何をいふ、王子樣は何處へもおいでなさらない。誰か王子樣に敵對ふものか。

老僕　どうして〳〵、敵對ふはさて置きお命も危なう御座ります。かうしてゐる中にもあのラーマン奴が此處へ來るかも知れません。さ王子樣早くお支度をなさいまし。

ブル　イーエ王子樣はやらぬ。王子樣は何處へもおいでなさらぬ。私と一緒に戰ふのだ。これから惡者共を退治なさるのだ。（王子の前に立塞る）

老僕　滅相なことを。あなたと王子樣が何人おゐでなさらうと先方は大勢。此處は一時も早く落延びて又時を待つが何よりの上分別。さ、王子樣――（ワサの手をとる）

ブル　（老爺の手を拂退け）王子樣はやらない。

ワサ　爺、私はブルムーラに助けられた。

老僕　折角塔から逃出しても此處でお命を落しては何の甲斐も御座りません。さ王子樣、早く駱駝にお召しなされ、爺がお供いたします。

ブル　（氣が氣でなく）お默り〳〵、王子樣は私のものだ。お前などゝ一緒にはやらん。

老僕　（少し腹を立てゝ）何を仰有る。王子樣のお身の上に迫まる危險をお知りなさらんか。さ、そこを

お離しなされ、えゝお離しなされ。（二人は王子を爭ふ、ララはブルムーラに力を合せて老僕を突退ける）

ワサ　爺待つてくれ、ブルムーラは私の恩人だ。捨てゝは行かれぬ。

老僕　何のそのやうの義理立が入りますものか。言はゞ大事の前の小事、さ王子様、（手を引張る、ブルムーラ突退ける）

ブル　やらない、王子様は私のものだ、私のものだ。

ララ　（ワサの手に縋つて）王子様――

ワサ　ブルムーラお前も一緒に行つてくれ、私と一緒に此處を落延びてくれ。

老僕　王子様、そのやうの事をしやうものなら直ぐ敵に見付かります。女子供は手足纏、潔く思切つて、さ早く――

ワサ　お願だブルムーラ、私と一緒に行つてくれ。お前一人を置いては行けない。

ブル　いゝえ行きません。此處には私の仇がゐます。此通り可愛いララがゐます。どうして逃げて行かれませう。

老僕　（イライラして）えゝもどかしい。王子様、捨てゝおしまひなさいまし、女に心を引かされて大事のお命にかかはつたら何となさる。

ブル　逃げたくばお前一人で逃げるがいゝ。王子様はやらん。

老僕　やらんとは口幅い。王子様はあなたのものでは御座りませぬ。かういふ私がお小さい時分から手鹽にかけてお育て申したお方ぢや。誰に許されてそのやうの口幅いことを仰有る。

ブル　（負けてはゐず）お前の知つたことではない。王子様あなたは私を捨てゝあの老耄と逃げておいでなさいますか、そんなあなたではないでせう。早くあの老耄を追拂つてください。

老僕　（怒つて）默らつしやい。あなたは王子様を大事とは思はぬか、王子様は申さばわしの子ぢや。あなたなどの口を出す所ではない、默つてゐなさい。

プル　お前こそ默るがいゝ。王子樣を塔から救出したのは私だ。お前ではない。私は王子樣に仇をうつていたゞくのだ。それまでは誰がきてもやりはせぬ。王子樣早く邪魔者を追拂つてください。

ワサ　あゝどうしたらよいだらう――プルムーラ、どうか一緒に行つておくれ。

プル　いゝえ私は行きません。仇のうてる迄は死んでも此處を離れません。此儘私が逃げて行つたら、あのカアシム奴が後妻を見て笑ひます。

ワサ　お前はそれほど迄に執念が强いのか。

プル　執念一つて生きてゐる私です。仇をうたぬ中は行きません。

ワサ　私のためにそれを捨てゝくれプルムーラ。

老僕　愚圖々々しておゐでなさる時では御座りません。敵が來ます、ラーマンめが來ます。さ、おいでなされ王子樣（プルムーラを突送けてワサの手をとる）

プル　（ワサに追縋つて其手をとり）　王子樣私は決してあなたを離しません。此手であなたを抱きすくめ、一寸でもやりません。さあ仇をうつてください。あの扉の中にゐる惡魔を引出してください、妃を殺してください、そして可哀さうな私達二人を印度へ歸らせてください。（ワサの手をとつて跪く）

ララ　（姉と一緒に王子に縋り）　王子樣――

老僕　面倒の足手纏――（突退けて王子を引行く）

プル　あなたは私を捨てるのですか。

ワサ　捨てはせぬ。たゞ一緒に行つてくれ。

プル　たゞ一緒に――

ワサ　砂漠の涯のメッカへ。

プル　（ワサから手を離し、決心した樣子で）　何處へでも逃げて行くがよう御座います。もう追かけはしません。

ワサ　プルムーラ――

プル　（冷やかに）　あなたは生温い愛で人生を鈍色にぼかさうとなさる。私は百年を一日に縮め大きな生命(いのち)の炬火(たいまつ)を燃やして死なうとする。二人の行く道は

逢つてゐます。

老僕　王子樣男らしく思切つて、さ早く駱駝にお召しなされ。女一人に代へられる時では御座りません。敵が來たら何となさる、さ御座らつしやい、(引張る)

ワサ　ブルムーラ今一度思直してくれ。此處ばかりがお前の生きる處ではない、砂漠の中にも樂しい人生はある。お前の復讐の心をすて、憎の念をすてゝ私と一緒に行つておくれ、憎みや復讐の念は決して貴いものではない、强いものではない。それよりも貴いのは愛だ、强いのも愛だ。

ブル　(冷たく强く)　愛は弱いものです。子供のやうに移氣で涙脆く、何をでも掴むけれど、深くものゝ命に喰入ることがない。私はもつと强いものが欲しい、生命の底まで喰入るものが欲しい。私の憎惡は丁度ヒマラヤの谿に張る氷のやうに人の心に喰入つて破らねば置かぬ。私は此思で人を殺し自分を殺し惡魔のやうに笑つて死にます。早く行つてください。

老僕　さ王子樣。

ワサ　愛を求めるものは破れる。あゝ私は敗者だ!(スゴスゴ老僕に引かれて行く)

ブル　あゝ一人だ。生きるにも死ぬにもたゞ一人だ。

ララ　(姉の手をとつて泣きながら)　姉樣。

ブル　泣くことはない。安心しておゐで、今姉樣が仇をとつてやる、カアシムを殺してやる。刀は何處だ刀は、(探廻る、聽て絕望的に)　あゝしまつた!塔の中だ。(決心してカアシムのゐる窓をよぢやうとする、高くて手が屆かない。扉を開けやうと石をとつて錠を打つ、錠は開かない)　えゝ此扉々々、何故開かぬ〳〵(無念さうに齒軋したが)　よいそれならあの繩にすがつて――(ワサの下りて來た繩にすがつて野獸のやうに塔をよぢ上る)

ララ　姉樣。姉樣　危ない――

ブル　心配することはない――今カアシムを殺してくる。(上つて行く、間)

ララ　姉樣、姉樣、どうしたらう、姉樣、返事がない何も音がしない、(身悶えしながら窓の下や戸の處へ

行つて、中の様子に耳をかたむける。ラーマンが武士を三四人連れ、松明をとつて來る。ララの姿を認め）

宰相　この子は此處で何をしてゐる。（武士に）これ早く扉を開けて二人の首を切つて來い。一人行けばい丶、後は私の傍にゐろ。（武士の一人石段を上り扉を開けやうとする、此時塔の中にカアシムの悲鳴、プルムーラの聲）

プル　死ね、死ね　惡魔　惡魔！

共驚いて扉に近寄る。武士は錠を外して扉を開く、髮も亂れ衣も破れたプルムーラが片手にカアシムの首、片手に血刀を握つて魔の塔から躍出す。武士は驚いて身を引く、プルムーラは高く首を捧げ、敵を倒した勇者のやうな歩調で扉口に現れ

プル　仇がうてた。ララおいで、仇がうてた（ララ段を上つて姉に抱つく）あ丶嬉しい、私は嬉しい。（大聲に）皆んな來い、國中の者が皆んな來い、お前達の仇がうてた、お前達の夫を殺し妻を奪ひ娘を犯した惡魔が死んだ。殺された、大きな聲で喜の歌をうたへ。あ丶私の胸で太陽が燃える!!世界が私のものになつた!!皆んな來い皆んな來い、私と一緒に手をとつて踊を踊れ！

プルムーラは歡喜と興奮の極に達して醉へるが如く、片手に首、片手に妹の手をとつて足を高く上げ勇躍して進む。石段の途中迄下りると俄かに崩れる大廈のやうに倒れ伏して氣を失ふ。ララは抱付いて

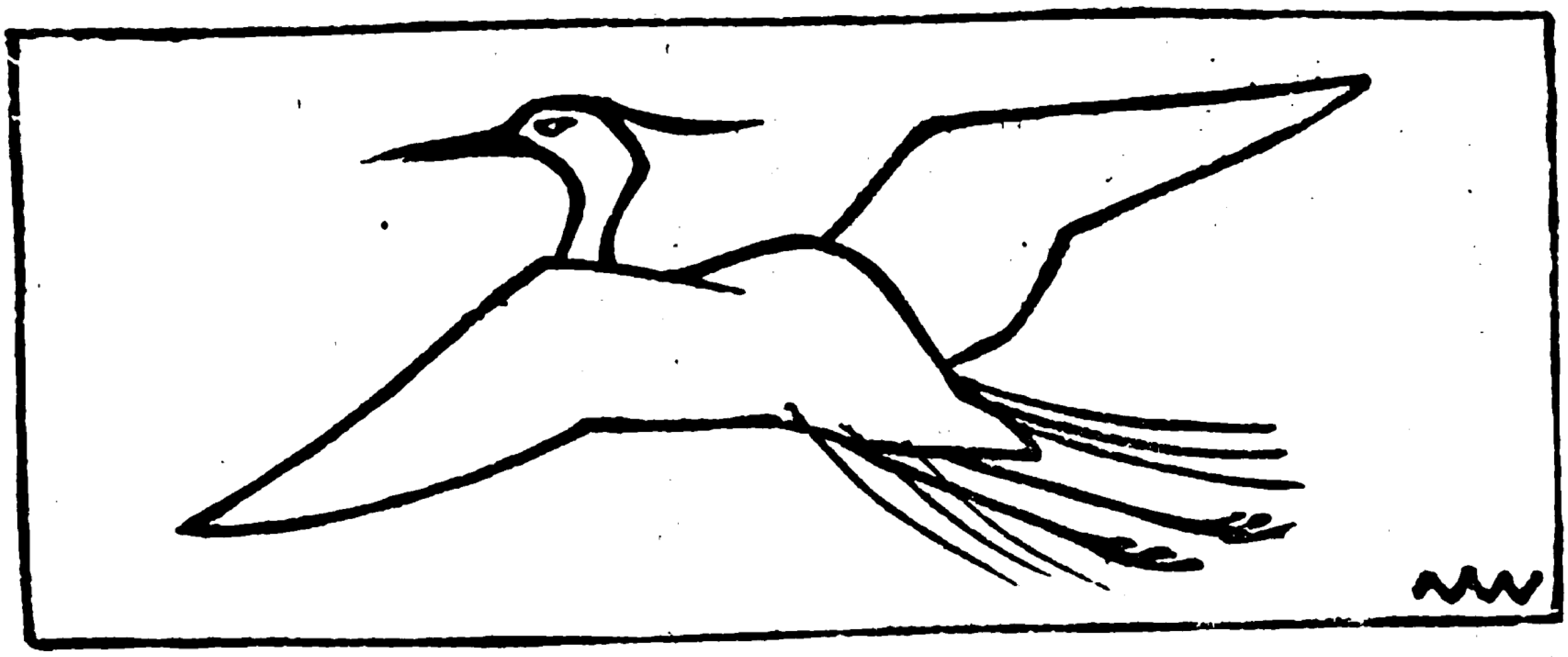
ララ　姉様姉様——姉様！

プルムーラは倒れたまゝ無言、宰相と武士は松明を上げて見る。塔の上で王兄の打つ鐘の音

——幕——

一九一八、二、一一

（禁無斷興行）



針供養

上司小劍

一

お二人さんへ。

昨日は二月八日で、針供養を致しました。年中、殆んど毎日、針を持つて裁縫をしてゐるものは、一年に一度針供養をしないといけない、と勝子さんから教はつたさうで、縫子は十年このかた二月八日の針供養を忘れたことがありません。

針供養をしないと、死んでから針の山へ登らせられる、といふことも、縫子は勝子さんあなたから教はつたのです。それで縫子は毎年二月八日までに、前年の二月九日から、尖端の折れた針や、みゝどの缺けた針を桐の箱へ一所に集めて置いたのをば、床の間に据ゑた白木の臺の上に飾り、恭しく供物をして、この日だけは成るだけ針を持たないやうにしてゐます。

平生は忘れるともなく、つひあなた方御夫婦お二人さんの朝鮮にござる

ことを忘れてゐることもありますが、二月八日の針供養の日は、朝から終日あなた方のお噂ばかりしてゐます。去年もさうでした。一昨年もさうでした。一昨々年――は御夫婦が東京においでになつて、私の家へ針供養のお客に見えだのでしたね。――

針供養といふことは、私たちの家で、もう大切な年中行事になりました。それが初めは勝子さんあなたに敎へて頂いたのだと思ふと、妙に有り難いやうな、感謝したいやうな氣持ちになると、縫子は申します。自分の名が『縫』と言つて針に緣のある爲めでせうか、御承知の通り裁縫が好きで、針さへ持てば少しくらゐの病氣なんぞは忘れて了ふと申します。

私の鄕里の方では、針供養を舊曆の十月八日に致します。東京では春もまだ淺い頃、關西では秋も末の頃と、針供養の日取りが、東西で違つてゐるのは、何ういふ譯でせうか。鄕里では、淡島大明神といふのを祀り、一年中に損じた針は、蒟蒻へ突き刺して、見ぬ地獄の針の山とは、こんなものかと身慄ひするやうな恰好にして、淡島大明神の御幣の前へ置きます。さうして矢張りお菓子だのお餅だのを供へ、針は蒟蒻のまゝ土の中に埋め、供物のお下りを一同で頂くのですが、重に縫物屋でなければ行ひませんから、針供養のお客と言へば、十四五から十七八までの、赤いものづくしの可愛らしいところばかりです。

ところが、近年私の家の針供養のお客には、無骨な、岩乘な草相撲のお關取のやうなのが一人混ります。こゝまで書いたら、あなた方御夫婦お二人さんは、『そら家の正一のことが出た。』と、口に唾液を溜めて、膝をお乘り出しになるでせうが、何うしたことか、今年の針供養には正一さんのバンカラ姿が、私

の家の座敷に見えなかつたのです。宅の子供は皆淋しがつて、『正一さんは何うしたんでせうね。』と、晴子も潔も申して居りました。

するとゝ針供養の遊びの最中、御馳走の出始めた午後の三時頃、他の郵便物とゝもに××中學校から一枚の葉書がまゐりました。生徒監督春山先生の名で、『貴殿御保證の二階堂正一身上に關して至急御相談致し度事件出來申し候に付明日午前中に御登校相成度候也』と書いてあるぢやありませんか。

丁度去年の三月、△△中學校から來たこんな風な葉書に驚いてから、彼れ是れ一年になります。言はゞ一週忌です。私たちは胸を轟かしました。

芝居の舞臺で美しい花見の場の觀樂が、惡魔に襲はれたやうな暗轉で、忽ち蕭條たる枯野原と變つて、骸骨がごろ／＼してゐるといふ風に、針供養の樂しさに和氣の漂ふてゐた私の家は、この一本の葉書で何んだか急に暗く寂しくなつて了ひました。

『何を仕出かしたんでせうね、正一さんはまた。……今度は二度目だから、ちッとは氣を付けさうなるものですのにねえ。』と、縫子は溜息を吐き／＼しました。

『行つてみなくちや分らないが、身上に關し、と書いてあるから、何うせ碌なことぢやあるまいね。』と、煙草を吸はぬ私は、腕組みもしないで、火鉢に手を翳しながら考へました。

『阿母さん、正一さんまた何んかしたんですか。』と、晴子はお垂髮のリボンをひら／＼さして、頭を動かしながら、氣樂さうに母へ話しかけました。

『喧ましい、子供がこんなところへ口を出すものぢやありません。』と、縫子はいつになく嶮しさを子

供に見せました。

お二人さん。

いつまでもこんなことを申してゐたとて、果てしがありません。思ひきつて本文に取りかゝりませうか。實は針供養の話も拔きにして、直ぐ本文へと初めは思つたのですけれど、かうやつてペンを持ちつゝ紙に臨むと、紙の上にお二人さんのお顔が並んで見えるやうで、正一さんが無事に卒業して、朝鮮へ歸つて行くのも、もうあと一月だと思つてゐらツしやると考へては、なか〳〵ぶツ付けに本文が書けないのです。針供養の話は、先づ〳〵短かい開幕劇とでも思つて下さい。

● 二

扨お二人さん。

其の夜はちよい〳〵不氣味な葉書のことばかり話し合つて、覺えず夜を更かしましたが、翌くる日郎ち今日は、八時になると其の葉書を懷中に入れ、袴を穿いて、私は出かけました。縫子は何かの首途でも見送るやうに、物々しく玄關まで出てまゐりました。私は出入りの度、家族や下女に送り迎ひをされるのが大嫌ひなばかりでなく、「行つてゐらツしやい」とか、「お歸りなさいまし」とか言はれるのも厭やですから、そんな作法はスツカリ家の内で禁止してゐますが、たゞ私が旅にでも立ちます時は、縫子が默つて玄關まで出てまゐります。されば今日の××中學校出頭は、縫子に取つて、私が旅にでも出るやうな心持ちがしたのかも知れません。

保證人になつてゐながら、私は實のところ、まだ一回も××中學校といふのへ行つたことがないので

す。電車の中から、あれがさうだと、友達から其の高い米藏のやうな屋根を指されたことはありましたが、何處から入つて行くのやら、それさへ知らなかつたのです。甚だ冷淡なやうですけれど、私は元來學校といふものを蟲が好かんのです。置物の鑄型か、肥料溜のやうな氣がして、其處から出て來る强權の鞴の火に鑄られた時代向きの惠比須大黑や、おかめ、ひよッとこ、般若などのごろ〳〵したのや、乃至は蛆蟲のやうにぞろ〳〵して、臭氣のいッぱいなのやを見ると、胸がわるくて、臭くてたまらないのです。中學校なんぞは、何うでもよいやうですが、矢張り惠比須大黑などの卵の生み付けられるところみたいな氣がして仕様がありません。

ところが、今日はぐる〳〵と狹く汚ない路を廻はつて、九時過ぎに初めて××中學校の門を入りました。掃除の行き屆かぬ三和土の廊下の薄暗いところへ首を突ッ込むやうにして行くと、左に事務所といふ木札のかゝつた窓が見えましたから、其の硝子戸をコッ〳〵と敲くと、内部からもコッ〳〵と靴の音を立てながら出て來て戸をあけたのは、この學校の制服を着た色の白い、くり〳〵と可愛らしい子でありました。私の差し出したあの不氣味な葉書を受け取つて、其の少年は奥の方へ引き返して行きましたが、この時放課の鐘が鳴つて、私の立つてゐる三和土廊下は、忽ちがや〳〵と混雜し始め、それこそ蟲の巣でも發いた如く、黑服の少年たちは私に突き當り〳〵して、運動場の方へ出て行きました。

やがて、前の色の白い少年が、今度は横の方の廊下から現はれ、「此方へ」と丁寧に私をボロ西洋館の奥の方へ案内しました。其の突き當りが應接室で、可なりに廣いが、板敷は銀座あたりの舖道よりもズッと汚ないまでに、土足で踏み荒されてゐました。

それでも、色の剝げた卓子掛けが見えて、大きな鐵の火鉢なんぞも出てゐましたが、黒く立ち消えのした堅炭が、不良少年のやうにごろ〳〵轉がつてゐて、手を翳してみると、まるで火の氣はありません。私は煙草の火にでも燒けたらしい卓子掛けのポツ〳〵とした小ひさな穴の幾つもあるのを數へながら、頻りに學校といふものを呪ふたルウソウの言葉を、彼れ是れと考へてゐる中に、「何うもお寒いのに、お忙しいところをお喚び立ていたしまして。」と沈んだ聲で言ひ〳〵、五十恰好の圓顏の人が、背後から寒い風と一所に入つて來ました。それが生徒監督の春山先生で、古びた背廣に、忘れたのか、襟飾がありませんでした。

「何うぞ、其のまゝ、其のまゝ。」と、先生は、二重廻はしを脫ぎかけた私を、手眞似で押さへるやうにして、破れたシートの上へ板を打ち付けた椅子に腰を下ろし、暫らく默つて考へ事をする風に俯向いてゐられましたが、其の半白の頭髮が、昨夜の中にかうなりました、と言つた風に顏を上げて、一段と聲を窃めつゝ、

「……實は容易ならんことが起りまして、……」と、まことに容易ならんといふ樣子をしました。

「あゝ、さうで、……」といふより外に、私の口は出すべき言葉を有ちませんでした。

「えゝえ、昨年の十月でございました。當校で劍道大會をやりました時、……」

これだけ言つて、先生はまた言葉を切りましたが、少しの間考へる樣子をしてから口を次いで、

「ン……其の劍道大會の時、一年生と二年生のマントが三着紛失いたしました。……何うも外部から賊の入つた模樣はございませんので、學校でも內々注意いたし居りますと、近頃になりまして、偶然

の機會から、………」

先生はまた暫らく言葉を切りましたので、私は何か言はうと思ひましたが、適當の語句も浮びませんでした。

「……ほんの一寸した機會から、それが二階堂正一外二名の所爲であることが判りまして、本人を詰問いたしましたところ、自白いたしましたから、これを表沙汰にすると刑事問題になつて、本人の一生を暗黒にすることになりますし、學校の方でも困りますから、品物を被害者へ辨償して、潔く學校を退くことにしたら好からうと、實は先刻副保證人の原田さんが見えましたから、さういふことに決めて、後であなたの御承知を願ふことにいたしましたのです。あなたに先きへ御相談しなければならないのですが、學校としては一刻も早く處分したいので、あなたには失禮でございましたが、何うか惡しからず。……」と、氣の毒なほど丁寧に、且つ氣の毒なほど萎れて言ひました。

私は、春山先生の萎れたのを感ずるよりも、そんなにまで墮落した正一さんの現狀に驚いて、暫らく先生の圓い顏を見詰めてゐました。それで先生は私が不滿にでも思つてゐると見たのか、

「お宅は郡部で、遠方なものでございますから、昨朝原田さんの方へ伺ひましたところが、お留守でしたから、あの葉書をお宅の方へ出しましたやうな譯で、昨夜學校から歸りにまた原田さんへ伺ひますと、またお留守で、今日になつて、先刻原田さんが見えましたから、委細をお話しいたしますと、原田さんも驚いて、さういふ譯なら已むを得ない。自分も職掌柄、同居人にさういふものが出たことが表向きになつては困る、と言つておゐでゝした。」と、くど／＼しく言つて、こんな比喩を用ゐては失禮でせ

うが、猫のやうに顔を擡げて、私の様子を窺ふてゐられました。

私は正一さんから、この春山先生のことを生徒たちが猫先生と綽名してゐるとか聞いてゐたのを思ひ出して、あわたゞしい、落ち付かぬ、さうして張り切つた氣持ちの中にも、一點の弛みを覺えて、微笑みたくなりましたが、それを顔に現はすまでには至らないで、もとの通り正一さんの上を思ふ痛ましい心に返へりました。

「いや何うも、飛んだ御迷惑をかけまして、恐れ入りました。わたくしも實はあれには困つて居りましたので、昨年△△中學をあんなことになりました時、朝鮮へ連れて行くやうに、さう申したんでしたが、本人が心を入れかへて勉强すると申しますし、兩親も東京で中學を卒業させ、直ぐ士官候補生の試驗を受けさせたいと申しますから、こちらで入れて下さるのを幸ひ、御面倒をお願ひしたのですが、こんなことになりますと、まことに折角の御好意を水に流したやうな次第で、申し譯がございません。」と私は改つてお辭儀をしました。先生は周章てたやうにお辭儀を返へして、

「いや昨年入れます時も、何分五年にもなつてゐるものでございますから、校長も餘り贊成はいたしませんし、職員間にも反對者がありましたが、わたくしの懇意にして居ります川田といふ男が本人と一所にまゐりまして、泣き付くやうに賴みますし、あなたの奥さんが叔母さんに當ると本人が申すものですから、あなたに保證人になつて頂けばよからうと、校長も申しましたので、漸く入學を許しますと、この始末で、わたくしも校長や同僚に對して面目がなく、實に困却いたしました。」と、今度は先生の方でから、少し不滿らしい語氣が漏れて來ました。

兎に角私は、歸り次第直ぐ退校届を出すことを約して、春山先生に別れました。

『何うも今日は格別風がお寒うございます。』と、春山先生は俄に元氣の好い聲を出して、立ち上りながら、古びた背廣の釦を殘らずかけて了ひました。さうして、

『何うも學科の成績もよくありませんし、缺席が多くて仕方がありませんから、あの二階堂は、今後もう學業を拋棄して、別の方面で身を立てたら好からうと、先刻本人にも申しましたが、感心した様子でございました。……かうなるまでに、私も幾度訓戒を加へたか知れませんでしたが、……』と、春山先生はまたもとの萎れた様子に返へりかけました。

三和土の廊下で先生に別れて、白墨で樂書のしてある堅い土をゴム草履で踏みつゝ、校門を出ようとすると、背後の運動場から、喇叭の音が響き渡りました。

三

成るたけ早くこの次第を縫子に知らせようと思つて、電車の終點から人車を急がして家へ歸りました。兩極端は一致するとよく申しますが、全く善いことを早く知らせようと思つて急ぐ時の心持ちと、惡いことを早く知らせようと思つて急ぐ時の心持ちとは、同じやうですね。

家へ入つて、外套を脫いでゐる私を見上げて、縫子は心配さうな顏をしながらも、少し微笑を浮べて、

『また何か亂暴でもしたのですか。一年生でゝ揃つて、停學になつたんぢやありませんか。……』と、問ひました。

『…………………。』

「またカンニングですか。……」

「まだ試驗は始まらない。」

「ぢやア、矢つ張り亂暴でせう。……身體が大きくて、力が强いのが自慢で、ぶん擲るぞッていふと、一年生なんぞ縮み上ると自分にも言つてますから、……」

「學生相撲で二階堂といふと、誰れでも知つてるんだッてね。」

「そんなことは何うでもいゝから、今日の喚び出しは何んの用でしたの。……」

「正一が退校を命ぜられた。……マントを盗んで、……」と、私は思ひ切つて言ひました。

「えゝッ。」と、縫子の顔の色は、さッと變りましたが、

「ほんたうですか。」と、息せき切つて、膝を押し進めました。私は一年中を通じて、數へるほどしか穿かぬ袴を脱ぎ棄て、靜かに火鉢の前に座り、出がらしの茶をいつぱい湯呑に注いでグッと飲んでから、學校で聞いて來たことを其のまゝ話しかけると、縫子は急に手を振つて、話を止めよと言ひました。何故かと思つたら、朝から親の家へ行つてゐた下女が戻つて來たらしかつたからです。

それから、私は聲を密めて一切を語り聽かせますと、

「姉さんや、義兄さんが聞いたら、どんなに悲むでせう。」と、縫子は其の長い睫毛の先きに露を宿してゐました。

「朝鮮へ委しく手紙を出してやらなければならないが、取り敢へず電報を打つてやらうね。」と、私が言ひますと、縫子は默つて點頭きました。

また外套を引つかけて、坂の上の小ひさな停車場の電報取扱口で、頼信紙へ、「ショウイチガクコウダサレタ、ヘン」と、細い絲で窓の金網へ繋ぎ止めてある短かい鉛筆を握つて書き付けた時は、私の手がわな〳〵と慄へました。

「あんまりいゝ電報ぢやありませんね。」と、出札係り兼帶の電信技手は、口の裡で電文を讀んでから、ニヤリと笑つて言ひました。

私もニヤリと笑つて、踵を返へしましたが、四五時間の後には其あんまりよくない電報を披いて讀まなければならぬ運命をもつてゐるお二人さんのことを考へると、胸がいつぱいになりました。

急いで家へ歸ると、二階には客があつて、縫子が應對して居りました。玄關に脱いであつた薩摩下駄で、おほよそ想像は付いてゐましたけれど、「誰が來てるの。」と下女に訊きますと、「原田さんとかお仰しやる方でございます。」と申しました。案の通りあの原田でした。副保證人でした。

私はまだ原田といふ人に會つたことはありませんし、警察の人といふ其の職業から見ても、あなた方お二人さんには、馬鹿に信用のある人ですけれど、私から進んで會ひたいとは思つたことがありませんでした。いや成るならば會はないでゐたいと思ひました。しかし今は絶體絶命の場合です。會はない譯にはまゐりますまい。そこで勇を皷して、とん〳〵と二階へ上つて行きました。

見たところ、原田といふ人は、そんなに警察臭くもありませんでした。ひところ私の家へよく、「先生、………クロポトキンとかいふ人の、法律と強權とか言ふ本をお持ちになりませんか。わたくしも勉強の爲めに見て置きたいと思ひまして、………お持ちになるなら、一寸發賣所を伺ひたいと存じま

すが、……わたくしには難かしくて解らないでございませうか。」などとカマを懸けて、そんなパンフレットの飜譯の秘密出版に、私が關係でもあるかのやうな樣子で訊きに來た高等視察係りとかいふ人達よりも、ズッと上品らしく見える、顏の四角張つたまだ三十そこ〱の男だつたのには、私も少し意外に思ひました。

「……出來るだけの注意はいたして居りましたが、わたくしなぞは兎ても學生を監督する力がございませんから、こんなことになりまして、何んとも申し譯がございません。」

「何ういたしまして、皆本人が惡いのでございますから。……」

私が二階の緣側に立つと、閉つた眞ッ白の貼りかへたばかりの障子の內にはこんなことが話されてゐました。さうして私が入つて行くと、原田は座蒲團を退つて初對面の挨拶をしたのです。

「何うも飛んだことになりまして、……何んとも早や。……しかし、あれはほんの惡戲が嵩じて、あんなことをしたので、意識して切取したといふ譯ではありません。幾ら何んでもそれまでに惡くはなつて居りませんから。……」と、原田は熱心に口から細かい唾液を飛ばしさうにして申しました。

「何うですかね。」と、私は容易に承服しない樣子をして、ぢろりと原田の四角い顏を見ました。

「いや、しかし、內情は何うでも事實は立派に罪を構成してゐますから、わたくしも實は弱りました。今日午前學校でわたくしの前へ生徒監督が本人を喚んで、潔く退校したまへと言ひますと、本人は屹となつて、いや僕は退校させられるやうな惡いことはしません、となか〱承服しさうにないんです。そこでわたくしが、いや、それや君いかんよ、そんなことと言つたつて、ちやんと證據が上つてる。君が强情を張る

やうなら、僕にも考へがあると、一つ脅かしてやりますと、直ぐ往生して、僕が行りました、と白じたんです。しかし田川とかいふ同級の同類に、君これ腹へ巻いて行けと賴まれて、其のマントを腹へ巻き付けて持ち出したといふんですがね、其のほかにもう獨り野上とかいふのと三人で、其のマントを入質して、西洋料理を食つて了つたんです、一圓二十錢とかでね。』と、原田の話し振りは、だん〳〵探偵口調になつて來ました。

『まア呆れて了ひますことね。』と、縫子の聲はます〳〵曇りました。

『いや何うも、叔母さんにお氣の毒だから成りッたけ隱しとかうと思つたんですが、兎ても駄目ですから、何もかも打ち撒けッちまひます。……それから潔く退校すると本人が言ひましたから、わたしが連れて道々いろ〳〵と訊きましたが、全く不正品と知らずに田川から賴まれて持つて出たんだが、其の結果かういふことになつてみると、僕が一人で罪を引ッ背負うと、俠客じみたことを言ひますから、君そんなことと言つたつて駄目だ、不正品だと思はないものを何故腹へ巻いて隱した。よしんばほんとに不正品だと知らなかつたにしても、君の行爲は贓品を運搬したんだから罪が重い。それから三人でやつたことを君が一人で引き受けることもないぢやないかと言ひますと、默つてましたが、急にまた調子を變へて、僕が重々惡かつた、しかし今度のことは何うか誰れにも言はないで下さい、と哀願するやうに言ふんです。……』と、原田は巧みに順序を立てゝ話しました。自分が同居して監督してゐた責任をば、幾分回避しようとしたのか。または肉身の叔母の前で、餘りと言へば甚だしい本人の墮落を洗ひざらし打ち明けることを憚つたのか。または職掌柄、自分の地位に影響することを恐れたのか。いづれにして

も初めは、包めるだけ事實を暗くして置かうといふ了見らしかつた原田の態度が、私の底の底まで見透かしてゐるらしい樣子の爲めに、これや隱しても駄目だといふやうになつた綫り目に、あまり繼ぎ接ぎの痕を見せないのは、流石にえらいものだと思ひました。

「紛失したマントは三枚だと聞きましたが、あと二枚は何うなつたんです。」

「それや分りませんね。何んでも二三日前にもまたマントが紛失したんださうで、これも學校では正一さんに嫌疑を懸けてゐる樣子だから、わたくしの手で調べてみませうかと一つ突ッ込んでやりますと、いやそれには及びませんと、學校では表向きになるのを恐れ抜いてゐるんです。……けども二三日前其のマントが紛失した日は、正一さんが學校へ出てゐて、翌日は來なかつたといふんですし、其の時丁度質に入れてあつた羽織を出して着てましたから、あまり威張つたことも言へないか知れませんよ。」と、原田は自分が泥を吐くやうに言ひました。

四

お二人さん。

聞いてみると、實に驚きを通り越して、何んとも言へないやうなことばかりです。

「まア、わたしの家へ預つてゐて、こんなことになつたら、姉さんに何んと言つて怒られるでせう。義兄さんにはどんなに恨まれるでせう。……」と、縫子は身慄ひとゝもに申しました。これは彼女の眞のく感慨だらうと思ひます。

危きに臨むと、人は皆自分の身を庇ふのが先きに立ちます。學校の先生、原田、縫子、皆さうおやあ

りませんか。

二三年前、正一さんがまだ△△中學の四年生であつた時、義兄さんがいよ〳〵朝鮮の會社へお勤めになることにきまつたので、正一さんを暫らく私の家へ預つたことがありましたね。あの時正一さんがいつの間にか卷烏とかいふ社會主義者と附き合つたと言つて、義兄さんが姉さんたちを引き緊めにお歸りになつた時、お酒に醉つた勢ひで、正一さんに卷烏を引き合はしたのは私だらうと言つて、縫子に厭や味を仰しやつたことがあるさうですね。それ以來縫子は、私が正一さんを預らうと言つても決して承知しないのです。私もまた家の子供たちに及ぼす正一さんの惡感化を思ふと、失禮ながら正一さんにあまり出入をして貰ひたくないと思つてゐたのです。

社會主義者は卽ち道樂者、道樂者は卽ち社會主義者といふやうに思つて居られる義兄さんは、正一さんが墮落したのをば、一切卷烏の爲めだと思はれるかも知れませんが、正一さんの墮落の原因は、本人の素質と子に甘いあなたがたお二人さんと、お二人さんの作られた家庭とにあるのです。

もう何もかも思ひ切つて、無遠慮に申しますから、お氣に障つたら絶交されても構ひません。

正一さんは、調子者で、人に煽動てられると、お先きに使はれる質です。それに腕力が强くて、他の生徒等に立てられるのをよいことにして、君行きたまへと言はれると、よし來た、と直ぐ乘りかゝるのです。去年△△中學校で、二階から體操教師の頭上へ小用を引つかけたり、一年生の足を持つて逆さまに二階の窓から外へ吊り下げ、ボン〳〵時計の振り子だと言つて、ブラ〳〵搖り動かしたりして、到頭退學しなければならないやうになつたのも、皆この煽動に乘り易いところから來てゐるのです。それへ

持つて來て、親が甘く、子供のいふことを一々ほんたうだと信用し、學校や監督者を惡いと思つて恨むといふ風ですから、幼い時から親をば輿し易いもの、何をしても怖くないものと思ひ込まして了つたのです。

よしや、正一さんの惡いといふ證據を眼の前に突き付けられても、無理に眼を瞑つてゐようとするのが、義兄さんの心です。姉さんに對してさへ、現に正一さんのことを飾らうとしてゐるぢやありませんか。父が母に對してまで、子の缺點を見せまいと努めるやうでは、子の良くなる筈がありません。

それから家庭ですが、あなたがたの家庭は、相當に暮らしてゐて少しは餘裕のあつた小石川時代から、職業も失つて貧しくなりかゝり、朝鮮三界へ落ち延びなければならなくなつた芝時代までを通じて、失禮ながら低級と俗惡との四字に盡きてゐます。まじめな話と言へば、金儲けのことぐらゐ。主人も主婦も家で書籍を一册讀むぢやなし、酒を飲むか、晝寢するか、馬鹿話をはずませるか。其の馬鹿話がまた土方の女房さへ顔を赧らめるほど卑猥なもので、類をもつて集る下等の男女が交る〲出入して、大口をきいてゐました。たまに私たちが見兼ね聞き兼ねて、忠告しても姉さんなんぞは、平然として、『罪がなくていゝぢやありませんか。』とかうなんですもの。無理はありません。あなたがたの家庭には、何一つ高雅な清新な話題のある譯はなかつたのです。無智と蒙昧との空氣が渦を卷いて、亂雜と卑猥との諧調を造つてゐたのです。

第一、あなたがたの家庭には、一度だつて大人の机といふものの据ゑられてあつたことがなかつたぢやありませんか。

幼いと言つても、小石川時代にはもう總領の正一さんが十五六になつてゐたでせう。其の柔かい、さくらげのやうな耳へ、卑猥な大口や亂脈な笑ひ聲が、どんな風に染み入つて、どんな感化を與へたか。考へてみれば怖ろしいことでせう。

それに姉さんは、其の物心の附きかけた正一さんに向つてさへ、下がゝつた戯れを言つて、からかつてゐたことがあるでせう。姉さんは忘れたか知りませんが、私たちは其の文句まで今なほ覺えてゐて、時々眉を顰めつゝ思ひ出します。

芝に居た時なんぞ、十七八にもなつた正一さんによく裸踊りをさして、喜んでゐたぢやありませんか。「家の正一は色氣なしの、無邪氣だ。」と言つて。……ところがもう其の時分に、△△中學校の下校時刻をはかつて、A町の角あたりで、正一さんを待ち合はしてゐた賣女同樣の安白粉の顏が、夕日にてら〳〵してゐたのを、原田なんぞは、ちやんと確めて、知らぬ風をしてゐたのです。

柔道部の會費だとか、劍道部の臨時費だとか、相撲部の寄附金だとか、いろ〳〵の名義で持つて行く金の受取證を見せろと言つたことが、あなたがたにはありますまい。教科書や參考書を買うと言つた金が、どんな書籍になつたか、改めて見たこともありますまい。

公平に見たところ、中學の初めあたりでは、正一さんも先づ普通の生徒でした。よくもなければわるくもない、十人並み……さうです、十人並みを少し下つた、中の下といふくらゐのところでした。それをば大層な秀才でゝもあるやうに買ひ被つて、他人がお世辭に水を向けて褒めると、口に唾液を溜めつゝ、一所になつて自慢したあなたがた、殊に義兄さんの甘さが、今日正一さんを下の下にまで墮落さ

した大きな原因の一つになつてゐるのです。

二年前でしたか、姉さんがまだこちらにおゐでになる時分、暑中休暇に△△中學校の遊泳會が房州にあつて、例の通り何んでもござれの遊び好きな正一さんは、それに入會することになり、苦しい中を朝鮮から十五圓の會費を義兄さんが送つてこられ、それを持つて正一さんがいそ／＼と出立して行つた先きを、房州だと思つてゐると、見當ちがひの伊豆であつたことの分つた時、姉さんの驚きやうは大變でした。遊泳會費の僞受取書をば、初めに看破することが出來なかつたのですから、伊豆へ氣の合つた同級生二三人とゝもに行つてゐたとばかり思つて、たゞ嘘を吐いたのがいけないといふことだけを責め立て、伊豆から引き戻された正一さんが、少しばかり猫を冠つて、改悛を裝ふてゐると、もうスッカリ安心して了ひ、『家の正一も邪のないものだ。あの親爺そつくりの大きな身體をして、わたしの前で溫和しく後悔してゐます。』などと私たちに話したりして、本人が蔭で赤い舌を出してゐるのを知らなかつたのですもの。

あの伊豆行の蔭に女が居たといふことは、しかし私も今まで知らなかつた。知つてゐたのは、職掌柄の原田だけです。

『あれは女と一所だと、わたしは直ぐ睨んだから、伊豆行の世話をしたあの社會主義の卷島のところへ行つて、おいッ、女だけを殘して、男を歸しやつて呉れ、親が心配してるから、と高飛車に出ましたら、スッカリ種が上つたと思つて、よろしいと受け合ひ、正一さんだけを直ぐ呼び戻して呉れたんです。歸つてからわたしが正一さんを連れ出し、川端の淋しいところで石の上へ腰をかけて、女のことを問ひ

と、初めはしらを切つてましたが、女から來た手紙を、ちやんと一通引き上げておいたもんだから、到頭白狀して了ひました。』と、原田は夕景になつて、酒飯を出してから、微醉の顏を電燈に光らして、ベラ〳〵喋舌り立てました。

女は何んでも三四人はあつたさうで、手紙は總べて局留にしてよこすから、分らなかつたのださうですが、原田の手に押へたのだけでも、兩手に溢れるほどあつたさうです。それが皆賣女ばかりでもなささうなので、何うしてあんなボロ書生に引つかかるものがあるか、不思議で仕樣がない、と原田は言ひました。

さうして原田は、其の色文に書いてあつたたまらない文句を思ひ出したらしく、獨り厭やな〳〵笑ひを浮べました。

『それでも、後の××中學校の方は、評判がわるいだけに程度が低いのでせうか、それとも同じ五年を二度やる故か、試驗の點は割合ひに良かつたやうですね。たつた一度きりわたしに通知簿を見せませんけれど。』と、縫子は熱い燗德利を持つて來て言ひました。

『一週間に二日か三日きり出席しないで、ノートには女の名前なんぞばかり書いてあるんですもの、學科の出來る譯がありませんや。……あの通知簿は皆自分で書きなほすんです。……わたしも初めは一寸騙されかかつたんですが、こいつ怪しいと睨んだから、各學科の得點を合はして割つてみると、平均點と違うんです。いよ〳〵可笑しいと思つて、電燈に透かして見ると、30を80にしたり、40を70にしたりしたインキの痕がよく分るんですもの。……一つ其の通知簿が證據物件に取つてありますが、學

校へは遺失したと言つて、一學期毎に通知簿が新らしくなつてるんです。』と、原田はまた正一さんの泥を自分が代つて吐きました。

『まア。……』と、維子はただ驚きの眼を圓くするだけです。

『失禮ですが、活馬の目でも拔かうといふ職掌のあなたをさへ騙しかけるんだから、あのお人好しの子に甘い兩親を騙すなんぞは、朝飯前の仕事ですね。』と、私は笑ひました。

『騙しかけるどころか、私もスッカリ騙されたことが二度や三度はありますよ。見たところ無邪氣で恍けたやうなことを言ひますから、一寸引つかかるんです。』と、原田はだん〳〵言葉をぞんざいにして來るやうでした。

『カンニングして、減點されたと言つてやると、甘い親爺は、出來ない生徒に敎へてやつたことばかり思ひ込んで、其の志は嘉すべきも……なんて、本人への手紙に書いて來るんですもの。……親を馬鹿にするにきまつてます。』と、私も何んだか下品な調子になりかけたので、我れながらハッと驚きました。

『親ばかりぢやありません。わたしだつて、これで正一さんにはいゝ加減馬鹿にされてゐたんです。……何も言はないで、正一さんに眩しがられてゐたのは、あなたお一人でせう。あつちは鬼門だと、く言つてましたよ。』と、原田の言葉はまた丁寧になりかけました。

『兎に角、わたしはあの男の顏を二月に一度か、三月に一度ぐらゐより見ませんもの。わたしの居ない時をうまく狙つて來るんですからね。』

『そら可笑しいほどなんでございますよ。宅で居りますと、キチンと畏こまつて、何か言はれると、ハア、ハアと返辭してゐるんですから、なか〳〵不良少年とは見えませんもの。』と、縫子も漸く笑顔をさしました。

お二人さん。

こんなことをいつまで書いてゐても、ほんたうに果てしがありません。けれども、一昨年あたりから正一さんの巣になつてゐた家のことを少しばかり書かねばなりますまい。

其の家は原田から遠くない〇〇橋の近くで、笈瀬といふのです。この變な苗字を聞いたら思ひ出すでせう、昔し義兄さんと友達であつたが惡い事をした爲めに絶交したといふあの人の家です。あんな家へ正一さんが何うして行くやうになつたか、不思議ですが、矢張り眼の寄るところへ玉の俚諺の通りなのでせう。其處は不良少年、不良少女の巣になつてゐて、正一さんにはパラダイスの思ひがするのでせう。

前科三犯の主人は、今四犯目の懲役一年で入獄中なのださうですが、去年の夏頃家に居た時は、それでも、正一さんが行くと、「お前は若いんだから、こんなとこへ來ると、俺みたいになるぞ。」と言つて意見をしたさうです。それが入獄して了つてからは、結構人のおかみさんが、息子と娘とを工場へ出し、家を正一さんなんかの宿にして、自分は質使ひなぞをしながら、若い者をごろ〳〵さしてゐるのです。こんなことは皆原田がお手のもので探り出して、突き留めたのですが、原田もたゞ岡ッ引式に、正一さんへカマをかけたり、尾行したりして、泥を吐かしてゐるばかり、それを制止しようともしなければ、——制止しても馬鹿にしてゐるから、聽かないのかも知れませんけれど、——自分の胸へ疊み込んだゞけ

で、今日まであなたの方へも私たちへも隱してゐたのは、何ういふ譯なのでせう。それが解りません。

何んでも、正一さんは無事に中學校を卒業しても、上の學校の試驗を受けるつもりなんぞはなく、また朝鮮へ行く氣もなく、笈瀨の悴の世話で、同じ工場へ入る約束が出來てゐたらしいさうです。

扨お二人さん。

これから先きを何うしますか。私の考へでは、一時親からおつ放り出して、學資はおろか、何一つ構ひ付けないのが一番です。昔しなら勘當といふ所ですね。さうすれば善くなるものなら、眼が覺めて善くなるし、惡くなるものなら、いよ／＼暗黑に落ちて行きます。いちかばちかといふところですね。しかしこれは子に甘い親の出來ることではありません。親にこれだけの腹があつたら、子も墮落はしなかつたのです。よくしたものです。

兎に角朝鮮へ呼び寄せて、親の膝元で嚴しく監督するといふのも一策ですが、それにはあのうまい口車に乘せられて、あなたがたがひツくりかへる危險があり、結局墮落の上塗りをすることになりはしないかと案じられます。

それに呼び寄せると言つても、本人は東京に面白いことがいろ／＼あるので、なか／＼行きますまい。職工拂底の今日、働く場所はどつさりありますから、取つて費ふ味を覺えたが最後、いよ／＼何うにもなりますまい。

義兄さんが連れに來たところで、繩付きにして行く譯にもまゐりませんから、本人が厭やだと言つて逃げ出せばそれツきりですし、よし一度は朝鮮まで行つたとて、淋しさと東京戀しさとに、また舞ひ戾つて來るやら知れません。

いづれにしても、もう學業は拋棄しなければなりますまい。事柄を暗記したり、面白くもない符牒を覺えたりすることは、ほかの遊びを知らない中のことで、道樂の味を舐めたものに、そんな馬鹿らしさの辛抱は出來ないでせう。

何んにしても、正一々々と、正一さん一人に望みをかけ通してゐたが、この始末ですから、あなたがたのお心を推し量ると、堪へられない思ひがいたします。

今夜も九時頃に、原田が、酒よりも自分の長話に醉ふて、辭し去つてから、私は縫子と新らしく茶を入れかへて、また暫らく、あなたがたのことや、正一さんの身の上を語り合ひました。

『今時分は、あの電報を前に置いて、義兄さんと姉さんが、何んな顏をしてゐるでせう。』と、縫子がほろりとして、低い聲で申しました。

『さうだ、もう電報が着いたらうね。いや疾くに着いた筈だ。頭がわるくても、氣の勝つてゐる姉さんが、何んとか、かとか言つて、義兄さんに食つてかゝつてるよ。』と、私は言ひました。

『それでなくてさへ、義兄さんは子供のことだといふと、めんくらつちまうんですから、泣くやら喚くやら、今頃は大騷動かも知れませんよ。』と、縫子は悄然と顏を上げて、本箱の上の置時計を見やりました。

『アスアサタツトウニンヘヒミツ』といふ返電が來たのは、それから一時間の後でした。

朝鮮からのお客を迎へて、めちやくにされた針供養を、もう一度催したい。それも緣喜なほしであらうと、私たちは考へてゐます。

——七年二月十九日夜脫稿——

蛇の話

小川未明

某工場が尙ほ形となつて出來ずに、設計されたばかりの當時である。後になつてこの工場は長い間、荒れ果てゐた昔の城下を幾分か賑はしたのであるが。最初に、小さな事務所が圃の中に建てられた。間口二間半に、奥行四間ばかりの平家で三方が硝子窓になつてゐた。家根は板葺で新しいうちは日に照らされて、圃中で光つた。三四人の者が其の内部で事務を執つてゐたが、しまひには其れが二人に減じた。何んでも工場主が資金が思ふやうに集らぬので、工事を一二年延期したといふことで、この事務所も其儘圃の中に忘れられたやうになつてゐたのである。

事務所の建物は始めから粗造であつたゝめに、いつしか雨風に晒されるとみすぼらしくなつて來た。硝子窓にも二三ヶ處破れたところがあるが其儘になつてゐる。傍を通る人々は、この建物を見て建ち腐れになるのだらうと思つた。而して、誰も近々未來に於て其處に大工場が出現するなどゝは夢にも思は

なかつた。

此時になるまで、幸作ともう一人の男とはこの事務所に來て番をしてゐた。他の者等は到底見込がないのと、給料についても不安なので何れも退いてしまつた。彼等はもつと安心して勤められる職があると思つたからだ。たとへ見付からなくとも、遊んでゐる方が餘程増であると思つたからだ。而して、いつまでもこの事務所に勤めてゐる二人を見て冷笑つた。

幸作の相手は老人である。この年になつては何處へ行つても使つてくれぬ。其の上この老人は隱居の身であつたから、小使錢が取れば仕合せだとの考へから此處に來てゐるのである。しかし、幸作は三十五六の男盛りであつた。他の人間ならば、何處でも、まだ優遇して調法がられるのであるが、この年になつて人見知りをするので、自から穴のやうな中に閉ぢ籠つて世間へ顏を出さぬのであつた。彼を知らぬ人々は、よくこんな處にいつまでもゐるものだと怪しんだ。

しかし、內氣な、煩雜な事務には到底堪へない、また何をしても氣疎い幸作には、この事務所の番人が最も適當であると、自からも考へてゐる。其れだから別に不平がなかつた。毎日、事務所に行つても仕事がない。たゞ用事といふものは、時々此處へは滅多に顏も出さない工場主宛に何處からか手紙や、はがきが來るのを受取る位のことである。其れに誰か一人は夜泊ることゝである。いつしか二人は、隔日に出勤して、其夜は泊つて朝歸るやうに相談を決めたのであつた。

幸作は後妻のお兼に、家にゐて口やかましく言はれるよりは、どれ程、事務所に來てゐて小言も聞かずに暢氣にしてゐる方が幸福であるか知れなかつた。

「お前みたいな意氣地なしがあるもんか。嬶一人さへ遊はして樂に食はして行けないぢやないか。こんな意氣地なしといつしよになつてゐたんでは、いつまで經つたつて見込がありやしない」と、彼女は大きな聲で怒鳴つた。脊の低い肥つた女で、晝でも何か氣に向かないことがあれば、飯を食つたなりにして、汚れた膳や茶碗を投り散したまゝで横になつて、牛のやうにぐう／＼寢てゐる。彼女は、夫の惡口を平氣で近所に行つて言ひ觸らした。

幸作は、女房が大きな聲で罵れば、罵らるゝ程體が竦んでしまつた。而して、小さな聲で、

「もういゝ、もういゝ、よく分つた。よく分つた。己が馬鹿なのだ。どうか大きな聲で言つてくれるな。近所に聞えると見つともないから」と、手を合はさんばかりに賴むのであつた。

「お前さん、其れでもみつともないといふことを知つてゐるか？　さうだよ。近所に聞えるように大きな聲で言ふのだよ」と、彼女は、憎々しげに幸作の顏を見る。

「何も、世間に知らさなくてもいゝだらう」と幸作は彼女に對して憫れみを請うような眼付をする。

この有樣が、また一層女の心を譯もなく腹立たしくさせる。

「お前が、馬鹿で、あんまり意氣地なしだからさ」

女は、男の顏に唾を吐きかけたさうに上眼で睨んで唇を歪めた。

幸作は、全く手が付けられないといふ風に溜息を洩した。而して、心のうちでは何うしても我慢が出來なかつた。けれど、また何うすることも出來なかつた。彼の體は、わな／＼と震へて來た。

「こんなに毒口を突かれたら、男だつたら擲ればいゝぢやないか。いつだつて妾や、こんな家から出て

行つてやる」と、女は、青褪めた顔をして、下を向いて震へてる男を見ると可哀さうなといふ情よりは憎しみの念が増して來た。

「俺は意氣地なしだ。ほんたうに自分で思つてさへ意氣地なしなんだ。お前に何と言はれたつて仕方がない。誰に何と言はれたつて仕方がない。俺でさへ、もつと俺のことを惡く言ひてやりたくなる位だ」と、彼は、下を向いて心の中で言つてゐた。

「前の女房（かみさん）はよくしたさうだが、お前さんはそんなおとなしい女房（かみさん）を擲つたといふぢやないか。たまには妾をもお叩きよ。大きな聲さへ出せない意氣地なし野郎」と、お粂は罵り終ると此方に脊中を向けて、自分のすることをした。

幸作は、のつそりと戸口を出た。

空の一處に日はぢつと燐の燃えるやうに輝いてゐた。木々の梢には、柔かな銀色の若芽が濕れたやうに首を垂れて、日の光りを音を立てるやうにして吸つてゐる。彼は淋しい細い道を歩いてゐた。

小學校に同じく學んで、而していつしよに遊んだことのある友達の中では、今、博士になつてゐる者もあつた。また、遠い外國へ行つて働いてゐる者もあつた。彼等の成功した人々は、もはやこの故郷に住んでゐない。彼は、昔の友達の面影を眼に描いたのである。

同じ級の中で、彼等は大抵算術がよく出來たやうだ。其の中でたゞ一人、算術の出來なかつた少年がある。其の少年には、十（プラス）と一（マイナス）だけは分つたけれど、×と÷になると、もう頭の中が混亂して、たゞ不可思議な謎を夢の中で解くやうに思はれるばかりで答が出せなかつた。教師は、其の少年を數學に對し

ては望みのない低能兒だと言つた。而して、學年試驗には落第した。この少年は誰でもない。かうして路を歩いてゐる幸作であつた。彼は、いかに自身が其の當時から、他に笑はれたり、蔑視されたかを考へた。しかし死なずにかうして生きてゐる。自分にだけは、何處へ行つても、恐らく人間の住む地上では、算術の出來ない俺は生きる處がないと心に思つたのが、今、尙かうして生きてゐる。彼は先刻家を出る前に妻に口汚なく罵られたことをも忘れてゐた。而して、自由に手足を動かして、春の日の光りの中を歩んでゐる自身の姿を見た。

「かうして、たしかに俺は生きてゐる」と、彼は頭を上げた。而して、廣々とした空を仰いだ。次に反射的に兩手を振つて歩いた。

ふと、事務所で、彼の來るのを待てゐる老人の顏が浮んだ。人の好さうな老人は笑顏で、常と少しも變りなく彼を迎へるであらう。而して、「今日は、大分遲うご座いましたな、何かご用でもありましたか」と聞くだらう。而して、入れ代りに家へ歸つて行くだらう。幸作は思はず、笑顏を造つた。老人は決して、俺が――この小學校時代に算術の出來なかつた俺が――この地上に存在する權利を有してゐることについて怪しまない。また曾て其れを疑はうとしない。思ふに、人間が人間を束縛したり、干渉したり、苦しめたり、また虐めたりするのは、自然でないのだ。自然はこのやうに自由を許すのだ。かうして手を振つたり、いくら大胯に力を入れて地の上を歩いたりしても差支へないのだ。彼は兩手を振つた。而して、大胯に歩いて見た。

「さうだ。俺は何にも怖れんでいゝのだ。あたり前に生活すればいゝのだ。其れだのに、自分にも分ら

ないものがたへず心の裡へ巣を組んでゐて、俺を脅やかしてゐるのだ」

幸作はかう思つた。彼は、もう決して脅かされまいとした。しかるにかう思つた矢先彼は立止つて、彼方の桑圃を凝視せずにはゐられなかつた。

冬の間、霜に鍛へられ、雪に磨かれた桑の木の外皮は白光りを放つて、さながら白骨の林の如く凄味を帯びてゐた。陽炎が其の枝先に揺めいて遠くの方は霞んでゐた。蜃氣樓の如く、忽ち人間の姿が浮んだ。

まだ年若い美しい武士であつた。座敷の眞中に突立つて、奥方の名を呼んだ。すると襖がゆるやかに開いて、隣の間から貞淑な、まだ嫁いでから幾何にもならない奥方が兩手を疊の上について頭を下げてゐる姿が現はれた。

「もつと近うまゐれ」と、武士は凜然とした聲で言つた。奥方は恐る〳〵羞かしさうに顔を赧らめて座敷に入つて來た。武士は右手を後方に隱して立てゐたが、不意に白刃が閃めくかと思ふと女の乳房のあたりを目かけてぐさりと突いた、あれ――と、悲しさうに呻き聲を上げて女は仰向けに倒れた。

これを見て武士は、ははと高らかに笑つた。其れから、半時と經たぬうちに武士は座敷の眞中に坐つて、兩肌を脱いだ。而して、白い腹を同じ短刀で眞一文字に切つた。

男は偶然に氣が狂つたのだ。而して、其家には女の幽靈が毎夜出るといふ噂が立つた。――桑の若葉は銀色に光つてゐた。陽炎が上つてゐる。もう其の不思議な幻影は見えない。――

幸作は、曾て聞いた話が忘られなかつた。毎日この路を通るたびに昔のことを思ひ出して、男と女の

姿を眼に描くのであつた。

「俺がなんだか其の男であつたやうな氣がする？」と、彼は心に思つた。而して、彼は女の魂消る悲鳴を實際に聞いたことがあつたやうな氣がする。

「あれ——」と、空の彼方で、女の悲鳴が聞えた。彼は驚いて、桑圃の方を見た。たしかにあの邊であつた。こんなやうな穩かな日に其の悲鳴が空氣を震撼したのだ。今も、まだ耳許で聞えるやうだ。其れだのに俺は何とも思つてゐないのはどうしたことだ。全く俺は何とも思つてゐないんだ。俺は自分のしたことが分らないのだ。忘れてしまつたのだ。

人殺しをして來て、平氣でかうして此路を歩いてゐることが出來るであらうか。日頃から俺を惡口する彼女を一思ひにぐさりと突殺して、其儘家を出て暢氣にいつもの如く空想に耽りながら歩いてゐることが果してあり得るだらうか。暫らくは誰も俺のしたことを知るものもない。村人に途上で相遇ふと彼等はやさしく聲をかけて過ぎる。ある者は俺の顏を見て笑つて、「いゝ天氣です」と言つて過ぎる。俺が家で何をして來たか彼等が知らう道理がない。しかし彼等ばかりでない、當人の俺が、もうそんなことは全く知らないのだ。昔、誰かそんなことをしたこともあつたらうといふ位にしか考へてゐないのだ。しかるに、かうして俺が路を歩いてゐる同時刻に、家の中には先刻殺されたばかりの女の死骸がまだ生々しく、血の裡に横はつて二目とは見られないやうな殘酷な死態をしてゐるのである。——こんなやうなことが眞にあり得るであらうか。

「俺が偶然に氣が狂つた時だ」と幸作は獨りで言つた。

此時、心の中に巣を造つてゐる形の見えない惡魔が狂ひ出した。而して、彼を脅かした。

「お前がよく武士の心持を理解してゐるやうに、武士の靈魂はお前を理解してゐる。何も其れを不思議がることはない。怖しがるのは道理だが二人に同じ血が流れてゐるのだ。お前も、いくら人殺をしまいと思つても、いつの間にかぐさりとやるかも知れない」と惡魔が囁いた。

俺は決して、そんなことはしない。彼は體がぶる／＼と震へた。俺は意氣地なしなのだ。何と彼女が言つたつて怒るまい。たゞ默つて忍耐してゐれば、そんな怖しい事件などの起りやう筈がないと彼は考へた。

遠く地平線は霞んでゐた。何處からか黄色な蝶が飛んで來て彼の前を舞つてゐた。死んだ人間の靈魂が墓場から春になると、蝶になつて來るのだ聞く。彼は此時奇怪な空想に捕はれた。

淡い、悲しみをそゝるやうな甘たるい香ひが鼻を襲つた。幸作は上を見るとうす紫色の桐の花が咲いてゐた。もう春も日にまし深くなつて行くことが思はれた。足許を見ると小さな可愛らしい菫の花が草の中に混つて咲いてゐた。ふと、彼は頭の伸び上つた、艶々しく日に光つた、毒々しさうに拗れたある草の叢を見た時、びつくりして飛び退いた。蛇でないかと思つたからだ。

彼の胸はどき／＼として容易に靜まらなかつた。やがて事務所の傍まで來ると、硝子窓は皆な閉つてゐた。而して、春の日が其の面にきら／＼反射してゐた。灰色に朽ちかゝつた壁板は存分に日の光りを吸ひ取つてゐるやうに見えた。老人の顏は硝子の内部に見えなかつた。

幸作は無心に來かゝると、ぴか／＼と光つたものが壁板を這ひ上らうとした。彼は其れを見て、覺え

た。

彼は眼を放さずに見てゐると、蛇は壁板を這ひ上つて、其の上の硝子窓を目がけてゐるやうであつた。硝子窓は折よく閉つてゐたけれど、彼の胸は尙ほ不安であつた。蛇が家へ入らうとするのは今日はおめてゞあらうか、其れとも前から蛇に自分等は祟られてゐるのだらうか。蛇は、人間が其處に立つてゐることを知らぬらしかつた。日光は蛇の鱗に一つ一つ反射した。蛇は頭を擡げて體を曲折して幾たびか這ひ上らうとしては、思ふに任せないで下に落ちた。而して、地面の上を右、左に往つたり來たりしては、また壁板に這ひ上らうとして、何處か樂に上り得る處を探してゐるやうだ。幸作は恐る〳〵蛇に近づいた。而して、よく蛇を凝視すると脊中に赤い斑點が付いてゐた。可なり長い蛇であつた。彼は、不意に蛇に喰ひ付かれた時のことを想像すると冷汗が湧いて身戰ひした。眼を四邊に配つたけれど、手頃の捧が見付からなかつた。足許に石があつたのを拾つて彼は其れを投げ付けやうかと躊躇したが、當り損つた場合が怖しいやうな氣がして石を捨てた。

幸作は老人に告げやうと、急いで事務所に馳け込んだ。すると老人は見えなく、もう歸つたらしく四邊は片附いてゐた。彼は、まご〳〵してゐられないと考へた。長い竹竿があつたのを引摺り出して急いで外に出た。けれど、もはや蛇の姿が見えなかつた。彼は、不安を感じた。何うしても其の姿を見出さなければ氣が澄ぬやうに覺えた。其れで限なく四邊を見廻つた。けれど見えなかつた。しまひに彼は手に持てゐる竹竿を振廻して、地面を摺りつゝ薙ぎ拂つたりした。けれど蛇は姿を現はさなかつた。

三四時間を經た午後である。幸作は釘箱と鐵鎚を持て二たび外へ出た。夜にでもなつて獨り寢てゐる

時分に、隙間から蛇の入り込むのを怖れたのである。彼は處々、壁板の合せ目の開いてゐる處を塞がうと思つて、三寸釘を處嫌はず打つて歩いた。

寂寞たる春の空氣を破つて、ガン、ガンと鐵鎚の音は遠くまで響いた。

暮方になると、何處からともなく田で鳴く蛙の聲がして、夢の中で聞いてゐるやうであつた。彼は燈火を點けることを忘れた。獨り坐つて死んだ前の妻のことや、其の妻に出來た、而して、やはり間もなく死んだ子供のことなどを思ひ出した。

彼が誰にもさまたげられずに、かうして自由に考へ、今の女房と以前のやさしかつた妻とを比較し、而して、何となく憫れを催して、いつしか悲しくなつて來て泣いたとて、傍で何とも言はれないのはこんな時である。

幸作は子供がやつと這へる時分になつて、緣側から落ちて額に傷を付けたことを思ひ出した。其れが彼女の罪でない、全く自分の過ちであつたことを思ひ出した。傷跡は死んだ時まで癒り切らずに殘つてゐた。其の額の傷がありありと見える。彼は何となく濟なく思つた。子供は死んでしまつた。しかし自然は欺くことが出來ない。自然は永久にこのことを記憶してゐる。これを思ふと彼は現在のことのやうに後悔して泣くのであつた。春の夕空は薄紙を透して見るやうにぼんやりと暗くなつた。

其れから七八日經つた。幸作が留守居の番に當つた時である。仕事もなく暖かなもので横になると、いつしか知らずうとうとと眠氣を催うした。其の間に彼は先妻と語つた夢を見た。

「なぜそんな妙な歩き付をするんだ」と、彼は妻に言つた。

「だつて、こんところが痛いんですもの」と、彼女は右足の膝頭の邊を押へた。幸作は出して見せるやうに言つた。彼女は裾を捲つて痛む處を示した。白い一部分が黒ずんだ紫色に變つてゐた。

「どうしたのだ？」と、幸作が聞いた。

「あなたに蹴られたんです」と、妻は答へて涙ぐんだ。

驚いて、彼は眼を醒した。其れは眞にはかない夢であつた。午後の日は麗らかに地上に漲り渡つてゐた。彼は胸が張り裂けるやうな悔恨の情に驅られて外へ出た。外は汗ばむやうに暖かな陽氣であつた。夢のことなどを思ひながら事務所の窓の下を往つたり來たりしてゐた。するとふと氣が差して、窓下の壁板に眼を注ぐと、板の間から光つた蛇の尾が三寸ばかり垂れてゐた。其の尾の先は鋭く光つてゐた。赤褐の斑點があるのを見るとまさしく先日の蛇にちがひなかた。

彼は、ぎよつとした。而して立止つて蛇の尾を見詰てゐた。何といふ執念深い蛇だらうと思つた。彼は、足許の石を拾つて壁板の上に投げ付けた。けれど、やはり蛇の尾は眤として動かなかつた。

彼は、また石を拾ひ上げて、今度は尾に當てるつもりで投げ付けた。けれども石は壁板に當つて音を立てた。やはり蛇の尾は動かなかつた。彼は不思議に思つた。棒を拾つて來て恐る〳〵蛇の尾先に觸れて見た。死んでゐるやうに手應へがない。強く左右に搖つて見た。極めて緩漫ではあるが、ぴくり〳〵と動いて見えた。けれどこれによつて兎に角、蛇が生きてゐることだけが分つた。

何うしたのだらう？といふ疑ひが起つた。彼は棒でちやうど蛇が其の下にゐる壁板の上を力委せに叩いた。しかし依然として、其の尾は活潑に動かなかつた。幸作は、あまり蛇がぢつとしてゐるので、

これには何か仔細があると思つた。而して、其れが知りたかつた。彼には恐ろしさの念よりは、其の原因を知らうといふ好奇心の方が一層強かつた。幸作は釘拔きを持つて來て、めり〳〵と壁板を剝ぎにかゝつた。しかし何時蛇が襲つて來ないとも限らないやうな氣がして、傍には太い棒と鐵鎚とを備へて置いた。やがて彼は順序に從つて板を剝いで、ちやうど蛇の下になつてゐる板をめり〳〵と剝ぎかゝゐた。而して、今迄全く暗く隱されてゐた場處に明るい日光が差し込んで、すべてが露骨に分る時に、彼の胸は轟いて、頭を下げて板の裏面を覗いた。

「アッ」と、叫んだ。而して、彼は驚いて、板から手を放して後方に倒れかゝつた。

もう一度、彼は頭を下げて板の裏面を覗いた。まさしく蛇が頭から四五寸下の胴の眞中を釘で貫かれて、釘は尙ほ其處にあつた大柱に突立つてゐるのであつた。

幾日か前に、彼が壁板に釘を打つた時にしたことだ。蛇は、急に眩しい日光に晒らされて釘付けにされたまゝ體を動かさうとした。けれど、頭の方だけしかよく動かなかつた。蛇の頭は空を向いた。口からは黑い糸のやうな舌を忙しく吐き出した。舌の先は炎のやうにちら〳〵搖めいた。

幸作は、思ひ切つて板を柱から引き離した。蛇の體は壁板と共に付いて來て、釘に刺されたまゝ地面の上に投げ出された。蛇はやはり體を擡げてゐた。而して、其の頭を左右に動かしたけれど、依然として體を釘から拔くことが出來なかつた。もはや、艶々しい光りが其の體になかつた。而して、半分下の方は色が變りかけてゐた。幸作は、たゞ茫然として其れを見詰てゐるばかりであつた。

「何といふ慘酷なことを俺はしたらう」と、やゝしばらくしてから彼は溜息と共に獨言を洩した。

とはいへ、誰も俺のしたことを知る者がない。知つてゐるものは俺と蛇だけだと思つた。蛇は苦しんでゐる。苦しみつゞけてゐる。而して、あの時から見るとずつと痩せ細つてゐる。彼は其の蛇を見ると怖しくなつた。この蛇さへ無くしてしまつたら、この苦しみを知る者も、また慘酷なことをした俺に對して怨む者も、全く何處にもないのだといふやうな考へが起つた。彼は、蛇を逃がしてしまふことが、何うしても怖しくて出來なかつた。狂人のやうになつて棒を手に取ると、何か口の中で言ひながら蛇の體を滅多無性に擲つた。それから次に鐵鎚を振り上げて、蛇の形が全くこの地上に何ものも殘らないやうに滅茶苦茶に擲き潰した。

眼を晒らすと、草の葉が銀色に日に輝くばかりだつた。もはや、何處にも、あのやうに釘付にされた、而して苦しんでゐる赤い斑點の體にあつた蛇を二たび見ることが出來なかつた。

けれど、其の時から蛇は彼の頭の中に入り込んでしまつた。彼の頭の中で、釘付にされて悶え始めた。彼は、たび／＼頭髪を掻き捲つた。けれど中から掴み出すことが出來なかつた。何としても取り除く役に立たない。彼は仕方なく見ないものと兩眼を閉じた。けれど心の眼にあり／＼と映る其の影を消すことが出來ない。

ある日のことである。村の者は、素足で何をか口走りながら歩いて行く幸作を見た。而して、彼等はお兼が幸作を捨てゝ家を出て行つたので、彼が氣が狂つたのだと噂した。

――一九一八、二作――

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同　神田區裏神保町 上田屋
同　京橋區銀座三丁目 東海堂
同　京橋區元數寄屋町 北隆館
同　京橋區西紺屋町 良明堂
同　日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同　北區東梅田町 宮內立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同　四條西洞院 前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附録號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年二月廿八日印刷納本
大正七年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　曾谷宏治
印刷人　高木丙三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年二月廿八日印刷納本
中央公論三月號（第三十三年第三號）